香川県農業試験場移転事業に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告
第３冊

西末則遺跡Ⅲ

２０１２．１２

香川県教育委員会

SDd041・042・044 全景 西から

SDd082・083 全景 北から

SKd09　出土石器接合状況 1

SKd09　出土石器接合状況 2

SKd09　出土石器接合状況３

SKd09　出土石器接合状況４

石器集中部Ⅰ　出土石鏃

SEd01　出土土器

序文

西末則遺跡は香川県農業試験場の移転に伴い発掘調査を行った綾川町北（旧綾南町）及び山田下（旧綾上町）に所在する遺跡です。

発掘調査は、平成13年度から平成17年度にかけて行い、その結果、縄文時代から江戸時代までの遺構・遺物が多数出土いたしました。なかでも弥生時代後期頃に開削された大規模な幹線水路跡や古代末から中世にかけての大規模な集落跡の存在が注目されます。

その後、平成16年度に弥生時代後期頃の大規模灌漑水路跡や奈良時代の火葬墓、奈良時代から江戸時代にかけての集落跡がある遺跡の南東部について、続く17年度には弥生時代後期の自然河川や古代末から中世前半にかけての集落跡がある遺跡の西部について、それぞれ整理作業を実施し、平成17年10月に『西末則遺跡Ⅰ』を、平成18年3月には『西末則遺跡Ⅱ』を刊行してまいりました。

今回刊行いたしますのは、平成14・15年度に調査を行った範囲の報告です。遺跡の北半部に位置し、縄文時代から中世にかけての遺構・遺物を確認しました。特に、縄文時代の石器製作跡は地点を違え、前期及び後期以降のものと考えられる2時期のものが見つかっており、石器製作に関するまとまった資料を得ることが出来ました。これとは別に分割した石器素材を一括して埋納した遺構も注目できます。また、中世前半期の集落跡は、遺跡内に点在する同時期ならびに後出する集落跡とあわせ、当時の集落景観を復元する上で貴重な資料となるものです。

本報告書が香川県及び綾川町の歴史研究のための資料として広く活用されますとともに、埋蔵文化財に対する理解と関心を一層深めるための一助となれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査から出土品の整理・報告に至るまでの間、関係諸機関並びに地元関係各位に多大なご援助とご協力を頂きましたことを、ここに深く感謝申し上げます。

平成24年12月27日

香川県埋蔵文化財センター

所長　藤好史郎

例言

1．本報告書は、香川県農業試験場移転事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第３冊で香川県綾歌郡綾川町北（旧綾南町）ならびに山田下（旧綾上町）に所在する西末則遺跡（にしすえのりいせき）Ⅲの報告を収録した。

2．発掘調査は、香川県教育委員会が調査主体となり、平成 15 年度以前は財団法人香川県埋蔵文化財調査センターが、平成 16 年度以降は香川県埋蔵文化財センターが、それぞれ調査を担当した。

3．発掘調査は、Ｃ地区を平成 14 年４月１日から平成 15 年３月 31 日まで、Ｇ・Ｈ地区を平成 15 年４月１日から平成 16 年３月 31 日まで実施した。発掘調査の担当は以下のとおりである。

平成 14 年度　Ｃ地区　　木下晴一　石原徹也　武井美和

平成 15 年度　Ｇ・Ｈ地区　　川原和生　小野秀幸　角田三保

4．調査にあたって、下記の諸機関の協力を得た。記して謝意を表したい。（順不同、敬称略）
香川県農政水産部農業経営課、中讃土地改良事務所、綾川町経済課、地元自治会、地元水利組合

5．本報告書は、香川県埋蔵文化財センターが作成した。
本報告書の執筆・編集は小野が担当した。

6．本報告書で用いる方位の北は、国土座標系第Ⅳ系（日本測地系）の北であり、標高は東京湾平均海面（Ｔ．Ｐ．）を基準としている。

7．本書で用いている遺跡記号は次のとおりである。
ＳＢ：掘立柱建物跡　ＳＡ：構列跡　ＳＰ：柱穴跡　ＳＥ：井戸跡　ＳＫ：土坑跡
ＳＤ：溝状遺構　ＳＦ：焼成土坑跡　ＳＴ：墓　ＳＸ：性格不明遺構　ＳＲ：自然河川跡

8．報告遺構名は整理区画と遺構種類を単位として、原則「01」から始まる通し番号により再整理を行った。柱穴跡のみ「001」からの通し番号とした。また、整理区画を明確にするために、遺構名中に整理区画記号の「d」を記入した。（例：SBd01、SPd001）

9．挿図の一部に国土地理院発行の 1/25,000 地形図を使用した。

10．本遺跡の報告にあたっては、下記の機関に分析を委託した。
サヌカイト産地同定…（株）パレオ・ラボ

本文目次

第１章　調査と整理の経過

第１節　調査と整理の方法 …… 1
第２節　調査と整理の体制 …… 6

第２章　調査の成果

第１節　調査の概要 …… 7
第２節　地形 …… 7
第３節　土層序 …… 35
第４節　遺構・遺物 …… 35

第３章　自然科学分析

西末則遺跡出土サヌカイトの産地推定 …… 218

第４章　まとめ …… 222

挿図目次

第１図　グリッド割図 …… 2
第２図　年度別地区割図 …… 3
第３図　グリッド名配置模式図 …… 4
第４図　調査区割図 …… 5
第５図　遺跡位置図 …… 7
第６図　Ｉ 21 区西壁・北壁土層（縦 1/40・横 1/80）…… 9
第７図　Ｉ 21 区南壁土層（縦 1/40・横 1/80）…… 10
第８図　Ｈ 19 区南壁土層（縦 1/40・横 1/80）…… 11
第９図　Ｈ 19 区西南壁・北壁・Ｆ 19 区東壁南端部土層（縦 1/40・横 1/80）…… 12
第 10 図　Ｆ 19 区西壁中央部・南壁西端部・西壁南端部・北壁東端部土層（縦 1/40・横 1/80）…… 13
第 11 図　Ｊ 18 区西壁土層（縦 1/40・横 1/80）…… 14
第 12 図　Ｊ 18 区北西・北壁土層（縦 1/40・横 1/80）…… 15
第 13 図　Ｊ 18 区東壁土層（縦 1/40・横 1/80）…… 16
第 14 図　Ｊ 18 区南壁土層（縦 1/40・横 1/80）…… 17
第 15 図　Ｉ 18 区北壁・南壁土層（縦 1/40・横 1/80）…… 18
第 16 図　Ｉ 18 区東壁土層（縦 1/40・横 1/80）…… 19
第 17 図　Ｈ 17 区北壁土層（縦 1/40・横 1/80）…… 20
第 18 図　Ｈ 17 区南壁土層（縦 1/40・横 1/80）…… 21
第 19 図　Ｆ 17 東壁土層（縦 1/40・横 1/80）…… 22
第 20 図　Ｄ 20 区西壁土層（縦 1/40・横 1/80）…… 23
第 21 図　Ｄ 20 区北壁・南壁土層（縦 1/40・横 1/80）…… 24
第 22 図　Ｃ 20 区東壁土層（縦 1/40・横 1/80）…… 25
第 23 図　Ｃ 20 区南壁土層（縦 1/40・横 1/80）…… 26
第 24 図　Ｄ 19 区西壁・南壁土層（縦 1/40・横 1/80）…… 27
第 25 図　Ｃ 19E 区南壁・Ｅ 17N 区北壁土層（縦 1/40・横 1/80）…… 28
第 26 図　Ｃ 18 区北壁・南壁土層（縦 1/40・横 1/80）…… 29
第 27 図　Ｂ 18 区南壁土層（縦 1/40・横 1/80）…… 30
第 28 図　Ｅ 16 区西壁土層（縦 1/40・横 1/80）…… 31
第 29 図　Ｅ 16 区北壁土層（縦 1/40・横 1/80）…… 32
第 30 図　Ｅ 16 区東壁土層（縦 1/40・横 1/80）…… 33
第 31 図　Ｅ 16 区南壁土層（縦 1/40・横 1/80）…… 34
第 32 図　SBd01 平・断面図（1/80）、出土遺物（1/4）…… 35
第 33 図　SBd02 平・断面図（1/100）…… 36
第 34 図　SBd02 出土遺物（1/4）…… 37
第 35 図　SBd03 平・断面図（1/80）、出土遺物（1/4）…… 38
第 36 図　SBd04 平・断面図（1/80）、出土遺物（1/4）…… 39
第 37 図　SBd05 平・断面図（1/80）、出土遺物（1/4）…… 40
第 38 図　SBd06 平・断面図（1/80）、出土遺物（1/4）…… 41
第 39 図　SBd07 平・断面図（1/80）、出土遺物（1/4）…… 42
第 40 図　SBd08 平・断面図（1/80）、出土遺物（1/4）…… 43
第 41 図　SBd09 平・断面図（1/80）、出土遺物（1/4）…… 44
第 42 図　SBd10 平・断面図（1/80）、出土遺物（1/4）…… 45
第 43 図　SBd11 平・断面図（1/80）…… 46
第 44 図　SBd12 平・断面図（1/80）、出土遺物（1/4）…… 47
第 45 図　SBd13 平・断面図（1/80）、出土遺物（1/4）…… 48
第 46 図　SBd14 平・断面図（1/80）、出土遺物（1/4）…… 49
第 47 図　SBd15 平・断面図（1/80）、出土遺物（1/4）…… 50
第 48 図　SAd01 平・断面図（1/200、1/100）…… 52
第 49 図　SAd02 平・断面図（1/200、1/100）…… 53
第 50 図　SAd03 平・断面図（1/80）、出土遺物（1/4）…… 53
第 51 図　柱穴出土遺物（1/4）…… 54
第 52 図　柱穴出土遺物（1/4）…… 54
第 53 図　SKd01 ～ 04 平・断面図（1/40）…… 56
第 54 図　SKd02 ～ 04 出土遺物（1/4）…… 57
第 55 図　SKd05 ～ 08 平・断面図（1/40）、出土遺物（1/4）…… 58
第 56 図　SKd09 平・断面図（1/20）…… 59
第 57 図　SKd09 出土石器　接合資料（1）（1/4）…… 61
第 58 図　SKd09 出土石器　接合資料（2）（1/4）…… 62
第 59 図　SKd09 出土石器接合資料（3）（1/4）…… 63
第 60 図　SKd09 出土石器　接合資料（4）（1/4）…… 64
第 61 図　SKd09・SPd043 出土石器接合資料（5）（1/4）…… 65
第 62 図　SKd12 ～ 21 平・断面図（1/40）、出土遺物（1/4）…… 67
第 63 図　SKd22 ～ 24 平・断面図（1/40）、出土遺物（1/4）…… 68
第 64 図　SKd10・11・21 平・断面図（1/40）…… 69
第 65 図　SKd26・27 平・断面図（1/40）、出土遺物（1/4）…… 70
第 66 図　SKd28・31 平・断面図（1/40）、出土遺物（1/4）…… 71
第 67 図　SKd32・33 平・断面図（1/40）、出土遺物（1/4）…… 72
第 68 図　SKd34 平・断面図（1/40）…… 72
第 69 図　SKd30・35 平・断面図（1/40）…… 73
第 70 図　SKd36・37 平・断面図（1/40）…… 74
第 71 図　SKd38・39 平・断面図（1/40）、出土遺物（1/4）…… 74
第 72 図　SKd40 ～ 43 平・断面図（1/40）、出土遺物（1/4）…… 75
第 73 図　SEd01 平・断面図及び見通し断面図（1/40）…… 77
第 74 図　SEd01 出土遺物（1/4）…… 78
第 75 図　SEd02 平・断面図（1/40）、出土遺物（1/4）…… 79
第 76 図　SFd01 ～ 03 平・断面図（1/40）、出土遺物（1/4）…… 80
第 77 図　SFd04 平・断面図（1/40）…… 81
第 78 図　STd01 平・断面図（1）（1/60）…… 82
第 79 図　STd01 出土遺物（1/4）…… 83
第 80 図　STd01 平・断面図（2）（1/60）…… 84
第 81 図　SDd028 出土遺物（1/4）…… 86
第 82 図　SDd001 ～ 005 断面図（1/40）、出土遺物（1/4）…… 88
第 83 図　SDd006 ～ 027 断面図（1/40）…… 89
第 84 図　SDd006 出土遺物（1/4）…… 91
第 85 図　溝状遺構出土遺物（1/4）…… 93
第 86 図　溝状遺構断面図（1/40）…… 95
第 87 図　溝状遺構出土遺物（1/4）…… 96
第 88 図　SDd041・042・044 断面図（1）（1/40）…… 97
第 89 図　SDd041・042・044 断面図（2）（1/40）…… 98
第 90 図　SDd041・042・044 断面図（3）（1/40）…… 100
第 91 図　SDd041・042・044 断面図（4）（1/40）…… 101
第 92 図　SDd041・042・044 出土遺物（1/4）…… 102
第 93 図　SDd046 断面図（1）（1/40）…… 103
第 94 図　SDd046 断面図（2）（1/40）…… 104
第 95 図　SDd046 断面図（3）（1/40）…… 105
第 96 図　SDd046 断面図（4）（1/40）…… 106
第 97 図　SDd046 遺物出土状況（1/40）…… 107
第 98 図　SDd046 出土遺物（1）（1/4）…… 108
第 99 図　SDd046 出土遺物（2）（1/4）…… 109

第 100 図　SDd046 出土遺物（3）(1/4) …… 110
第 101 図　SDd047 ～ 050 断面図 (1/40)、
出土遺物 (1/4) …… 111
第 102 図　SDd051 ～ 057 断面図 (1/40)、
出土遺物 (1/4) …… 113
第 103 図　SDd058 ～ 068 断面図 (1/40)、
出土遺物 (1/4) …… 114
第 104 図　溝状遺構断面図 (1/40･1/80) …… 115
第 105 図　SDd069・072 ～ 075 出土遺物 (1/4) …… 116
第 106 図　SDd082・083 断面図（1）(1/40) …… 118
第 107 図　SDd082・083 断面図（2）(1/40) …… 119
第 108 図　SDd082 出土遺物 (1/4) …… 120
第 109 図　SDd083 出土遺物 (1/4) …… 121
第 110 図　SDd084 ～ 099 断面図 (1/40) …… 123
第 111 図　SDd084 出土遺物 (1/4) …… 124
第 112 図　溝状遺構出土遺物 (1/4) …… 125
第 113 図　SDd100・101 平・断面図 (1/40･1/20) …… 126
第 114 図　SDd100 出土遺物 (1/4) …… 127
第 115 図　SXd01 平・断面図 (1/40)、
出土遺物 (1/4) …… 128
第 116 図　SXd02 ～ 04 平・断面図 (1/40) …… 129
第 117 図　SXd05 平・断面図 (1/40) …… 130
第 118 図　SXd08・09 平・断面図 (1/40)、
出土遺物 (1/4) …… 131
第 119 図　SXd10 平・断面図 (1/40) …… 132
第 120 図　SXd11 平・断面図 (1/40) …… 132
第 121 図　SXd12 平・断面図 (1/40) …… 133
第 122 図　SRd01・03 断面図（縦 1/40・横 1/80） …… 135
第 123 図　SRd01・03 断面図（縦 1/40・横 1/80） …… 136
第 124 図　SRd01・03 断面図（縦 1/40・横 1/80） …… 137
第 125 図　SRd01 出土遺物（1）(1/4) …… 138
第 126 図　SRd01 出土遺物（2）(1/4) …… 139
第 127 図　SRd02 断面図（縦 1/40・横 1/80） …… 140
第 128 図　SRd02 出土遺物 (1/4) …… 141
第 129 図　SRd03 出土遺物 (1/4) …… 141
第 130 図　SRd04 断面図（縦 1/40・横 1/80） …… 143
第 131 図　SRd04 出土遺物 (1/4) …… 144
第 132 図　SRd05 断面図（縦 1/40・横 1/80） …… 145
第 133 図　SRd06 断面図（縦 1/40・横 1/80） …… 146
第 134 図　石器集中部 B1 平・断面図 (1/20・1/200) …… 147
第 135 図　石器集中部 1 遺物密度模式図 …… 148
第 136 図　石器集中部 B1 出土石器　石鏃（1）(2/3) …… 150
第 137 図　石器集中部 B1 出土石器　石鏃（2）(2/3) …… 151
第 138 図　石器集中部 B1 出土石器　石鏃（3）(2/3) …… 152
第 139 図　石器集中部 B1 出土石器　石鏃（4）(2/3) …… 152
第 140 図　石器集中部 B1 出土石器　石鏃（5）(2/3) …… 152
第 141 図　石器集中部 B1 出土石器　異形石器・石錐
・スクレイパー (2/3) …… 153
第 142 図　石器集中部 B1 出土石器　RF (2/3) …… 154
第 143 図　石器集中部 B1 出土石器　楔形石器
・石匙未製品 (2/3) …… 155
第 144 図　石器集中部 B1 出土石器
石核（1）(1/2) …… 156
第 145 図　石器集中部 B1 出土石器
石核（2）(1/2) …… 157
第 146 図　石器集中部 B1 出土石器
石核（3）(1/2) …… 158
第 147 図　石器集中部 B1 出土石器
敲石 (1/2) …… 159
第 148 図　石器集中部 B1 出土石器
凹石・敲石 (1/2) …… 160
第 149 図　石器集中部 B1 出土石器
剥片（1）(2/3) …… 161
第 150 図　石器集中部 B1 出土石器
剥片（2）(2/3) …… 162
第 151 図　石器集中部 B1 出土石器
剥片（3）(2/3) …… 163
第 152 図　石器集中部 B1 出土石器
剥片（4）(2/3) …… 164
第 153 図　石器集中部 B1 出土石器
剥片（5）(2/3) …… 165
第 154 図　石器集中部 B1 出土石器
剥片（6）(2/3) …… 166
第 155 図　石器集中部 B1 出土石器
剥片（7）(2/3) …… 167
第 156 図　石器集中部 B1 出土石器
接合資料（1）(1/2) …… 168
第 157 図　石器集中部 B1 出土石器
接合資料（2）(1/2) …… 169
第 158 図　石器集中部 B1 出土石器
接合資料（3）(1/2) …… 170
第 159 図　石器集中部 B1 出土石器
接合資料（4）(1/2) …… 171
第 160 図　石器集中部 B1 出土石器
接合資料（5）(1/2) …… 172
第 161 図　石器集中部 B1 出土石器
接合資料（6）(1/2) …… 173
第 162 図　石器集中部 B1 出土石器
接合資料（7）(1/2) …… 174
第 163 図　石器集中部 B1 出土遺物分布図（1）
(1/200・1/2) …… 175
第 164 図　石器集中部 B1 出土遺物分布図（2）
(1/200・1/2) …… 176
第 165 図　石器集中部 B1 出土遺物分布図（3）
(1/200・1/2) …… 177
第 166 図　石器集中部 B1 出土遺物分布図（4）
(1/200・1/2) …… 178
第 167 図　石器集中部 B1 出土遺物分布図（5）
(1/200・1/2) …… 179
第 168 図　石器集中部 B1 出土遺物分布図（6）
(1/200・1/2) …… 180
第 169 図　石器集中部 B1 出土遺物分布図（7）
(1/200・1/2) …… 181
第 170 図　石器集中部 B1 出土遺物分布図（8）
(1/200・1/2) …… 182
第 171 図　石器集中部 B2 平・断面図 …… 184
第 172 図　石器集中部 B2 出土石器（1）(2/3) …… 185
第 173 図　石器集中部 B2 出土石器（2）(1/2) …… 186
第 174 図　I 21 区包含層出土遺物 (1/4) …… 187
第 175 図　H 19 区包含層出土遺物 (1/4) …… 188
第 176 図　F 19 区包含層出土遺物 (1/4) …… 188
第 177 図　G 地区（予備調査トレンチ）
出土遺物 (1/4) …… 188
第 178 図　I 21 区出土石器 (2/3) …… 189
第 179 図　H 19 区出土石器 (2/3) …… 190
第 180 図　F 19 区出土石器 (2/3) …… 191
第 181 図　J 18 区包含層出土遺物 (1/4) …… 192
第 182 図　I 18 区包含層出土遺物 (1/4) …… 192
第 183 図　I 17 区包含層出土遺物 (1/4) …… 193
第 184 図　F 17 区包含層出土遺物 (1/4) …… 193

第185図　H地区（予備調査トレンチ）
出土遺物（1/4）……193
第186図　J 18区出土石器（2/3）……194
第187図　I 18区出土石器（2/3）……195
第188図　H 17区出土石器（2/3）……196
第189図　F 17区出土石器（2/3）……197
第190図　E 17 N区包含層出土遺物（1/4）……198
第191図　B 18区包含層出土遺物（1）（1/4）……200
第192図　B 18区包含層出土遺物（2）（1/4）……201
第193図　B 18区奈良包含層出土遺物（1）（1/4）……201
第194図　B 18区奈良包含層出土遺物（2）（1/4）……202
第195図　C 18区包含層出土遺物（1/4）……203
第196図　C 19E区包含層出土遺物（1/4）……204
第197図　C 19W区包含層出土遺物（1/4）……204
第198図　D 19区包含層出土遺物（1）（1/4）……205
第199図　D 19区包含層出土遺物（2）（1/4）……206
第200図　C 20区包含層出土遺物（1/4）……207
第201図　D 20区包含層出土遺物（1/4）……208
第202図　D 20区出土石器（2/3）……209
第203図　C 20区出土石器（2/3）……210
第204図　D 19区出土石器（2/3・1/3）……212
第205図　C 19E区出土石器（2/3）……213
第206図　C 18区出土石器（2/3）……213
第207図　B 18区出土石器（2/3）……214
第208図　E 16区包含層出土遺物（1/4）……214
第209図　E 16区出土石器（1）（2/3）……215
第210図　E 16区出土石器（2）（2/3）……216
第211図　E 16区出土石器（3）・金属製品
（2/3・1/3）……217
第212図　サヌカイト産地推定判別図（1）……220
第213図　サヌカイト産地推定判別図（2）……221
第214図　縄文時代遺構配置図……222
第215図　弥生時代遺構配置図……222
第216図　古墳時代遺構配置図……223
第217図　古代時代遺構配置図……223
第218図　中世時代遺構配置図……224

表目次

第1表　平成18年度発掘調査体制一覧表……6
第2表　原石採取地点と判別群名称……218
第3表　原石採取地点と判別群名称……220
第4表　石器集中部1　個体別重量一覧……227
第5表　西末則遺跡Ⅲ出土土器観察表
第6表　西末則遺跡Ⅲ出土石器観察表
第7表　西末則遺跡Ⅲ出土金属器観察表

図版目次

巻頭図版1
SDd041・042・044全景 西から
SDd082・083全景 北から
巻頭図版2
SKd09　出土石器接合状況1
SKd09　出土石器接合状況2
巻頭図版3
SKd09　出土石器接合状況3
SKd09　出土石器接合状況4
巻頭図版4
石器集中部Ⅰ　出土石鏃
SEd01　出土土器
図版1
I21区全景 南から
I21区北半全景 南から
I21区完掘状況 西から
I21区完掘状況 西から
図版2
I21区南半全景 西から
I21区完掘状況 西から
I21区完掘状況 南から
H19区全景 南から
図版3
H19区全景 南から
H19区全景 東から
F19区遺構面検出状況 南から
F19区南半全景 西から
図版1
I18区北半全景 東から
I18区南半全景 北から
I18区全景 南から
I18区北半全景 南から
図版5
H17区全景 南から
H17区全景 北から
F17区南半全景 北西から
D20区 完掘状況 南から
図版6
C19W区全景 南から
C19E・C20区 完掘状況 南から
C19E区南半 掘削状況 南から
C19E区北半 掘削状況 南から
図版7
E17N区 完掘状況 東から
E17N・D19区 完掘状況 南から

E17N・D19 区 完掘状況　北から
C 18 区　完掘状況　北から
図版 8
B 18 区　完掘状況　西から
B 18 区　完掘状況　南から
B 18 区　完掘状況　北から
図版 9
I21 区南拡張区西壁 土層断面　東から
I21 区南拡張部西壁 土層断面　東から
I21 区北壁 土層断面　南から
H19 区北壁 土層断面　東から
H19 区南壁 土層断面　北から
H19 区南壁 土層断面　北西から
F19 区西南壁 土層断面　東から
F19 区西壁 土層断面　東から
図版 10
J18 区北西壁 土層断面　南東から
J18 区北壁 土層断面　南から
J18 区北壁 土層断面　南から
J18 区北壁 土層断面　南から
I18 区東壁 土層断面　西から
J18 区南壁 土層断面　北から
J18 区西壁 土層断面　東から
I18 区東壁 土層断面　西から
図版 11
I18 区東壁 土層断面　西から
I18 区東壁 土層断面　南東から
I18 区東壁 土層断面　北東から
I18 区東壁 土層断面　北西から
H17 区北壁 土層断面　南から
H17 区北壁 土層断面　南から
H17 区北壁 土層断面　南東から
D20 区北壁 土層断面　南から
図版 12
E17N 区北壁西半 土層断面　南から
E16 区東壁北半 土層断面　西から
E16 区東壁南半 土層断面　西から
E16 区南壁 土層断面　東から
E16 区西壁 土層断面　東から
E16 区西壁 土層断面　東から
E16 区西壁 土層断面　南東から
C20 区南壁 土層断面　北から
図版 13
C18 区北壁 土層断面　南から
C18 区南壁 土層断面　北から
C18 区南壁 土層断面　北から
B18 区南壁 土層断面　北西から
I21 区 SBd10 検出状況　南から
H19 区 SBd02 全景 北から
F19 区 SBd12・SDd035・SKd26・SKd27 完掘状況　南から
F19 区 SBd12-P17（SDd035 に切られる）完掘状況　西から
図版 14
B18 区 SBd14 検出状況　南から
B18 区 SBd14 検出状況　南から
B18 区 SBd14-P1 土層断面　東から
B18 区 SBd14-P2 土層断面　東から
B18 区 SBd14-P4 土層断面　西から
B18 区 SBd14-P7・12 土層断面　東から
B18 区 SBd14-P8 土層断面　東から
B18 区 SBd15 検出状況　南から
図版 15
B18 区 SBd15 検出状況　南から
I21 区 SAd01 検出状況　東から
B18 区 SAd03-P1 土層断面　西から
I21 区 SKd01 土層断面　東から
I21 区 SKd02 土層断面　北東から
I21 区 SKd04 土層断面　南東から
I21 区 SKd08 土層断面　南から
I21 区 SKd09 検出状況　西から
図版 16
I21 区 SKd09 土層断面　北から
I21 区 SKd09 土層断面・遺物出土状況　北から
I21 区 SKd09 完掘状況　南から
I21 区 SKd09 遺物出土状況　南から
H19 区 SKd11 土層断面　南から
I21 区 SKd16 土層断面　南西から
I21 区南拡張区 SKd24 土層断面　北から
H19 区南壁 SKd25 土層断面　北から
図版 17
F19 区 SKd26 木葉など出土状況　南東から
F19 区 SKd26 土層断面　土器出土状況　南から
F19 区 SKd26 上面検出状況　南から
F19 区 SKd26 完掘・遺物出土状況　東から
F19 区 SKd27 土層断面　西から
F19 区 SKd27 土層断面　西から
J18 区 SKd28 土層断面　南東から
J18 区 SKd28 土層断面　北西から
図版 18
J18 区 SKd28 完掘状況　南から
F17 区 SKd30 土層断面　北東から
F17 区 SKd30 土層断面　南西から
J18 区 SKd31 土層断面　南東から
J18 区 SKd31 土層断面　北西から
I18 区 SKd33 土層断面　北から
F17 区 SKd35 土層断面　北東から
D19 区 SKd37 土層断面　西から
図版 19
D19 区 SKd37 土層断面　西から
C19E 区 SKd38 土層断面　西から
C19E 区 SKd39 土層断面　東北から
C19E 区 SKd39 土層断面　西南から
B18 区 SKd40 完掘状況　西から
B18 区 SKd40 土層断面　西南から
B18 区 SKd40 土層断面　東北から
B18 区 SKd42 遺物出土状況　西から
図版 20
B18 区 SKd43 土層断面　西から
I21 区 SEd01 完掘状況　東から
I21 区 SEd01 完掘状況　南から
I21 区 SEd01 土層断面　西から
I18 区 SEd02 検内完掘状況　北から
I18 区 SEd02 土層断面　南東から
I18 区 SEd02 検内完掘状況　南から
E16 区 SFd01・02 検出状況　東から
図版 21
E16 区 SFd01 炭化物層除去　東から
E16 区 SFd02 土層断面　南西から
E16 区 SFd02 土層断面　北東から
E16 区 SFd02 炭化物層上面検出　東から
E16 区 SFd02 完掘状況　東から

E16 区 SFd02 完掘状況　南から
E16 区 SFd03 検出状況　西から
E16 区 SFd03 検出状況　南から
図版 22
E16 区 SFd03 検出状況　東から
E16 区 SFd03 土層断面　西から
E16 区 SFd03 土層断面　南から
E16 区 SFd03 炭化物層上面　東から
E16 区 SFd03 炭化物層上面　南から
E16 区 SFd03 完掘状況　東から
E16 区 SFd03 完掘状況　東から
E16 区 SFd03 完掘状況　南から
図版 23
B18 区 SFd04 土層断面　西南から
B18 区 SFd04 掘削状況　北から
B18 区 SFd04 土層断面　東北から
B18 区 SFd04 完掘状況　南から
B18 区 SFd04 完掘状況　南から
H19 区 STd01 調査前風景　東から
H19 区 STd01 北面（拡大）北から
H19 区 STd01 南面（拡大）南から
図版 24
H19 区 STd01 土層断面　東から
H19 区 STd01 土層断面　南から
H19 区 STd01 1 層除去　西から
H19 区 STd01 1 層除去　南から
H19 区 STd01 検出状況　南から
H19 区 STd01 検出状況　南から
H19 区 STd01 半裁状況　南から
H19 区 STd01 南北土層断面　西から
図版 25
H19 区 STd01 南北土層断面　東から
H19 区 STd01 東西土層断面　北から
H19 区 STd01 東西土層断面　南から
H19 区 STd01 全景　南から
H19 区 STd01・SDd028 土層断面　東から
H19 区 STd01・SDd028 掘削状況　北西から
H19 区 SDd028 B'-B 土層断面　北から
H19 区 SDd028 C'-C 土層断面　東から
図版 26
H19 区 SDd028 D-D' 土層断面　東から
H19 区 SDd028 E-E' 土層断面　北から
I21 区 SDd001 A-A' 土層断面　南から
I21 区 SDd001 B-B' 土層断面　南から
H19 区 SDd004 B'-B 土層断面　北から
H19 区 SDd004 C'-C 土層断面　北から
H19 区 SDd004 D-D' 土層断面　南から
I21 区 SDd006 B'-B 土層断面　西から
図版 27
I21 区 SDd006 遺物出土状況　西から
I21 区 SDd006 完掘状況　西から
I21 区 SDd026 土層断面　西から
H19 区 SDd031 土層断面・遺物出土状況　東から
F19 区 SDd033 土層断面　南から
F19 区 SDd033 完掘状況　北から
F19 区 SDd033 完掘状況　西から
F19 区 SDd034 土層断面　北から
図版 28
F19 区 SDd035 A'-A 土層断面　西から
F19 区 SDd035 B-B' 土層断面　東から
18 区 SDd039（左）・041 I'-I（右）土層断面　西から
F17 区 SDd040 土層断面　南から
F17 区 SDd040・SXd09 完掘状況　南から
J18 区 SDd041（左）・042（中央）・044（右）
検出状況　西から
J18 区 SDd041（右）・042（中央）・044（左）
検出状況　東から
J18 区東壁 SDd041・042・044　C'-C 土層断面　西から
図版 29
I18 区 SDd041 F'-F 土層断面　西から
I18 区 SDd041 L'-L・042 K'-K・044
J'-J 土層断面　西から
I18 区 SDd041 L'-L 土層断面　西から
H17 区 SDd041 Q'-Q 土層断面　西から
F17 区 SDd041 T'-T 土層断面　西から
E16 区 SDd041 X'-X 土層断面　西から
E16 区 SDd041 Z'-Z 土層断面　西から
E16 区 SDd041 地山境界付近 石器出土状況　東から
図版 30
J18 区 SDd041（右）・042（左）底部（地山）
石器出土状況　東から
J18 区 SDd042 B'-B 土層断面　西から
I18 区 SDd042 E'-E 土層断面　西から
H17 区 SDd042 Q'-Q 土層断面　西から
I18 区 SDd042 H'-H 土層断面　西から
I18 区 SDd042 K'-K 土層断面　西から
J18 区 SDd044 B'-B 土層断面　西から
I18 区 SDd044 D'-D 土層断面　西から
図版 31
I18 区 SDd044 G'-G 土層断面　西から
I18 区 SDd044 J'-J 土層断面　西から
I18 区 SDd044 溜まり部 M'-M（N-N'を含む）土層断面　南から
I18 区 SDd044 溜まり部 N'-N（M-M'を含む）土層断面　北から
H17 区 SDd044 P'-P 土層断面　西から
F17 区 SDd041（左）・044（右）完掘状況　西から
F17 区 SDd041（左）・044（右）完掘状況　西から
F17 区 SDd044 U'-U 土層断面　西から
図版 32
E16 区 SDd044 Y' -Y 土層断面　西から
J18 区 SDd041（右）・042（中央）・044（左）
完掘状況　東から
J18 区 SDd041（右）・042（中央）・044（左）
完掘状況　西から
I18 区 SDd041（右）・042（中央）・044（左）
完掘状況　東から
16 区 SDd043 土層断面　西から
D20 区北端部 掘削状況　南から
D20 区 SDd046 環状集石 上層の石除去後　南から
D20 区北端部 掘削状況　南から
図版 33
D20 区 SDd046 環状集石 掘削状況　東南から
D20 区 SDd046 A'-A 土層断面　北から
D20 区 SDd046・047・048　切り合い
B-B' 土層断面　南から
D20 区 SDd046 C-C' 土層断面　南から
D19 区 SDd046 F-F' 土層断面　南から
D19 区 SDd046 G'-G 土層断面　北から
D19 区 SDd046 H-H' 土層断面　南から
D19E 区南壁SDd046 I'-I 土層断面　北から

図版 34
E17N 区北壁 SDd046 J-J' 土層断面　南から
E17N 区 SDd046 K-K' 土層断面　南から
E17N 区 SDd046 L-L' 土層断面　南から
E16 区 SDd046 M-M' 土層断面　南から
E16 区 SDd046・SFd01 N'-N 土層断面　北東から
E16 区 SDd046 Q-Q' 土層断面　南から
D19 区 SDd046 中層 礫集中状況　西から
D19 区 SDd046 中層 礫集中状況　南から
図版 35
D19 区 SDd046 中層 礫集中状況　南から
D20 区 SDd046 完掘状況　南から
D20 区 SDd046 完掘状況　南から
D19 区 SDd046 完掘状況　南から
D19 区 SDd046 完掘状況　南から
E17N 区 SDd046 掘削状況　南から
E17N 区 SDd046 完掘状況　南から
E17N 区 SDd046 完掘状況　北から
図版 36
D20 区西壁 SDd046・047付近 土層断面　東から
D20 区 SDd046・049 切り合い 土層断面　南から
D20 区 SDd047 土層断面　東南から
D20 区西壁 SDd047（右）・048（左）土層断面　東から
D20 区 SDd049 A-A' 土層断面　南から
D20 区 SDd049 B-B' 土層断面　南から
D20 区 SDd050 A-A' 土層断面　東から
D20 区 SDd049（右）・050（左）　C-C' 土層断面
東南から
図版 37
C20 区 SDd052（右）・051（左）掘削状況　西から
D20 区 SDd052 A'-A 土層断面　西北から
C20 区 SDd052 B'-B 土層断面　西から
C20 区 SDd052 C-C' 土層断面　東から
C20 区 SDd052 掘削状況　北西から
D20 区 SDd053 土層断面　南から
D20 区 SDd055（左）・054（右）　A'-A 土層断面
北から
D20 区 SDd055（左）・054（右）　B'-B 土層断面
北から
図版 38
D20 区南壁　SDd055（左）・054（右）土層断面
北から
C20 区 SDd056 土層断面　西から
C20 区 SDd057 遺物出土状況　東から
C20 区 SDd057 A-A' 土層断面　東南から
C19W 区西壁 SDd059 土層断面　東から
E17N 区 SDd069・046 掘削状況
E17N 区 SDd069 A-A' 土層断面　東南から
E17N 区 SDd069 B'-B 土層断面　西から
図版 39
E17N 区 SDd069 完掘状況　東南から
E17N 区北壁 SDd072（左）・073（右）土層断面
南から
E17N 区 SDd046・072～078（左から）完掘状況　南から
C20 区南壁 SDd082 土層断面　北から
C20 区 SDd082 A-A' 土層断面　南から
C20 区 SDd082 B-B' 土層断面　南から
C18 区南壁 SDd082 掘削状況　南から
C19E 区南壁 SDd082 土層断面　北から
図版 40
C19E 区 SDd082 E-E' 土層断面　南から
B18 区 SDd082 F-F' 土層断面　南から
C20 区 SDd082（上）・083（下）掘削状況　東から
C20 区 SDd082（右）・083（左）掘削状況　北から
C19E 区 SDd082（右）・083（左）　C-C' 土層断面
南から
C19E 区 SDd082（右）・083（左）　D-D' 土層断面
南から
C20 区南壁 SDd083 土層断面　北から
C20 区 SDd083 A-A' 土層断面　南から
図版 41
C20 区 SDd083 B-B' 土層断面　南から
C19E 区 SDd083 G-G' 土層断面　南から
B18 区 SDd083 H-H' 土層断面　南から
B18 区南壁 SDd083 土層断面　北から
C19E 区南壁 SDd084（左）・082（右）　土層断面
北から
B18 区南壁 SDd084 土層断面　北から
B18 区 SDd084 B-B' 土層断面　南から
B18 区 SDd083（右）・084（左）完掘状況　南から
図版 42
B18 区 SDd083（左）・084（右）完掘状況　北から
B18 区 SDd084 完掘状況　南から
B18 区 SDd089 A-A' 土層断面　南東から
B18 区 SDd099 土層断面　東から
B18 区 SDd100 D'-D 土層断面　北から
B18 区 SDd100 遺物出土状況(563) 西北から
B18 区 SDd100 遺物出土状況(564) 西から
B18 区 SDd100 遺物出土状況　北から
図版 43
B18 区 SDd100 など 完掘状況　北から
B18 区 SDd100 など 完掘状況　北東から
I21 区 SXd01 土層断面　南東から
F19 区 SXd05 上面検出状況　西から
F19 区 SXd05 完掘状況　西から
I18 区 SXd07 炭化物検出状況　南から
I18 区 SXd07 炭化物検出状況　南から
F17 区 SXd09 土層断面　西から
図版 44
F17 区 SXd09 完掘状況　西から
I21 区 SRd01 B'-B 土層断面　西から
I18 区・I21 区南拡張部・H19 区 SRd01 検出状況　東から
I21 区南拡張区 SRd01　土層断面　南東から
I12 区南拡張部 SRd01 完掘状況　東から
I12 区南拡張部 SRd01 全景　東から
H19 区 SRd01 D-D' 土層断面　東から
H19 区 SRd01 E-E' 土層断面　東から
図版 45
H19 区 SRd01 完掘状況　西から
I18 区 SRd01 完掘状況　南から
F17 区 SRd01 完掘状況　西から
H17 区 SRd01 下層（SRd03）G-G' 土層断面　南東から
H17 区 SRd01 下層（SRd03）G-G' 土層断面　南西から
H17 区 SRd01 下層（SRd03）G-G' 土層断面　東から
H17 区 SRd01 下層（SRd03）G-G' 土層断面　東から
F17 区 SRd01・02 H-H' 土層断面　北東から
図版 46
F17 区 SRd01・02 H-H' 土層断面　南西から
F17 区 SRd02 全景　東から

F17 区 SRd02 全景　東から
H17 区 SRd02 上面検出状況　東から
H17 区 SRd02 土層断面　東から
H17 区 SRd02 A-A' 土層断面　南から
F17 区 SRd02 B-B' 土層断面　南から
H17 区 SRd02 完掘状況　東から
図版 47
H17 区 SRd02 上層 完掘状況　東から
H17 区 SRd02 下層 完掘状況　南から
H17 区北半 SR 群 完掘状況　北から
E16 区 SRd04 A-A' 土層断面　西から
E16 区 SRd04 完掘状況　東から
E16 区 SRd04 完掘状況　東から
E16 区 SRd04 完掘状況　南東から
J18 区 SRd05 C-C' 土層断面　南西から
図版 48
J18 区 SRd05 完掘状況　南東から
J18 区 SRd05 完掘状況　東から
F19 区 SRd06 上面検出状況　北から
F19 区 SRd06 上面検出状況　南から
J18 区石器集中部 1　東側ﾄﾚﾝﾁ（18I-19I ﾗｲﾝ）　土層断面　西から
J18 区石器集中部 1　中央・南北ﾄﾚﾝﾁ 土層断面　西から
J18 区石器集中部 1　中央・東西ﾄﾚﾝﾁ 土層断面　南から
J18 区石器集中部 1　東側ﾄﾚﾝﾁ（18I-19I ﾗｲﾝ）　土層断面　西から
図版 49
J18 区石器集中部 1　東側ﾄﾚﾝﾁ（18I-19I ﾗｲﾝ）　土層断面　西から
J18 区石器集中部 1　外周土層断面　西から
J18 区石器集中部 1　ﾋｽｶｲ出土状況　西から
J18 区石器集中部 1　中央・東西ﾄﾚﾝﾁ西半　土層断面　東から
J18 区石器集中部 1　外周土層断面　南から
J18 区石器集中部 1　石器出土状況
J18 区石器集中部 1　B 区画南端 遺物出土状況　東から
J18 区石器集中部 1　ﾋｽｶｲ出土状況　西から
図版 50
J18 区石器集中部 1　石器出土状況
J18 区石器集中部 1　D 区画 石器出土状況　東から
J18 区石器集中部 1　D 区画 石器出土状況　西から
J18 区石器集中部 1　C 区画 遺物出土状況　北から
J18 区石器集中部 1　D 区画 石器出土状況　東から
J18 区石器集中部 1　18J7g・7h 石器出土状況　北から
J18 区石器集中部 1　18J7g・7h 石器出土状況　北から
J18 区石器集中部 1　18J3d・18J4e 剥片分布状況　東から
図版 51
J18 区石器集中部 1　18J4j 石核出土状況　南から
J18 区石器集中部 1　19J23o 遺物出土状況
J18 区石器集中部 1・南西方向拡張部 完掘状況・作業風景　南から
J18 区石器集中部 1　18J7j 南西隅 堆積状況　北東から
J18 区石器集中部 1　18J8a 石器出土状況　南から
H19 区石器集中部 2　遺物出土状況　北から
J18 区石器集中部 1・南西方向拡張部 作業風景　東から
H19 区石器集中部 2　遺物出土状況　西から
図版 52
出土遺物（1）
図版 53
出土遺物（2）
図版 54
出土遺物（3）
図版 55
出土遺物（4）
図版 56
出土遺物（5）
図版 57
出土遺物（6）
図版 58
出土遺物（7）
図版 59
出土遺物（8）
図版 60
出土遺物（9）
図版 61
出土遺物（10）
図版 62
出土遺物（11）
図版 63
出土遺物（12）
図版 64
出土遺物（13）
図版 65
出土遺物（14）
図版 66
出土遺物（15）
図版 67
出土遺物（16）
図版 68
出土遺物（17）
図版 69
出土遺物（18）
図版 70
出土遺物（19）

第１章　調査と整理の経過

調査の経緯については、『香川県農業試験場移転事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告　第１冊　西末則遺跡Ⅰ』（香川県埋蔵文化財センター　2005）に詳述されていることからここでは割愛する。ただし、調査・整理の経過については方法などで補足があることから、上記の報告書（以下『西末則遺跡Ⅰ』と記す）を一部加筆修正して再掲する。

第１節　調査と整理の方法（『西末則遺跡Ⅰ』より再掲、一部に加筆修正）

１．調査の方法

対象地を調査するにあたり、まず事業予定地全体に南東隅を基点とする 20 mメッシュのグリッドを設定した。グリッド基点Ａ－１は国土座標第Ⅳ系のＸ＝ 135.820、Ｙ＝ 40.520 で、座標北の方向に１、２、３･･･、西の方向にＡ、Ｂ、Ｃ ･･･ と付し、各交点をＢ－２、Ｄ－２等のように呼称することにした。（第１図）また、20 mメッシュのグリッドの呼称は南東隅の交点によっている。さらに、部分的にはこの 20 mメッシュの中を 25 等分した４mメッシュを作成した中グリッドとさらにそれを 16 等分した１mメッシュを作成した小グリッドを用いた調査区もある。

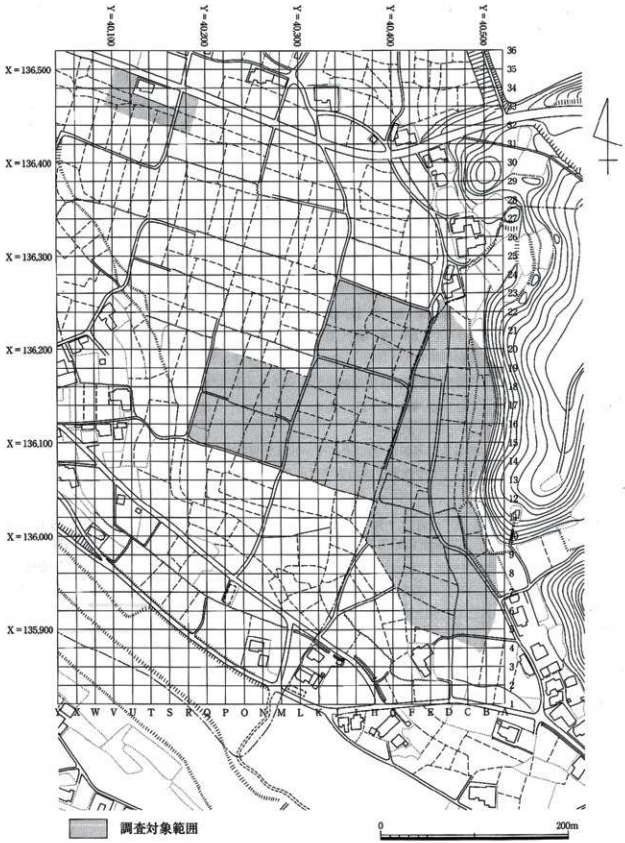
調査区全体の図化は、遺構密度の高い地域に限り業者に委託して航空測量を実施し、1/100・1/50 の縮尺で図化した。また、航空測量の対象外の区域と主要な遺構については、トータルステーションによる測量及び手描きの実測などにより対応した。対象地内に設置する基準点については対象地内の数地点に限り測量業者に委託し設置した。

２．調査区の設定

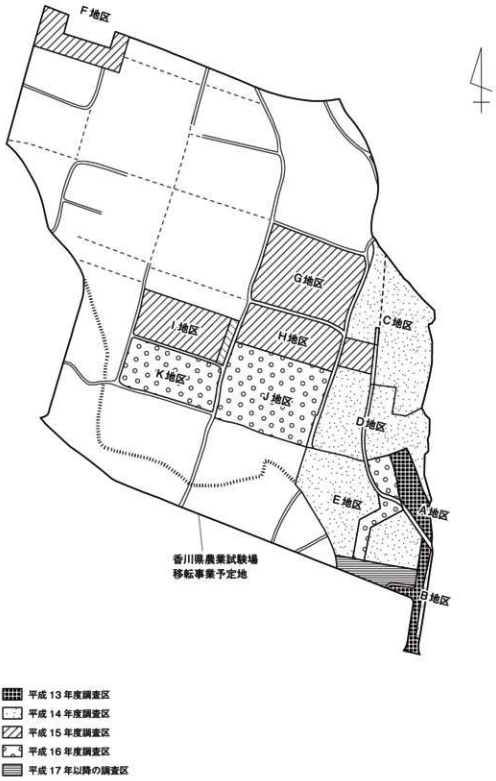
事業予定地は綾川町山田下・北（旧綾上町山田下および旧綾南町北）で、綾川の北岸段丘上面に位置する。県道 278 号線を北限とし、南限は綾川の氾濫原まで、東限は東辺に所在する南北丘陵 (末則丘陵) までで、南北約 450 m、東西約 400 mを測り、面積は約 18ha を測る。調査対象地は、予定地の南東部に位置する末則丘陵西斜面とそこから広がる平坦面を中心とした地域と、予定地北西隅部の県道 278 号線に接した飛び地状の地域とに分かれる。（第２図）

調査区の設定としては、調査対象地の面積がかなり広いため、まず、対象地をＡ～Ｋ地区までの 11 地区の大区画（以下地区と称す）に区分した。また、調査を進める都合上、地区内をさらに小区分した（以下調査区と称す）。調査区名は、原則各調査区内に位置する最も南東隅に近い交点名を用いた。したがって、先に示したＢ－２という交点が調査区内の最も南東隅に存在する場合、その調査区名はＢ２区と呼称されることになる。これは、農業試験場用地内の発掘調査が複数年次にまたがり、調査区も全面ではなく局所的に設定される可能性もあり、調査区名によって大まかな位置が把握できることを目的としたものである。

ところで、今回の報告対象地では、先に触れたとおり、中グリッド･小グリッドを用いたところがある。細分を必要とする箇所が複数にわたる場合、小グリッド名が煩雑になる可能性が想定されたため、次のようにグリッド呼称法を定めた。20 mメッシュの大グリッドについては従来使用してきている南東隅の交点名を用いる。ただし、調査区名との混乱を避けるためにアルファベットと数字を逆転させた。中

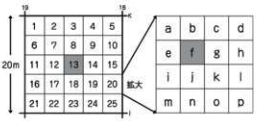

Y=40100
Y=40200
Y=40300
Y=40400
Y=40500
X=136,500
X=136,400
X=136,300
X=136,200
X=136,100
X=136,000
X=135,900
調査対象範囲
0
200m

第1図　グリッド割図


F地区
G地区
I地区
H地区
C地区
K地区
J地区
D地区
E地区
A地区
B地区
香川県農業試験場
移転事業予定地
平成 13 年度調査区
平成 14 年度調査区
平成 15 年度調査区
平成 16 年度調査区
平成 17 年以降の調査区

第２図　年度別地区割図

グリッド名には、25等分されたグリッドのうち北西隅のものから東へ向けて順に1・2・3・・・と通し番号を振った。例えば、第3図のトーン掛けされた中グリッドの名称は18Ｊ13グリッドとなる。小グリッドは、この中グリッド内をさらに1ｍメッシュで16等分したものである。グリッド名はアルファベット小文字で表現し、先ほど同様に北西隅から順につけてゆく。したがって、先程の18Ｊ13グリッドの中を細分し、トーン掛けした部分を呼称する際には18J13ｆという名称がつく。



第3図　グリッド名配置模式図

3．整理作業の方法

本遺跡は広大な調査対象地を数ヵ年にわたり、複数パーティーで調査を実施してきている関係上、相当数の職員が調査に関与し、調査区が多数存在することになり、全体像を把握しにくい状況になっている。整理作業に際しては、調査時の調査区のとおりに整理の範囲が確定できない問題と、発掘調査の担当者が必ずしも整理まで担当できるとは限らない人事上の問題などがあり、整理作業を順調に進めるための課題となっている。そのため、これらの問題点を解消し、計画的に整理作業を進めるため、全体の整理計画を作成し作業を進めることにした。

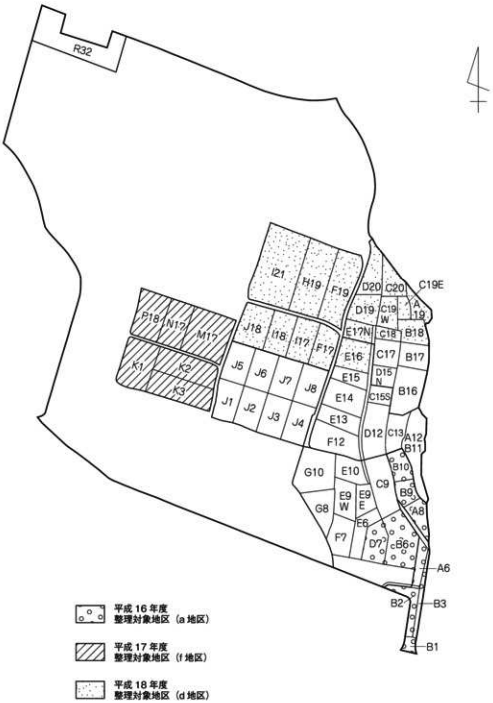
4．整理区画の設定

計画的に整理作業を進め、記載事項の混乱を防ぐ目的で、発掘調査時のＡ～Ｋ地区までの区画とは別に、新たに整理作業用の区画割を設定した。なお、この区画は次年度以降の整理作業の進行状態を考慮して、適時改変する必要が出てくるものと考えられる。(第4図)

今年度の整理対象地区は整理区画でいえば「ｄ地区」に当たり、平成14・15年度に調査を実施したＣ地区の一部（Ａ19・Ｂ18・Ｃ18・Ｃ19Ｅ・Ｃ19W・D20・Ｅ17Ｎ・Ｄ19・Ｄ20の各区）および15年度に調査を実施したＤ地区（Ｅ16区）・Ｇ地区（Ｉ21・Ｈ19・Ｆ19の各区）・Ｈ地区（Ｊ18・Ｉ18・Ｈ17・Ｆ17の各区）に相当する。以上のように今年度の整理対象地は、調査が複数年度に分かれる上、調査区も各年度単位で細かく分かれ、それとともに担当もそれぞれ異なる。さらに、複数の調査区にまたがる遺構の存在も認められる。これらの状況から、整理作業に混乱が生じることが当初より予測できたため、原則、調査地区をもとにした整理作業を実施することにした。

5．報告遺構名の呼称法

発掘調査時に付された個々の遺構の名称は、各調査区単位に適宜付された遺構名で、異なる遺構に同一名称を与えている事例や、遺構内容と照らし修正すべき遺構名称などが含まれている。そのため、報告書刊行時には数ブロックに分割した整理区画と遺構種類を単位として、全種類について「01」から始まる通し番号により再整理を行うものとした。さらに、各整理区画を明確にすることと、番号の混乱を防ぐことを目的として、遺構略称中に小文字アルファベットを用いた整理区画記号を記入し報告することにした（例：SBd01)。今回報告する遺構名の振替はＧ、Ｈ、Ｃ、Ｄ地区の順で、原則、対象地北西に位置するものから順に行った。


R32
I21
H19
F19
D20
C20
C19E
D19
C19
W
A
19
E17N
C18
B18
E16
C17
B17
E15
D15
N
B16
E14
C15S
E13
D12
C13
A12
B11
F12
G10
E10
B10
C9
B9
E9
W
E9
E
G8
A8
E6
F7
D7
C6
B6
A6
B2
B3
B1
P18
N17
M17
K1
K2
K3
J18
I18
H17
F17
J5
J6
J7
J8
J1
J2
J3
J4
平成 16 年度
整理対象地区（a 地区）
平成 17 年度
整理対象地区（f 地区）
平成 18 年度
整理対象地区（d 地区）

第４図　調査区割図

第２節　調査と整理の体制

発掘調査は財団法人香川県埋蔵文化財調査センターの直営によって平成14年度・15年度に実施し、調査員２名、調査技術員１名の３名１班体制で行った。調査体制の詳細は『西末則遺跡Ⅰ』に記述されていることからここでは割愛する。

整理作業は、平成15年度末の財団法人解散に伴い、香川県埋蔵文化財センターが平成18年度に実施した。出土遺物は土器・石器・金属器・木器合わせて99箱である。整理期間は平成18年４月から平成19年３月までの12ヶ月である。整理作業の体制は第１表のとおりである。

第１表　平成18年度整理体制一覧表

香川県教育委員会　文化行政課		香川県埋蔵文化財センター	
総括		総括	
課長	三谷雄治	所長	渡部明夫
総務		次長	榊原正人
副主幹（グループリーダー）	河内一裕	総務	
副主幹	谷　主昌	総務課長	野口孝一
主任	林　照代	主任	嶋田和司
主事	脇　悠介	資料普及課	
埋蔵文化財		課長	廣瀬常雄
課長補佐	藤好史郎	文化財専門員	小野秀幸
主任	山下平重		
文化財専門員	信里芳紀		

第２章　調査の成果

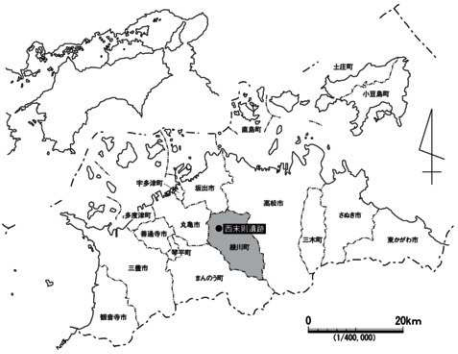
第１節　調査の概要

西末則遺跡は香川県綾歌郡綾川町山田下（旧綾上町山田下）･北（旧綾南町北）に位置する（第５図）。本報告は、西末則遺跡の第３冊目にあたり、遺跡の立地と環境については、『西末則遺跡Ⅰ』に詳述されているため、ここでは割愛する。

本報告が対象とする地区は、平成 14 年度に調査を実施したＣ地区の一部（Ａ 19･Ｂ 18･Ｃ 18･Ｃ 19 Ｅ･Ｃ 19W・Ｄ 20・Ｅ 17 Ｎ・Ｄ 19・Ｄ 20 の各調査区）および 15 年度に調査を実施したＤ地区（Ｅ 16 区）・Ｇ地区（Ｉ 21・Ｈ 19・Ｆ 19 の各調査区）・Ｈ地区（Ｊ 18・Ｉ 18・Ｈ 17・Ｆ 17 の各調査区）で、整理区画としてはｄ地区にあたる。調査面積はあわせて 18,453㎡を測り、調査期間は 18 ヶ月である。以下、報告時の地区名は今年度で整理が終わるＧ・Ｈ地区はそのままアルファベット大文字の地区名を使用するが、整理が複数年度にわたるＣ・Ｄ地区については煩雑になることから、整理区画名の「ｄ地区」の名称を用いる。

第２節　地形

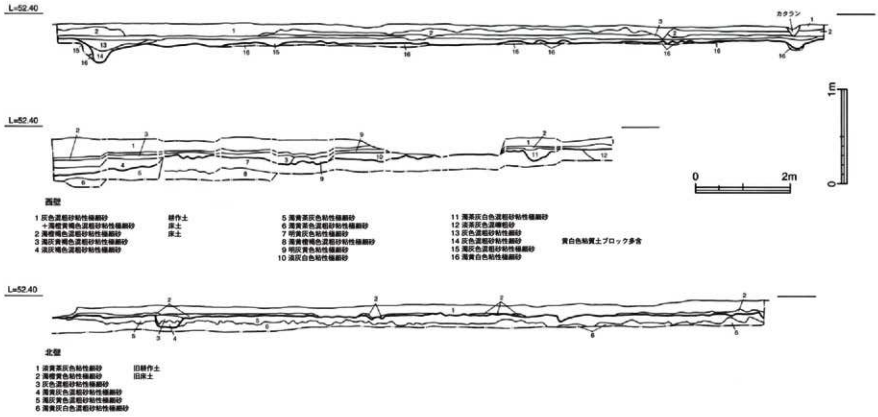
ｄ地区の旧状は、大半が水田で、Ｃ地区の東端丘陵上は畑地であった。地形の概略は木下氏により既に述べられている（木下晴一 2002）ことから、今回報告の対象となるｄ地区に関連する部分のみを抽出しながら記載する。この地区の東端については丘陵裾部にあたり、等高線が詰まることから等高線の作成は行っていない。この部分を除けば、東から西へと緩やかに傾斜する地形であるといえるが、ｄ地



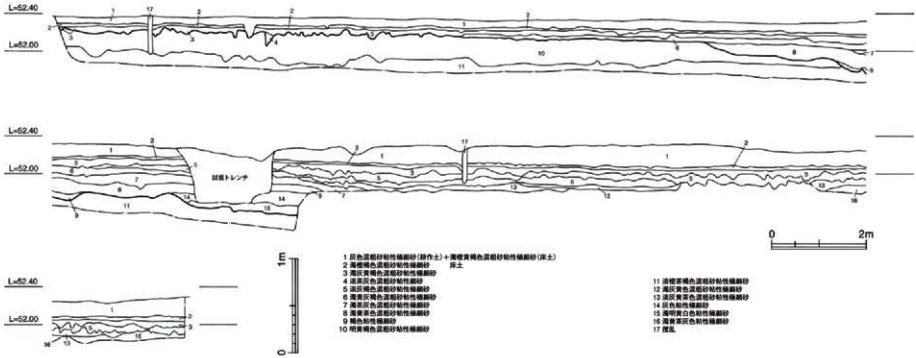
第５図　遺跡位置図

区南東隅から中央部をとおり、西辺中央部へ抜けるような微凹地が認められる。これはかつて木下氏により存在が指摘された、旧河道の可能性が想定される微凹地に当る。この微凹地を挟んで、南側のH地区は微凹地へ向けての緩傾斜面が、北側のG地区はほぼ平坦な地形がそれぞれ見られる。G地区については対象地外へ目を向けると、北側すぐのところを東側の丘陵から派生する谷筋が通る。このことから、G地区は南北を東西方向に延びる旧河道に挟まれた微高地上に位置することがわかる。H地区については、南にあるJ地区や先述のG地区と比べると等高線の間隔がやや密になっており、やや傾斜の強い地形であるといえる。このことは、C地区についても同様である。ここでは、等高線の間隔がさらに密になっており、さらに傾斜は強くなる。

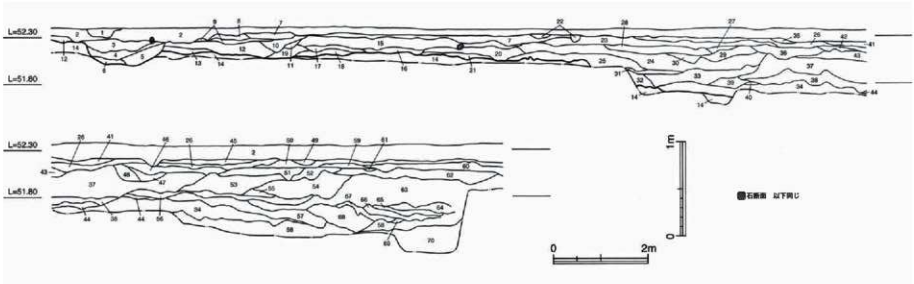
（木下晴一　2002「Ⅱ．遺跡周辺の地理的環境・歴史的環境　Ⅰ．地理的環境」『香川県農業試験場移転事業に伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告書　西末則遺跡』香川県教育委員会　（財）香川県埋蔵文化財調査センター）



第6図　Ⅰ21区西壁・北壁土層（縦1/40・横1/80）

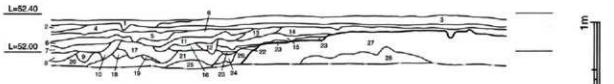


第７図　Ｉ21 区南壁土層（縦 1/40・横 1/80）



1 花崗土
2 橙黄褐色混粗砂粘性極細砂　　旧床土
3 濃灰黄褐色混粗砂粘性極細砂
4 濃灰褐色混粗砂粘性極細砂
5 淡茶灰褐色混粗砂粘性極細砂　　灰色粘性極細砂ラミナ状に含
6 灰色混細砂粘性極細砂
7 濃褐灰色混粗砂粘性極細砂
8 茶灰色混粗砂粘性極細砂
9 茶灰褐色混粗砂粘性細砂
10 薄黄茶灰色混粗砂粘性極細砂
11 濃灰黄茶色混粗砂粘性極細砂
12 暗灰色混粗砂粘性細砂
13 茶褐灰色混粗砂粘性極細砂
14 明黄褐色粘性極細砂
15 薄黄茶褐色混粗砂粘性細砂
16 暗灰色混粗砂粘性細砂
17 濃灰茶色混粗砂粘性細砂
18 茶灰褐色混細砂粘性細砂
19 暗灰褐色粘性極細砂
20 濃茶灰黄色粘性細砂
21 濃灰色混細砂粘性細砂
22 淡茶褐色混粗砂粘性細砂
23 薄黄茶褐色混粗砂粘性細砂
24 濃灰褐色混粗砂粘性細砂
25 灰色混粗砂細砂
26 薄褐灰色混粗砂粘性極細砂
27 淡茶褐色混粗砂粘性細砂　　砂多量
28 暗灰色混粗砂粘性細砂
29 薄茶灰色混粗砂粘性極細砂
30 暗灰色混粗砂粘性極細砂
31 橙灰褐色混細砂粘性極細砂　　炭化物若干含
32 薄褐灰黄色粘性極細砂
33 灰色混粗砂粘性極細砂　　砂ラミナ状に含
34 茶黄色混粗砂細砂
35 濃灰黄色混粗砂粘性極細砂
36 淡灰褐色混粗砂粘性細砂
37 淡茶灰色混粗砂細砂
38 濃褐灰黄色粘性極細砂
39 淡灰色砂砂
40 灰白色極細砂
41 薄黄茶褐色混粗砂粘性極細砂
42 薄茶灰褐色混粗砂粘性極細砂
43 灰茶褐色混粗砂粘性細砂
44 淡黄灰白色混粗砂粘性極細砂
45 暗灰色粘性極細砂
46 薄茶褐色混粗砂粘性細砂
47 薄茶灰色混粗砂粘性細砂
48 茶色混粗砂粘性細砂
49 暗灰色粘性極細砂
50 薄黄茶褐色混粗砂粘性細砂
51 黄茶灰色混粗砂細砂
52 茶色混粗砂粘性細砂
53 淡灰黄色混粗砂細砂
54 灰色混粗砂細砂　　茶色細砂ラミナ状に含
55 薄茶灰色混粗砂細砂
56 淡灰色細砂
57 茶灰色色混粗砂細砂
58 暗灰色粘性極細砂
59 薄黄灰黄色混粗砂粘性細砂
60 薄黄灰茶色混粗砂粘性細砂
61 淡灰茶色混粗砂粘性細砂
62 茶灰色混粗砂粘性細砂
63 灰茶色混粗砂細砂
64 明茶灰色細砂
65 暗灰色粘性極細砂
66 灰白色混粗砂細砂
67 灰色混粗砂粘性極細砂
68 灰色混粗砂細砂
69 灰色混粗砂細砂
70 濃灰褐色混粗砂細砂

第８図　Ｈ１９区南壁土層（縦 1/40・横 1/80）

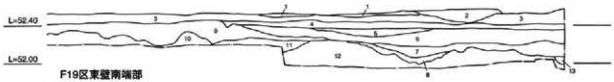


H19区西南壁

1 旧耕作土
2 花崗土
3 淡橙黄灰色混砂砂性極細砂　旧耕作土?
4 濃橙黄灰色混砂砂性極細砂　旧床土
5 濃灰黄褐色混砂砂性極細砂
6 暗灰色混砂砂性極細砂
7 灰褐色混砂砂性極細砂
8 灰黄褐色粘性細砂
9 茶灰褐色砂性細砂
10 濃灰黄褐色粘性細砂　やや粒子粗
11 濃灰褐色粘性細砂
12 濃灰黄褐色粘性細砂
13 淡黄灰褐色混砂砂性極細砂
14 濃灰褐色混砂砂性細砂
15 茶灰褐色混砂砂性細砂
16 明茶灰色粘性細砂
17 濃灰黄褐色混砂砂性細砂
18 淡茶灰白混砂砂細砂
19 暗灰色混砂砂粘性細砂
20 灰色細砂
21 灰色細砂
22 明灰白色細砂
23 灰白色細砂
24 灰褐色混砂砂粘質土
25 濃灰色混砂砂粘質土
26 暗灰色混砂砂粘質土
27 明黄白色混礫砂質土
28 明黄白色混礫砂質土　27層に比べ礫含有率高

H19区北壁

1 表土
2 暗褐
3 淡黄茶灰色混砂砂性細砂
4 薄橙茶灰色混砂砂性細砂　旧床土
5 灰色混砂砂粘性細砂中
6 薄黄灰色混砂砂性細砂中
7 薄明黄灰色粘性細砂中　地山
8 濃灰褐色混砂砂粘性細砂　SB002



F19区東壁南端部

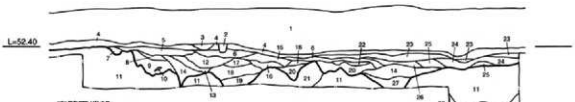
1 耕作土
2 花崗土
3 床土
4 灰褐色混砂シルト
5 やや明灰褐色混砂シルト　Mn・Fe粒顕著
6 暗灰褐色混砂シルト
7 濃暗灰色砂質シルト
8 灰褐色多砂質シルト
9 黄褐色砂質シルト
10 11層より明
11 暗褐色硬質シルト　12層と基本的には同一層だが明(粗成キリン状縞目)
12 暗黄褐色硬質シルト　地山
13 明灰色砂質シルト　部分的な落ち込み

0　2m

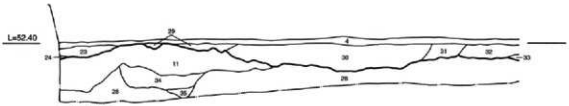
第９図　Ｈ１９区西南壁・北壁・Ｆ１９区東壁南端部土層（縦 1/40・横 1/80）

西壁中央部

1 赤褐色混砂シルト　　現床土
2 部地灰褐色(固)混砂粘質シルト　　Mn粒含　須恵器等包含　整地層or旧耕作土層ｶ?
3 黄褐色シルト
4 部地褐色砂質シルト　　グライ気味の灰色シルトが乾燥に入る(キリン斑文状)

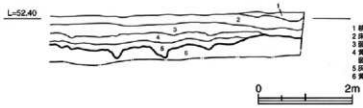


南壁西端部



西壁南端部

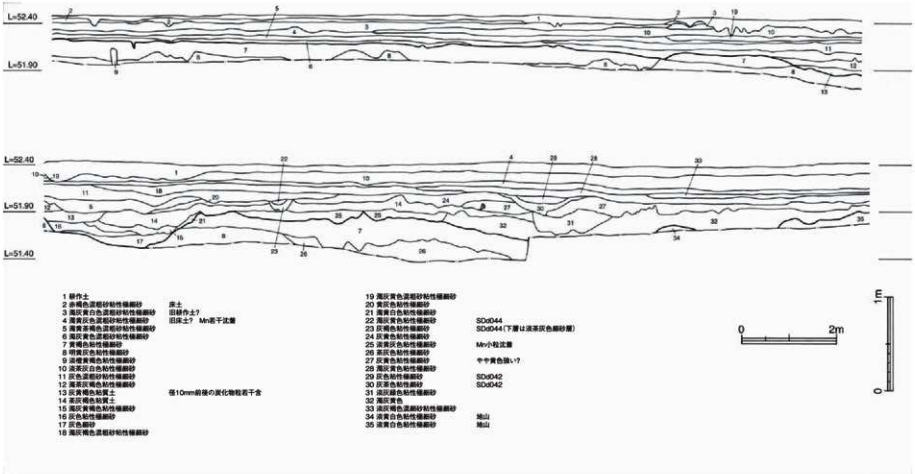
1 表土　　ニノ又用水護岸工事時形成
2 耕作土
3 暗赤褐色混砂シルト
4 赤褐色混砂シルト　　床土
5 暗灰褐色粘質シルト　　Mn粒含　SX05埋土
6 暗赤褐色混砂シルト、暗灰褐色粘質シルト
7 黄褐色砂質
8 黄褐色混砂シルト
9 褐褐色砂質
10 11層ブロック
11 黄褐色砂質シルト　　地山
12 褐黄褐色混砂シルト
13 5層に砂が多く混る
14 13層より多砂
15 12層と類似
16 暗赤褐色粘砂
17 赤褐色中砂
18 14層と類似
19 褐褐色砂質
20 13層と類似
21 11層よりにごる
22 暗灰褐色砂
23 黄灰褐色混砂シルト
24 褐褐色混砂シルト
25 暗赤褐色中砂　　Fe・Mn粒多
26 24層と類似
27 19層と類似
28 黄灰色中砂　　地山
29 暗灰褐色混砂粘質シルト
30 褐黄褐色砂質シルト
31 暗褐色砂礫
32 褐褐色砂質シルト
33 褐褐色砂質シルト　　32層より多砂
34 黄褐色砂質シルト　　11層より多砂
35 灰色褐混砂質シルト



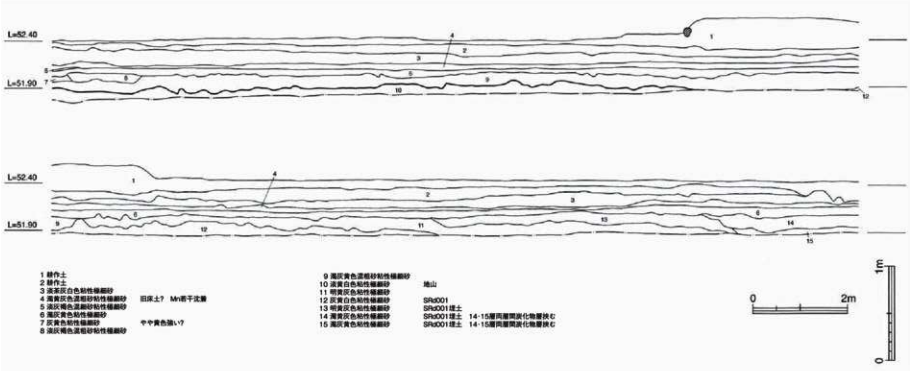
北壁東端部

1 耕作土
2 床土
3 部地灰褐色粘質シルト　　須恵器等包含
4 黄褐色砂質シルト(固グライ)、部地灰褐色粘質シルト
5 灰色中粘砂質
6 黄褐色砂質シルト(固グライ)　　地山

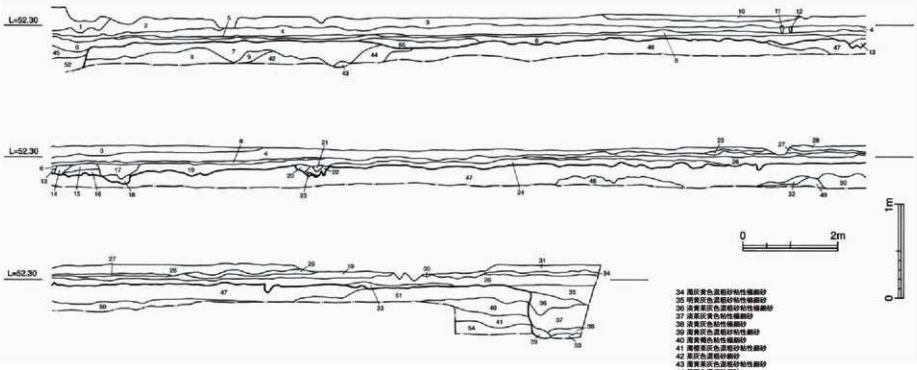
第10図　Ｆ19区西壁中央部・南壁西端部・西壁南端部・北壁東端部土層（縦1/40・横1/80）



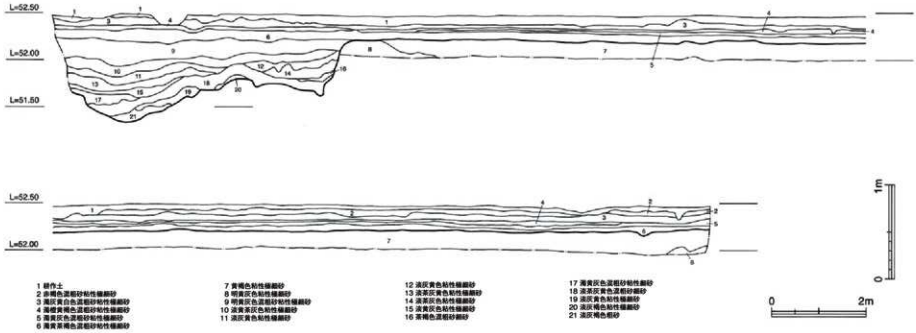
第11図　J 18区西壁土層（縦1/40・横1/80）



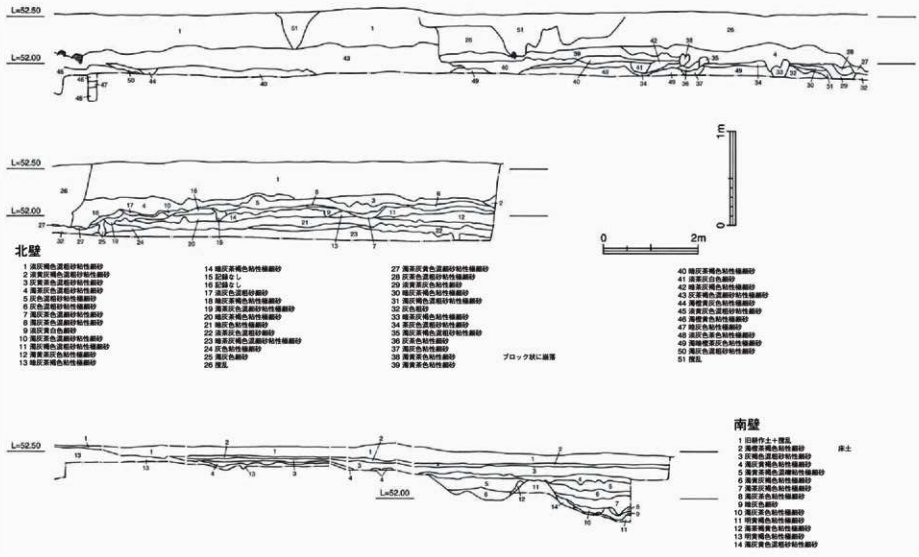
第12図　J 18区北西・北壁土層（縦 1/40・横 1/80）



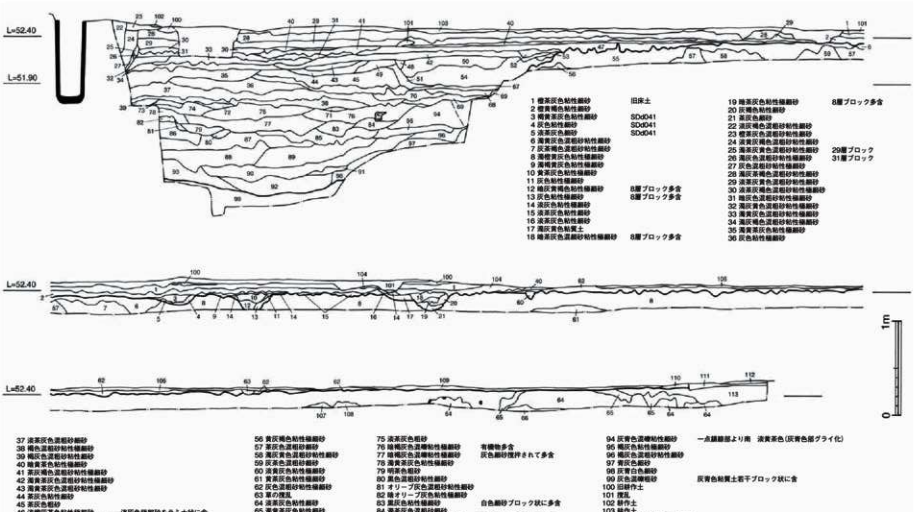
第13図　J 18区東壁土層（縦1/40・横1/80）



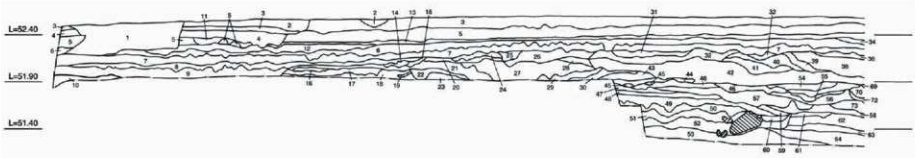
第14図　J 18区南壁土層（縦1/40・横1/80）

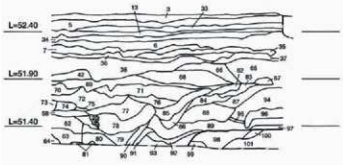


第15図　I 18区北壁・南壁土層（縦1/40・横1/80）



第16図　Ⅰ18区東壁土層（縦1/40・横1/80）

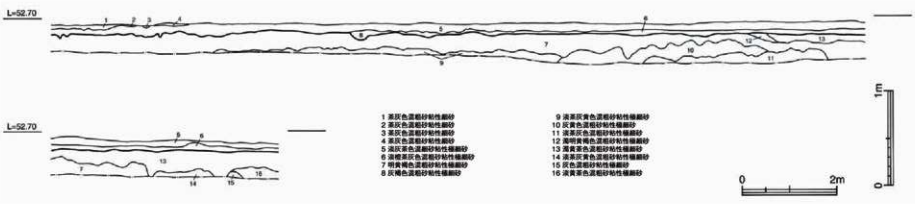




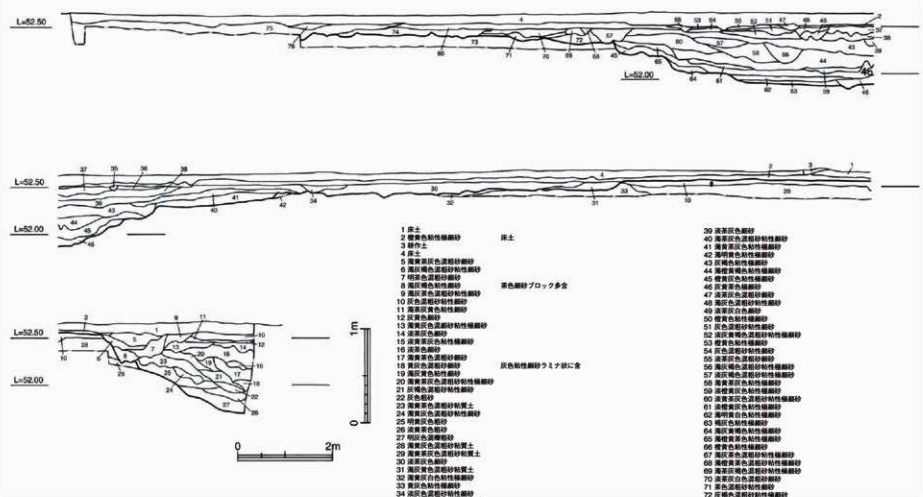
1 試掘トレンチ埋土
2 耕作土
3 赤茶褐色混粗砂粘性細砂　　旧床土
4 淡茶灰色混粗砂粘性細砂
5 薄黄茶白色混粗砂粘性細砂
6 褐褐色粘砂粘性細砂
7 淡灰茶褐色混粗砂粘性細砂
8 茶灰色混粗砂粘性極細砂
9 淡茶灰黄色粘性極細砂
10 淡灰黄色粘性極細砂
11 明茶灰色混粗砂粘性細砂
12 薄茶灰色混粗砂粘性細砂
13 褐褐茶灰色混粗砂粘性細砂
14 淡茶灰色粘性極細砂
15 黄茶灰色粘性極細砂
16 淡灰茶色細砂
17 茶灰色粘性細砂
18 暗灰色粘性極細砂
19 灰色混粗砂細砂
20 淡灰色粘性細砂
21 淡灰色細砂
22 褐褐灰色粘性細砂
23 灰色細砂

24 茶灰色細砂
25 淡黄茶灰色混粗砂粘性細砂
26 茶灰色混粗砂細砂
27 暗茶灰色細砂
28 灰色粘性細砂
29 茶灰色粘性細砂
30 灰茶色粘性細砂
31 茶褐色混粗砂粘性細砂
32 茶灰色細砂
33 明黄色粘性細砂
34 明黄灰茶色混粗砂粘性極細砂
35 淡灰茶色混粗砂粘性細砂
36 暗褐色混粗砂粘性極細砂
37 薄黄茶灰色混粗砂粘性細砂
38 灰褐色混粗砂粘性極細砂
39 灰褐色混粗砂粘性極細砂
40 明灰茶色混粗砂細砂
41 明灰褐色混粗砂極細砂
42 茶褐灰色混粗砂細砂
43 茶灰色細砂
44 暗灰色粘性極細砂
45 灰黄色細砂
46 灰色混粗砂細砂
47 暗灰色細砂
48 淡茶灰白色混粗砂細砂
49 暗褐色混粗砂粘性極細砂
50 暗灰色粘性極細砂
51 茶灰色細砂
52 暗灰色粘性極細砂
53 黒色混褐粘性極細砂
54 暗茶色混粗砂細砂
55 暗灰色粘性極細砂
56 赤茶灰色混粗砂細砂
57 赤茶色細砂
58 暗灰色粘性極細砂
59 茶灰色細砂
60 茶灰色混粗砂粘性細砂
61 淡茶灰色混粗砂細砂
62 淡灰茶色混粗砂細砂
63 淡黄灰色混粗砂細砂
64 黒色混粗砂粘性極細砂
65 灰褐色粘性細砂
66 茶灰色混粗砂粘性細砂
67 暗灰色粘性極細砂
68 暗赤褐色細砂
69 淡灰黄色粘性細砂
70 赤茶灰色混粗砂粘性細砂
71 明灰色細砂
72 黒茶灰色混粗砂粘性細砂　　暗灰色細砂をラミナ状に含む
73 黒色混粗砂細砂
74 黄褐灰茶色混粗砂細砂
75 茶灰茶色混粗砂細砂
76 茶灰色混粗砂細砂
77 暗灰色混粗砂粘性細砂
78 淡灰色混粗砂細砂
79 暗灰色混粗砂粘性細砂　　灰色細砂・細砂をラミナ状に含む
80 淡灰色細砂
81 青灰色混粗砂細砂　　褐色粘質土ブロック状に含む
82 黒茶灰色混粗砂細砂
83 灰色混粗砂粘性細砂
84 暗灰色混粗砂粘性極細砂
85 茶灰色混粗砂細砂
86 灰色細砂
87 明茶灰色細砂
88 暗灰色混粗砂粘性細砂　　灰色細砂ラミナ
89 灰色粘質細砂
90 淡灰黄色粘性細砂
91 灰黄色粘性極細砂
92 暗灰色混粗砂粘性細砂
93 暗灰黄色細砂
94 赤茶灰色混粗砂細砂
95 暗灰色混粗砂粘性細砂
96 暗灰色混粗砂粘性細砂
97 暗灰色混粗砂粘性細砂
98 オリーブ灰黄色粘性極細砂
99 オリーブ灰黄色細砂
100 オリーブ灰黄色細砂
101 オリーブ灰黄色細砂

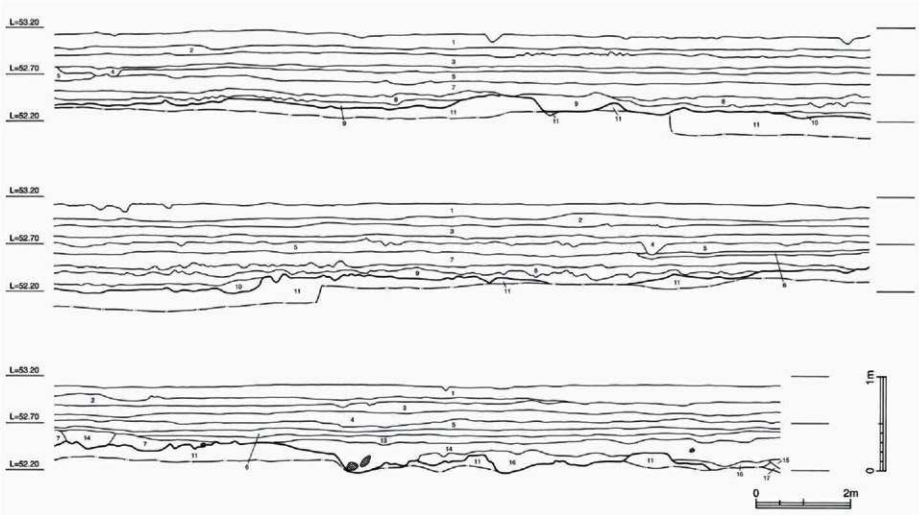
第17図　H17区北壁土層（縦1/40・横1/80）



第18図　H17区南壁土層（縦1/40・横1/80）

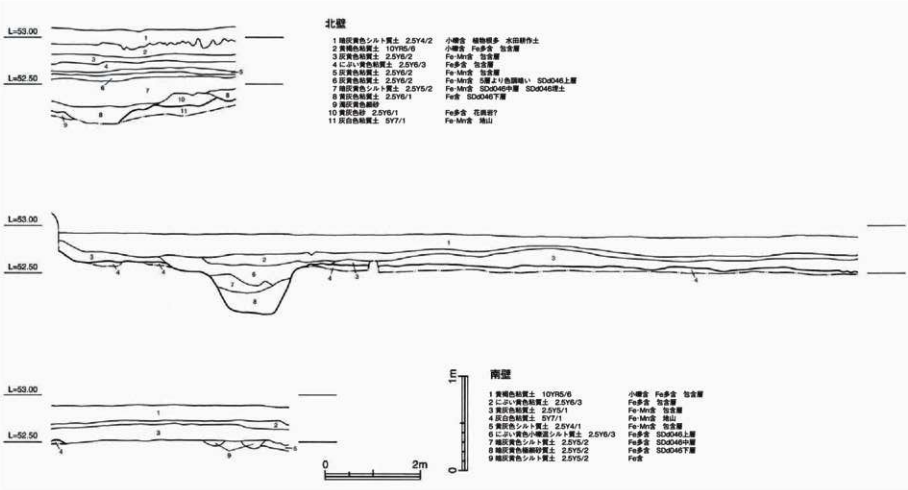


第19図　F 17 東壁土層（縦 1/40・横 1/80）

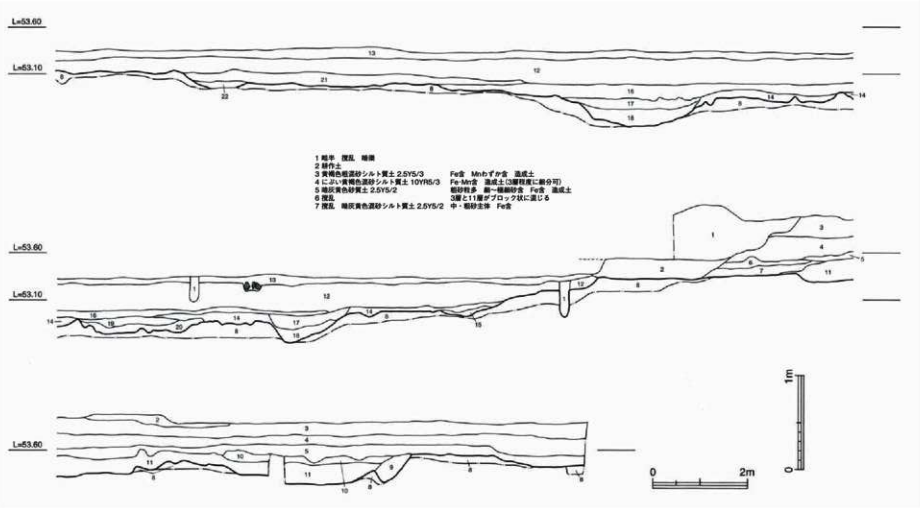


1 暗灰黄色シルト質土　2.5Y4/2　小礫含　植物根多　水田耕作土
2 暗灰黄色シルト質土　2.5Y5/2　小礫含　水田耕作土
3 黄褐色粘質土　10YR5/6　小礫含　Fe多含　包含層
4 灰黄色粘質土　2.5Y6/2　Fe・Mn含　包含層
5 にぶい褐色粘質土　2.5Y6/3　Fe多含　包含層
6 灰黄色粘質土　2.5Y6/2　Fe・Mn含　包含層
7 黄灰色粘質土　2.5Y5/1　Fe・Mn含　包含層
8 黄灰色シルト質土　2.5Y4/1　Fe・Mn含　包含層
9 灰黄色細細砂質土　2.5Y6/2　Fe含　包含層
10 灰黄色細砂　2.5Y6/2　一部1cm程の砂礫包含　包含層
11 灰白色粘質土　5Y7/1　Fe・Mn含　地山
12 褐灰色シルト質土　10YR5/1　Fe・Mn含　下方で粘質化する　SD₁050埋土
13 灰黄色粘質土　2.5Y6/2　Fe・Mn含　6層より色調暗い　SD₁046上層
14 暗灰黄色シルト質土　2.5Y5/2　Fe・Mn含　SD₁046中層　SD₁046埋土
15 黄灰色粘質土　2.5Y6/1　Fe含　SD₁046下層
16 灰黄色砂　2.5Y6/2　鉄一中砂
17 黄灰黄色砂

第 20 図　D 20 区西壁土層（縦 1/40・横 1/80）



第21図　D 20区北壁・南壁土層（縦1/40・横1/80）



8 灰黄色粘質土 2.5Y7/2
9 灰黄褐色砂質土 10YR5/2

10 灰黄褐色混砂シルト質土 10YR4/2
11 暗灰色シルト質土 10YR4/1

12 黄褐色砂質土 2.5Y5/4
13 にぶい黄色細細砂質土 2.5Y6/3
14 にぶい黄褐色小礫混シルト質土 10YR5/3

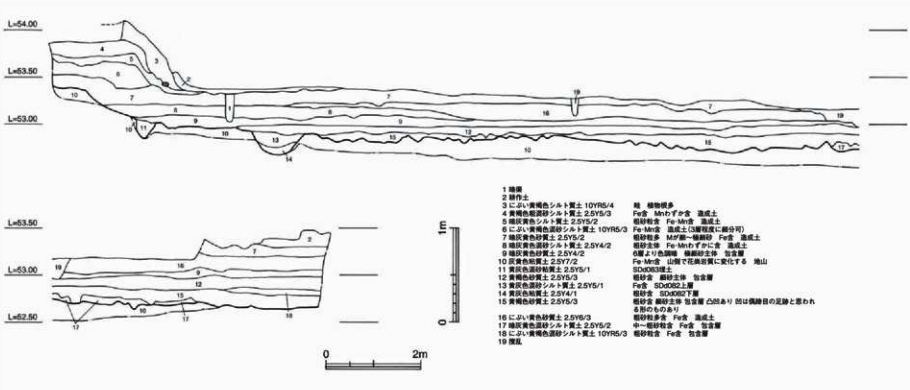
Fe·Mn含　山側で花崗岩質に変化する　地山
中～粗砂　Fe多　花崗岩質化による　SDd083もしくは同時期の包含層の複数
細～粗砂粒含　Fe·Mn含　SDd083もしくは同時期の包含層の複数
細～粗砂粒含　Fe多含　Mn含　SDd083もしくは同時期の包含層の複数
3～4層に細分可　Fe含
Fe含　床土
Fe含 包含層

15 灰黄褐色シルト質土 10YR4/2
16 灰黄褐色小礫混細砂質土
17 暗灰黄色砂質土 2.5Y5/2
18 黒褐色混砂粘質土 2.5Y3/2
19 にぶい黄橙色砂 10YR6/4

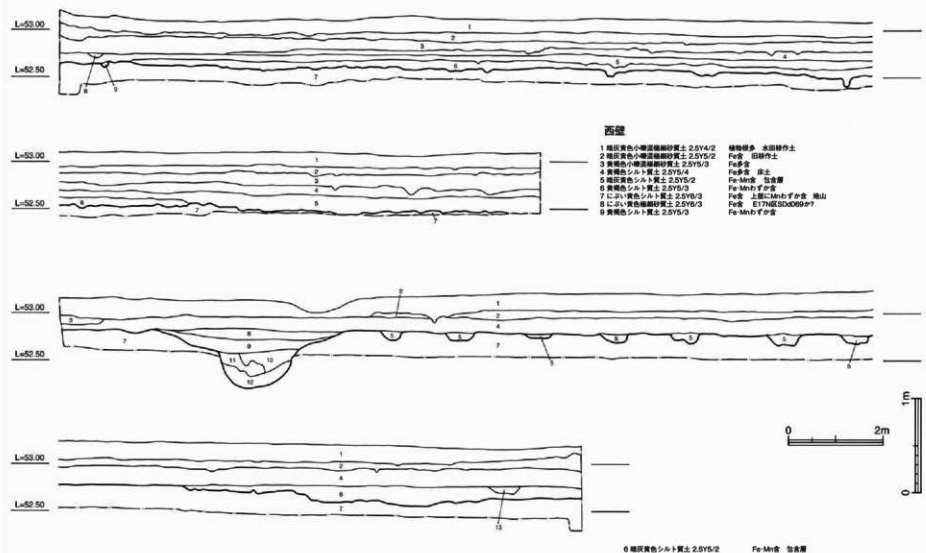
20 灰黄褐色シルト混砂質土 10YR4/2
21 にぶい黄色砂質土 2.5Y6/3
22 にぶい黄色砂質土

Fe·Mn含 SDd83埋土
Mn多含　Fe含　包含層
小礫含　細砂主体　Fe含　SDd082埋土
細砂含　Fe含　SDd082埋土
粗砂含　細砂主体　SDd056·057
(北壁断面でSDd056·057は同一遺構)
Fe·Mn含　SDd056·057(北壁断面ではSDd056·057は同一遺構)
Fe·Mn含 包含層
Fe·Mn多含　SDd051

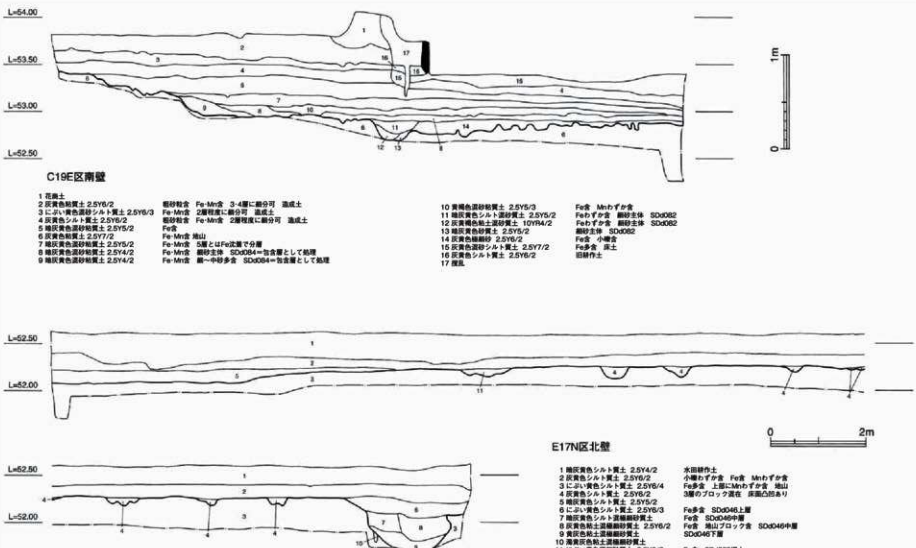
第22図　C 20区東壁土層（縦1/40・横1/80）



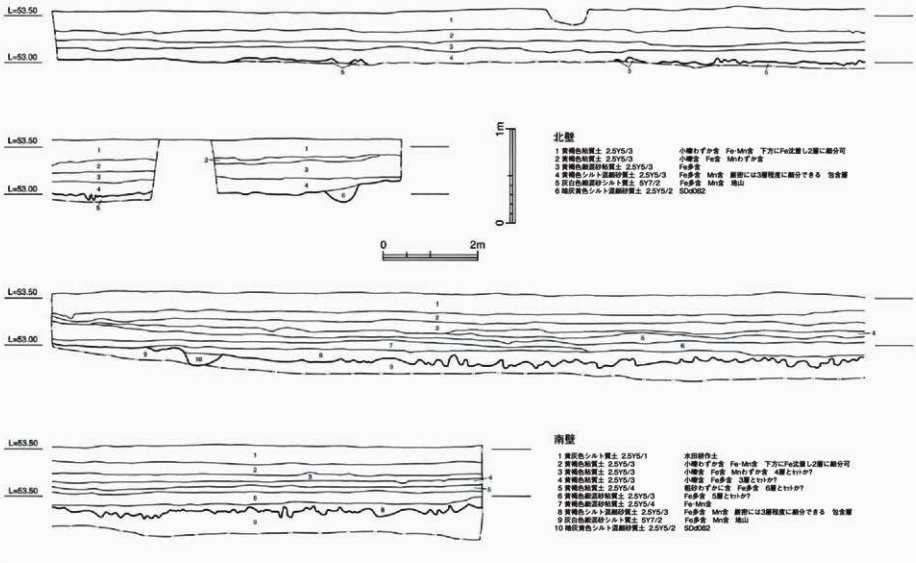
第23図　C 20区南壁土層（縦1/40・横1/80）



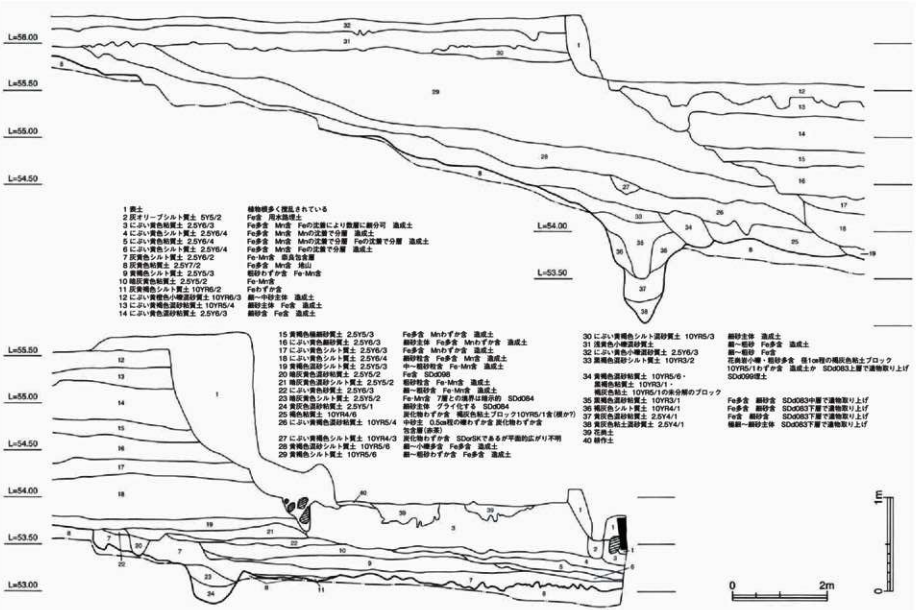
第 24 図　D 19 区西壁・南壁土層（縦 1/40・横 1/80）



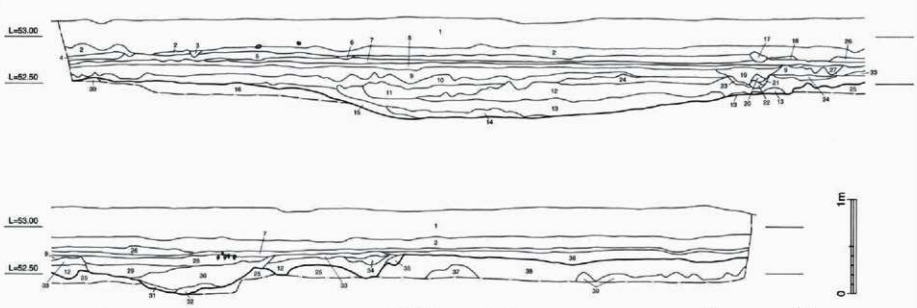
第25図　C 19 E区南壁・E 17N 区北壁土層（縦 1/40・横 1/80）



第26図　C 18区北壁・南壁土層（縦1/40・横1/80）

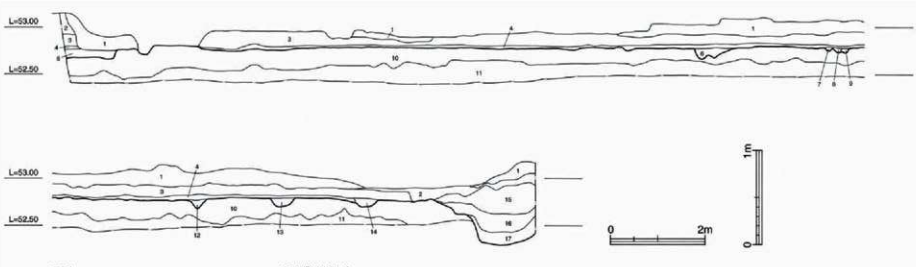


第27図　B 18区南壁土層（縦1/40・横1/80）



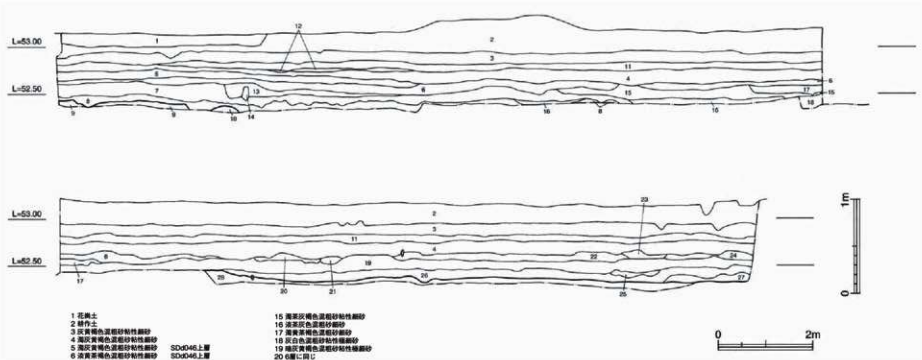
1 耕作土
2 灰黄褐色混粗砂粘性極細砂
3 黒灰色粘性細砂
4 明黄黒灰色混粗砂粘性細砂
5 灰褐黄褐色混粗砂粘性細砂
6 褐黒灰色混粗砂細砂
7 橙黄灰色混粗砂粘性極細砂
8 灰色混粗砂粘性極細砂　SRd04最上層　SFd03連構面
9 黒灰褐色混粗砂粘性極細砂　SRd04上層　SDd043・SDd044連構面
10 暗灰黄色混粗砂粘性極細砂　SRd04中層
11 灰褐灰褐色混粗砂粘性極細砂　SRd04中層　炭化物やや多含
12 暗灰黄色混粗砂粘性細砂　SRd04上層
13 灰黄茶褐色混粗砂粘性極細砂　SRd04中層
14 黒灰色混粗砂粘性細砂　SRd04下層
15 黒灰黄黒色混粗砂粘性極細砂　SRd04下層
16 黒灰黄色粘性極細砂　SRd04地山
17 灰褐色粘性細砂
18 暗黒灰色混粗砂細砂
19 暗黒灰色混粗砂粘性極細砂　SDd044
20 暗黒灰色混粗砂粘性細砂　SDd044
21 黒黒灰色細砂　SDd044
22 明灰黄色細砂　SDd044
23 灰色細砂　SDd044
24 黒黒灰灰色混粗砂粘性細砂　SRd04上層
25 明黄灰色混粗砂粘性極細砂　地山
26 明橙黄褐色混粗砂粘性細砂
27 明黄灰色混粗砂粘性極細砂　SDd043
28 海橙黄褐色混粗砂粘性極細砂　SDd041埋め立て土　灰褐色粘性細砂ブロック多含
29 黒灰褐色混粗砂粘性極細砂　SDd041中層
30 灰褐色混粗砂粘性極細砂　SDd041中層
31 灰褐色混粗砂粘性極細砂　SDd041下層　灰色細砂ラミナ状に含
32 灰色混粗砂細砂　SDd041下層
33 暗灰褐色混粗砂粘性極細砂　SRd04上層
34 暗褐灰色混粗砂粘性細砂
35 暗灰黄色混粗砂粘性細砂
36 黒灰黄褐色混粗砂粘性極細砂
37 暗茶褐色混粗砂粘性極細砂
38 明黄褐色粘性極細砂
39 海褐色粘性極細砂　Mnの流動による色調変化　ベースは灰黄白色か?

第28図　E 16 区西壁土層（縦 1/40・横 1/80）

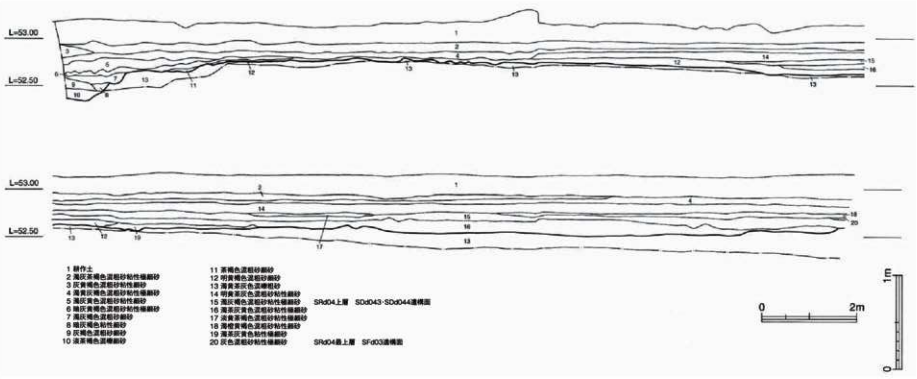


1 花崗土
2 耕作土
3 黄灰黄褐色混粗砂粘性極細砂　旧耕作土
4 橙黄茶色混粗砂粘性極細砂　旧床土
5 淡灰黄褐色混粗砂粘性極細砂
6 淡灰褐色粘性細砂　10層ブロック多含
7 淡灰黄白色粘性細砂
8 淡灰褐色粘性細砂
9 淡灰黄色粘性細砂
10 明黄褐色粘性極細砂
11 黄褐色粘性極細砂　Mnの沈着による色調変化　ベースは灰黄白色か?
12 淡灰茶色混粗砂粘性細砂
13 淡灰黄色混粗砂粘性細砂
14 灰白色混粗砂粘性細砂
15 淡黄褐色混粗砂粘性極細砂
16 薄橙黄褐色混粗砂粘性極細砂
17 淡灰茶色混粗砂粘性細砂

第29図　E 16区北壁土層（縦 1/40・横 1/80）



第30図　E 16区東壁土層（縦 1/40・横 1/80）



第31図　E 16区南壁土層（縦 1/40・横 1/80）

第３節　土層序

基本的にはほぼ耕作土直下で遺構面となる。C地区の丘陵裾部以外の平坦地でその傾向は明確である。

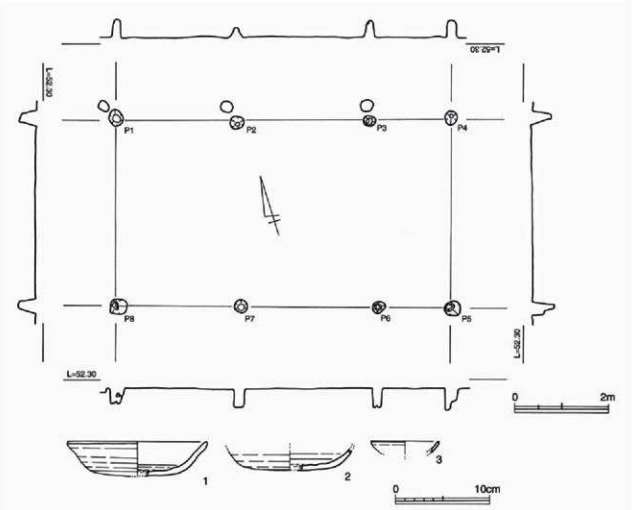
堆積層順は、平坦地がほぼ全面水田耕作地であったことから、灰色系の粗砂混じり粘性極細砂の耕作土・橙色系の粗砂混じり粘性極細砂の床土が認められる。包含層が削平されたところはすぐに灰黄白色系の粘性極細砂からなる地山が現れるが、埋没旧河道周辺など若干低い地形では地山層の上に茶灰色系の粗砂混じり粘性極細砂包含層の堆積が認められる。C地区の丘陵裾部においてはさらに地山と茶灰色系の粗砂混じり粘性極細砂包含層との間に暗灰色系粘性極細砂包含層を挟む。以下、各区における壁の土層を掲げておく。

第４節　遺構・遺物

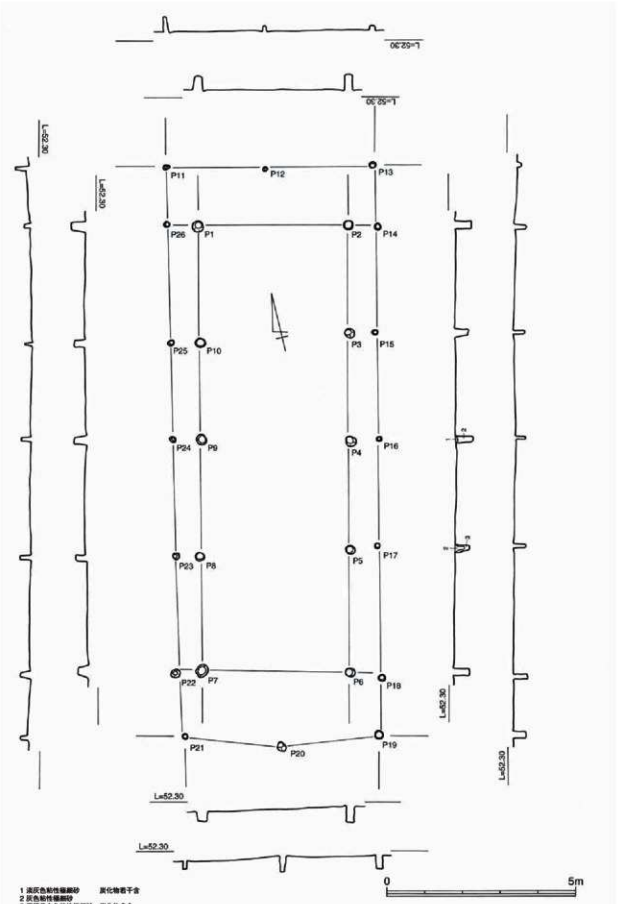
１．掘立柱建物跡

SBd01（第 32 図）

G地区北西隅で検出した東西棟の建物跡である。建物の規模は、１間（4.00 m）×３間（7.06 m）、面積 28.24㎡、主軸方位 N-16°- E を測る。柱間は梁行 4.00 m、桁行 1.60 ～ 3.00 m を測る。桁行の柱の



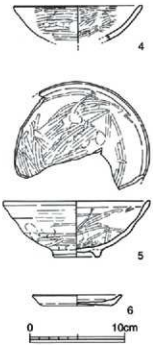
第 32 図　SBd01 平・断面図（1/80）、出土遺物（1/4）



第 33 図　SBd02 平・断面図（1/100）

うち、Ｐ４・Ｐ５について間隔がやや詰まる。柱穴掘形は平面形が直径0.3～0.35ｍの円形、断面形が深さ0.2～0.5ｍの深い逆台形状を呈する。

出土遺物は小片を中心としてあまり多くはなく、形状の判別できるものはＰ５・８から土師質土器杯（第31図１・２）が、Ｐ４から土師質土器小皿（第31図３）がそれぞれ出土している程度である。



第34図　SBd02出土遺物（1/4）

SBd02（第33図・第34図）

Ｇ地区北辺中央付近で検出した南北棟の四面庇付建物跡である。建物の規模は、1間（4.00ｍ）×４間（11.8ｍ）、面積47.2㎡、主軸方位N-18°-Ｅを測る。柱間は梁行4.00ｍ、桁行2.50～3.10ｍを測る。また、四面に庇が取り付く構造で、その平面形状は２間（5.10～5.50ｍ）×６間（15.0ｍ）、面積79.5㎡となる。柱間は梁行2.60～2.80ｍ、桁行1.50～3.50ｍを測る。東西に面する庇は0.7ｍの幅であるのに対し、南北に面する庇は1.50～1.70ｍの幅を持つ。柱穴掘形は身舎のものが平面形は直径0.2～0.35ｍの円形、断面形は深さ0.3～0.45ｍの深い逆台形状ないしは長方形を呈する。庇のものは平面形が直径0.1～0.2ｍの円形、断面形は深さ0.10～0.40ｍの深い逆台形状ないしは長方形を呈する。庇部の柱筋は概ね直線的に揃うものの、東面と南面で若干の乱れが見られる。柱穴埋土については概ね灰色系の粘性極細砂を主体とし、炭化物をやや多く含む。

出土遺物はあまり多くはなく、形状の判別できるものはＰ10から須恵器椀（第34図４）が、Ｐ４から黒色土器椀（第34図５）が、Ｐ５から土師質土器小皿（第34図６）がそれぞれ出土している。

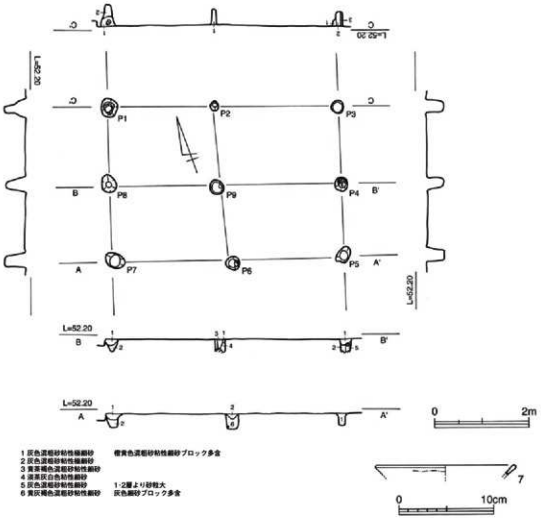
SBd03（第35図）

Ｇ地区西辺中央やや北寄りで検出した東西棟の総柱建物跡である。建物北壁と東壁がそれぞれSDd006・SDd001とほぼ平行する関係にある。建物の規模は、２間（3.30ｍ）×２間（4.90ｍ）、面積16.17㎡、主軸方位N-18°-Ｅを測る。柱間は梁行1.60ｍ、桁行2.20～2.50ｍを測る。柱穴掘形は平面形が直径0.20～0.40ｍの円形、断面形は深さ0.2～0.35ｍの長方形を呈する。埋土は灰色系の粗砂混じり粘性極細砂を主体とする。

出土遺物はあまり多くはなく、形状の判別できるものはＰ７から出土した須恵器椀（第35図７）が確認できる程度である。

SBd04（第36図）

Ｇ地区西辺中央付近で検出した南北棟の建物跡である。建物が溝状遺構SDd001の二股に分岐する部分で挟まれている。建物の規模は、１間（2.60～3.10ｍ）×２間（5.20ｍ）、面積14.82㎡、主軸方位N-20°-Ｅを測る。柱間は梁行2.60～3.10ｍ、桁行2.60ｍを測る。柱穴掘形は平面形が直径0.25～0.40ｍの円形、断面形は深さ0.35～0.65ｍの長方形を呈する。柱筋が北西隅の柱穴Ｐ１の部分でずれており、



第 35 図　SBd03 平・断面図（1/80）、出土遺物（1/4）

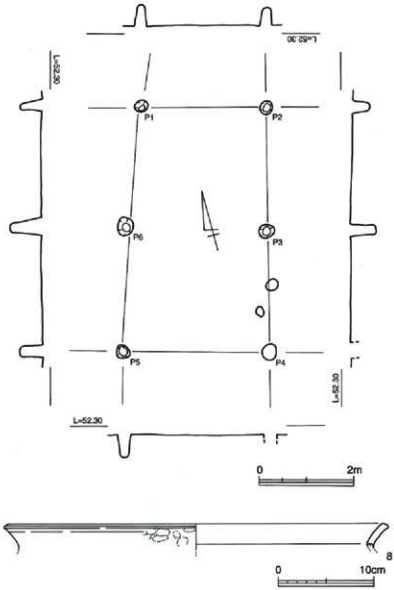
建物の輪郭が若干いびつになる。なお、Ｐ４については調査時のミスで断面の記録ができていない。

出土遺物はあまり多くはなく、形状の判別できるものはＰ５から出土した土師質土器土鍋（第 36 図８）が確認できる程度である。

SBd05（第 37 図）

Ｇ地区西辺中央付近で検出した南北棟の建物跡である。分岐した溝状遺構 SDd001 の東側溝を挟み、SBd04 と隣接する。ただし著しく近接しており、その同時性は疑わしい。先後関係があるものと考えられるが、切り合いが認められず、詳細は不明である。建物の規模は、1 間（3.80 m）× 2 間（4.50 m）、面積 17.1㎡、主軸方位 N-14° - E を測る。柱間は梁行 3.80 m、桁行 2.10 ～ 2.50 m を測る。柱穴掘形は平面形が直径 0.20 ～ 0.40 m の円形ないしは短軸 0.20 m、長軸 0.4 m の隅丸長方形、断面形は深さ 0.20 ～ 0.40 m の逆台形を呈する。西壁にほぼ平行して柱間が概ね揃う柱穴列が認められ、西面する庇の可能性が想定できる。これを含んだ場合の建物の規模は 5.10 ～ 5.20 m × 4.50 ～ 4.80 m となる。庇の幅は 1.30 ～ 1.40 m である。

出土遺物は小片を中心としてあまり多くはなく、形状の判別できるものはＰ２から出土した土師質土



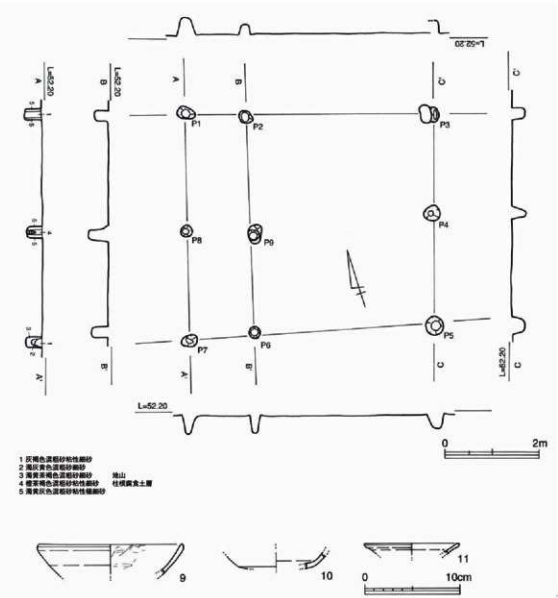
第36図　SBd04 平・断面図（1/80）、出土遺物（1/4）

器椀（第37図９）、Ｐ３から出土した土師質土器杯（第37図10）、Ｐ５から出土した土師質土器小皿（第37図11）が確認できる程度である。

SBd06（第38図）

Ｇ地区西辺中央付近で検出した南北棟の建物跡である。後述するSBd07と重複しているが、柱穴の切り合いが認められないことから、先後関係は不明である。建物の規模は、２間（3.90～4.10ｍ）×２間（5.70～5.90ｍ）、面積23.2㎡、主軸方位N-16°-Eを測る。なお、南壁中央の柱穴は精査を行ったものの検出できなかった。柱間は梁行1.90～2.00ｍ、桁行2.70～3.00ｍを測る。柱穴掘形は平面形が直径0.15～0.25ｍの円形、断面形は深さ0.20～0.40ｍの長方形を呈する。

出土遺物はあまり多くはなく、形状の判別できるものはＰ５から出土した須恵器杯（第38図12）、Ｐ３から出土した黒色土器椀（第38図13）、Ｐ１から出土した土師質土器小皿（第38図14）が確認で



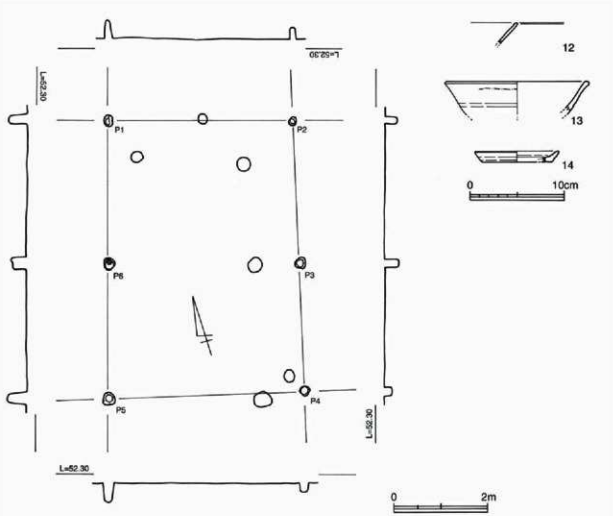
第 37 図　SBd05 平・断面図（1/80）、出土遺物（1/4）

きる程度である。

SBd07（第 39 図）

G 地区西辺中央付近で検出した南北棟の建物跡である。建物の規模は、1 間(3.80～3.90 m）× 3 間(6.80 ～ 7.00 m）、面積 26.57㎡、主軸方位 N-14° - E を測る。柱間は梁行 3.80 ～ 3.90 m、桁行 2.00 ～ 2.90 m を測る。柱穴掘形は平面形が直径 0.25 ～ 0.40 m の円形、断面形は深さ 0.20 ～ 0.55 m の逆台形状ないし長方形を呈する。

出土遺物は比較的多く認められる。形状の判別できるものを第 39 図 15 ～ 34 に挙げた。15 ～ 18 は須恵器椀に分類した。15 はＰ６、16 はＰ４、17・18 はＰ５からそれぞれ出土している。口径は概ね 15 ～ 16cmを測る。器高については 17 が 4.8cmを測る以外は不明である。外面調整は回転ナデにより、18 以外は横位のヘラミガキが認められる。内面調整はヘラミガキによる 15・17 と板ナデによる 16・18 が



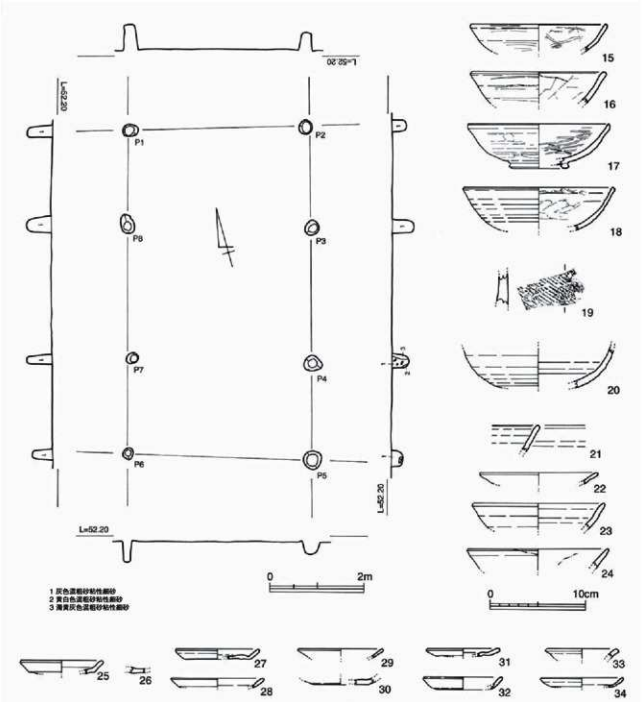
第 38 図　SBd06 平・断面図（1/80）、出土遺物（1/4）

認められる。19 はＰ７出土の須恵器甕である。小片であることから詳細は不明である。20 はＰ５出土の土師質土器椀である。21 ～ 24 は土師質土器杯に分類した。それぞれＰ７・５・６・８から出土した。小片であることから詳細は不明である。22 は浅い器形に復元されることから、皿の可能性もある。25 ～ 34 は土師質土器小皿である。Ｐ４（25）・５（26 ～ 30）・６（31 ～ 34）からそれぞれ出土している。いずれも小片であり、詳細は不明である。

SBd08（第 40 図）

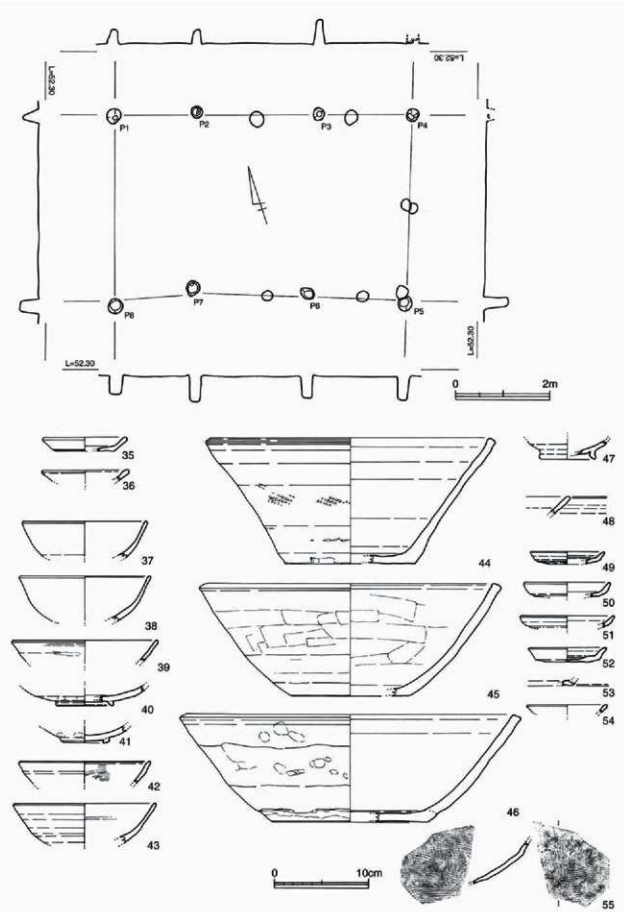
Ｇ地区中央付近で検出した東西棟の建物跡である。建物の規模は、1 間（3.90 ～ 4.10 m）× 3 間（6.10 ～ 6.30 m）、面積 24.8㎡、主軸方位 N-18° - E を測る。柱間は梁行 3.90 ～ 4.10 m、桁行 2.70 ～ 3.00 m を測る。柱穴掘形は平面形が直径 0.25 ～ 0.30 m の円形、断面形は深さ 0.30 ～ 0.55 m の長方形ないしは逆台形を呈する。Ｐ２の埋土上位には、後述する須恵器捏鉢がまとまって埋没する状況が確認できた。また、Ｐ４埋土上位には礫が２点埋没していた。調査時のミスで完掘後の断面の記録ができていない。

出土遺物は比較的多い。35・36 はＰ２出土の須恵器小皿である。37 ～ 43 は須恵器椀である。37 ～ 40 はＰ１、41 はＰ５、42・43 はＰ７から出土した。37・38・43 のように内湾する体部に斜め上方へ延



第39図　SBd07平・断面図（1/80）、出土遺物（1/4）

びる口縁部を特徴とする。貼り付け高台を有し、その断面は丸みを帯びて短く踏ん張る。外面調整は回転ナデによるものが多く、39のようにわずかにヘラミガキを施すものも見られる。内面調整は回転ナデ後板ナデによると見られるものが多いが、42のように横位のヘラミガキを施すものも見られる。44～46はＰ２出土の須恵器捏鉢である。いずれも１/４程度遺存しているのみであった。44はやや深い器形を呈し、やや外湾気味に立ち上がる体部からわずかに内湾する口縁部を有する。口縁端部には平坦面が認められる。外面調整は横位のナデによるが、タタキ痕が残っており、先行してタタキが施されたことが窺える。45・46はやや浅めの器形を呈し、わずかに内湾する体部を有する。口縁端部には平坦



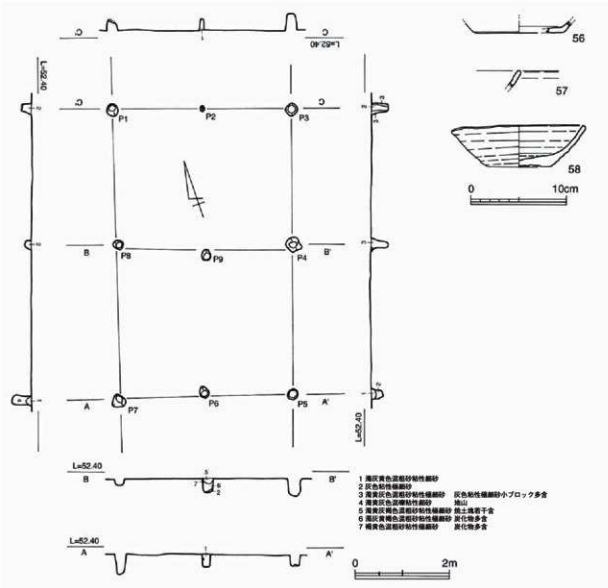
第 40 図　SBd08 平・断面図（1/80）、出土遺物（1/4）

面が認められる。内外面の調整は横位の板ナデで、口縁部付近は指ナデを用いる。片桐氏編年のⅡ-⑨期頃のものか。47は土師質土器椀底部である。Ｐ４から出土した。小片であることから詳細は不明であるが、丸底の椀部に長く直立気味の高台が取り付く。48はＰ２から出土した土師質土器杯の口縁部である。49～54は土師質土器小皿である。49はＰ１、50・51はＰ６、52はＰ７、53・54はＰ８からそれぞれ出土した。55は土師質土器土鍋の底部片である。内外面ともにハケによる調整が施される。

SBd09（第41図）

Ｇ地区中央付近で検出した南北棟の総柱建物跡である。建物の規模は、２間(3.70～3.80ｍ)×２間(6.10～6.20ｍ)、面積23.1㎡、主軸方位N-17°-Eを測る。柱間は梁行1.80～1.90ｍ、桁行2.90～3.30ｍを測る。柱穴掘形は平面形が直径0.10～0.35ｍの円形、断面形は深さ0.10～0.40ｍの長方形を呈する。埋土は濁灰黄色ないし濁黄灰色の粗砂混じり粘性極細砂が主体を占め、炭化物や焼土を含む。

出土遺物はあまり多くはなく、形状の判別できるものはＰ７から出土した56の須恵器皿、57の土師



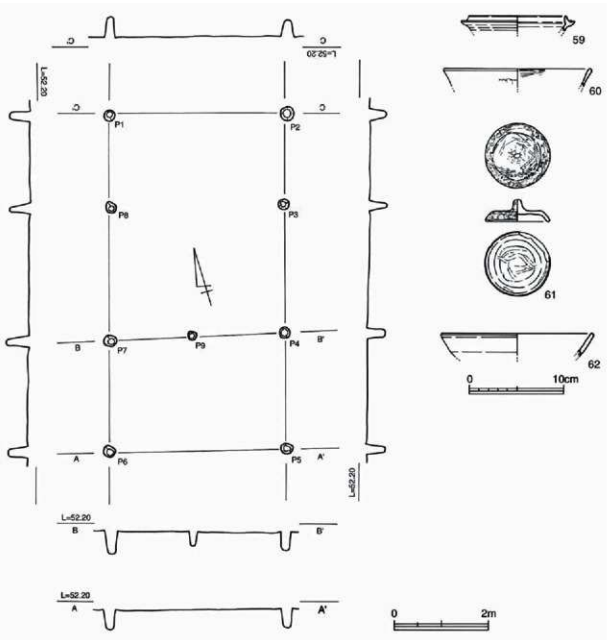
第41図　SBd09平・断面図（1/80）、出土遺物（1/4）

質土器椀、Ｐ８から出土した 58 の土師質土器杯が確認できる程度である。

SBd10（第 42 図）

Ｇ地区南辺中央西寄り付近で検出した南北棟の建物跡である。建物の規模は、１間（3.70 m）×３間（7.10 ～ 7.20 m）、面積 26.46㎡、主軸方位 N-16° - E を測る。柱間は梁行 3.70 m、桁行 1.90 ～ 2.80 m を測る。精査を行ってもＰ９のみ対応する柱穴が見当たらなかった。建物内の間仕切りに関連するものと考えられる。柱穴掘形は平面形が直径 0.2 ～ 0.25 m の円形、断面形は深さ 0.35 ～ 0.50 m の長方形ないし深い逆台形状を呈する。

出土遺物はあまり多くはなく、形状の判別できるものはＰ８から出土した 59 の須恵器杯、Ｐ３から



第 42 図　SBd10 平・断面図（1/80）、出土遺物（1/4）

出土した60の須恵器椀、61の黒色土器蓋、P８から出土した62の土師質土器杯が確認できる程度である。59は古墳時代後期のもので、混入したものと考えられる。61は上面に摘みが付くことから蓋であると考えられるが、何の蓋であるかは不明である。外面は精緻なヘラミガキがほどこされていたようであるが、受熱したらしく、多数の小さなハジケ痕が認められる。

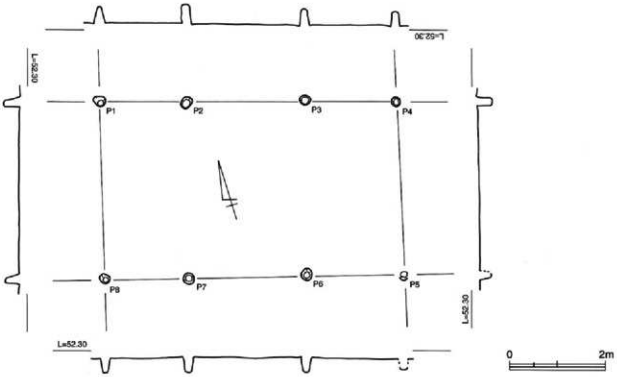
SBd11（第43図）

Ｇ地区南辺中央西寄り付近で検出した東西棟の建物跡である。先述のSBd10の東側に位置する。建物の規模は、１間（3.70～3.80 m）×３間（6.30 m）、面積23.63㎡、主軸方位N-16°-Eを測る。柱間は梁行3.70～3.80 m、桁行2.70～3.00 mを測る。柱穴掘形は平面形が直径0.20～0.25 mの円形、断面形は深さ0.20～0.40 mの逆台形ないし長方形を呈する。なお、Ｐ５の北半上場は暗渠により破壊されていたため、平面形状は不明である。

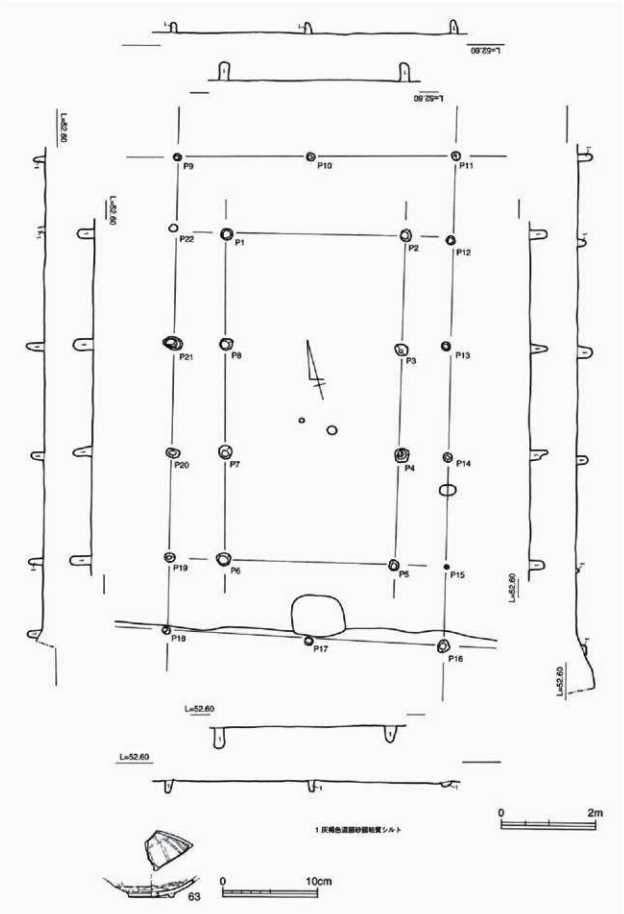
出土遺物は小片が中心で、形状の判別できるものはない。

SBd12（第44図）

Ｇ地区南東隅で検出した南北棟の四面庇付建物跡である。建物の規模は、１間（3.60～3.80 m）×３間（6.90～7.00 m）、面積25.72㎡、主軸方位N-17°-Eを測る。柱間は梁行3.60～3.80 m、桁行2.20～2.30 mを測る。また、四面に庇が取り付く構造で、その平面形状は２間（5.90 m）×５間（10.0～10.4 m）、面積60.18㎡となる。柱間は梁行2.80～3.20 m、桁行1.40～2.50 mを測る。東西に面する庇は1.0～1.10 mの幅であるのに対し、南北に面する庇は1.50～1.80 mの幅を持つ。柱穴掘形は身舎のものが平面形は直径0.2～0.30 mの円形、断面形は深さ0.35～0.45 mの深い逆台形状ないしは長方形



第43図　SBd11 平・断面図（1/80）



第 44 図　SBd12 平・断面図（1/80）、出土遺物（1/4）

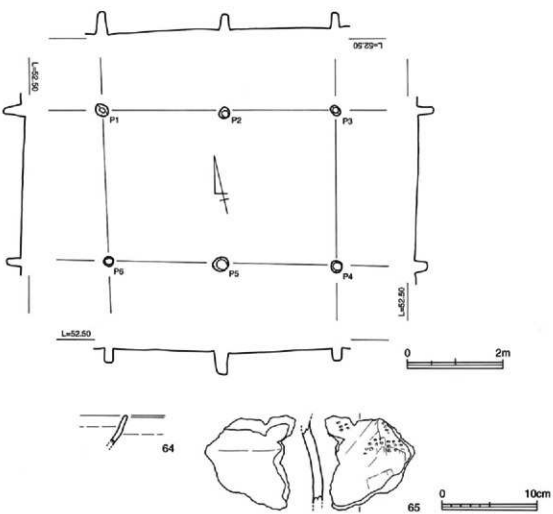
を呈する。庇のものは平面形が直径 0.08 ～ 0.20 mの円形ないしは長軸 0.30 ～ 0.40 m・短軸 0.20 mほどの楕円形、断面形は深さ 0.10 ～ 0.30 mの深い逆台形状ないしは長方形を呈する。身舎と庇の梁行の柱筋はほぼ一直線に並ぶ。なお、南面する庇の柱は溝状遺構 SDd035 により削平されており、これに先行する建物である可能性がある。柱穴埋土については灰褐色粘性極細砂である。

出土遺物はあまり多くはなく、形状の判別できるものはＰ４から63の須恵器椀が出土している程度である。

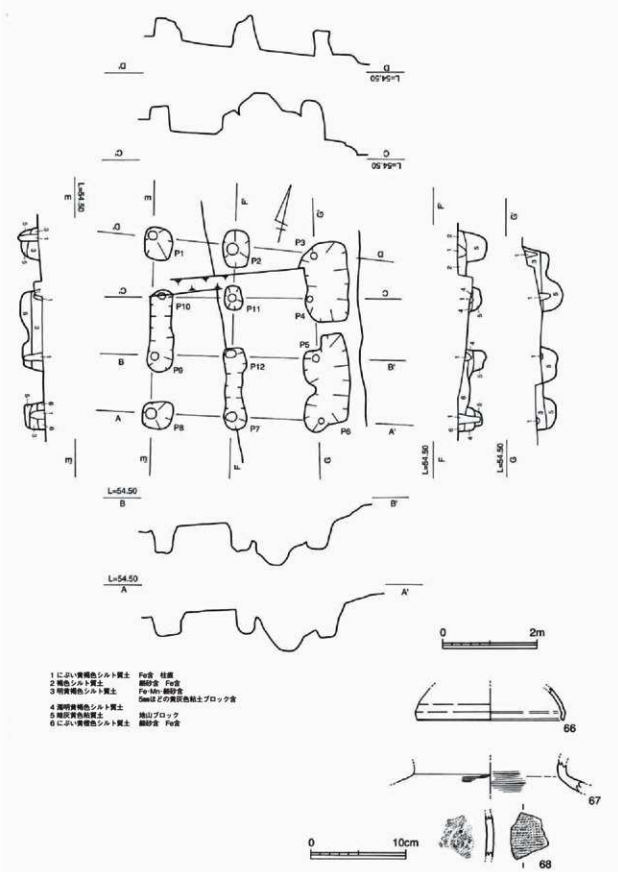
SBd13（第 45 図）

Ｈ地区北東隅で検出した東西棟の建物跡である。建物の規模は、1 間(3.20～3.30 m)×２間(4.80～4.90 m)、面積 15.76㎡、主軸方位 N-13.5°-Ｅを測る。柱間は梁行 3.20 ～ 3.30 m、桁行 2.40 ～ 2.60 mを測る。柱穴掘形は平面形が直径 0.20 ～ 0.30 mの円形、断面形は深さ 0.20 ～ 0.50 mの逆台形ないし長方形を呈する。

出土遺物は小片が中心であまり多くない。ある程度、形状が判別できるものはＰ５から 64 の土師質土器椀と 65 の土師質土器甕が出土している程度である。



第 45 図　SBd13 平・断面図（1/80）、出土遺物（1/4）



第46図　SBd14 平・断面図（1/80）、出土遺物（1/4）

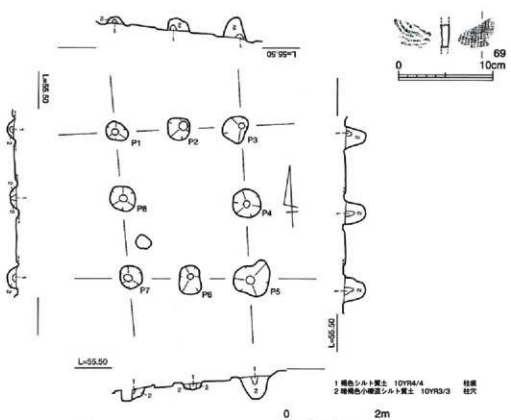
SBd14（第46図）

d地区南東隅で検出した南北棟の総柱建物跡である。後述する溝状遺構SDd083と切り合い関係にあり、土層の観察から同溝の埋没後に建てられたものであることがわかるが、調査時のミスでSDd083を掘削した後に東側2列の柱穴の存在に気づいた。建物の規模は、2間(3.40～3.60 m)×3間(3.50～3.80 m)、面積12.78㎡、主軸方位N-10°-Wを測る。柱間は梁行1.70～1.90 m、桁行0.90～1.30 mを測る。柱穴掘形は柱を1基につき1本据えるものと1基につき2本据える布掘状を呈するものが混在する変則的な形状を採る。布掘状を呈するものは必ず桁行方向の柱に採用され、梁行方向には認められない。掘形の形状は通常の柱穴が平面形一辺0.60 mの隅丸方形、断面形は深さ0.40 mの箱形を呈する。一方、布掘状のものは長辺1.70 m×短辺0.55 m～長辺1.95 m×短辺0.95 mほどの長方形である。断面形状は柱が据わる最深部で0.40～0.80 mを測るが、柱と柱の間では0.20～0.40 mと半分ほどの深さとなる逆凹字状を呈する。

出土遺物は小片が中心であまり多くない。ある程度、形状が判別できるものはいずれもP1からの出土で、66の須恵器壺蓋と67･68の須恵器甕の小片が出土している程度である。66の壺蓋は小片であり、他の器種に分類すべきものである可能性もある。

SBd15（第47図）

d地区南東隅で検出した南北棟の建物跡である。建物の南辺はC地区B17区（後年度報告）の掘立柱建物との重複が確認でき、柱穴の切り合いからSBd15の方が後出するものであることがわかる。建



第47図 SBd15平・断面図（1/80）、出土遺物（1/4）

物の規模は、２間（2.60 m）×２間（3.10 m）、面積 8.06㎡、主軸方位は国土座標の真北を示す。柱間は梁行 1.10 ～ 1.50 m、桁行 1.40 ～ 1.70 m を測る。柱穴掘形は平面形が直径約 0.50 ～ 0.60 m のいびつな円形、断面形は深さ 0.10 ～ 0.50 m の深い椀状を呈するものが多い。

出土遺物は小片が中心であまり多くない。ある程度、形状が判別できるものはＰ５から出土した 69 の須恵器甕の小片が出土している程度である。小片のため、部位については不明である。外面に叩き調整ののちカキ目調整を施した痕跡が見られるほか、内面に青海波文が認められる。

２．柵列

SAd01（第 48 図）

Ｇ地区南東部で検出した柵列である。直径 0.10 ～ 0.30 m、深さ 0.05 ～ 0.25 m の断面皿状ないし浅い逆台形を呈する柱穴が、0.30 ～ 0.50 m の比較的均等な間隔で約 30 m の長さに並ぶ。埋土は灰色の砂質土である。柱穴の配置はすべて直線的となるのではなく、２～７基の単位で直線的に配置され、全体的に見ると緩やかに蛇行する。これを見る限り、柵列の方向は周辺の施設や地割に規制されるのではなく、他の要素に起因する可能性が高い。この視点で見た場合、この柵列の南側に SRd01 がほぼ方向を同じくして流れており、SAd01 はこの SRd01 に関連するものである可能性が考えられる。ただし、柵列を構成する柱穴としてはかなり浅いうえ、埋土が砂質土であることからも他の遺構、あるいは単なる地形の窪みの可能性も否定できない。

出土遺物は図化に耐えない小片が極わずかに出土している程度である。

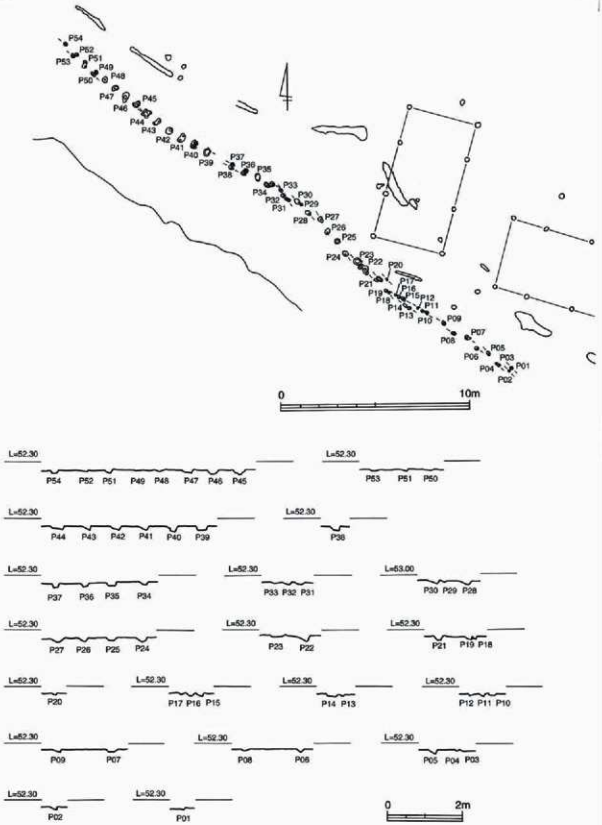
SAd02（第 49 図）

Ｇ地区南辺中央部で検出した柵列である。直径 0.20 ～ 0.50 m、深さ 0.05 ～ 0.10 m の断面皿状ないし浅い逆台形を呈する柱穴が、0.20 ～ 0.50 m の比較的均等な間隔で約 6 m の長さに並ぶ。埋土は灰色の砂質土である。柱穴の配置はすべて直線的となるのではなく、２～４基の単位で直線的に配置され、全体的に見ると緩やかに蛇行する。これを見る限り、柵列の方向は先述の SAd01 同様、周辺の施設や地割に規制されるのではなく、他の要素に起因する可能性が高い。この柵列の南側にも SRd01 がほぼ方向を同じくして流れており、SAd02 も SAd01 同様にこの SRd01 に関連するものである可能性が考えられる。ただし、柵列を構成する柱穴としてはかなり浅いうえ、埋土が砂質土であることからも他の遺構、あるいは単なる地形の窪みの可能性も否定できない。

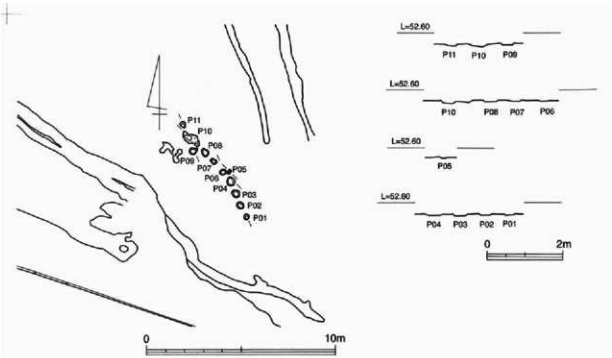
出土遺物は図化に耐えない小片が極わずかに出土している程度である。

SAd03（第 50 図）

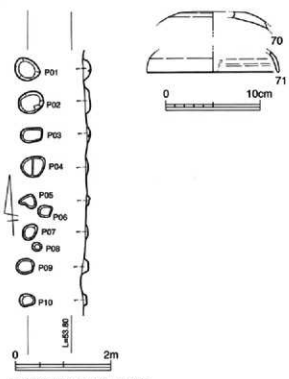
ｄ地区南東部で検出した柵列である。直径 0.30 ～ 0.40 m、深さ 0.05 ～ 0.15 m の断面皿状ないし浅い逆台形を呈する柱穴が、0.20 ～ 0.40 m の比較的均等な間隔で約 5 m の長さに並ぶ。埋土は暗灰黄色極細砂である。柱穴の配置はほぼ直線的である。しかし、周辺の遺構を見た場合、他の施設との区画を明確に意識しているようには見えない。関連性を求める場合、SAd03 西側すぐの溝状遺構 SDd84 や南側に位置する SDd98 が南北方向の軸をほぼ同じにしていることから、これらに関連する遺構である可能性が考えられる。ただし、柵列を構成する柱穴としてはかなり浅いうえ、埋土が砂質土であることからも他の遺構、あるいは単なる地形の窪みの可能性も否定できない。



第 48 図　SAd01 平・断面図（1/200、1/100）



第 49 図　SAd02 平・断面図（1/200、1/100）



第 50 図　SAd03 平・断面図（1/80）、出土遺物（1/4）

出土遺物は、小片がわずかに認められ、形状が判別できるのは 70・71 の須恵器杯蓋が認められる程度である。ともに古墳時代後期頃のものと考えられる。

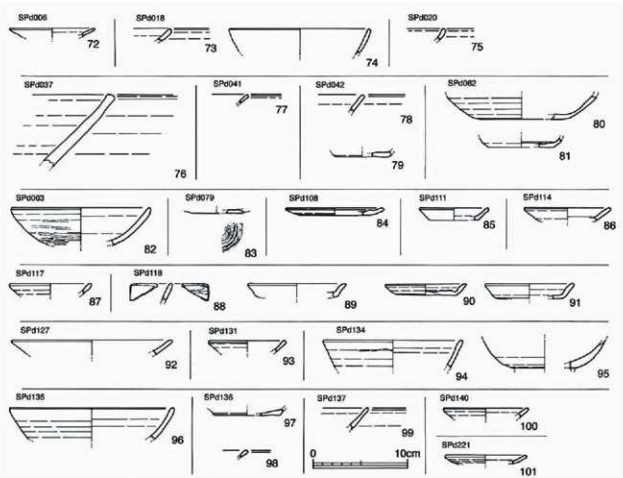
3．柱穴（第 51・52 図）

ここでは建物や構列に復元できない柱穴を報告する。この条件に合致する柱穴は、全調査区内で 220 基検出した。うち、164 基は Ⅰ 21 区で検出しており、残りの 56 基が他の調査区で検出したものになり、圧倒的に Ⅰ 21 区に分布が集中している状況である。他の調査区においては建物を含めて、柱穴の数も少ない。埋土は褐灰色系の粗砂混じり粘性極細砂が主体となり、掘立柱建物を構成するものと大差はない。

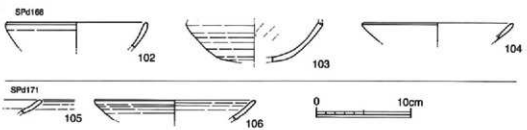
図化に耐えうる遺物が出土した柱穴のみを対象として、それらの遺物を第 51・52 図に挙げた。Ⅰ 21 区からは 21 基報告する（第 51 図）。器種としては土師質土器小皿が圧倒的に多く、土師質土器杯・須恵器椀がそれに続く。

土師質土器小皿は底部から体部にかけて明確に「く」の字に屈曲するものと屈曲が弱いものの２種が認められる。体部は直線的に斜め上方へ延ばすものと、若干外反気味にするものの２種が認められる。また、口縁端部は丸く収めるものと、若干面を持たせるものがあり、丸く収めるものの中には若干肥厚させるものが見られる。底部外面の切り離し痕は回転ヘラ切りによる。

Ｈ 19 区からは２基報告する。柱穴の埋土の状況はＩ 21 区と大差ない。



第 51 図　柱穴出土遺物（1/4）



第 52 図　柱穴出土遺物（1/4）

4．土坑

SKd01（第 53 図）

G 地区北西部で検出した土坑である。調査時にこの SKd01 を切るように側溝を設定して破壊したため、東半分の形状は本来の形状とは異なる。平面形は長辺 0.84 m × 短辺 0.62 m のいびつな隅丸長方形を呈し、短辺方向の断面形状は西がやや深く東が浅い偏りのある形状となる。最深部で 0.26 m を測る。埋土は灰色系の粗砂混じり粘性極細砂である。遺物の出土は見られなかった。

SKd02（第 53・54 図）

G 地区西辺中央やや北寄りで検出した土坑である。SKd03 と切り合い関係にあり、これを切ることから SKd02 が後出することがわかる。平面形は長辺 2.62 m × 短辺 0.70 ～ 1.02 m のいびつな隅丸長方形を基本形とするが、西辺中央付近で西側へ長さ約 0.60 m、幅 0.20 m の規模で張り出しが取り付く。断面形状は浅い皿状を呈する。深さは最深部で 0.06 m を測る。埋土は淡灰褐色系の粗砂混じり粘性極細砂である。

遺物の出土は小片を中心とするが、やや多く、形状を把握しうるものとしては 107 ～ 111 の須恵器椀、112 の土師質土器杯、113・114 の土師質土器小皿が挙げられる。107・108 は小片であり、全体の器形についての詳細は不明であるが、口縁端部はやや丸みを持たせ、わずかに肥厚させる。110 は内湾気味の体部から直線的に斜め上方へ延びる口縁を持ち、口縁端部は丸みを持たせるが薄い。111 は口縁端部を強く外反させる。109 は断面隅丸方形の低い高台を有する。107 は内面調整に、109 と 110 は外面調整にそれぞれ横位のヘラミガキを施す。

SKd03（第 53・54 図）

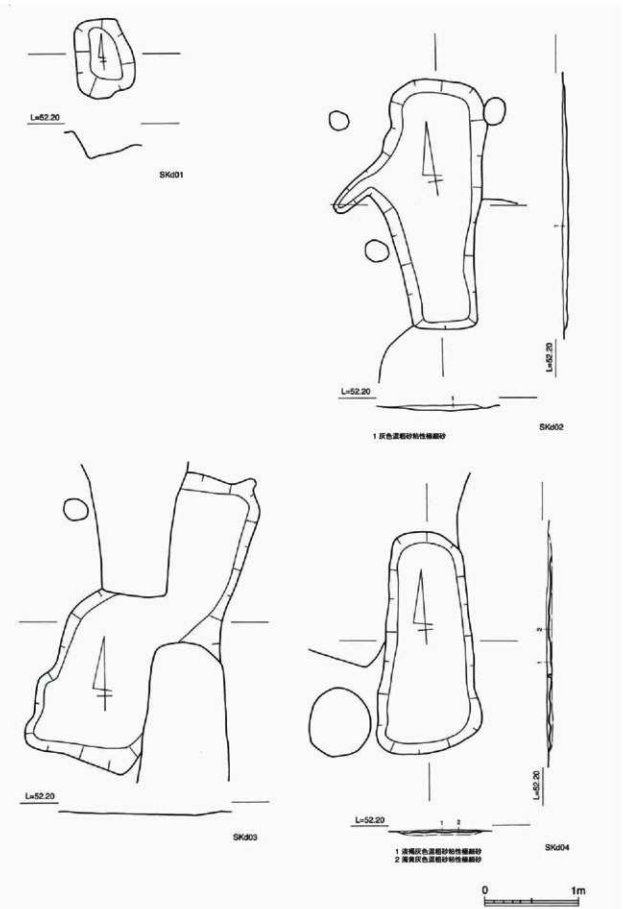
G 地区西辺中央やや北寄りで検出した土坑である。SKd02 及び SKd04 と切り合い関係があり、これらにより切られていることから、SKd03 がこれらに先行することがわかる。平面形は長辺 3.30 m × 短辺 1.20 m のいびつな隅丸長方形を呈し、断面形状は浅い皿状を呈する。深さは最深部で 0.04 m を測る。埋土は淡灰褐色系の粗砂混じり粘性極細砂である。

出土遺物は小片を中心とするが、やや多く、形状を把握しうるものとしては 115 の土師質土器杯、116・117 の土師質土器小皿が挙げられる。いずれも小片であり、全体の器形についての詳細は不明である。

SKd04（第 53・54 図）

G 地区西辺中央やや北寄りで検出した土坑である。SKd03 と切り合い関係にあり、SKd04 が後出することがわかる。平面形は長辺 2.34 m × 短辺 0.78 ～ 1.10 m のややいびつな隅丸長方形を呈し、断面形状は浅い皿状を呈する。深さは最深部で 0.05 m を測る。埋土は淡褐灰色系の粗砂混じり粘性極細砂である。

遺物の出土は小片を中心とするが、やや多く、形状を把握しうるものとしては 118 ～ 121 の須恵器椀、122 ～ 124 の土師質土器杯、125 ～ 127 の土師質土器小皿が挙げられる。須恵器椀はいずれも小片であり、全体の器形についての詳細は不明であるが、口縁端部はやや丸みを持たせるものが多い。121 は内湾気味の体部から直線的に斜め上方へ延びる口縁を持つ。器高はやや低い。小皿は底部と体部の境が明瞭で



第 53 図　SKd01 ～ 04 平・断面図（1/40）

「く」の字に屈曲する平底の 125 と、境が不明瞭で丸底気味を呈する 126 とがみられる。

SKd05（第 55 図）

G 地区西辺中央やや北寄りで検出した土坑である。SKd04 の南西隅に近接した位置にある。平面形は長軸 0.72 m × 短軸 0.65 m のやや南北に長い楕円形、断面形は逆台形を呈する。深さは最深部で 0.30 m を測る。

遺物の出土は小片が中心で、形状を把握しうるものは 128 の須恵器椀と 129 の土師質土器小皿である。

SKd06（第 55 図）

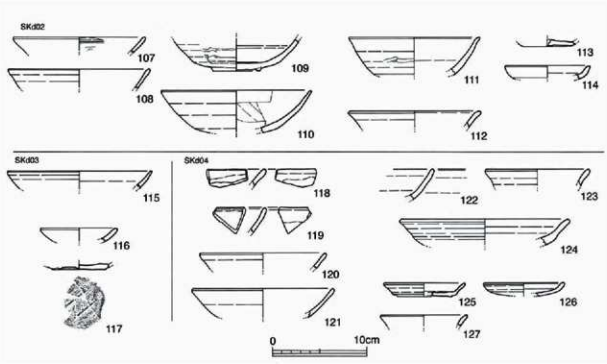
G 地区北西部で検出した土坑である。平面形は長軸 0.76 m × 短軸 0.56 m のややいびつな楕円形、断面形はいびつで浅い皿状を呈する。深さは最深部で 0.05 m を測る。出土遺物は認められない。

SKd07（第 55 図）

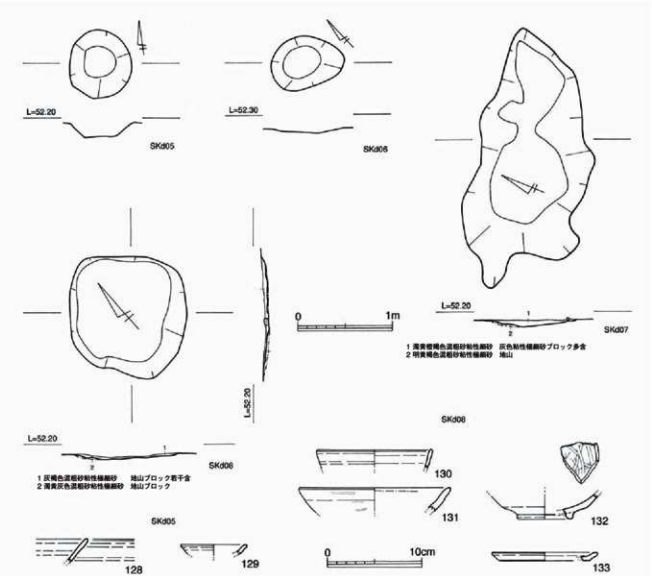
G 地区西辺中央付近で検出した土坑である。溝状遺構 SDd001 が分岐する地点の西側に位置する。平面形は最大長 2.76 m × 最大幅 1.16 m の概ね東西方向へ軸を持つ不整形、南北の断面形は浅い皿状を呈する。深さは最深部で 0.07 m を測る。埋土は濁黄褐色粗砂混じり粘性細砂に灰色粘性極細砂のブロックを多く含むものである。出土遺物は認められない。

SKd08（第 55 図）

G 地区西辺中央付近で検出した土坑である。分岐した SDd001 の西側溝と重複しており、SKd08 が後出することがわかる。平面形は一辺約 1.20 m のややいびつな隅丸方形、断面形は浅い皿状を呈する。深さは最深部で 0.06 m を測る。埋土は灰褐色系の粗砂混じり粘性極細砂である。



第 54 図　SKd02 ～ 04 出土遺物（1/4）



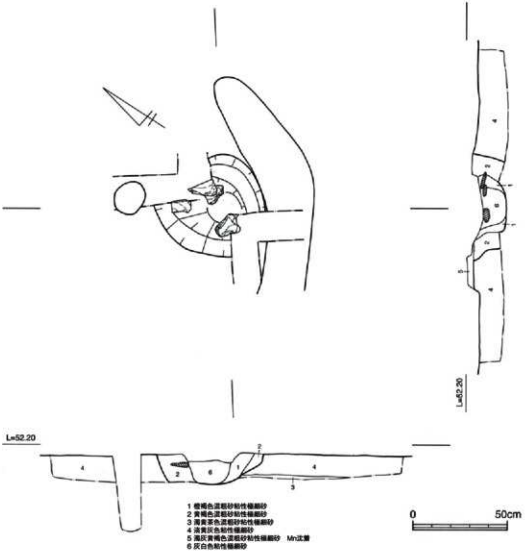
第 55 図　SKd05 ～ 08 平・断面図（1/40）、出土遺物（1/4）

遺物の出土は小片が中心で、形状を把握しうるものは 130 ～ 132 の須恵器椀と 133 の土師質土器小皿である。

SKd09（第 56 ～ 61 図）

G 地区北西部で検出した土坑である。SDd012 の南端部に切られる位置関係である。機械掘削時にサヌカイトの大型剥片 1 点（第 61 図 139）および大型石核（第 60 図 137）が並んで出土したため、その部分は周辺の包含層をわずかに残して周辺を掘り下げた。大型剥片は機械掘削時に原位置から若干移動したことから、大体の位置で写真撮影による記録を行ったうえで取り上げた。その際、大型剥片が接地していた付近は周辺地山とほぼ同様の色調で、遺構埋土と考えられる土の確認ができなかったことから、掘形の有無を確認するため精査をした。その後、大型剥片 2 点があった中心部に交点を設定して、十字にアゼを残しながら水平に数cmほど掘り下げたところ、大型剥片が存在していたあたりで橙褐色に変色した土の存在と、埋没したサヌカイトの存在を確認した。しかし、平面的には明確な掘形は確認できな

かったため、断ち割りを入れて断面から掘形を検討した。このような状況で掘削を行った結果、遺構の掘形の平面形状は長軸 0.59 m × 短軸 0.54 m のいびつな円形ないしは寸詰まりの楕円形を呈するものと考えられる。断面形状は中心部がやや窪む深い皿状を呈し、深さは最深部で 0.27 m を測る。埋土は橙褐色粗砂混じり粘性極細砂・黄褐色粗砂混じり粘性極細砂・灰白色粘性極細砂の 3 層からなる。周辺の地山は淡黄灰色粘性極細砂で、若干 SKd09 の埋土の方が濃い色調を呈するといえるものの、その差は微々たるものである。大型剥片以外の遺物出土状況は第 56 図のとおりである。長軸 5 ～ 15cmほど、厚さ 1 ～ 2 ㎝程度の剥片が 6 枚（第 57 ～ 59・61 図 134 ～ 136・141）と、2 ㎝角で厚さ 0.5cmほどの剥片 1 枚（第 61 図 138）がやや散漫な状態で埋納されていた。また、第 61 図 140 は隣接する SPd043 の埋土中から出土した。現状の SKd09 は攪乱された様子が窺えないことから、本来の SKd09 の規模は少なくとも SPd043 の位置まで広がっており、SPd043 掘削時に現存しない部分が攪乱され、そこに埋納されていた 140 が SPd043 に混入した可能性が高い。

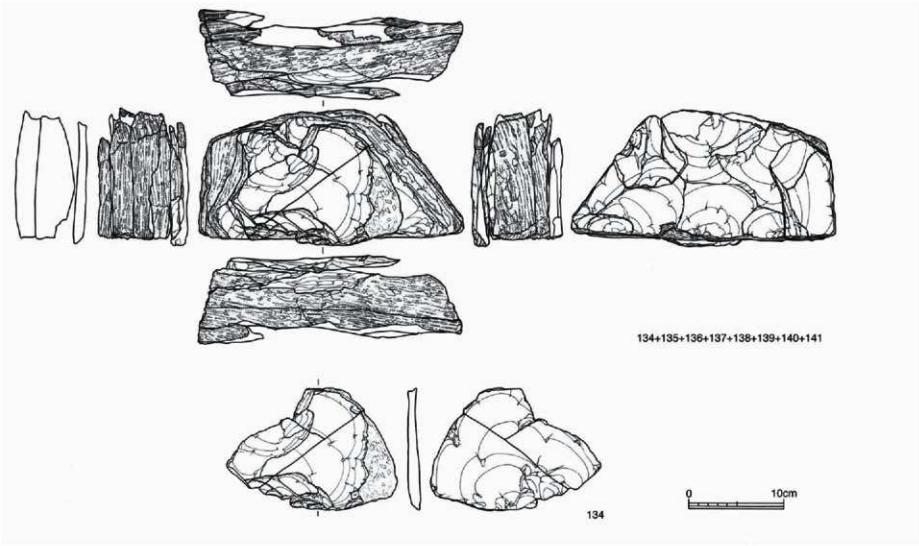


第 56 図　SKd09 平・断面図（1/20）

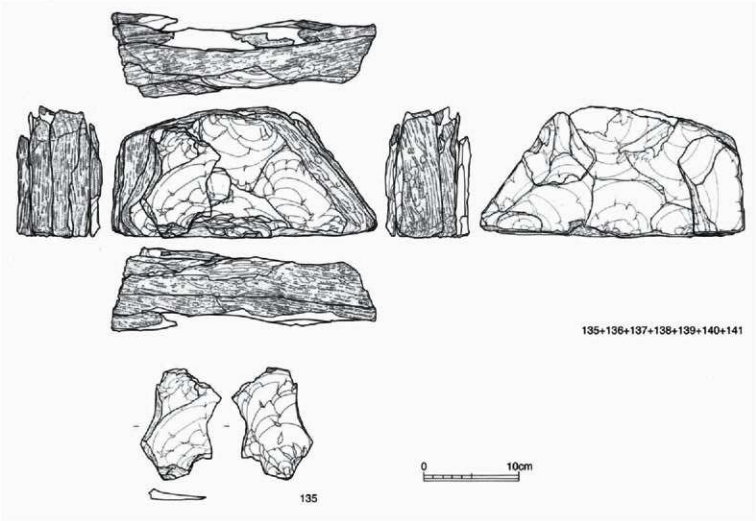
出土した剥片はすべて接合する。以下、接合資料を基にして、個別の資料を紹介してゆく。すべての資料が接合した状態の大きさは最大長28.0cm、最大幅14.5cm、最大高9.5cmを測り、不整形な裁頭四角錐を呈する石核に復元できる（第57図）。総重量は4,113.54ｇである。裁頭四角錐の側面はすべて原礫面に覆われ、上下面は先行する概ね5枚の剥離面が認められる。この上下面が剥片剥離時の作業面となる。したがって、第57図では裁頭四角錐の上面を中心において図化しているが、この面を正面に、下面を裏面として表現する。正面・裏面共に作業痕が見られるが、原則正面に作業面が固定されていると仮定し、記載を進めることにする。さて、正面には右1／3程度がやや平坦な原礫面に覆われており、素材の表皮に極めて近い位置にあることが想定できる。つまり、この面に認められる剥離面のうち、上面あるいは左側面から剥がされた大型の剥離面は、原礫面を除去するか原礫面を取り込んだ大型剥片を剥離した際にできたものであるといえる。また、下端から大きく3枚に分かれるやや小型の剥離面は続けて剥がされる134の直前に剥がされたものである。これらはSKd09周辺から持ち去られている。次いで134が剥がされる。石核下端の礫面を打面として剥がされた大型の横長剥片である。134は出土時には3点に分割されていたが、1枚の剥片に戻して図化している。これにより、正面に見られた原礫面はほとんど除去される。

次に剥がされるのは第58図135である。打面を134同様、石核下端に設定して剥がされた縦長剥片である。右側面及び末端部に原礫面を留めるほか、右側縁上端に折れ面が認められる。打面は線状打面を呈し、背面の打面直下は微細剥離に覆われる。135の剥離直後に136が剥がされる。石核下端に打面を設定して剥がされたもので不定形な平面形状である。左側縁に原礫面を留める。以上が剥離されたのち、最低でも石核上端から1枚、下端から2枚やや薄手の剥片が剥離される。これらはSKd09周辺から持ち去られ、遺存しない。次に裏面に作業面を展開し、まず141が剥離される。本来的には寸詰まりの縦長剥片であったものが、剥離時の打撃により打点を中心に二分されたものである。折れた残りは遺存しない。その後、最低でも石核上下端からやや薄手の剥片5枚程度を剥離した後、140が剥がされる。140以外は周辺に遺存しない。次に137・139が分割される。139側の主要剥離面がポジティブ面で構成されることから、140剥離後に大きく打ち欠いて139を得たものと考えられる。137側の主要剥離面はネガティブ面で構成され、この打面側で小型の横長剥片（138）を剥離したのち、作業を終える。137を石核に、それ以外を剥片として剥離の単位を記載したが、137と139にまたがる剥離面が存在せず、両者の関係が石核と剥片の関係でよいのか、両者がそれぞれ分割された後、個別に剥片剥離を行ったのかについては不明である。また、周辺にこれらの剥離作業の痕跡が認められなかったことから、上記に示した工程が本遺跡内で行われたのではなく、原石採取地で行われた後に本遺跡内へ搬入された可能性も考えられる。

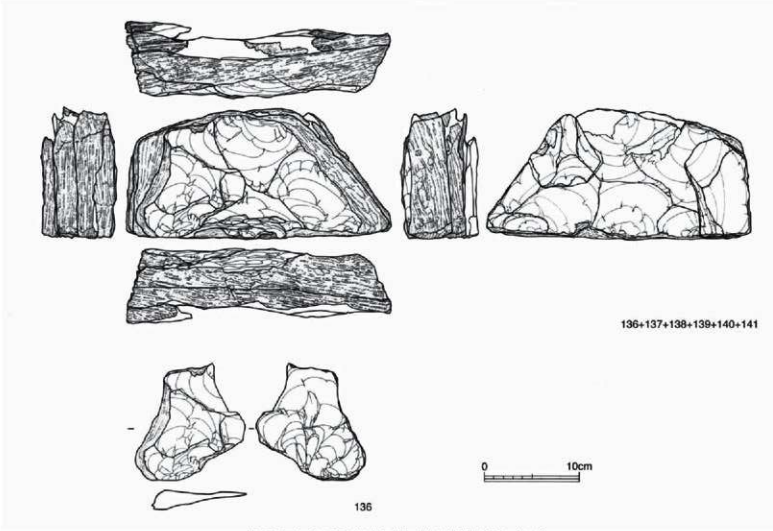
なお、当資料についてはサヌカイトの産地推定分析を行い、金山産であることが判明した（第3章）。



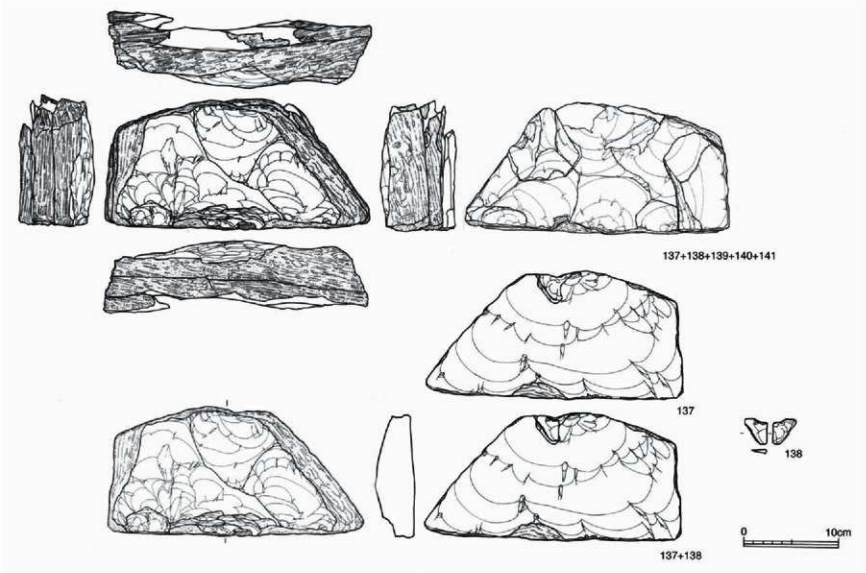
第 57 図　SKd09 出土石器　接合資料（1）（1/4）



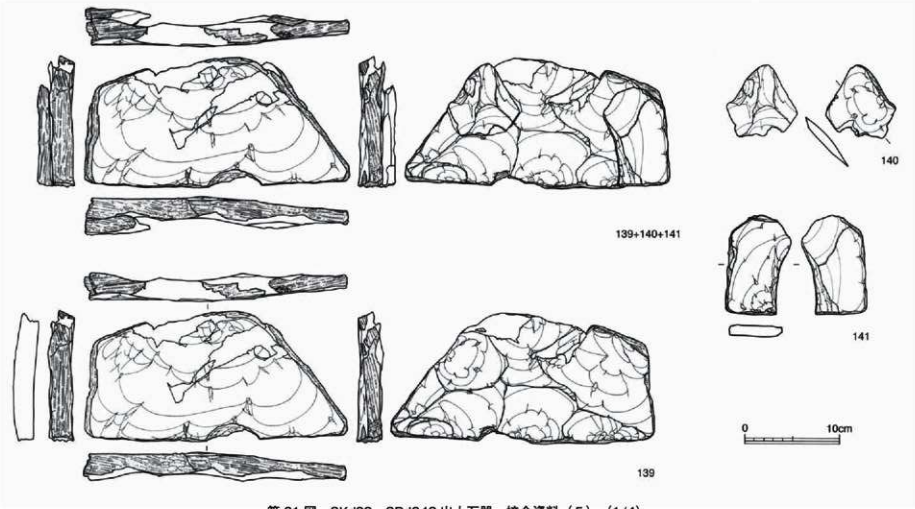
第 58 図　SKd09 出土石器　接合資料（2）（1/4）



第 59 図　SKd09 出土石器　接合資料（3）（1/4）



第 60 図　SKd09 出土石器　接合資料（4）（1/4）



第 61 図　SKd09・SPd043 出土石器　接合資料（5）（1/4）

SKd12（第 62 図）

G 地区西辺中央付近で検出した土坑である。平面形は一辺約 0.50 mのややいびつな隅丸方形で、断面形は浅い皿状を呈する。深さは最深部で 0.10 mを測る。遺物の出土は認められない。

SKd13（第 62 図）

G 地区西辺中央付近で検出した土坑である。平面形は直径 0.40 mのややいびつな円形、断面形は浅い皿状を呈する。深さは最深部で 0.06 mを測る。遺物の出土は認められない。

SKd14（第 62 図）

G 地区西辺中央付近で検出した土坑である。平面形は長辺 0.85 m、短辺 0.65 mのややいびつな隅丸長方形、断面形は浅い皿状を呈する。深さは最深部で 0.10 mを測る。遺物の出土は認められない。

SKd15（第 62 図）

G 地区北西部付近で検出した土坑である。平面形は直径約 0.80 mのややいびつな円形、断面形は浅い皿状を呈する。深さは最深部で 0.06 mを測る。

遺物の出土は小片が中心に少量認められる。142 は須恵器椀、143・144 は土師質土器小皿である。

SKd16（第 62 図）

G 地区北西部付近で検出した土坑である。平面形は長辺 1.70 m、短辺 1.20 mのややいびつな隅丸長方形、断面形は浅い皿状を呈する。深さは最深部で 0.10 mを測る。埋土は暗灰色粘性極細砂である。

遺物の出土は小片が中心で、形状を把握しうるものは 145 の須恵器椀、146 の土師質土器杯、147 の土師質土器小皿である。

SKd18（第 62 図）

G 地区西辺中央付近で検出した土坑である。平面形は一辺約 0.62 mのややいびつな隅丸方形、断面形は浅い皿状を呈する。深さは最深部で 0.08 mを測る。

遺物の出土は小片が中心で、形状を把握しうるものは認められない。

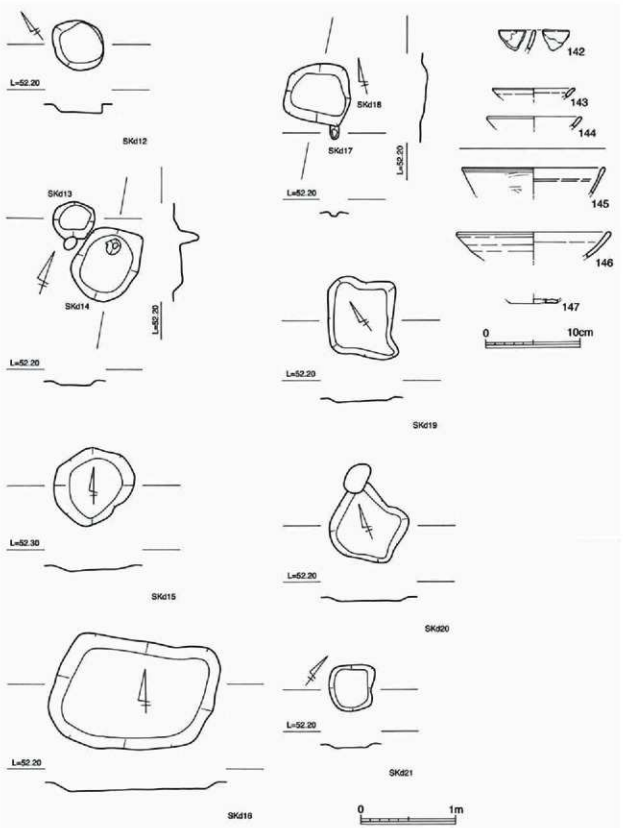
SKd19（第 62 図）

G 地区西辺中央付近で検出した土坑である。平面形は長辺約 0.80 m、短辺約 0.70 mのややいびつな隅丸長方形、断面形は浅い皿状を呈する。深さは最深部で 0.04 mを測る。

遺物の出土は小片が中心で、形状を把握しうるものは認められない。

SKd20（第 62 図）

G 地区西辺中央付近で検出した土坑である。平面形は一辺約 0.80 mのいびつな隅丸方形、断面形は浅い皿状を呈する。深さは最深部で 0.04 mを測る。遺物の出土は認められない。



第 62 図　SKd12 ～ 21 平・断面図（1/40）、出土遺物（1/4）

SKd21（第 62 図）

G 地区西辺中央付近で検出した土坑である。平面形は一辺約 0.45 mのややいびつな隅丸方形、断面形は浅い皿状を呈する。深さは最深部で 0.04 mを測る。遺物の出土は認められない。

SKd22（第 63 図）

G 地区西辺中央やや南寄り付近で検出した土坑である。平面形は一辺約 0.48 mのややいびつな隅丸方形、断面形は浅い皿状を呈する。深さは最深部で 0.04 mを測る。遺物の出土は認められない。

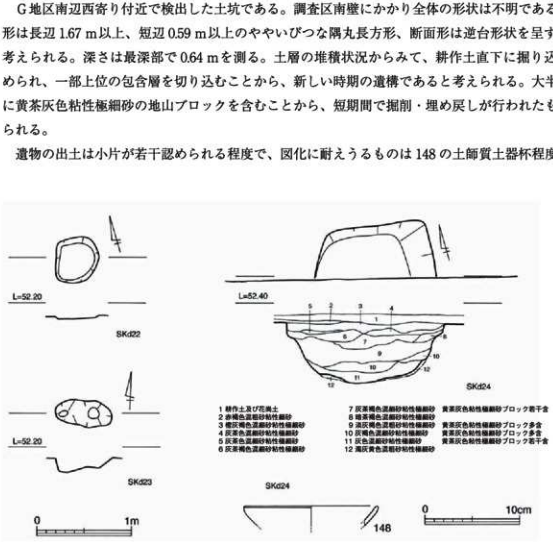
SKd23（第 63 図）

G 地区西辺中央やや南寄り付近で検出した土坑である。平面形は長軸 0.60 m、短軸 0.28 mのややいびつな長楕円形、断面形は二段の底部を持つ逆台形状を呈する。深さは最深部で 0.14 mを測る。遺物の出土は認められない。

SKd24（第 63 図）

G 地区南辺西寄り付近で検出した土坑である。調査区南壁にかかり全体の形状は不明であるが、平面形は長辺 1.67 m以上、短辺 0.59 m以上のややいびつな隅丸長方形、断面形は逆台形状を呈するものと考えられる。深さは最深部で 0.64 mを測る。土層の堆積状況からみて、耕作土直下に掘り込み面が認められ、一部上位の包含層を切り込むことから、新しい時期の遺構であると考えられる。大半の埋土中に黄茶灰色粘性極細砂の地山ブロックを含むことから、短期間で掘削・埋め戻しが行われたものと考えられる。

遺物の出土は小片が若干認められる程度で、図化に耐えうるものは 148 の土師質土器杯程度である。



第 63 図　SKd22 ～ 24 平・断面図（1/40）、出土遺物（1/4）

SKd25（第 64 図）

G地区南辺中央東寄り付近で検出した土坑である。調査区南壁にかかり全体の形状は不明であるが、平面形は長軸 1.80 m以上、短軸 0.33 m以上のややいびつな長楕円形、断面形は皿状を呈するものと考えられる。深さは最深部で 0.26 mを測る。遺物の出土は認められない。

SKd26（第 65 図）

G地区東辺南寄り付近で検出した土坑である。平面形は長軸約 1.70 m、短軸約 1.50 mのややいびつな長楕円形、断面形は深い箱状を呈する。深さは最深部で0.72 mを測る。埋土は中層が淡灰色系の極細砂、下層が暗灰色系の極細砂を主体とする。6層内中層付近に木の葉が薄く堆積する。

出土遺物はあまり多くなく、小片が中心である。

SKd27（第 65 図）

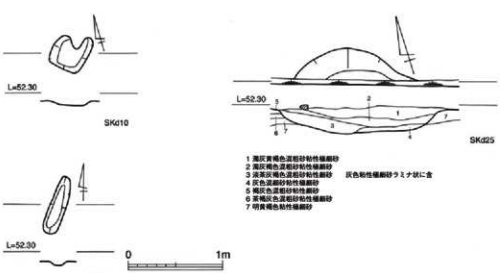
G地区南東隅で検出した土坑である。掘立柱建物 SBd12 及び溝状遺構 SDd035 と重複しているが、SBd12 は SDd035 に切られているのに対し、SKd27 は SDd035 の最上層を切っていることから、3遺構中最も新しいものであるといえる。平面形は長辺約 1.10 m、短辺約 0.85 mのややいびつな隅丸長方形、断面形は深い椀状を呈する。深さは最深部で 0.50 mを測る。

出土遺物は少なく小片が中心で、図化に耐えうるものは 149 の土師質土器杯程度である。

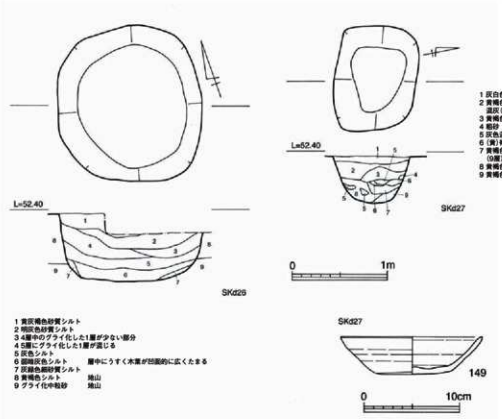
SKd28（第 66 図）

H地区北壁西寄りで検出した土坑である。平面形は長辺約 1.90 m、短辺約 1.10 mの隅丸長方形、断面形は浅い箱型を呈する。深さは最深部で 0.26 mを測る。主軸方位はN -21° - Eを測る。埋土は上層が黄褐色粗砂混じり粘性細砂で、地山ブロックがかなり主体を占める。下層は薄く、灰色粗砂が堆積する。

出土遺物は少なく小片を中心とする。形状が把握できるものとしては 150・151 の土師器杯が挙げられる。



第 64 図　SKd10・11・21 平・断面図（1/40）



第65図　SKd26・27平・断面図（1/40）、出土遺物（1/4）

SKd30（第69図）

H地区北辺東半中央部で検出した土坑である。平面形は長辺約1.15 m、短辺約0.76 mの隅丸長方形、断面形は浅い箱状を呈する。深さは最深部で0.20 mを測る。
出土遺物は少なく小片が中心であり、図化に耐えうるものが認められない。

SKd31（第66図）

H地区南西部で検出した土坑である。平面形は長辺約0.65 m、短辺約0.60 mのややいびつな隅丸長方形、断面形は椀状を呈する。深さは最深部で0.25 mを測る。出土遺物は認められない。

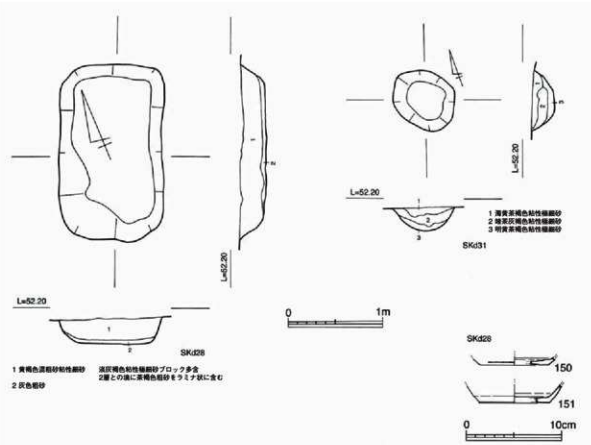
SKd32（第67図）

H地区南辺中央やや西寄りで検出した土坑である。平面形は長辺約1.30 m、短辺約0.90 mのややいびつな隅丸長方形、断面形は凹凸のある浅い皿状を呈する。深さは最深部で0.10 mを測る。

出土遺物は少なく小片を中心とする。形状が把握できるものとしては152の土師質土器椀が挙げられる程度である。

SKd33（第67図）

H地区南辺中央やや西寄りで検出した土坑である。平面形は長辺約2.20 m、短辺約1.30 mの隅丸長方形、断面形は浅い箱状を呈する。主軸方位はN -17° - Eを測る。深さは最深部で0.34 mを測る。埋土



第 66 図　SKd28・31 平・断面図（1/40）、出土遺物（1/4）

は９層に細分できるが、比較的埋土を撹乱しているようで、１層内に５層のブロックが多く含まれる。また、１層の下底は他の層に比べて著しく凹凸が認められる。掘り直しなどの行為があったものと想定できる。

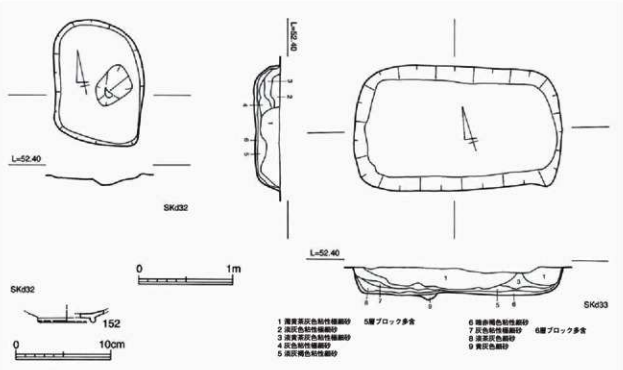
出土遺物は少なく小片が中心で、図化に耐えうるものが認められない。

SKd34（第 68 図）

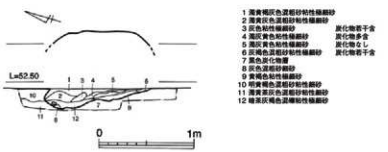
Ｈ地区南辺中央付近で検出した土坑である。平面形は長軸約 1.06 m、短軸約 0.30 m の長楕円形、断面形は北側へ向けて深くなり、北壁がオーバーハングするやや不整形な皿状を呈する。深さは最深部で 0.23 m を測る。７層を中心に炭化物を多く含んでいるが、特に７層は炭化物のみからなる。Ｈ地区南西隅において、この SKd34 に類似した炭化物を大量に含む窪みを検出していたが、掘削の結果、上面で見えた形状とは異なり、不整形に広がってゆく状況を確認したことから、同遺構については埋没樹木が自然炭化した結果であると判断した。SKd34 についても同様の性格が想定される可能性がある。出土遺物は認められない。

SKd35（第 69 図）

Ｈ地区北東隅で検出した土坑である。平面形は長軸約 1.65 m、短軸約 1.15 m の長楕円形、断面形は浅い椀状を呈する。深さは最深部で 0.32 m を測る。埋土は灰茶褐色系の細砂混じり粘性極細砂を中心



第 67 図　SKd32・33 平・断面図（1/40）、出土遺物（1/4）



第 68 図　SKd34 平・断面図（1/40）

とするが、２・３層で濁黄褐色粘性極細砂地山ブロックを含む。出土遺物は認められない。

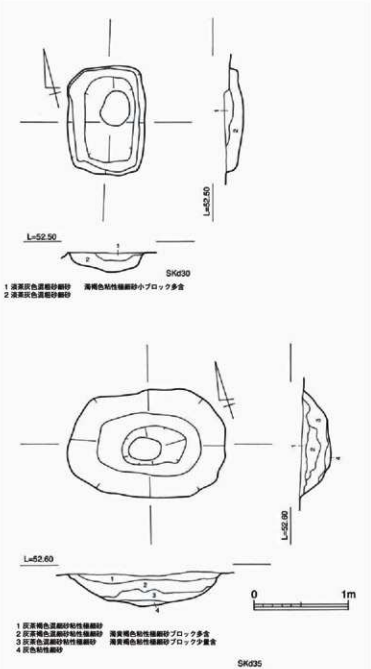
SKd36（第 70 図）

ｄ地区中央で検出した土坑である。遺構東半が調査区外へ伸びるため詳細な形状は不明であるが、平面形は長軸約 1.34 m以上、短軸約 0.60 m以上の長楕円形、断面形は深い皿状を呈する。深さは最深部で 0.32 mを測る。埋土は黄色系の極細砂を中心とする。

出土遺物は少なく小片が中心で、図化に耐えうるものが認められない。

SKd37（第 70 図）

ｄ地区中央で検出した土坑である。遺構東半がわずかに調査区外へ伸びるため詳細な形状は不明であるが、平面形は長軸約 1.10 m以上、短軸 0.65 mのいびつな長楕円形、断面形は浅い皿状を呈する。深さは最深部で 0.08 mを測る。



第 69 図　SKd30・35 平・断面図（1/40）

出土遺物は少なく小片が中心で、図化に耐えうるものが認められない。

SKd38（第 71 図）

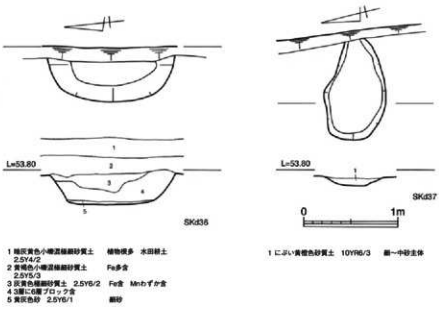
d 地区東辺中央やや南寄りで検出した土坑である。溝状遺構 SDd83 と重複しているが、同溝が平面形は直径約 1.30 m のややいびつな円形、断面形は深い皿状を呈する。深さは最深部で 0.16 m を測る。

出土遺物は少なく小片が中心で、ある程度形状が把握できるのは 153 の須恵器杯、154 の須恵器甕、155 の土師質土器小皿である。

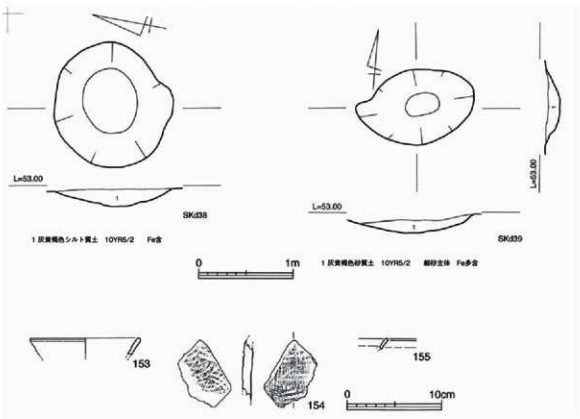
SKd39（第 71 図）

d 地区東辺中央やや南寄りで検出した土坑である。平面形は長軸約 1.26 m、短軸約 0.80 mのいびつな楕円形、断面形は深い皿状を呈する。深さは最深部で 0.12 mを測る。

出土遺物は少なく小片が中心で、図化に耐えうるものが認められない。



第 70 図　SKd36・37 平・断面図（1/40）

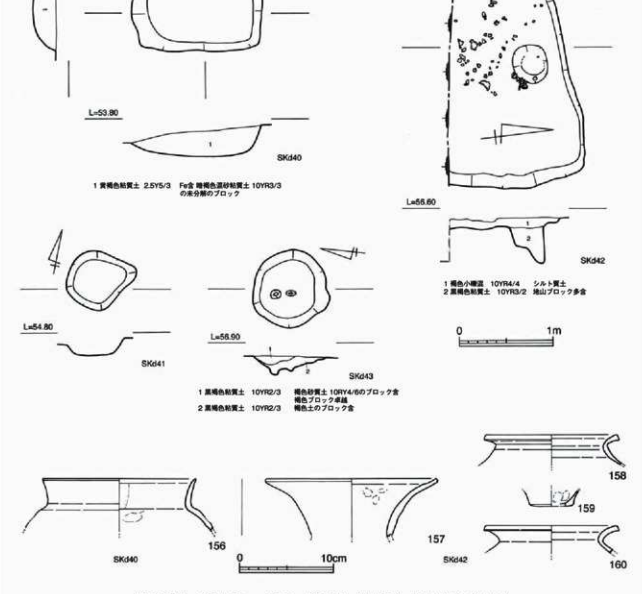


第 71 図　SKd38・39 平・断面図（1/40）、出土遺物（1/4）

SKd40（第 72 図）

d 地区南東部で検出した土坑である。溝状遺構 SDd83 と重複しているが、同溝の最上層を削ることから同溝埋没後に掘削された土坑であることがわかる。平面形は長辺 1.38 m、短辺 0.86 m のややいびつな隅丸長方形、断面形は浅い椀状を呈する。深さは最深部で 0.28 m を測る。

出土遺物は少なく小片が中心で、図化に耐えうるものは 156 の土師器甕程度である。小片であるため全体の器形は不明であるが、頸部はやや緩やかに屈曲し、そこからやや外反気味に直立する口縁部を持つ。口縁端部はやや薄く仕上げられる。肩部と頸部の境付近に稜線が形成される。



第 72 図　SKd40 ～ 43 平・断面図（1/40）、出土遺物（1/4）

SKd41（第72図）

d地区南東部で検出した土坑である。平面形は一辺約0.60 mのいびつな隅丸方形、断面形は浅い椀状を呈する。深さは最深部で0.17 mを測る。

出土遺物は少なく小片が中心で、図化に耐えうるものが認められない。

SKd42（第72図）

d地区東辺南端付近で検出した土坑である。南側を削平されており、正確な規模は不明であるが、平面形は現状で東西2.76 m、南北1.45 m以上のややいびつな隅丸方形、断面形は底部にやや凹凸が認めらる浅い皿状を呈する。深さは最深部で0.10 mを測る。

出土遺物は小片が中心ながら、土坑底部西半部でややまとまって出土している。157は弥生土器広口壺である。頸部から口縁部にかけてのものであるが、遺存状態は不良である。内外面の調整はほぼ摩滅しており、観察は困難である。158～160は弥生土器甕である。158・160は頸部から口縁部にかけての破片、159は底部片である。いずれも摩滅が進み、器面調整の観察は困難である。

5．井戸

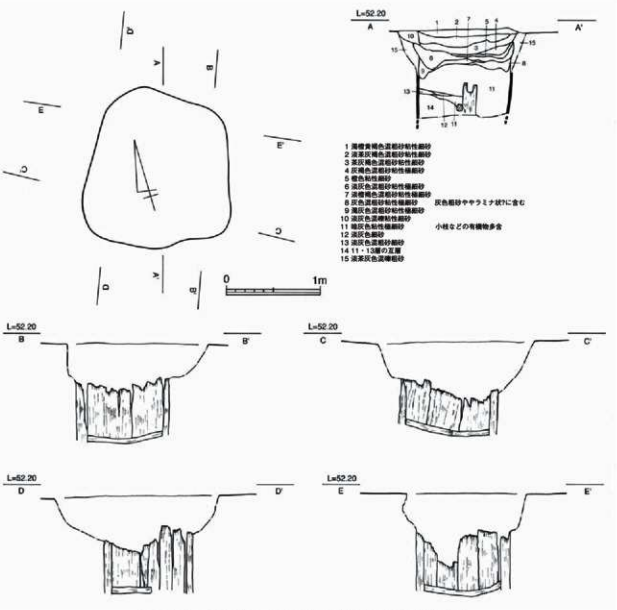
SEd01（第73・74図）

G地区北西部で検出した井戸である。G地区西壁中央付近から地区中央付近にかけて遺構が密集し、これらを区画するSDd012の北東コーナー付近に位置する。図示していないが、遺構検出面から約0.20 mより下は茶灰色系の粗砂混じり細砂が堆積し、そこから著しい湧水が確認できた。そのため、遺構壁の崩落が著しく、十分な記録が取れていない。上面検出プランは本来一辺約1.35 mのいびつな隅丸方形を呈していたが、先の理由により、記録時には約1.60 m四方の隅丸方形に変形している。掘り方内には一辺1 m四方に側板が組まれていた。図示した部分まで記録が取れた段階でかなり側板が内側に傾き始めており、崩落の危険が生じたことから底部の確認は機械掘削による断ち割りを行った。しかし、断ち割り開始直後に、側板が限界に達して崩落したため、下部構造の記録は取れなかった。回収されたものから側板は幅約0.20～0.40 m、厚さ平均約0.03 m、長さ約1.20 mのものが用いられていたことがわかる。埋土は検出面から約0.50 mまでは茶灰色系の粘性砂質土からなり、それ以下は灰色系の粘性極細砂を中心とした埋土となる。11層上面を境に堆積環境が変化したものと考えられる。なお、1層はG地区の床土直下に堆積する旧耕作土と考えられる近世の遺物を含む包含層に類似しており、最終的に平坦化が完了したのが、近世にいたるものと考えられる。

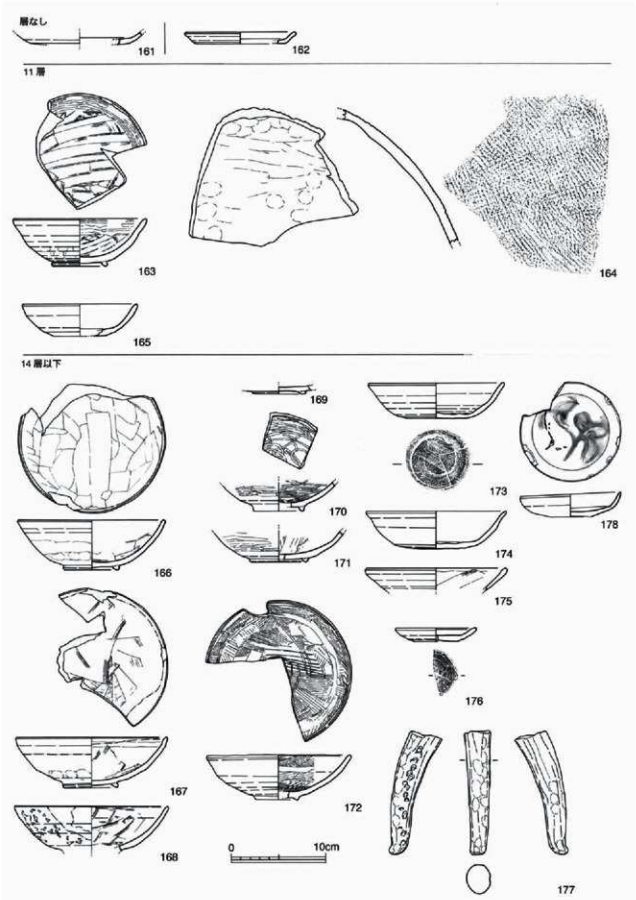
出土遺物は比較的多量で、かつ遺存状況が良好であった。161は土師質土器杯である。出土層位は不明であるが、上位の埋土中から検出したものと考えられる。162は土師質土器小皿である。上位の埋土から一括で取り上げた資料からの抽出である。163～165は11層出土遺物である。163は須恵器椀である。底部から緩やかに内湾して立ち上がる体部に、若干外半気味に斜め上方へ延びる口縁部を持つ。内面はほぼ同一方向の板ナデを施した後、口縁部のみ幅5㎜程度の横位のヘラミガキを施す。外面は回転ナデにより、底部には短く踏ん張る断面形状が楕円形の高台が貼り付けられる。164は須恵器甕である。165は土師質土器杯である。底部から口縁部まで緩やかに内湾する器形を呈する。内外面は回転ナデにより仕上げられる。底部外面にはヘラ切りの後、ナデを施した痕跡が認められる。

166～177は14層以下から出土した遺物である。主として、最終断ち割り時に一括して取り上げた

遺物である。166～171は須恵器椀である。166･167は丸みを帯びた底部から内湾して立ち上がる体部、口縁直下で外反する口縁部を持ち、内面の調整を板ナデによって施すものである。また、底部と体部の境よりやや上の位置で横位に連続する指押さえ痕が認められる。高台はやや不整形ながら比較的しっかりとしたものである。166は口縁部内面から体部下半にかけて、167は口縁部内外面にカーボンの付着を認める。168は体部～口縁にかけての破片である。内面の調整方法は166・167と共通するが、外面体部下半の指押さえ痕が認められない。169～171は底部片である。169は高台が若干へたり気味である。これと比較すると170・171の高台はしっかりしており、特に170は断面方形を呈し、直立する。内外面の調整は170がヘラミガキにより、171は内面が板ナデ、外面が横位のヘラミガキによりそれぞれ仕上げられる。170の内面見込み部には螺旋状の暗文が施される。172は瓦器椀に分類した。調整がきわめて良好に残っており、特に内面はかすかに金属光沢が残る。内面調整はハケナデを主体とし、内面見



第73図　SEd01 平・断面図及び見通し断面図（1/40）



第 74 図　SEd01 出土遺物（1/4）

込みにヘラミガキが施される。高台は低い逆台形状の断面形を呈する。173～175は土師質土器杯である。173・174はほぼ全体の形状が把握できるが、整形は内外面共に回転ナデにより行われ、底部切り離しはヘラ切りによる。175は口縁部をやや肥厚させる。176は土師質土器小皿である。底部と体部の境がやや不明瞭な形状である。底部切り離しはヘラ切りによる。177は土師質土器土釜の脚である。178は白磁皿である。これらの遺物から当遺構は12世紀後半頃のものと考える。

SEd02（第75図）

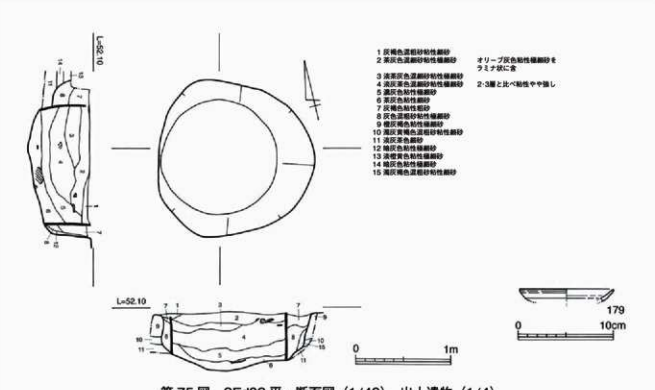
H地区北辺西半中央付近で検出した井戸である。掘形の平面形は直径1.60 mのややいびつな円形を呈し、断面形状は椀状を呈する。深さは最深部で0.62 mを測る。この掘形内の西寄りに、直径約1.20 mの土師質井戸枠が据えられる。埋土は灰色系の粘性極細砂を主体とする。2層で粘性極細砂をラミナ状に含むなど、流水に関連する堆積が見られるが、基本的には人為的な埋め戻しに近い堆積が想定できる。

出土遺物は大半が井戸枠の破片であり、その他の遺物は小片がわずかに認められる程度である。179は備前焼の灯明皿である。また、図化し得なかったが、アルミニウム製のおろし金が底部から出土している。

6．焼成遺構

SFd01（第76図）

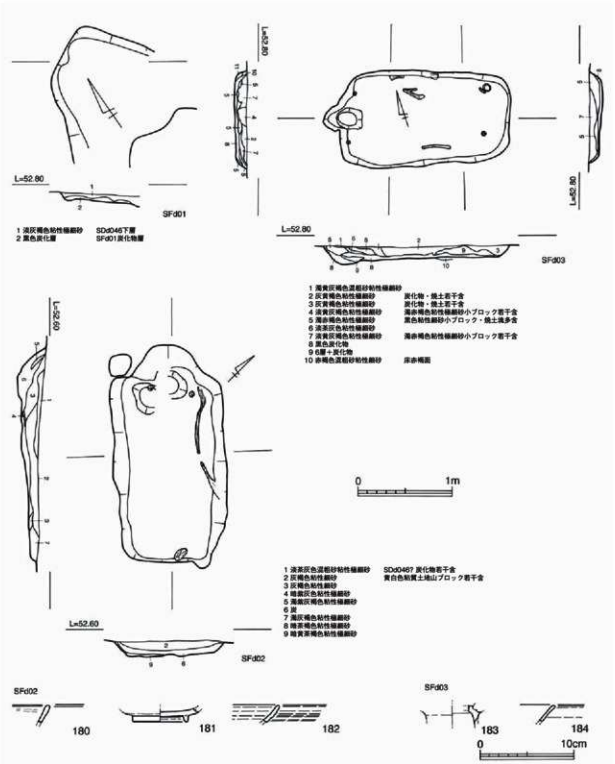
d地区東壁中央付近で検出した焼成遺構である。後述するSFd02や溝状遺構SDd046によって破壊されており、これらに先行する遺構であることがわかる。現状では平面形が上底0.60 m・下底1.50 m・高さ0.75 mの台形で、深さが最深部で0.04 mを測る程度の窪みとして認識できる程度である。主軸方



第75図　SEd02 平・断面図（1/40）、出土遺物（1/4）

位はN -38° - Eを測る。上面はSDd046の埋土に覆われるが、その直下には炭化物層が遺存する。遺存部位は煙道部であると考えられる。また、遺構底部は赤変しており、受熱していることを裏付ける。

出土遺物はわずかに認められるが、図化に耐えるものはない。



第76図　SFd01～03平・断面図（1/40）、出土遺物（1/4）

SFd02（第 76 図）

d 地区東壁中央付近で検出した焼成遺構である。溝状遺構 SDd046 の埋土によって上面が被覆されることから、これに先行する遺構であることがわかる。平面形は長さ 2.30 m・幅 1.00 ～ 1.20 m の隅丸長方形に半円状の張り出しがつく形状で、断面形状は長軸方向で突出部へ向けて緩やかに深くなる浅い皿状、短軸方向で浅い皿状を呈する。主軸方位はN -38° - E を測る。深さは最深部で 0.28 m を測る。上面は SDd046 の埋土がわずかにかぶり、その直下に黄白色粘質土地山ブロックが堆積する。SDd046 が機能する以前に廃棄され、その際に埋め戻された際の土と考えられる。突出部とその直下はさらに複数の埋土がみられ、最下層には炭化物層が認められる。同層内には長さ 1.20 m、直径 0.04 m ほどの炭化材が遺存する。また、突出部直下には浅い皿状の窪みが見られるほか、直径 0.05 m ほどの小ピットが 2 基確認できた。皿状の窪みは土層確認用のトレンチ掘削時に掘りぬいてしまったことから、2 基あるのか 1 基のものを分断しているのか不明である。遺構底部や壁面はあまり顕著な赤変を認めない。

出土遺物は大半が小片であるが、若干量出土している。うち 3 点を図化した。180 は黒色土器 A 類椀の口縁部である。181 は土師質土器椀の底部である。平底気味の底部にやや長めに直立する断面長方形の高台が張り付く。182 は土師質土器杯の口縁部である。

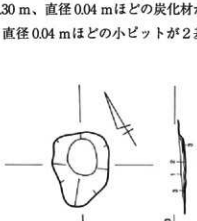
SFd03（第 76 図）

d 地区西壁中央付近で検出した焼成遺構である。SRd06 の上層を遺構面としており、SRd06 の埋没後に掘削された遺構であることがわかる。平面形は長さ 2.00 m・幅 0.90 ～ 1.00 m の隅丸長方形に半円状の張り出しがつく形状で、断面形状は長軸方向で突出部へ向けて緩やかに深くなる浅い皿状、短軸方向で浅い皿状を呈する。主軸方位はN -15° - E を測る。深さは最深部で 0.20 m を測る。底部の勾配は SDd02 と比べるとやや傾斜が緩い。突出部とその直下はさらに複数の埋土がみられ、最下層には炭化物層が認められる点は SFd02 と同様である。同層内には長さ 0.15 ～ 0.30 m、直径 0.04 m ほどの炭化材が遺存する。また、突出部直下には浅い皿状の窪みが見られるほか、直径 0.04 m ほどの小ピットが 2 基確認できた。また、浅いほうでも直径 0.04 ～ 0.08 m の小ピットを 2 基確認し、都合 4 基の小ピットが底面に認められる。突出部周辺の壁や長手方向の壁、中央部床面が比較的顕著に赤変している。

出土遺物は大半が小片であるが、若干量出土している。うち 2 点を図化した。183 は土師質土器椀の底部である。ごく小片であり形状が不明な部分が多いが、かなり長く直立した高台が張り付いたものと考えられる。184 は土師質土器椀の口縁部である。

SFd04（第 77 図）

d 地区南東隅で検出した焼成遺構である。平面形は長軸 0.78 m、短軸 0.60 m のややいびつな楕円形を呈し、断面形は浅い皿状を呈する。深さは最深部で 0.04 m を測る。埋土は上位ににぶい黄褐色砂混じりシルト質土、下位に平均 0.01 m の厚さ



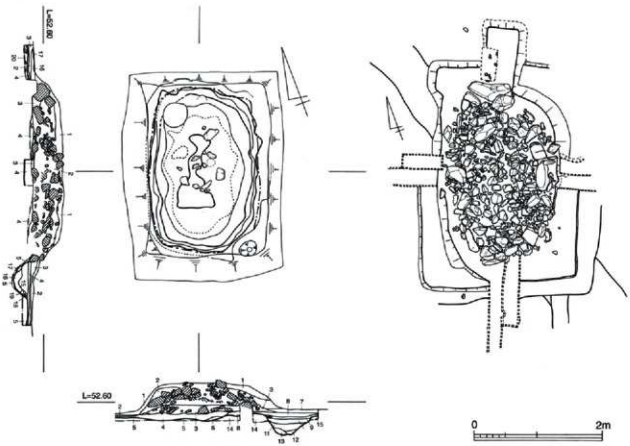
第 77 図　SFd04 平・断面図（1/40）

で炭化物の堆積が認められる。底面はややまだらではあるが、赤変している様子がうかがえる。形態的にも規模的にも SFd02・03 とは異なる。出土遺物は認められない。

7．墓

STd01（第 78 ～ 81 図）

G 地区中央やや南寄りで検出した遺構である。調査前から平面形長軸約 2.60 m、短軸約 1.80 m の楕円形、高さ約 0.20 m、主軸方位をN -17° - Eにとるマウンドとして遺存していた。これは地元で「オニ塚」として知られた塚であることから、中世墳墓の可能性を考慮に入れながら調査を行った。前年度に耕作土のみを機械で除去したが、その際に STd01 の裾部間近まで作業が及び、見かけの高さが若干高くなってしまっている。盛土は概ね 3 層に大別が可能である。最上層は耕作土とほぼ同じ土である。握り拳大の礫を若干含む。2 層は濁灰褐色混礫粘性極細砂で、STd01 の盛り土と判断した。拳大からそれ以上の礫を多量に含む。これらの礫はマウンド状に積み上げられるが、積み方はランダムで規則性はあまり認められない。強いて言えば裾部を構成する礫に大型のものがやや顕著に見られる程度である。何らか

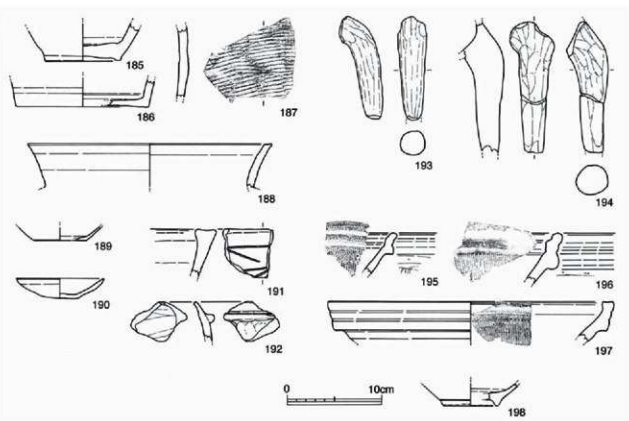


第 78 図　STd01 平・断面図（1）（1/60）

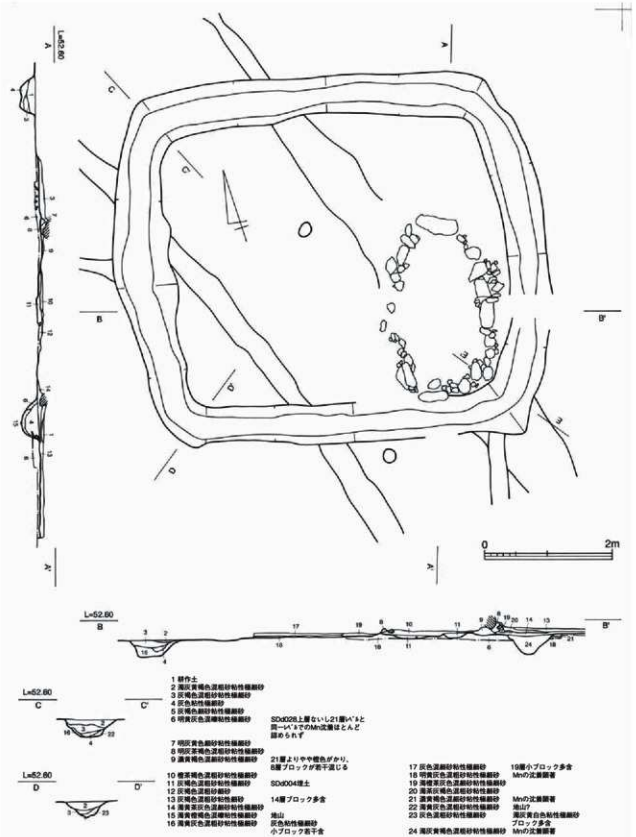
の構造物を構成している様子は看取出来ない。石材構成は砂岩を主体とし、安山岩・花崗岩が混じる。基本的に、綾川の河床に見られる構成と同じである。3層は淡茶灰白色の粗砂混じり粘性極細砂で、その下の4層ブロックを多量に含む。基本的には3層までが塚の埋土であると判断した。ここまでは、埋葬施設の存在は確認できなかった。

さて、ここでSTd01に関連する可能性のあるSDd028についても併せて報告しておく。この遺構は、STd01の東辺及び南辺の3層を除去したところ、この層に被覆される形で確認したものである。当初、この溝はSTd01の南東部で直角に折れることから、STd01のマウンドを区画する方形溝となる可能性を考えていた。しかし、北辺・西辺でSDd028の存在が認められなかったことと、マウンドの土がSDd028を被覆することから、STd01とSDd028は別の遺構であることも考える必要が出てきた。その後、調査が進み、SDd028は平面形が長辺約6.90 m、短辺約5.80 mの隅丸の長方形を呈する区画溝であることが判明した。方形区画の主軸方位はN -11° - Eを測る。また、幅は0.50 ～ 0.90 m、深さは約0.30 mを測り、断面形状は逆台形ないしは椀形を呈する。埋土は概ね上・中・下の3層に大別できる。上層は灰色系の粗砂混じり粘性極細砂ないしは橙黄灰色系の粗砂混じり粘性極細砂、中層は黄灰褐色系の粗砂混じり粘性極細砂、下層は濁黄灰褐色系の粗砂混じり粘性極細砂である。上・中層を中心に一定量の遺物の出土が認められたが、その出土状況はランダムで法則性は認められない。また、SDd028による区画内には、同遺構に先行するSDd004･005の他、帰属時期不明のSPd170が確認できるのみであった。

出土遺物は小片ではあるものの、一定量の出土を見た。盛土内からのものとSDd028のものを分けて提示する。前者は古代から近代までのものを含む。185 ～ 188は須恵器である。185・186は壺、187・188は甕に分類した。189 ～ 194は土師質土器である。189は杯に、190は小皿に、191 ～ 194は土釜に



第79図　STd01 出土遺物（1/4）



第80図　STd01 平・断面図（2）（1/60）

分類した。191・192は土釜口縁部、193・194は脚部である。191には外面に線刻が見られる。195～197は擂鉢である。198は磁器椀である。他に、図示していないが、近現代のものと考えられる軒丸瓦や染付が出土している。

後者のSDd028出土遺物は、いずれの層からも概ね満遍なく出土している。199・201～205は北辺部から出土した。199・200は須恵器椀である。200は西辺部上層で溝の肩部に伏せたような状態で出土したが、比較的遺存状態は良好である。若干平底気味の底部からややなだらかで内湾気味の体部が立ち上がり、そのまま口縁部は斜め上方へ延びる。内面は放射状に施される板ナデ、口縁端部内面から外面全体は回転ナデにより仕上げられる。底部には張り付け高台がつく。201は須恵器杯である。口縁部の小片で全体の形状は不明であるが、比較的著しく外反する口縁部である。202は土師質土器椀である。やや摩滅が進み、詳細不明である。203～205は土師質土器小皿である。小片のため、詳細な形状は不明である。

206～214は上層出土遺物である。206～209は須恵器椀である。208は小片ながら、比較的遺存状態は良好である。体部はなだらかに内湾気味に立ち上がり、口縁部でわずかに外反する形状を呈する。調整は内外面に横位のヘラミガキが認められる。外面のヘラミガキは、回転ナデで生じた稜線上に施されている。210は須恵器甕、211・212は土師質土器杯、213・214は土師質土器小皿である。いずれも小片であり、全体の形状は窺いにくい。土師質土器小皿は底部と体部のなす角度が大きく、浅い作りであることが窺える。

215～227は中層出土遺物である。215～218は須恵器椀である。いずれも小片であり、全体の形状は窺いにくい。219～222は土師質土器椀、223・224は土師質土器杯である。219は土師質土器椀に分類したが、カーボンの剥落した黒色土器の可能性もある。225～227は土師質土器小皿である。227はほぼ完形で出土した。底部と体部の境は緩やかに屈曲し、やや浅い角度で体部が立ち上がる。内面見込みから体部にかけては回転ナデを施すが、底部は切り離し時のヘラ切り痕を残す。228～230は下層出土遺物である。228は瓦器椀、229は土師質土器皿、230は土師質土器小皿に分類した。228・229は小片であることから、別の器種と誤認している可能性もある。231～233は底部出土遺物である。いずれも土師質土器で、231は椀、232は皿、233は小皿にそれぞれ分類した。

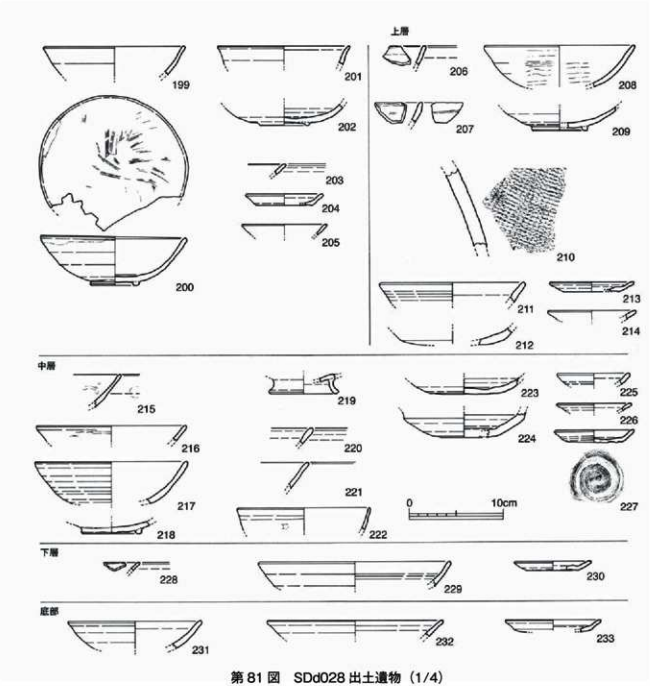
以上を踏まえ、STd01及びSDd028についてまとめておく。現状でのSTd01は、墓としての塚ではなく、耕作地内に散在した耕作に妨げとなる礫などを積んだだけの「塚」であるといえる。しかし、SDd028と併せて考えた場合、この溝が方形区画をなすものであることや、その区画の南東隅に主軸を揃えてSTd01が築かれていることから、両者は全く関係の無いものではないと想定できる。ただし、両者の主軸は共に周辺の条理地割の方位と共通することから、これに規制された結果であることは否めず、時期を違えてそれぞれが地割の方向に従って構築された可能性はある。しかし、d地区において、STd01に積まれたようなサイズの礫がほかの調査区で頻繁に出土した例はなく、耕作地に点在した礫を集積したと理解するのは不自然である。やはり、STd01のごく周辺に大型の礫が特にまとまって存在したと見たほうがよいであろう。すなわち、本来的に集石墓として存在したSTd01が、墓としての認識が薄れた後世に耕作に伴う破壊を受け、祟りを恐れた耕作者が改めて積み直したと考えたい。観音寺市豊浜町所在の大木塚の例のように、区画溝を持ち、その内側に礫によって埋葬施設を構築した塚の残骸がこのSDd028およびSTd01であると考える。主体部が遺存しないため、これに伴う遺物は不明であるが、溝埋土中から出土した遺物を見る限り、概ね12世紀後半頃のものであると考える。

8．溝状遺構

SDd001（第 82 図）

G地区北西隅で検出した南北方向の溝状遺構である。検出長は約 38 mを測り、南端はG地区西端中央付近にある。現地形から見ると南から北へ向けて流下していたものと考えられ、当初２条に分岐しているが南端から９m付近で合流し、北壁西端付近で調査区外へ延びる。断面形状は浅い皿状を呈し、幅は約 0.10 ～ 0.80 m、深さは約 0.10 mを測る。主軸方位 N-23° - Eを測る。埋土は灰黄褐色ないし褐灰色の細砂混じり極細砂からなる。

遺物は比較的多く出土しているが、小片が大半であった。その中で復元可能なものを図示した。234 ～ 241 は須恵器椀である。238 ～ 241 に底部片を図化しているが、240 を除き、短く踏ん張った高台が



第 81 図　SDd028 出土遺物（1/4）

取り付く。242 は須恵器鉢である。243 は黒色土器椀に分類した。244 ～ 248 は土師質土器杯に、249・250 は土師質土器皿に分類した。杯は比較的平坦な底部を持つ。251 は土師質土器脚台付小皿、252 ～ 256 は土師質土器小皿である。257 は土師質土器土釜の脚部片である。

SDd002・003（第 82 図）

G 地区北西隅で検出した南北方向の溝状遺構である。検出長は約 2.50 m で、南端で両者が交わって途切れる。断面形状は共に浅い皿状を呈し、幅は SDd002 が約 0.20 m、SDd003 は約 0.10 ～ 0.15 m、深さは共に約 0.03 ～ 0.06 m を測る。間が途切れるため確証は得られないが、位置関係から見ると後述する SDd005 と同一遺構である可能性もある。出土遺物は認められない。

SDd004（第 82 図）

G 地区北西隅で検出した南北方向の溝状遺構である。検出長は途中で若干途切れるものの約 77.0 m を測り、南端は G 地区南辺中央付近にある。現地形から見ると南から北へ向けて流下していたものと考えられる。北壁西端付近で調査区外へ延びる。比較的直線的に北北西へ延びる溝であるが、北端付近で北へ方向を変える。幅は約 0.15 ～ 1.00 m、深さは約 0.06 m を測る。直線的に流れる部分の主軸方位は N-20° -W を測る。断面形状は浅い皿状を呈し、埋土は灰黄褐色ないし褐灰色の細砂混じり極細砂からなる。

出土遺物は若干量出土しているが、図化に耐えうるものは少ない。258 は弥生土器直口壺頸部である。全体の形状は不明であるが、綾杉状の紋様が施される。弥生時代後期頃のものと考えられる。

SDd005（第 82 図）

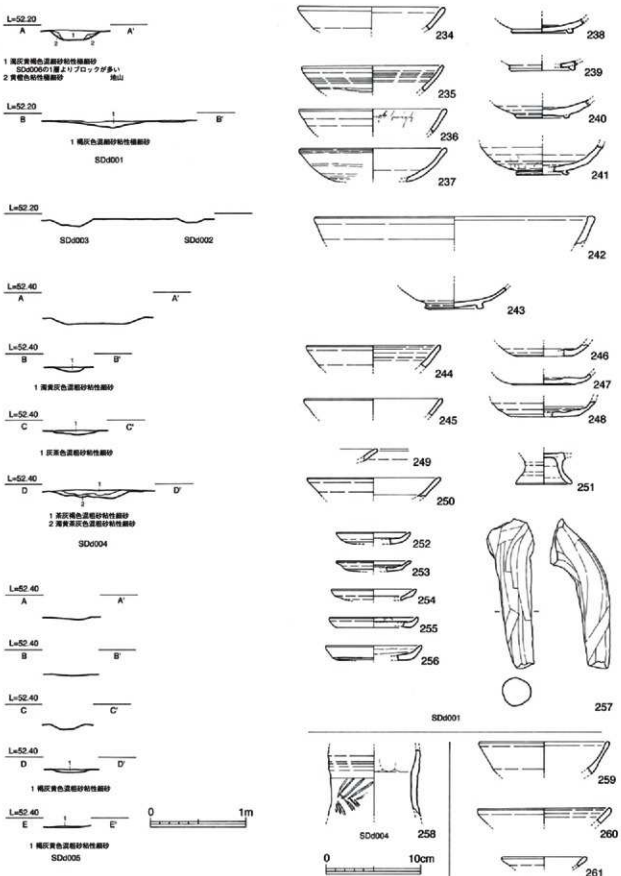
SDd004 とほぼ並行して流下する溝状遺構である。検出長は約 64.0 m を測り、南端は G 地区南辺中央付近にある。現地形から見ると南から北へ向けて流下していたものと考えられる。北壁西端付近で調査区外へ延びる。比較的直線的に北北東へ延びる溝であるが、北端付近で北へ方向を変える。断面形状は浅い皿状を呈し、幅は約 0.30 ～ 0.50 m、深さは約 0.02 m を測る。直線的に流れる部分の主軸方位は N-19° -W を測る。埋土は褐灰黄色の粗砂混じり粘性細砂からなる。

出土遺物は少量で、図化に耐えうるものも少ない。259 は土師質土器椀、260 は土師質土器杯、261 は土師質土器小皿に分類した。出土遺物から中世の遺構であると考えられる。

SDd006（第 83・84 図）

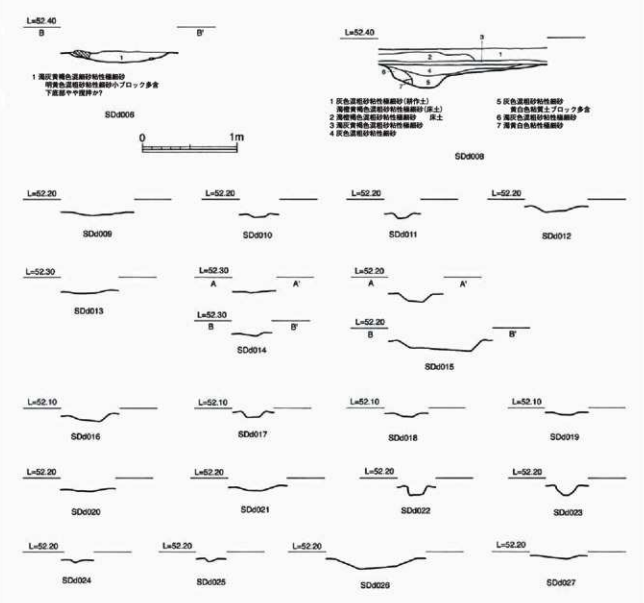
G 地区北東隅付近で検出した東西方向の溝状遺構である。検出長は約 32.5 m を測り、西端は G 地区西壁外へ延びるため不明、東端は SDd004 と接した後、途切れる。比較的一直線に掘削された溝であるが、後述する SDd012 の北端部と接する辺りから SDd004 までの間はややプレが生じる。断面形状は浅い皿状を呈し、幅は約 0.40 ～ 1.05 m、深さは約 0.10 m を測る。直線的に流れる部分の主軸方位は N-18° - E を測る。埋土は濁黄茶色ないし濁灰黄褐色の粘性極細砂からなる。

出土遺物は比較的多量であるが小片が多い。図化に耐えうるものを第 84 図に図示した。262 ～ 275 は須恵器椀である。小片が中心で全体の形状が把握しにくいが、263・264 のようにやや深めの器形を呈するものが認められる。また、底部はいずれも丸みを帯び、比較的しっかりとした高台が貼り付けら



第 82 図　SDd001 ～ 005 断面図（1/40）、出土遺物（1/4）

れる。276 は須恵器杯に分類した。277 は須恵器小皿である。278 ～ 280 は須恵器捏鉢である。口縁部のみの小片で全体の形状は不明であるが、口縁端部に平坦面をもち、体部から口縁部にかけて直線的に延びる形状を取ると見られる。280 は外面にタタキ目が残る、片口の捏鉢である。281 ～ 283 は須恵器甕である。284 は黒色土器Ａ類の椀である。285 は瓦器に分類した。286 ～ 289 は土師質土器杯である。287・288 を見る限り、底部はやや平底気味であるが、体部との境はなだらかで丸みを帯びる。290 ～ 297 は土師質土器小皿である。底部と体部の境に明確な稜線を持つ 290・291・294・296 と、ややなだらかに変化する 292・293・295 が見られる。いずれも底部切り離しはヘラ切りにより、未調整のままである。298 は脚台付の土師質土器小皿に分類した。299 は土師質土器土鍋に分類した。



第 83 図　SDd006 ～ 027 断面図（1/40）

以上の点から、当遺構は 12 世紀第 4 四半期頃のものであると考える。

SDd007（第 83・85 図）

G 地区西辺中央付近で検出した東西方向の溝状遺構である。検出長は約 5.00 m を測るが、西から 4.00 m のところで北へクランクする。断面形状は逆台形を呈し、幅は約 0.45 m、深さは約 0.15 m を測る。主軸方位は N-13° - E を測る。

出土遺物はわずかで小片が多い。300 は須恵器椀、301 は土師質土器小皿である。共に小片のため、詳細な時期は不明である。

SDd008（第 83・85 図）

G 地区西辺中央付近で検出した東西方向の溝状遺構である。検出長は約 8.05 m を測り、西端は G 地区西壁外へ延びるため不明である。比較的一直線に掘削された溝であるが、東端は突然消える。断面形状は浅い皿状を呈し、幅は約 0.50 ～ 1.00 m、深さは約 0.25 m を測る。主軸方位 N-11° - E を測る。埋土は灰色系の粗砂混じり粘性細砂を主体とする。

出土遺物は若干出土しているが小片が多い。302 ～ 305 は須恵器椀に分類した。306・307 は土師質土器杯である。308・309 は土師質土器小皿である。詳細な時期は判別しにくい。

SDd009（第 83 図）

G 地区西半中央部で検出した東西方向の溝状遺構である。検出長は約 2.00 m を測る。断面形状は浅い皿状を呈し、幅は約 0.60 m、深さは約 0.01 m を測る。SDd001 東側分岐溝の南端に近接する。

出土遺物は無く、帰属時期は不明である。

SDd010・011（第 83 図）

G 地区北西部で検出した遺構である。いずれも遺存状況は不良で、大半が試掘トレンチ掘削時に削平され、東端がわずかに窪みとして残る程度である。幅 0.20 m、深さ 0.04 ～ 0.05 m を測る。

出土遺物は無く、帰属時期は不明である。

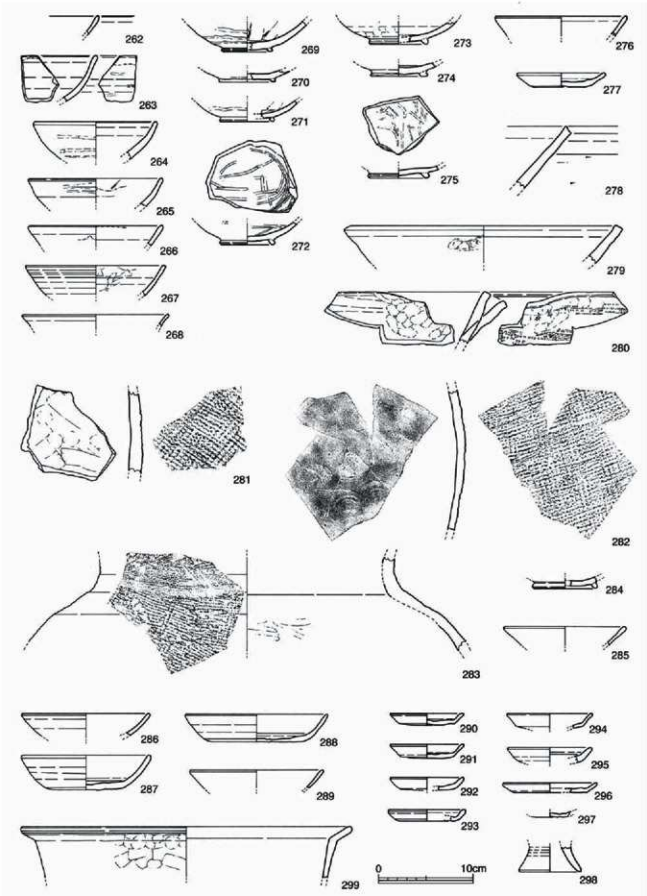
SDd012（第 83 図）

G 地区北西部で検出した南北方向の溝状遺構である。検出長は約 7.00 m を測る。断面形状は浅い皿状を呈し、幅は約 0.50 m、深さは約 0.06 m を測る。主軸方位 N-18° - E を測る。北端は西へ向けて緩やかに湾曲し、SDd006 と重複して途切れる。南端もほぼ同様に西へ緩やかに湾曲し、SKd09 と重複する辺りで途切れる。

出土遺物は無く、帰属時期は不明である。

SDd013（第 83 図）

G 地区西半中央部で検出した南北方向の溝状遺構である。検出長は約 5.00 m を測る。断面形状は浅い皿状を呈し、幅は約 0.45 m、深さは約 0.01 m を測る。主軸方位 N-22° - E を測る。



第 84 図　SDd006 出土遺物（1/4）

出土遺物は無く、帰属時期は不明である。

SDd014（第 83・85 図）

G 地区西半中央部で検出した南北方向の溝状遺構である。検出長は約 6.00 m を測る。断面形状は浅い皿状を呈し、幅は約 0.20 ～ 0.40 m、深さは約 0.01 ～ 0.04 m を測る。主軸方位 N-15° - E を測る。南端で SXd01 に切られて重複する。

遺物は少量出土したが、小片が中心である。310・311 は須恵器椀である。311 は平底の底部から内湾気味に立ち上がる体部を持つ。底部外面のやや中心に寄った位置に、断面方形の径の小さい高台が直立気味に張り付く。312 は土師質土器小皿である。

SDd015（第 83・85 図）

G 地区西辺中央部で検出した東西方向の溝状遺構である。検出長は約 10.0 m を測る。断面形状は浅い皿状を呈し、幅は約 0.35 ～ 0.90 m、深さは約 0.10 m を測る。西へ行くにつれ細くなり、調査区外へ延びるようである。東端はほぼ直角にクランクするが、約 2.00 m で途切れる。

遺物は極わずかに出土したが、小片が中心である。313 は土師質土器椀、314 は白磁皿に分類した。

SDd016（第 83 図）

G 地区西辺中央部、SDd015 の南側で検出した東西方向の溝状遺構である。検出長は約 1.50 m を測る。断面形状は浅い皿状を呈し、幅は約 0.45 m、深さは約 0.08 m を測る。出土遺物は認められない。

SDd017 ～ 027（第 83 図）

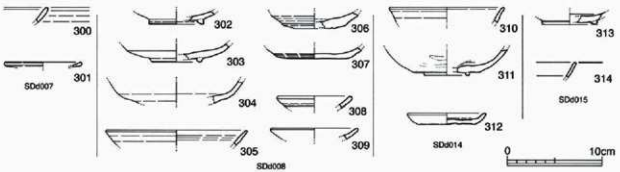
G 地区西半南部で検出した溝群である。途切れ途切れになっているが、本来的には一条の溝であった可能性がある。すべて連続するものとしてみた場合、概ね西へ向けて流下するものと見られるが、SDd020 付近でやや蛇行する。SDd027 以東に SRd01 の一部として捉えた枝溝のようなものが見えるが、これに接続していた可能性がある。また、SAd01 や SRd01 と方向を同じくする傾向にあることから、これらは本来同一のものであった可能性も考えられる。幅は約 0.10 ～ 0.90 m、深さは 0.01 ～ 0.10 m とバラつきがある。出土遺物は認められない。

SDd029（第 83 図）

G 地区中央南寄りで検出した東西方向の溝状遺構である。断面形状は浅い皿状を呈し、検出長は約 1.00 m、深さは 0.01 m である。SDd028 に切られており、これに先行する遺構であるが、出土遺物が見られず、時期については不明である。

SDd030（第 86 図）

G 地区中央南寄りで検出した方形区画をなす溝状遺構である。平面形は長辺約 5.00 m、短辺約 3.00 m の長方形を呈し、南方中央部と西方北側が開口する。断面形状は浅い皿状を呈し、溝の幅は約 0.25 m、深さは 0.01 ～ 0.02 m である。SDd028 に切られており、これに先行する遺構であるが、出土遺物が見られず、時期については不明である。



第 85 図　溝状遺構出土遺物（1/4）

SDd031（第 86・第 87 図）

G 地区南辺中央やや東寄りで検出した溝状遺構である。SRd01 の上層に削られており、検出できたのは約 7.00 m の長さである。断面形状は浅い皿状を呈し、幅 0.40 m、深さ約 0.10 m である。埋土は上層が暗褐色系の粗砂混じり粘性極細砂、下層は同系色の礫混じり粘性細砂である。SRd01 に沿うように流れるが、同流路上層では古代末から中世にかけての遺物が出土したのに対し、SDd031 からは第 87 図に掲載したように、古墳時代終末のものと考えられる須恵器ばかりがややまとまって出土した。315・316 は古墳時代タイプの蓋杯の身である。共に立ち上がりが外反し、短く立ち上がる。317 は無蓋の杯あるいは返りの付く蓋を持つ杯である。底部外面を手持ちヘラ削りにより調整する。318・319 は蓋である。320 は小片のため不明瞭であるが、台付椀の脚部と判断した。以上の状況から見て、7 世紀中頃～終わり頃までの遺構であると考える。

SDd033（第 86・第 87 図）

G 地区南東隅で検出した南北方向の溝状遺構である。断面形状は不整形な椀状を呈し、検出長は約 15.0 m を測る。幅は約 0.25 ～ 0.90 m で南から北へ徐々に広くなり、深さは最深部で約 0.20 m を測る。南から約 15 m の辺りで緩やかに北北東へ湾曲する。

出土遺物は少量出土しているが、図化しうるものはわずかに弥生土器片が出土している程度である。321 は壺底部、322 は甕底部である。共に摩滅がやや著しい。弥生時代後期頃のものと考えられる。

SDd034（第 86 図）

G 地区南東隅で検出した南北方向の溝状遺構である。断面形状は椀状を呈し、検出長は約 5.40 m を測る。幅は約 0.25 m、深さは最深部で約 0.12 m を測る。平面形状は弱い蛇行を繰り返す。出土遺物は認められない。

SDd035（第 86 図）

G 地区南東隅で検出した東西方向の溝状遺構である。検出長は約 14.2 m を測る。東端は G 地区東壁に、南岸は南壁にそれぞれ潜り込んで途切れ、全体の状況は不明である。主軸方位は N -20° - E を測る。断面形状は浅い皿状を呈するものと考えられる。検出幅は最大で約 4.60 m、深さは最深部で約 0.36 m を測る。東半部はやや広くなる傾向にあり、底部は浅い皿状に窪むが、西へ行くと上層部は緩やかな肩を

持つが、下層部では箱型に近い形状になる。土層断面を観察すると、浅い皿状の断面を箱型の断面が切るように堆積しており、最低1回の掘り直しが行われたものと考えられる。また、東壁の土層を観察すると、溝の芯が西から直線的に延ばした位置と、調査区の南東隅の2箇所に分かれることが判明した。これは、当初東側から直角にクランクしたのち西へ延びていた溝が、ある段階でやや南から斜めに掘られた結果であると考えられる。これは、隣接する現行の用水路の流れ方と比較しても矛盾しない。現行の水路の前身であると考えられる。なお、当遺構はSKd27に切られるほか、SBd12の南側庇部柱列を切ることから、SKd27よりも古くSBd12よりも新しい。出土遺物は小片が中心で、図示に耐えうるものは認められない。

SDd037・038（第86図）

H地区北辺西半中央付近で検出した東西方向の溝状遺構である。検出長は前者が約1.00 m、後者が約0.60 m、幅は約0.20～0.30 mである。断面形状は浅い皿状を呈し、深さはSDd037が最深部で約0.06 m、SDd038で約0.01 mを測る。出土遺物は認められない。

SDd039（第86図）

H地区西半中央の北東寄り付近で検出した東西方向の溝状遺構である。検出長は約5.10 mを測る。断面形状は浅い皿状を呈し、幅は約0.80 m、深さは約0.01 mを測る。主軸方位はN -18° - Eを測る。

出土遺物はわずかに認められる。323は須恵器杯、324は須恵器高杯脚部である。共に小片であり、全体の形状は不明である。

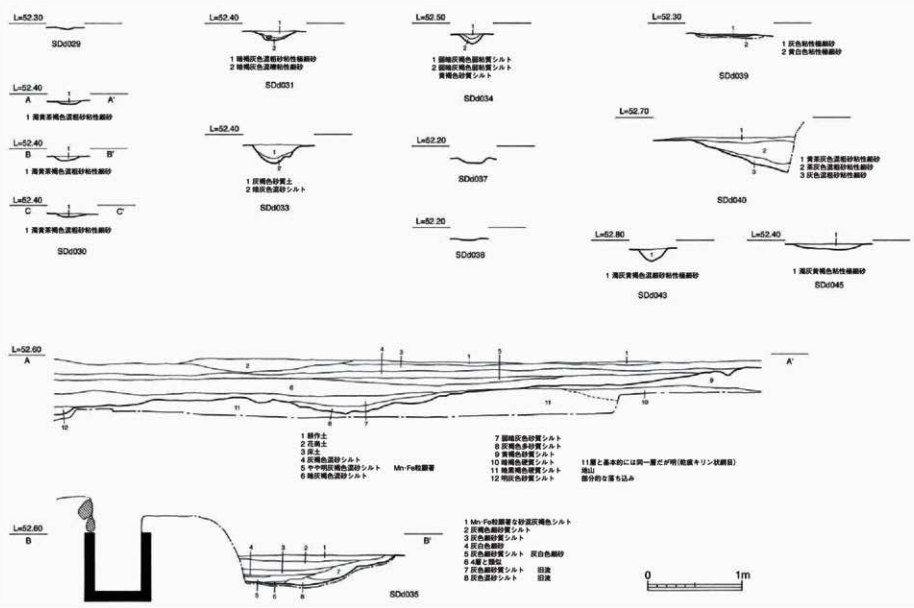
SDd040（第86・87図）

H地区北東隅で検出した南北方向の溝状遺構である。大半が調査区外へ延びるため詳細は不明であるが、検出長は約5.10 m、断面形状は浅い皿状を呈するものと考えられる。主軸方位はN -10° - Eを測る。検出幅は約0.80 m、深さは約0.38 mを測る。位置関係から見ると先述したSDd035に直交する溝となる可能性が想定できる。

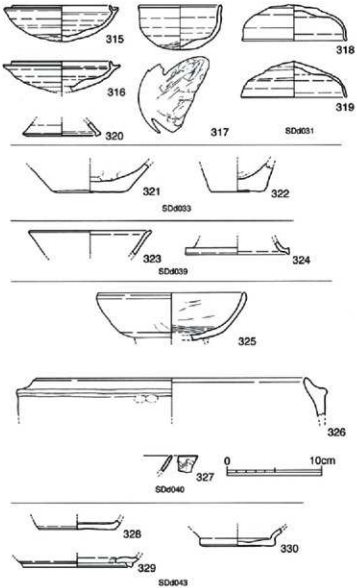
出土遺物は小片が中心であるが、若干量認められる。325は黒色土器A類椀である。底部を欠くため、全体の形状は不明であるが、やや内湾気味の体部を持ち、口縁端部がやや薄くなる形状を取る。口縁直下5㎜程のところに稜線をなす。底部と体部の境付近にも稜をなし、内面にはヘラミガキが認められる。326は土師質土器土釜である。327は青磁椀である。小片であるが、外面に蓮弁文が認められる。13世紀初頭～前半期頃に位置づけられると考えられる。

SDd041（第88図～第92図）

H地区からd地区にかけて検出した東西方向の溝状遺構である。SDd042・044と平行する位置にある。若干分断されるが、検出長は約138 mを測る。主軸方位はN -16° - Eを測る。断面形状は浅い皿状を呈する場所が多い。H地区内での検出幅は約0.60～1.00 mであるが、東側のd地区では約1.60～3.20 mと幅が広がる。深さは約0.01～0.36 mを測る。西端はH地区西壁直前で途切れるが、東端は後述するSDd046と重複する。d地区では最上層に地山の掘削土と見られる濁黄色混粗砂粘質土が堆積しており、人為的な埋め戻しが想定できる。この埋め戻し土はSDd046との交点西側で途切れて無くなり、交



第 86 図　溝状遺構断面図（1/40）



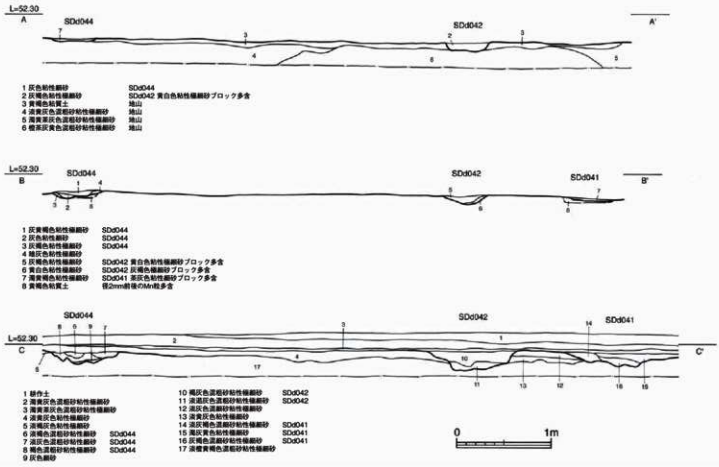
第87図　溝状遺構出土遺物（1/4）

点部では両者の埋土は見分けがつきにくい状況であった。SDd046の東側にSDd041が延びる様子は窺えないことからSDd046から分岐する溝であると考えられる。その他の埋土は概ね灰色系の粗砂混じり粘性極細砂である。平行するSDd042・044との関係は最も土層の観察がしやすいd地区西壁部（第28図W－W´断面）で見ると、SDd041が最も新しく掘削されたものと考えられる。ここではSDd042との関係が不明であるが、H地区西半中央付近で観察した土層（第91図W－W'断面）で見る限り、差は無いものと考えられる。また、SDd044は同断面で観察すると、SDd041・042よりも古い遺構と判断できる。

出土遺物はやや多い。331～340はd地区で検出した範囲からの出土遺物である。331～333は上層出土遺物である。334～340は下層出土遺物である。334～336は黒色土器椀である。いずれも小片であることから詳しい形状は不明であるが、内外面の調整にヘラミガキが施される。器形はやや深い形状と想定できる。337は須恵器高杯脚部である。混入したものであろう。338は土師質土器杯である。やや平底気味の底部と直線的に斜め上方へ延びる体部との境に明瞭な稜線をなす。339は白磁椀、340は青白磁合子蓋である。341～362は各調査区出土遺物である。341～343は黒色土器椀、344は黒色土器小皿である。345・346は須恵器杯である。347は須恵器杯蓋である。348は須恵器鉄鉢型土器である。349・350は土師器椀の底部である。351・352は土師質土器椀、353は土師質土器皿に分類した。354～361は土師質土器小皿である。362は土師質土器土鍋に分類した。いずれも小片が中心であることから詳細な時期を決めるだけの根拠に乏しいが、338・340などから概ね13世紀代のものと考える。

SDd042（第88～92図）

H地区中央部を東西方向に横断する溝状遺構である。SDd041・044と平行する位置にある。検出長は約74mを測る。主軸方位はN-16°-Eを測る。断面形状は浅い皿状を呈する場所が多い。幅は約0.40



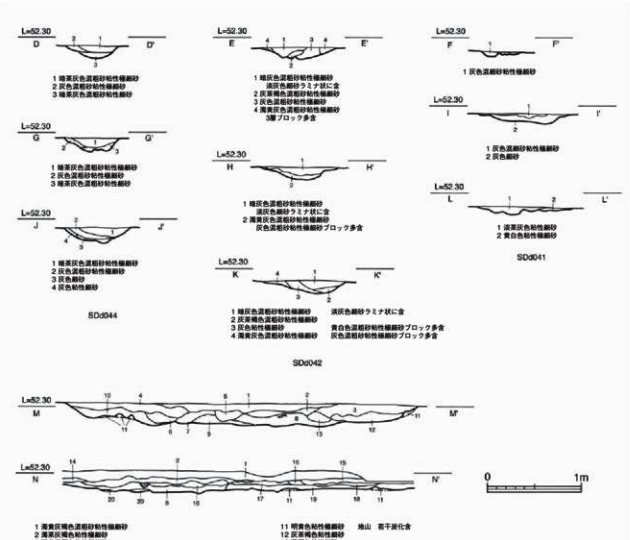
第88図　SDd041・042・044断面図（1）（1/40）

～1.30 m、深さは約 0.08 ～ 0.22 mを測る。西端はH地区西壁直前で途切れ、東端はF 17 区に入ると途切れる。埋土は概ね２層前後に分かれ、上層に茶灰色系の粘性極細砂が堆積する傾向にある。一方、下層は灰色系の粘性極細砂が堆積するが、地山ブロックと見られる黄白色系の粘性極細砂を多く含み、やや攪拌されたような状況を呈する。

出土遺物はあまり多くなく、小片が中心である。形状が把握できるものも限られ、わずかに 363 の瓦器椀がそれとわかる程度である。帰属時期は中世と考える。

SDd043（第 92 図）

d 地区中央部を東西方向に横断する溝状遺構である。検出長は約 18.2 mを測る。主軸方位はN -19° -Eを測る。断面形状は椀状を呈する場所が多い。幅は約 0.30 m、深さは最深部で約 0.12 mを測る。埋



第 89 図　SDd041・042・044 断面図（2）（1/40）

土は濁灰黄褐色混細砂粘性極細砂からなる。

出土遺物は若干出土しているが小片を中心とする。328 は須恵器杯、329 は須恵器高台付杯、330 は土師器円盤状高台付杯である。いずれも小片であることから全体の形状は不明である。遺構の帰属時期は 9 世紀頃か。

SDd044（第 88 ～ 92 図）

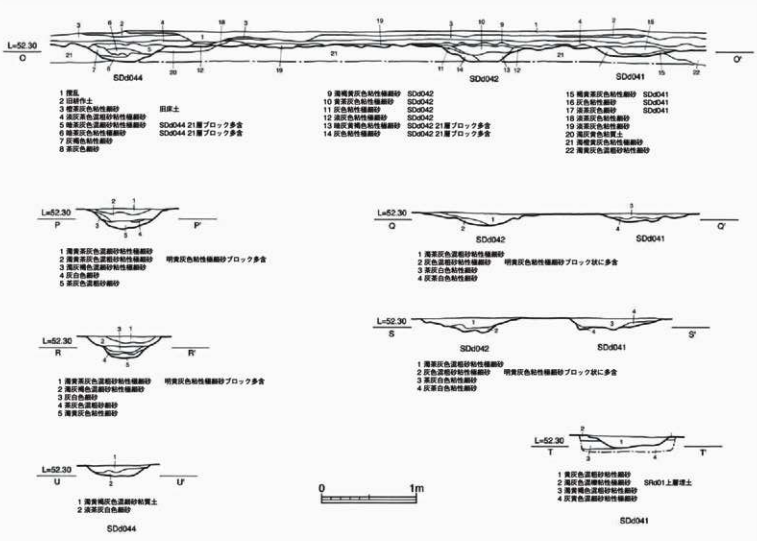
H 地区から d 地区にかけて中央部を東西方向に横断する溝状遺構である。検出長は約 133 m を測る。主軸方位は N -16° - E を測る。断面形状は浅い皿状を呈する場所が多い。幅は約 0.50 ～ 1.40 m、深さは約 0.02 ～ 0.24 m を測る。H 地区中央部では、長軸約 3.80 m、短軸約 3.00 m、深さ約 0.20 m を測る平面形アメーバ状の溜まり部を伴う。当初別遺構との重複関係を疑ったが、埋土が両者共通することから、SDd044 の範疇に含めた。西端は H 地区西壁直前で途切れるが、東端は後述する SDd046 と重複する。SDd046 の上層埋土が SDd044 に被ることから、SDd046 に先行する遺構であると判断できる。この溝は、次年度以降の報告となるが SDd046 以東へ延びることが確認出来ており、これを含めると総延長は約 180 m を測る。

出土遺物はあまり多くなく、小片が主体である。364 は上層で検出した須恵器高台付杯である。365 は黒色土器椀、366 ～ 368 は須恵器杯、369 は須恵器平瓶の把手である。367 は古墳時代終末頃のもので、混入したものと考えられる。遺構の時期は、概ね 10 世紀頃のものと考えられるが、後述する SRd01 の遺物が巻き上げられて混入している可能性もある。

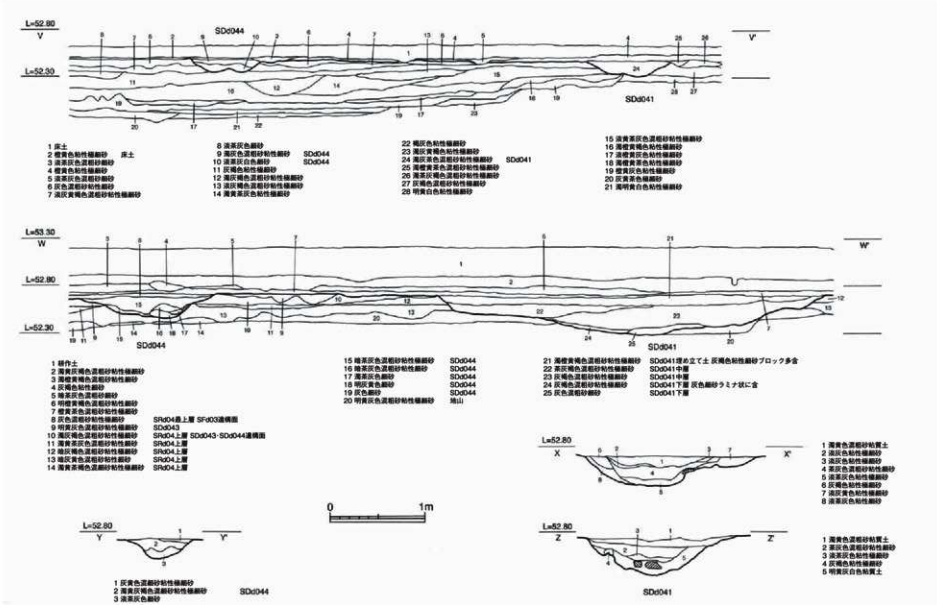
SDd046 ～ 048（第 93 ～ 100 図）

d 地区の東端から d 地区中央やや西寄りを南北方向に縦断する溝状遺構である。検出長は約 132.4 m を測り、主軸方位は N -10° - E を測るが、北端付近で弱く屈曲し北北西方向へ軸の向きを変える。この溝は d 地区以南から延びてきており、その端部は次年度以降に報告が予定されている E 地区 E 10 区にある。ここから、d 地区北端までの SDd046 の総延長は約 236 m を測る。断面形状は浅い皿状ないしは椀状を呈する場所が多く、幅は約 2.90 ～ 4.10 m、深さは約 0.22 ～ 0.60 m を測る。埋土は概ね 2 ～ 3 層に大別できる場所が多く、いずれも黄灰色系の粘性極細砂からなる。下層はやや砂質が強くなる傾向が見られるほか、北側ではやや鉄分を多く含む傾向がある。一方、南端付近では灰色～茶灰色系の粘性細砂が主体となるが、これは、特にこの付近では地山が黄褐色系の粘質土ではなく、濁黄茶褐色の礫混じり粗砂となることに起因すると見られる。d 地区北端及び南半部で溝状遺構の切り合いや派生が見られる。北端での遺構の重複関係は東から延びてくる SDd052 は SDd046 によって切られ、これより西へは続かない。また、SDd047・048 は SDd046 から派生する溝である。北北西へ進路を変える屈曲部から北へ約 5 m のところから派生する。B － B ′ 間の埋土の状況から見ると SDd046 中層と下層の間の埋土が SDd047・048 の埋土として共通する。この SDd047・048 と SDd046 の交点付近では、SDd046 の中場肩部を中心に礫の集積が認められる（第 97 図）。その密度は SDd046・047 の分岐点を中心に濃く分布しており、検出レベルも概ね揃うことから、ここへ意図的に集積したものと考えられる。この礫を集積することにより、井関としての機能を持たせ、SDd046 内でダムアップした水を SDd047・048 へ配水した可能性が想定できる。

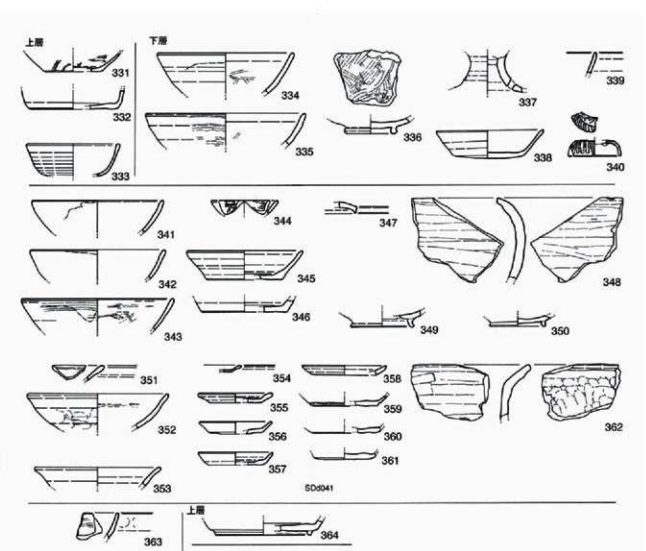
出土遺物は比較的多量に出土しているが、小片が主体である。形状がある程度復元可能なものについ



第 90 図　SDd041・042・044 断面図（3）（1/40）

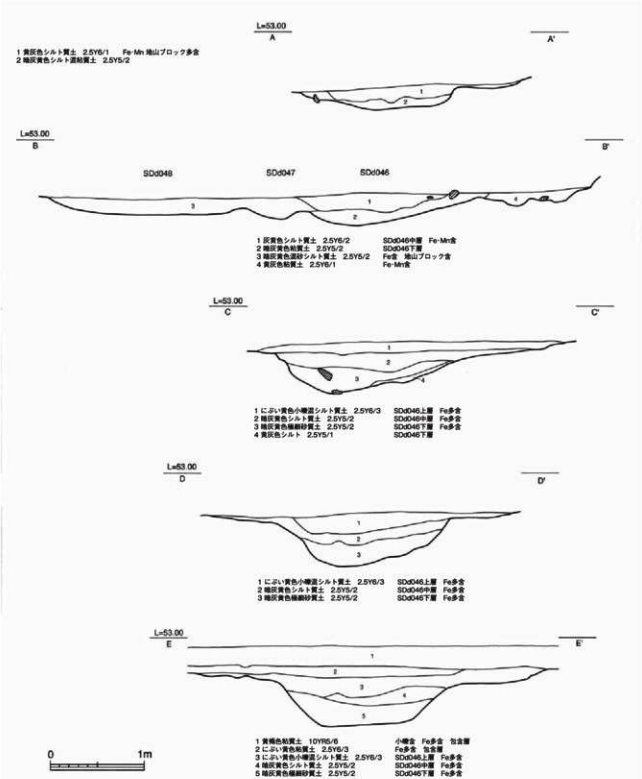


第 91 図　SDd041・042・044 断面図（4）（1/40）

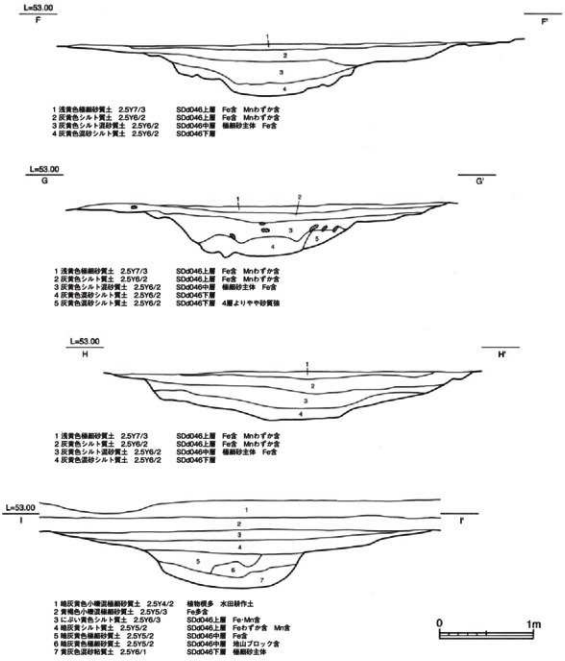


第92図　SDd041・042・044出土遺物（1/4）

て図化した。370～390は上層出土遺物として取り上げたものである。370は須恵器椀である。371～377は須恵器杯に分類した。378･379は須恵器蓋である。380は須恵器捏鉢である。381は須恵器甕である。382～384は土師質土器小皿である。法量が7cm未満のものに限られる。382・384は底部切り離しが回転ヘラ切りによるが、383は糸切りによる切り離しが行われる。また、384は底部外面及び内面見込み共に回転ヘラ切りの痕跡を認める。粘土塊から成形した小皿を切り離した後、切り離し痕を特に成形することなく、次の個体の成形にかかったことを窺わせるものである。385～387は土師質土器土釜である。388は土製イイダコ壺である。海面漁業に関連する資料が直線距離で約10kmの内陸部で出土している点は興味深い。391～403は中層出土遺物として取り上げたものである。391は黒色土器椀である。392・393は須恵器椀である。394は須恵器杯、395は須恵器高台付杯である。396は須恵器蓋、397は須恵器皿である。398～400は土師質土器杯、401は土師質土器小皿である。小皿は上層のものに比べるとや

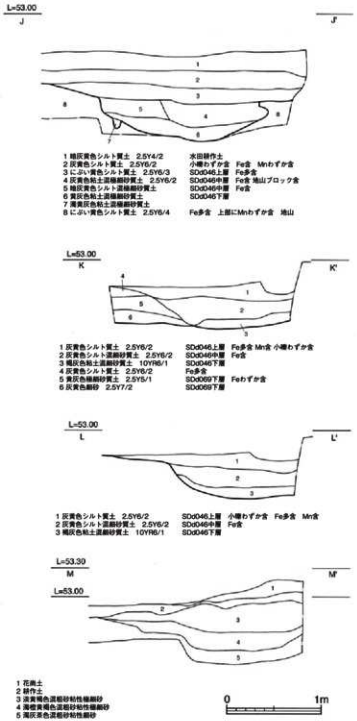


第 93 図　SDd046 断面図（1）(1/40)



第 94 図　SDd046 断面図（2）（1/40）

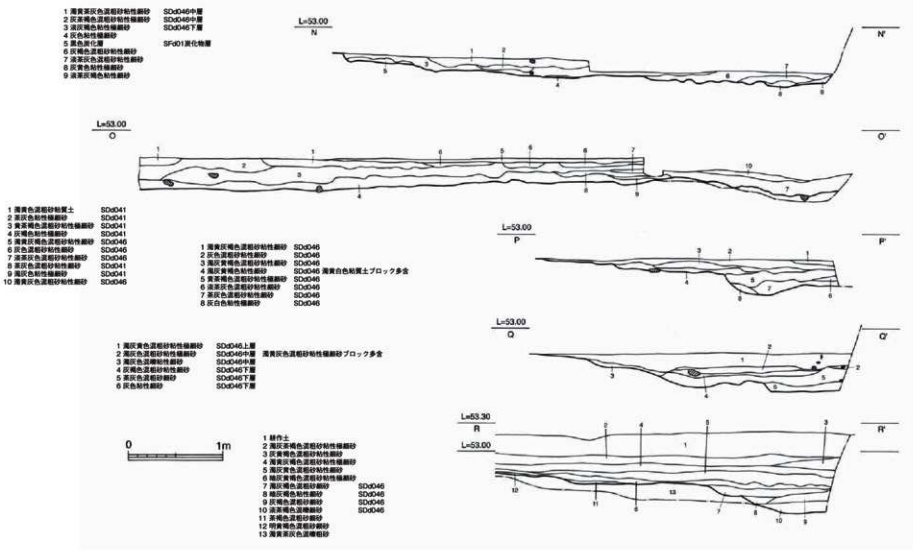
や大振りである。402 は土製管状土錘である。403 は平瓦の小片である。404 は青磁椀である。405 ～ 407 は北半集石部の下から出土したものである。405 は土師質土器土釜、406・407 は土師質土器土鍋である。408 ～ 430 は下層出土遺物として取り上げたものである。408 は黒色土器椀である。409 ～ 412 は須恵器椀である。413 ～ 415 は須恵器杯である。416 は須恵器壷、417 は須恵器皿である。418 は須恵器捏鉢、419･420 は須恵器甕である。421 は土師器椀、422 は土師質土器椀、423 ～ 428 は土師質土器杯、429 は土師質土器小皿、430 は瓦器椀に分類した。431 は底部出土遺物として取り上げた須恵器椀である。432 ～ 438 は出土層位、位置共に不明な遺物である。432・433 は須恵器杯である。434 は須恵器捏鉢、



第 95 図　SDd046 断面図（3）（1/40）

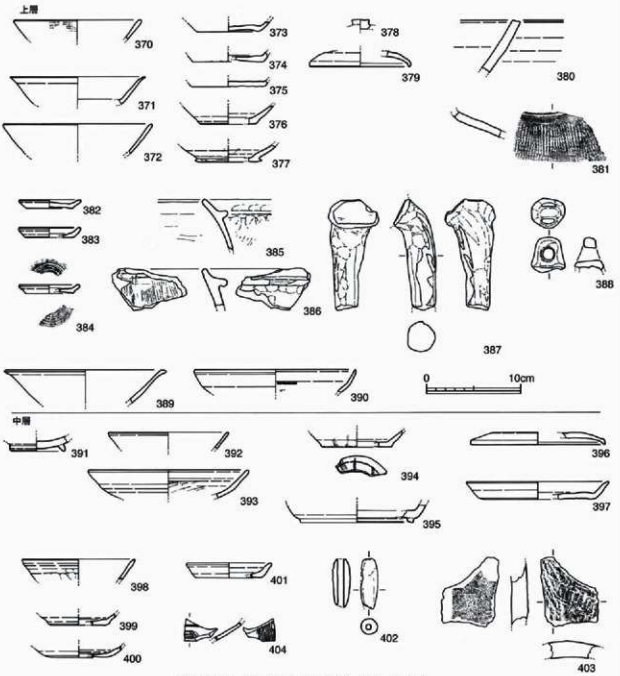
435 ～ 438 は須恵器甕である。439･440 は土師質土器杯に分類した。441･442 は土師質土器土釜脚部片、443 は平瓦の小片である。なお、438 は d 地区で出土したものであるが、上層出土遺物と下層出土遺物が接合したものであり、部分的に攪拌されている可能性が想定できる。

444・445 は SDd047 出土遺物である。444 は須恵器高台付杯、445 は須恵器蓋である。



第 96 図　SDd046 断面図（4）（1/40）

第 97 図　SDd046 遺物出土状況（1/40）

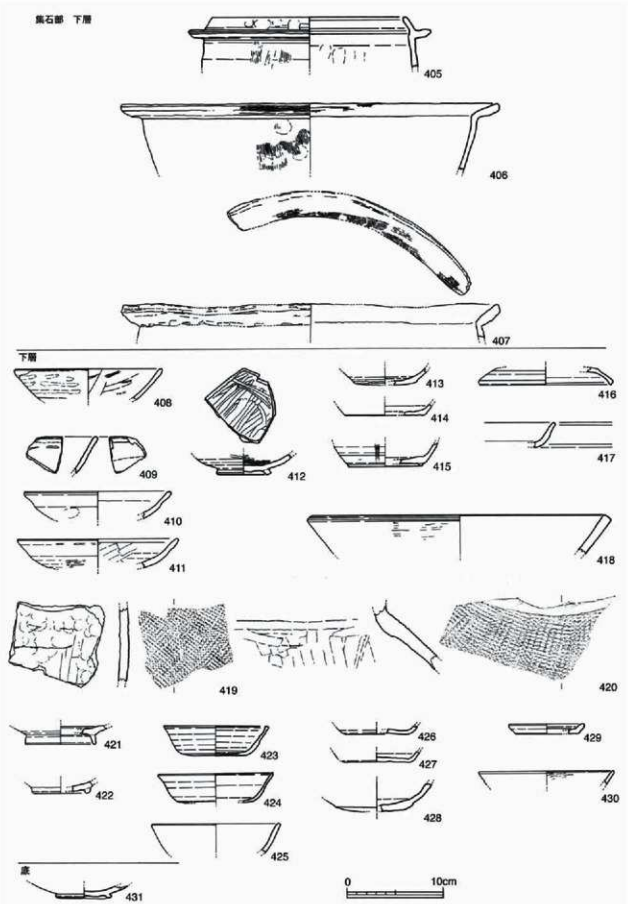


第 98 図　SDd046 出土遺物（1）（1/4）

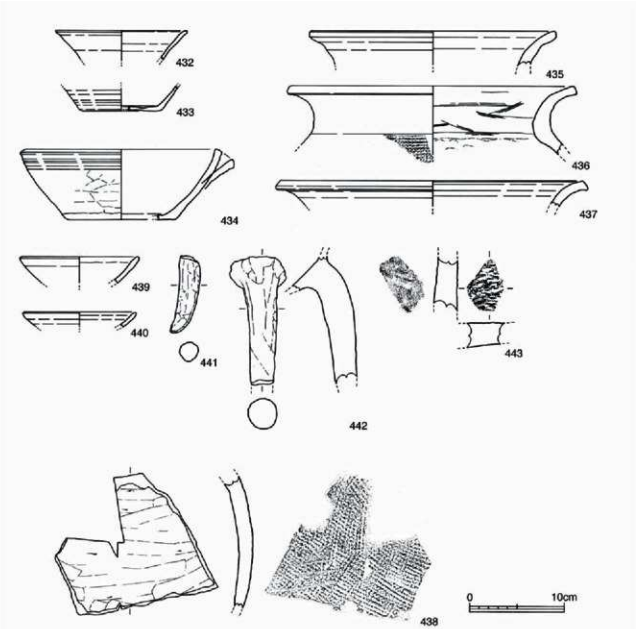
いずれの出土資料も帰属時期を決めるにはやや貧弱ではあるが、大半は概ね 13 世紀前半頃のものと考える。

SDd049・050（第 101 図）

d 地区北端部で検出した溝状遺構で、重複関係から SDd046 に先行するものであることがわかる。また、C－C ′ 断面の観察結果から、SDd050 が先行して掘削され、その後 SDd049 が掘削されたものと判断した。溝の規模は SDd050 が幅約 0.50 m、SDd049 が約 0.35 ～ 0.50 m を測る。断面形状は概ね椀



第99図　SDd046出土遺物（2）（1/4）



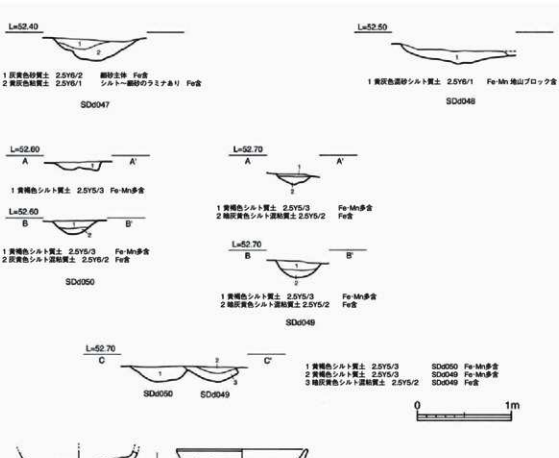
第100図　SDd046出土遺物（3）（1/4）

状を呈し、深さは約0.08～0.18 mを測る。切り合いの観察結果からは、さらにその後SDd046が掘削されたものと考えられるが、先述したSDd047・048との交点同様、SDd049・050とSDd046との交点にも礫の集積が認められる。これもSDd046から水を導くための施設として機能していた可能性が考えられる。

出土遺物はあまり多くはない。形状が把握できるものはSDd049出土の土師質土器杯（第101図446）程度である。底部外面に板状圧痕が認められる。

SDd051（第102図）

d地区北端で検出した東南東から西北西へと延びる溝状遺構である。検出長は約4.50 mを測り、幅は約0.65 m、深さは最深部で約0.13 mを測る。断面形状は浅い皿状を呈する。埋土は黄灰色シルト質



第 101 図　SDd047 ～ 050 断面図（1/40）、出土遺物（1/4）

土である。遺構の位置関係から見て後述する SDd083 の北端の可能性が想定できる。出土遺物は認められない。

SDd052（第 102 図）

d 地区北端で検出した東南東から西北西へと延びる溝状遺構である。検出長は約 13 m を測り、幅は約 0.55 ～ 1.10 m、深さは約 0.18 ～ 0.26 m を測る。断面形状は浅い箱状ないし椀状を呈する。埋土は黄灰色系のシルト質土を主体とし、上層で砂質土が認められる。遺構の位置関係から見て後述する SDd082 の北端の可能性が想定できる。

出土遺物は小片が主体であるが若干認められる。447 ～ 449 は出土層位不明遺物である。447 は古墳時代タイプの須恵器杯身、448 は土師質土器甕、449 は管状土錘である。450 ～ 453 は上層出土遺物として取り上げたものである。450・451 は須恵器杯、452 は須恵器甕、453 は緑釉陶器皿である。453 は淡灰色でやや硬質な胎土を持ち、淡緑色の釉がほぼ全面にかかる。器壁に近い部分は一部酸化炎焼成気味の色を呈する。高台は削り出しによって作り出され、断面形状は方形を呈する。内湾気味の体部を持

つが、口縁下1㎝ほどのところで弱い稜をなし、そこから口縁端部へ向けて外反する。これらの遺物から概ね10世紀頃の遺構であると考えられる。

SDd053（第102図）

d地区北半西寄りで検出した溝状遺構である。検出長は約13mを測るが、北から8mのところで「く」の字に折れ、西方へ延びる。幅は約0.50m、深さは最深部で約0.08mを測る。断面形状は浅い皿状を呈する。埋土は灰黄色シルト質土である。出土遺物は認められない。

SDd054・055（第102図）

d地区西壁中央付近で検出した溝状遺構である。検出長はSDd054が約8m、SDd055が10mを測り、幅は約0.30～0.50m、深さは約0.03～0.11mを測る。断面形状は浅い皿状ないし逆台形を呈する。埋土は共に暗灰黄色シルト質土である。出土遺物は認められない。

SDd056（第102図）

d地区北半東寄りで検出した東西方向の溝状遺構である。検出長は約4mを測り、幅は約0.38m、深さは最深部で約0.08mを測る。断面形状は浅い皿状を呈する。埋土は細・中砂を主体とする鈍い黄橙色砂質土である。

出土遺物はわずかに認められるが、図化に耐えうるものはほとんどない。454は弥生土器壷に分類した。

SDd057（第102図）

d地区北半東寄りで検出した東西方向の溝状遺構である。検出長は約5.20mを測り、幅は約0.32～1.50m、深さは約0.08～0.10mを測る。断面形状は浅い皿状を呈する。埋土は暗灰黄色の砂質土ないし粘質土である。

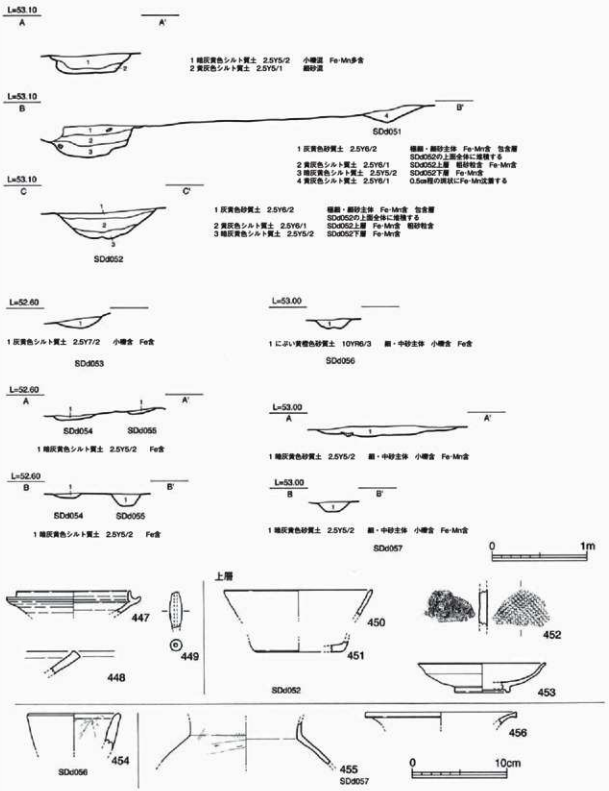
出土遺物は小片が主体であるが若干認められる。455・456は弥生土器である。概ね後期頃のものと考えられる。

SDd058（第103図）

d地区中央部やや南寄りで検出した東西方向の溝状遺構である。検出長は約2.80mを測り、幅は約0.19mを測る。深さは約0.04mを測る。断面形状は浅い皿状を呈する。埋土はにぶい黄色粘質土である。SDd046の埋没後に掘削されたものだが、出土遺物が認められず、詳細な帰属時期は不明である。

SDd59（第103図）

d地区南半中央部で検出した東西方向の溝状遺構である。検出長は中間で約7m分断される場所があるが、全長は約18mを測り、幅は約0.23～0.36mを測る。深さは約0.03～0.13mを測る。断面形状は浅い皿状ないし椀状を呈する。埋土は黄灰色ないし灰黄色のシルト質土である。分断部にはSDd046があるが、現状での切り合いは認められないため、前後関係は不明である。出土遺物は認められない。



第 102 図　SDd051 ～ 057 断面図（1/40）、出土遺物（1/4）

SDd60～67（第103図）

d地区南半中央部で検出した短い溝状遺構群である。東西方向に主軸を持つSDd060～062・065・066と南北方向に主軸を持つSDd063・064・067が認められる。全長は約0.60～2.40mを測り、幅は約0.12～0.50mを測る。深さは約0.02～0.20mを測る。断面形状は浅い皿状を呈するものが主体であるが、SDd063は断面方形状を呈する。埋土は灰黄色シルト質土がほとんどであるが、SDd062・063は灰白色シルト質土である。原則周辺の地割と概ね同一の主軸を持つが、SDd061・067は合致しない。出土遺物は認められない。

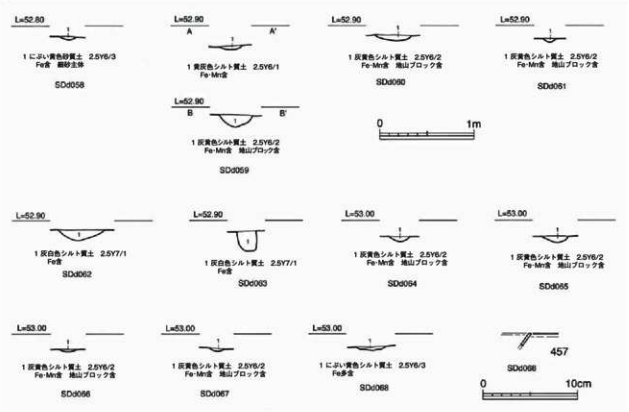
SDd068（第103図）

d地区南半中央付近で検出した東西方向の溝である。検出長は約4.00m、幅は0.31mを測る。深さは約0.03mを測る。断面形状は浅い皿状を呈し、埋土はにぶい黄色シルト質土である。

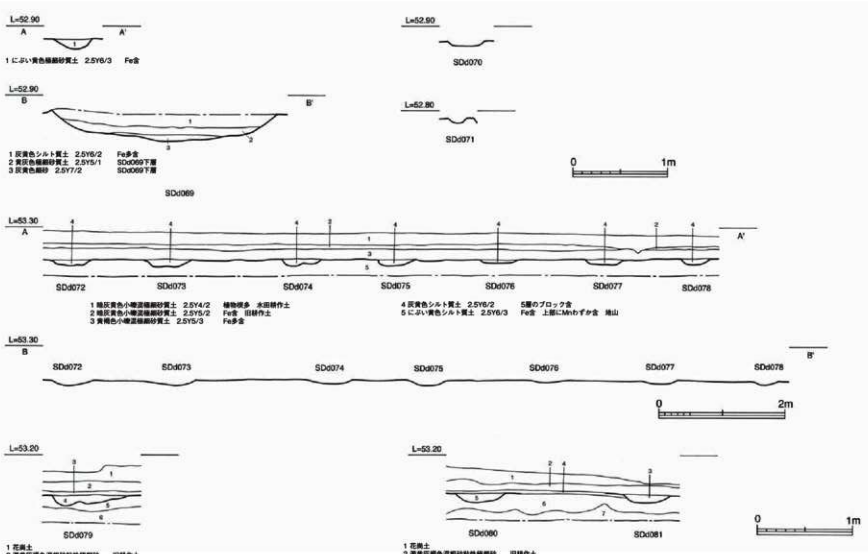
出土遺物はわずかに認められるが、小片である。457は瓦器椀の口縁部と判断した。

SDd069（第103・第105図）

d地区南西隅で検出した、東南東から西北西へと延びる溝状遺構である。検出長は約16.0mを測り、幅は約0.40～2.40mを測る。深さは約0.09～0.27mを測り、断面形状は浅い皿状を呈する。埋土は黄色系の細砂～シルト質土である。東端はSDd046と交わり、交点部の埋土の観察からSDd069の上・中層がSDd046の中・下層とほぼ共通するため、SDd069が先行して機能していたところへSDd046が掘



第103図　SDd058～068断面図（1/40）、出土遺物（1/4）



第 104 図　溝状遺構断面図（1/40･1/80）

削されて接合したか、SDd069 下層堆積後に SDd046 のみ掘り直しを行った可能性が想定できる。接合部から西へ２mのところで溝幅は一気に細くなる。溝幅の広い部分は、取水口としてやや広めに掘削された結果と見られる。西端は調査区北壁に潜り、その後どこへ延びるかは不明である。

出土遺物は少量認められるが、小片がほとんどである。458 は下層出土の須恵器杯である。459 ～ 462 は出土層位不明である。459･460 は須恵器杯である。461 は須恵器蓋である。462 は土師器杯である。概ね古代後半頃のものと考えられるが、詳細な時期は不明である。

SDd070・071（第 103 図）

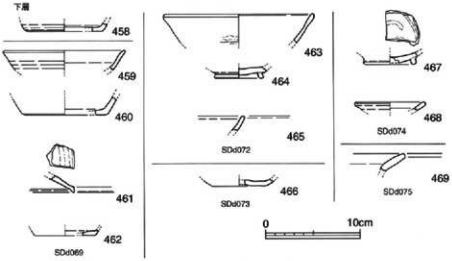
d 地区西辺南端付近で検出した東西方向と見られる溝状遺構である。検出長は約 0.80 ～ 1.60 m、幅は約 0.20 ～ 0.38 mを測る。断面形状は浅い皿状を呈し、深さは約 0.04 mである。

出土遺物は認められず、帰属時期は不明である。

SDd072 ～ 081（第 103・第 105 図）

d 地区南西部で検出した南北方向の溝状遺構である。主軸方位はN - 6°～ 10° - Eの振れ幅の中に納まる。検出長は調査区境などで分断されているが、概ね 30 m前後を測る。幅は約 0.30 ～ 0.50 mの間で納まり、深さは 0.02 ～ 0.10 mを測る。断面形状は浅い皿状を呈し、埋土は黄色系の礫混じり砂質土ないし粘性極細砂からなる。各溝の間隔が概ね約 0.80 ～ 1.20 mの間に納まり、比較的等間隔に掘削されることから鋤溝の可能性が想定できる。

出土遺物は小片を中心に若干量出土した。463 ～ 465 は SDd072 出土遺物である。463･464 は須恵器椀、465 は土師質土器杯である。466 は SDd073 出土の土師質土器杯である。467 ～ 469 は SDd075 出土遺物である。467 は須恵器椀、468 は土師質土器小皿、469 は土師質土器土鍋である。いずれも遺構の性格上、出土遺物が時期を示すとは考えにくいが、概ね 12 世紀代のものが出土していると考える。



第 105 図　SDd069・072 ～ 075 出土遺物（1/4）

SDd082（第107・第108図）

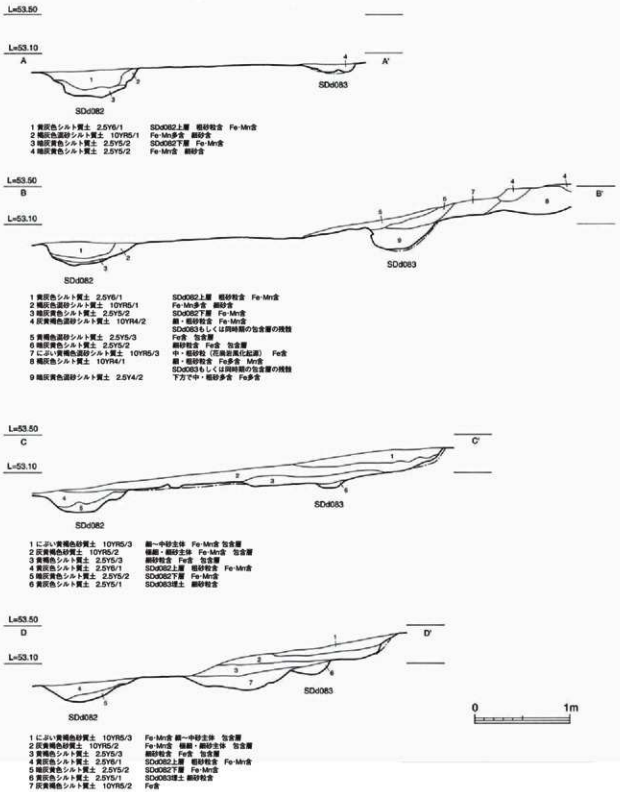
d地区東半をほぼ南北に流れる溝状遺構である。今回報告する部分では検出長約141mを測るが、C地区B17区（次年度以降報告）以南でさらに72m南まで続く総延長約213mの溝状遺構となる。今回報告部の南半は比較的直線的に掘削されており、主軸方位はN-15°-Eを測るが、北半付近で「く」の字に屈曲したのちやや蛇行しながら北北西方向へ延びる。この屈曲部で後述するSDd084の北端が途切れるが、本来的にはSDd082の屈曲部以北とSDd084は同一遺構であった可能性も想定できる。幅は約0.80～1.00mを測り、断面形状は浅い椀状ないし皿状を呈する。埋土は概ね2ないし3層からなり、黄色系・灰褐色系のシルト質土を主体とする。今年度報告対象地の範囲でSDd082底部の標高を各断面図で計測すると、最南端のF-F´断面の標高が最も高い約52.8m、最北端のA-A´断面で最も低い約52.6mを測る。間のB-B´～E-E´断面では約52.7m前後を計り、しばらくフラットな状態が続くものの、概ね南から北へと向けて導水するための溝として掘削されたものと考えられる。なお、遺構の位置関係から見て本遺構と先述したSDd052は同一遺構の可能性があり、底部の標高から見ても、東端で約52.55m、西端で約52.5mを測ることから、矛盾はないものと考えられる。SDd052を加えた場合のSDd082の検出長は約165m、総延長は237mとなる。

出土遺物は比較的多いものの、小片が中心である。470～480は上層出土遺物として取り上げたものである。470～473は須恵器高台付杯である。いずれも小片で詳細な形状が把握しにくいが、いずれも平坦な底部を持ち、体部との境に断面形状方形の短い高台が取り付く。470を見ると体部は直線的である。474は須恵器蓋、475は須恵器鉄鉢形土器、476は須恵器壺、477は須恵器甕にそれぞれ分類した。477は外面に五条の串描沈線文が認められる。478は土師器杯、479は土師器土鍋、480は平瓦にそれぞれ分類した。481～483は下層出土須恵器である。481は杯、482は壺、483は甕である。484～490は出土層位不明遺物である。484～486は須恵器杯、487は土師質土器杯、488は土師質土器小皿、489は土師質土器土鍋、490は平瓦である。484を除き、全体の形状は把握しにくい。485は口縁端部を若干肥厚させ、上方へやや摘み上げる。

SDd083（第107・第109図）

d地区東半をほぼ南北に流れる溝状遺構である。今回報告する部分は検出長約100mを測るが、南から延々と延びてきた溝状遺構で、『西末則遺跡Ⅰ』で報告されたSDa05に相当する遺構である。総延長は約300mを測る。幅は約0.60～2.00mを測り、断面形状は浅い皿状ないし椀状を呈するものが多い。ただし、南半部は上面の開いたV字状を呈するところも認められる。埋土は概ね2ないし3層からなり、灰黄色系のシルト質土を主体とする。最も遺存状態の良好なH-H´断面で観察すると、この層は下層埋土に相当し、上層に褐色・黒褐色のシルトないし粘質土層が、中層に褐灰色・暗褐色のシルト質土がそれぞれ堆積する。したがって、幅が狭く浅い溝として遺存している部分についても本来的にはH-H´断面で観察できるような大型の溝状遺構であったことが窺える。なお、H-H´断面の1層および5層は後世に掘削された柱穴の埋土である。

出土遺物は若干量出土しているが、小片が中心である。491～504は上層出土遺物として取り上げたものである。491～498は弥生土器である。491～494は壺である。491は広口壺で、頸部と体部の境に貼付突帯を施す。495～498は甕に分類した。概ね弥生時代後期頃のものと考えられる。499～503は古墳時代の須恵器である。499～501は蓋杯の身である。最大径14.5～16.0cmを測る。底部が遺存し



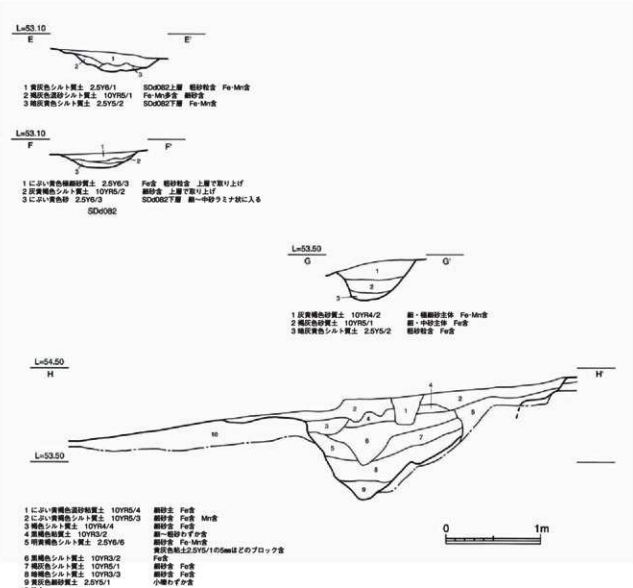
第106図　SDd082・083断面図（1）（1/40）

ていないため、全体の形状は不明である。受け部がやや直立する 499・500 とやや内傾する 501 に分類できる。502 は壺口縁あるいは平瓶などの口縁と見られる。503 は甕である。肩部の破片と見られるが、内外面の工具痕が顕著に残る。504 は土師質土器小皿である。これは混入したものと考えられる。土師質土器小皿を除くと、上層の堆積時期は概ね古墳時代後期後半頃と考えられる。

505 ～ 509 は中層出土遺物として取り上げたものである。中層以下から出土したものはいずれも弥生土器である。505 は壺、506 は甕、507 ～ 509 は高杯である。

510 ～ 514 は下層出土遺物として取り上げたものである。510 ～ 512 は壺、513 は甕、514 は台付甕と考えられる。また、515 ～ 522 は底部からの出土遺物である。515 ～ 520 は壺、521・522 は甕である。

523 ～ 529 は出土層位不明遺物である。523 ～ 526 は壺、527 は甕である。528 は小片であるため詳細は不明であるが、器台と考えられる。529 は白磁皿である。中層から底部にかけて出土した遺物はいず

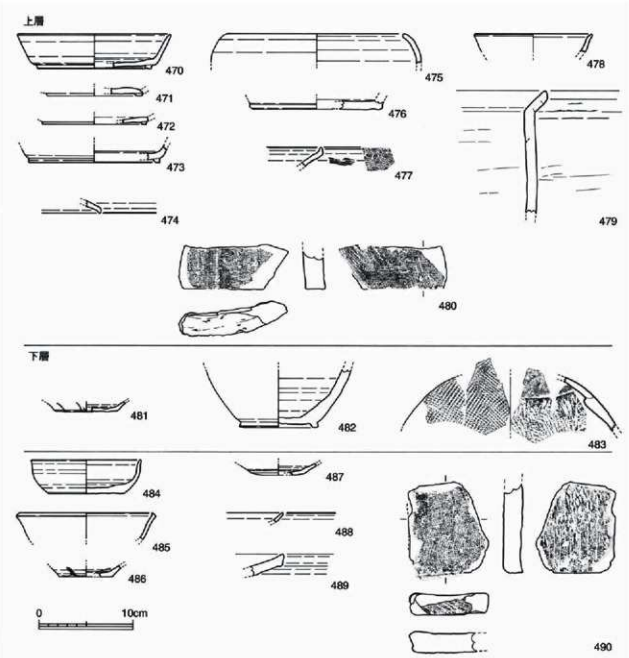


第 107 図　SDd082・083 断面図（2）（1/40）

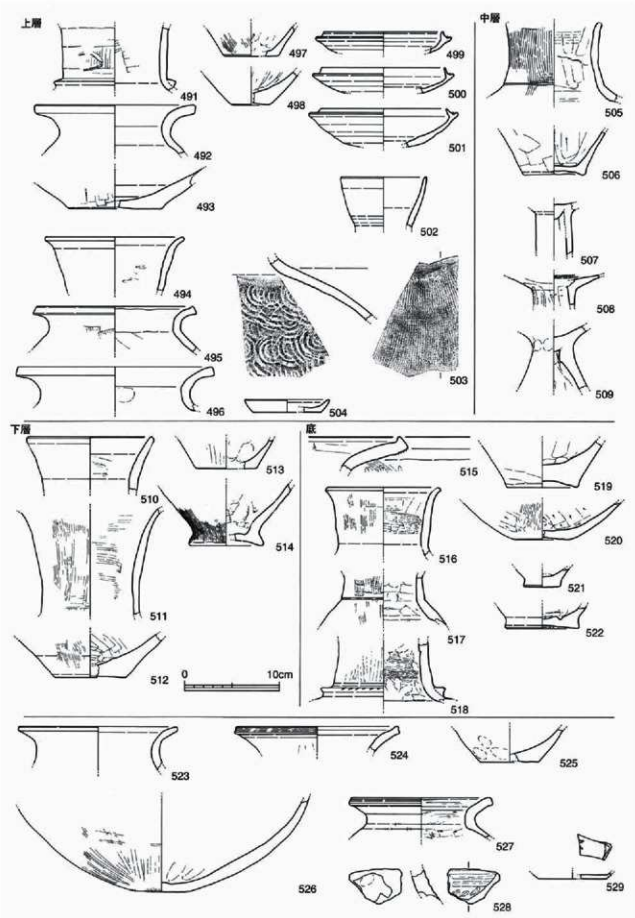
れも他の時期の混入が基本的に認められず、機能していた時期をある程度示すものと考える。しかし、南側で確認された遺物が量的に少ないものの完形に近い形で残るものが多いのに対し、今回対象地ではかなり細片化が進んでいるのが特徴である。想定される集落域が遺跡南東部の丘陵上に求められることを考えると、今回対象地はその集落域からやや外れた位置になると考えられる。出土遺物から見ると開削された時期は弥生時代後期末頃で、最終埋没が古墳時代後期後半頃と考えられる。

SDd084（第 110・第 111 図）

SDd082・083 に挟まれた位置で検出した溝状遺構である。今回報告する部分は検出長約 54.0 m を測るが、C 地区 B 17 区（次年度以降報告）以南で約 70 m 南へ延び、総延長は約 124 m を測る。幅は約 0.60



第 108 図　SDd082 出土遺物（1/4）



第 109 図　SDd083 出土遺物（1/4）

～2.00 mを測り、断面形状は浅い皿状ないし椀状を呈する。深さは約0.15～0.30 mを測る。

出土遺物は比較的多く出土している。530～537は上層出土遺物として取り上げたものである。530は須恵器椀である。中世のもので混入したものであろう。531は須恵器蓋杯の蓋である。古墳時代後期後半頃のものか。532・533は須恵器甕である。534・535は土師器甕、536は土師器甑の把手である。中央部に上方からの刺突による穿孔が認められる。538は中層出土の弥生土器広口壷である。539～545は下層出土遺物である。539は弥生土器壺である。540は須恵器椀である。中世後半頃のものが混入したものと考えられる。541は須恵器蓋杯の蓋である。542は須恵器高杯、543は破片のため詳細不明であるが提瓶に分類した。544・545は土師器甕である。546～554は出土層位不明遺物である。546は弥生土器壺、547・548は須恵器蓋杯の身である。小片のため全体の器形は不明であるが、受け部は短く、比較的直立する形状を取る。549・550は須恵器高台付杯である。いずれも破片であり、全体の形状は把握しにくいが、ほぼ完形に復元可能な549例を見ると平坦な底部からほぼ直立する体部を持ち、底部と体部の境付近に強く踏ん張ったやや低い高台が取り付く。550はやや高台が矮小化している感を受ける。551は須恵器杯蓋の摘みである。552は須恵器高杯の脚部である。長脚の形状をとり、二段の透かしとその間に2条の沈線が施される。透かしは形骸化しており、貫通させずに切り込みが施されるのみである。553は土師質土器小皿である。554は須恵器甕の口縁部である。外面に5条の串描波状文が2段に施される。

SDd085・086（第110図）

d地区南東部で検出した溝状遺構である。検出長はSDd085が約4.00 m、SDd086は約1.50 mである。SDd086はSDd085の中央付近から東へ派生するように取り付く。幅は共に約0.20 mを測る。断面形状は皿状を呈し、埋土は灰黄褐色の極細砂質土である。出土遺物は認められない。

SDd087（第110図）

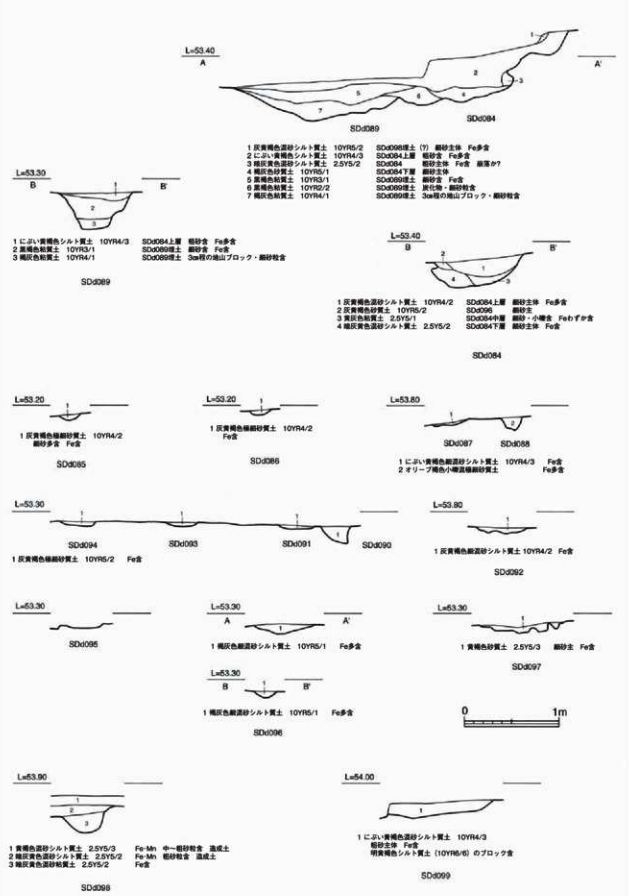
d地区南東部で検出した南北方向の溝状遺構である。検出長は約3.60 m、幅は0.30 mである。断面形状は浅い皿状を呈し、深さは約0.02 mを測る。埋土はにぶい黄褐色砂混じりシルト土である。出土遺物は認められない。

SDd088（第110図）

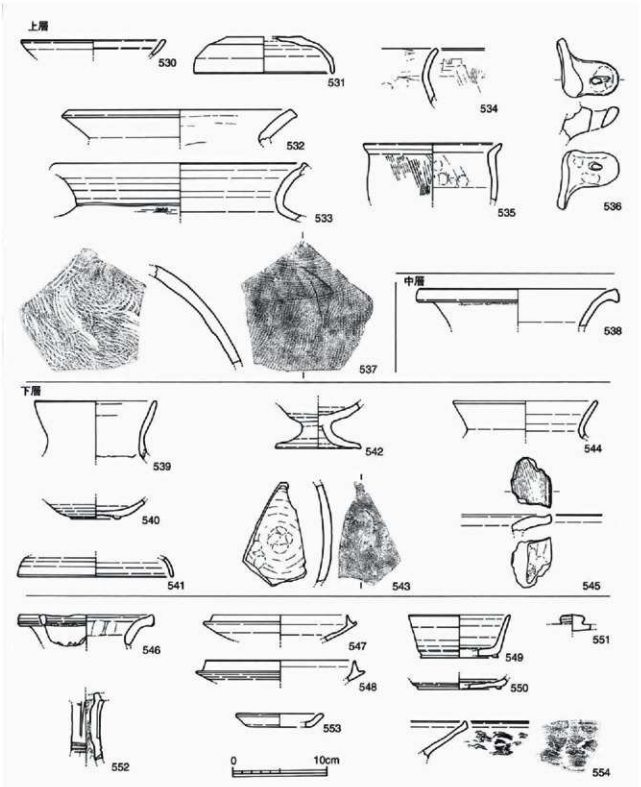
d地区南東部で検出した南北方向の溝状遺構である。検出長は約7.00 m、幅は約0.20 mである。断面形状は深い逆台形状を呈し、深さは約0.14 mを測る。埋土はオリーブ褐色礫混じり極細砂質土である。SDd083・084と接するが、共通する埋土が見られないためこれらに先行ないしは後出する遺構であると判断する。出土遺物は認められない。

SDd089（第110図）

d地区南東部で検出した東西方向の溝状遺構である。検出長は約2.80 m、幅は0.80 mである。断面形状は皿状を呈し、深さは最深部で約0.40 mを測る。埋土は3層からなり、黒褐色ないし褐灰色を呈する粘質土である。SDd084から概ね直角に派生するように見えるが、土層の観察からSDd084に先行するものである。



第 110 図　SDd084～099断面図（1/40）



第 111 図　SDd084 出土遺物（1/4）

出土遺物はなく、詳細な時期は不明である。

SDd090・091（第 110 図）

SDd089 の南側で検出した東西方向の溝状遺構である。検出長は約 1.20 ～ 1.30 m、幅は約 0.30 ～ 0.40 m、深さは SDd090 が約 0.18 m、SDd091 は約 0.02 m を測る。断面形状は、SDd090 は底部が北へ偏った V 字状、SDd091 は浅い皿状を呈する。埋土は共に SDd084 から派生するように見えるが共通する埋土が認められない。

出土遺物は認められず、詳細な時期は不明である。

SDd092（第 110・第 112 図）

SDd090 の東側で検出した東西方向の溝状遺構である。検出長は途中で分断されるものの、約 5.60 m を測る。幅は最大で約 0.50 m を測る。断面形状は浅い皿状を呈し、深さは約 0.05 m を測る。埋土は灰黄褐色細砂混じりシルト質土である。SDd083 に切られる形で検出しており、これに先行するものと考えられる。

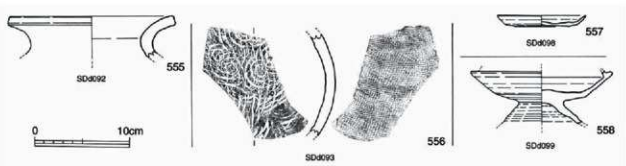
出土遺物で図化に耐えうるものは、わずかに 555 の弥生土器壷が認められる程度である。

SDd093 ～ 095（第 110・第 112 図）

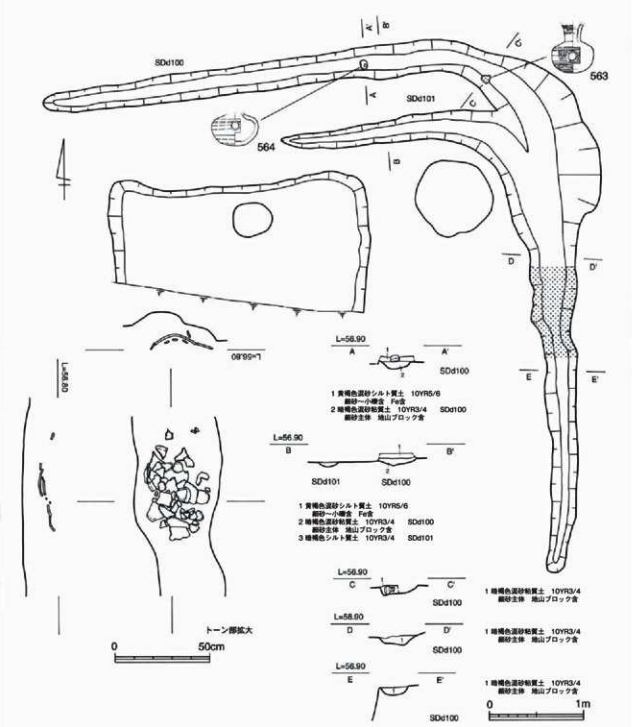
SDd091 の南側で検出した東西方向の小溝群である。先述した SDd090・091 と遺構の規模・埋土を同じくし、同一性格の遺構であると言える。SDd093 からは 556 の古墳時代後期頃の須恵器甕の破片が出土している。

SDd096（第 110 図）

d 地区南東隅部で検出した南北方向の溝状遺構である。SDd084 B - B ′ 断面の観察結果から、同溝から派生する溝状遺構である。また、派生地点から約 3 m のところで二股に分岐する。検出長は長く延びるほうで約 7.00 m を測る。幅は約 0.20 ～ 0.60 m を測る。断面形状は浅い皿状を呈し、深さは約 0.08 ～ 0.10 m を測る。SDd084 の現状で確認できる最終埋没期に近いころに分岐して掘削されたものか。出土遺物は認められない。



第 112 図　溝状遺構出土遺物（1/4）



第113図 SDd100・101平・断面図（1/40・1/20）

SDd097（第110図）

d地区南東隅部で検出した南北方向の溝状遺構である。検出長は約4.00mを測るが、C地区B17区（次年度以降報告）へさらに延びており、総延長は約7.20mを測る。幅は約0.90mを測る。断面形状は浅い皿状を呈し、深さは最深部で約0.10mを測る。埋土は黄褐色砂質土を呈する。出土遺物は認められない。

SDd098（第 110・第 112 図）

SDd084 南端東側で検出した溝状遺構である。主としてＣ地区Ｂ 17 区（次年度以降報告）以南で検出したもので、今年度報告するのはｄ地区南壁で検出した断面のみである。幅 0.40 m、深さ 0.20 mを測る。埋土は暗灰黄色砂混じり粘質土である。

出土遺物はわずかに 557 の土師質土器小皿が認められる程度である。

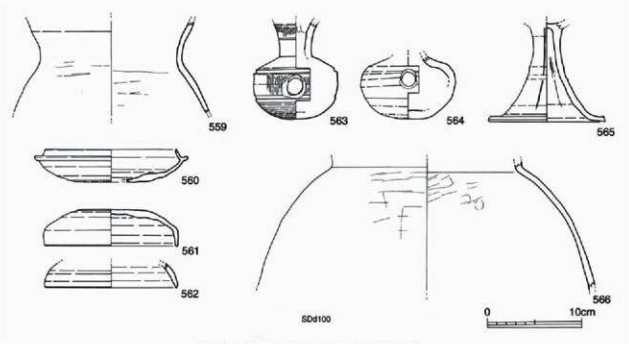
SDd099（第 110・第 112 図）

ｄ地区南壁東半中央付近で検出した溝状遺構である。南半はＣ地区Ｂ 17 区（次年度以降報告）に延びている。検出長は約 6.00 mを測り、幅は約 0.20 mを測る。断面形状は浅い皿状を呈し、深さは最深部で約 0.15 mを測る。埋土ははにぶい黄褐色砂混じりシルト質土である。

出土遺物はわずかに 558 の須恵器有蓋高杯が認められる程度である。

SDd100・101（第 113・第 114 図）

ｄ地区東壁南端付近で検出した溝状遺構である。平面形がいびつな逆Ｆ字形を呈し、東西方向部で約 5.00 m、南北方向部で約 5.50 mを測る。また、SDd101 は約 2.50 mを測る。幅は約 0.20 ～ 1.00 mを測る。断面形状は浅い皿状を呈し、深さは約 0.08 ～ 0.15 mを測る。埋土は暗褐色砂混じり粘質土を主体とする。SDd100 南北方向部中央付近に土器溜りが形成されており、弥生土器壺の頸部（559）・土師器甕胴部上半（566）が潰れた状態で出土したほか、須恵器蓋杯（560 ～ 562）・高杯脚部（565）の出土が認められる。また、SDd100 東西方向部で鳧２点（563・564）が出土している。出土遺物の形状から見て、古墳時代後期後半頃のものと考えられる。



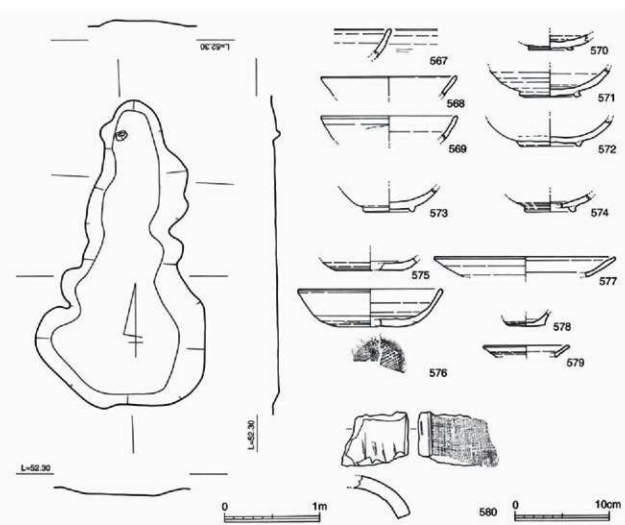
第 114 図　SDd100 出土遺物（1/4）

9．性格不明遺構

SXd01（第115図）

G地区中央やや西寄りで検出した遺構である。SDd014南端と当遺構北端が重複しており、その切り合いから当遺構が後出することがわかる。平面形は不整形で、最大長3.22 m、最大幅1.20 mを測る。断面形は浅い皿状を呈し、深さは最深部で約0.08 mを測る。埋土は濁灰黄茶色混粗砂粘性極細砂である。当初、当遺構からSDd014が派生するように見え、地形の傾斜が北へ緩やかに下がることから、湧水施設とその導水路の可能性を想定したが、SXd01の底部は湧水層へは達していなかった。

出土遺物は小片が多いが、若干出土している。567～572は須恵器椀である。567～569は口縁部である。567・569はやや内湾気味、568は直線的に斜め上方へ延びる。570～572は底部である。小片であることから全体の形状は不明であるものの、570・571はやや丸底気味の平底を呈するが、572は平底を呈する。いずれも貼り付け高台を有するが、その形状はまちまちである。570は高台径が5㎝であるのに対し、571・572は6.5㎝とやや大きい。573は黒色土器椀、574は土師質土器椀に分類した。575～577は土師質土器杯に分類した。575・576は平底の底部を持つ。577はやや径が大きく、浅い器径に復元され、あるいは別の器形に分類すべきかもしれない。578は小片であり、詳細は不明であるが、底径



第115図　SXd01平・断面図（1/40）、出土遺物（1/4）

が小さいことから土師質土器円盤状高台付の小皿に分類した。底部切り離しはヘラ切りによると見られる。579 は土師質土器小皿に分類した。580 は丸瓦である。小片であり詳細は不明であるが、内面に布目、外面に板ナデの痕跡がそれぞれ認められる。

SXd02（第 116 図）

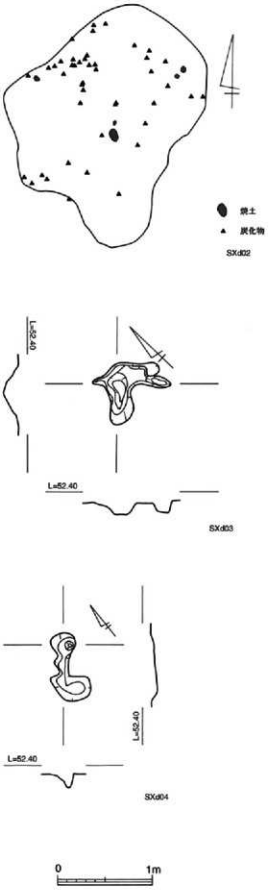
G 地区南辺中央付近で検出した遺構である。遺構検出時に微細な炭化物・焼土が集中している状況を確認したため、その分布範囲の平面記録を作成した。長軸約 2.58 m、短軸約 2.00 m の不整形な平面形を呈する。遺構埋土については周辺の地山と見分けがつかなかったことから、断ち割りを入れて確認したが、差を見出すことができなかった。したがって、検出面がそのまま遺構底部であった可能性が考えられる。焼土・炭化物ともに、下層へ広がる状況も確認できなかった。なお、平面図には図示しなかったが、同様のものを H 地区中央やや北西寄り付近で SXd06・07 として検出している。

SXd03・04（第 117 図）

G 地区南辺中央付近で検出した遺構である。共に SAd02 西端の南側に位置する。不整形な形状を呈し、最深部は 0.16 m を測る。やや凹凸の目立つ遺構であるが、性格は不明である。

SXd05（第 117 図）

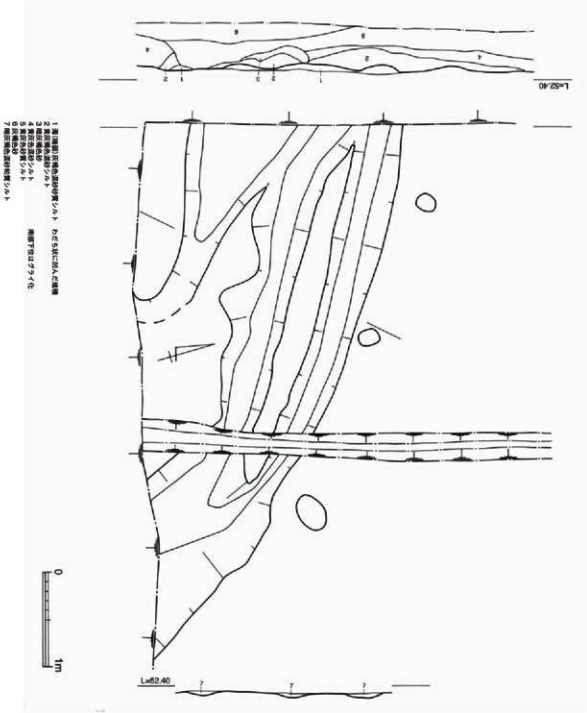
G 地区南辺中央東寄り付近で検出した遺構である。大半が G 地区南壁外へ延びるほか、西端も途切れる。概観上は 3 条の浅い溝が離合を繰り返しながら流下するように見え、西端の断絶部から西へ約 7 m のところに SDd031 が存在し、これとのつながりが想定されるが、決定的な根拠が認められない。検出長は 6.20 m、幅は合流点で最大 1.58 m を測る。断面形状は浅い皿状を呈し、最深部で 0.06 m を測る。埋土は暗灰褐色



第 116 図　SXd02 ～ 04 平・断面図（1/40）

混砂粘質シルトである。

出土遺物は微細で、図化に耐えうるものはない。この点において、古墳時代終末期頃の須恵器がまとまって出土したSDd031とは異なる。



第117図　SXd05平・断面図（1/40）

SXd08（第 118 図）

H 地区北東隅付近で検出した遺構である。平面形は途切れた溝状を呈し、長さ 0.67 m、最大幅 0.22 m を測る。断面形状は浅い皿状を呈し、深さは最深部で 0.03 m を測る。

出土遺物は認められない。

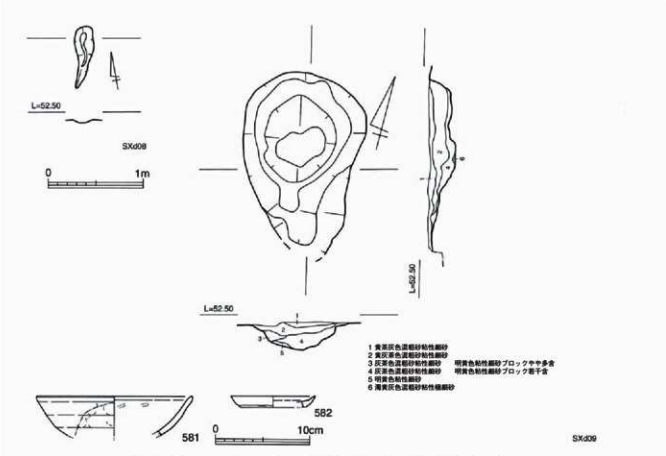
SXd09（第 118 図）

H 地区北東隅付近で検出した遺構である。SDd40 と SRd01 の間で検出した。南端をトレンチで破壊しているため、正確な規模は不明であるが、平面形は卵形で最大長 1.95 m 以上、最大幅 1.30 m を測る。断面形状は、長軸方向がやや北寄りに深みを持つ皿状を呈し、短軸方向は浅い椀状を呈する。埋土は概ね 5 層に分層でき、茶色系の粘性極細砂からなる。特に 3 ・ 4 層には地山ブロックを含み、掘削後まもなく埋め戻した可能性が想定できる。

出土遺物は小片を主体に出土しており、図化に耐えうるのは 581 の黒色土器椀及び 582 の土師質土器小皿程度である。

SXd10（第 119 図）

H 地区中央やや東寄りで検出した遺構である。SDd042・044 間に位置する。当遺構の南辺は SDd044 の肩を切っており、これに後出することがわかる。埋土も周辺を被覆していた淡灰色系の粗砂混じり粘性極細砂と同じものが堆積しており、単なる地形の窪みの可能性は捨てきれないが、南東隅部が直角に



第 118 図　SXd08・09 平・断面図（1/40）、出土遺物（1/4）

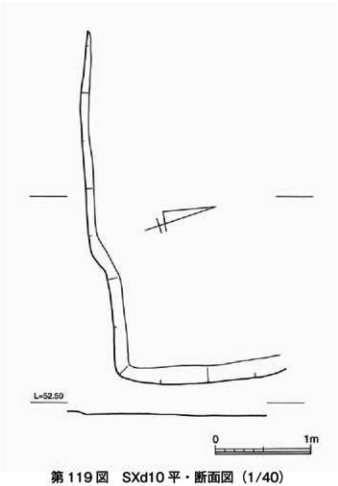
掘り込まれていることから、何らかの人的行為を想定した。削平が著しいことから正確な規模は不明であるが、現存規模で平面形が長辺約 3.80 m以上、短辺約 1.80 m以上の長方形、断面形が最深部での深さ 0.08 mを測る浅い皿状を呈するものと想定できる。出土遺物は認められない。

SXd11（第 120 図）

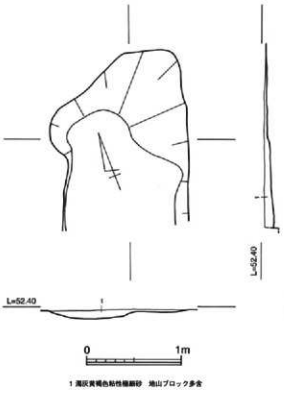
H地区南辺中央で検出した遺構である。長軸 1.80 m、短軸最大 1.42 mのいびつな隅丸長方形状を呈する。断面形状は浅い皿状を呈し、深さは最深部で 0.10 mを測る。埋土は濁灰黄褐色粘性極細砂である。見かけは南側に位置するJ地区の北辺付近まで延びるものと考えていたが、平成 16 年度の同地区の調査では検出されていないため、H地区南壁すぐのところで途切れるものであったのであろう。出土遺物は認められない。

SXd12（第 121 図）

d地区北西隅で検出した遺構である。遺構の西部と北部が調査区壁にかかることから詳細な規模は不明であるが、長辺 6.40 m以上、短辺 1.65 m以上を測る平面形長方形、最深部で 0.06 mを測る断面形浅い皿状の遺構である。出土遺物は認められない。



第 119 図　SXd10 平・断面図（1/40）

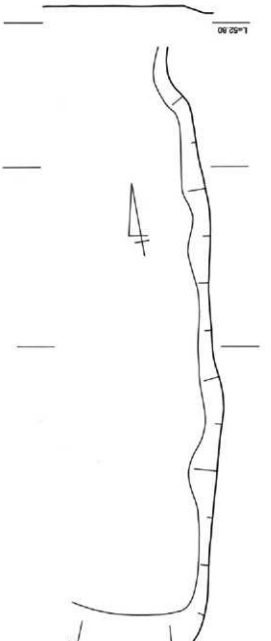


第 120 図　SXd11 平・断面図（1/40）

10. 自然河川跡

SRd01・03（第 122 ～ 126 図・第 129 図）

H地区南東隅付近からG地区南西隅にかけて、約110 mにわたって検出した流路跡である。検出面での幅は 12 ～ 31 mを測る。検出面での状況は周辺の濁黄灰色粘質土からなる地山に対し、灰褐色系の粘性極細砂を主体とする埋土が見られたことから、その範囲を旧河道として調査した。この灰褐色系の埋土が堆積する範囲について、数箇所で断ち割りを入れたところ、概ね灰褐色系の粘性極細砂を主体とする上層、茶灰色系の粗砂混じり粘性極細砂を主体とする中層、暗灰～黒色系の粘性極細砂を主体とする下層に大別できた。部分的に全掘を実施したが、上層以外はあまりまとまった遺物の出土が見られなかったため、中層以下はSRd01全域の全掘まで及んでいない。しかし、その結果として正確な流路の単位が不明瞭になり、調査に大きな混乱を招いた。最たる例として、SRd01下層として掘削した黒色系粘性極細砂が流路底部の地山と判断した土の下に潜り込んだことから、部分的にSRd01の下に別単位の旧河道SRd03が存在することが判明した。その結果、SRd01下層遺物として取り上げたものの中にSRd03遺物が混入した可能性が高い。また、SRd01上層除去後に一部でSRd02を確認したが、H地区内である程度その流路が押さえられていたのに対し、G地区でその流路が不明瞭となった。また、H地区H 17 区・F 17 区間でも若干混乱した部分がある。上層の堆積状況から見ると、d地区SRd04についても同一流路である可能性があるが、H断面で観察したSRd01の埋土とH地区東壁土層（F 17 区東壁）で観察したSRd01と考えられる埋土は、下部においてやや異なる状況を見せる。H断面では同流路底部は検出面から約 1.00 mを測るが、H地区東壁土層では検出面から約 0.50 mで底部となり、約 0.50 mのギャップが生じる。そのため、非常によく似た埋土を持つものの、SRd04は別流路として扱った。あるいはH断面を確認したトレンチ付近でSRd01の中・

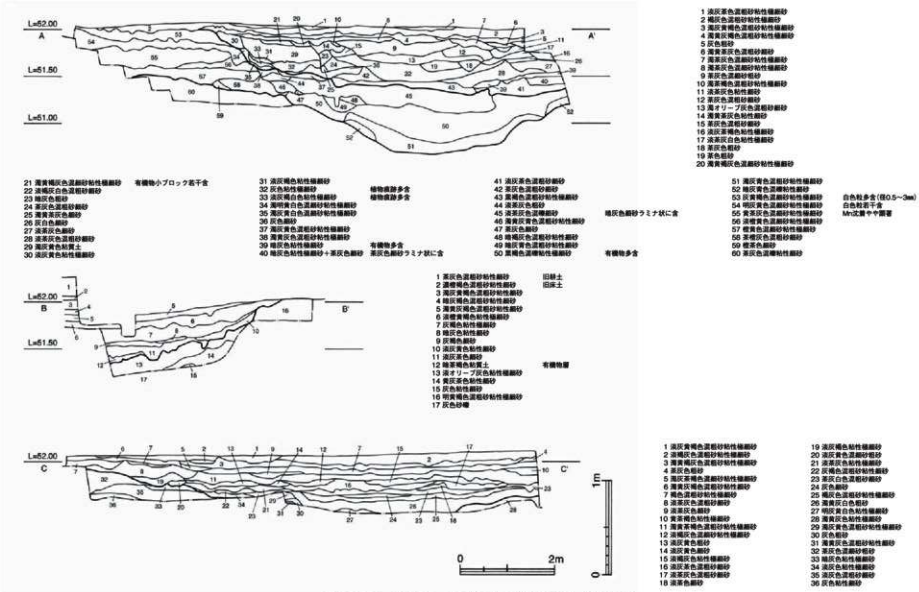


第 121 図　SXd12 平・断面図（1/40）

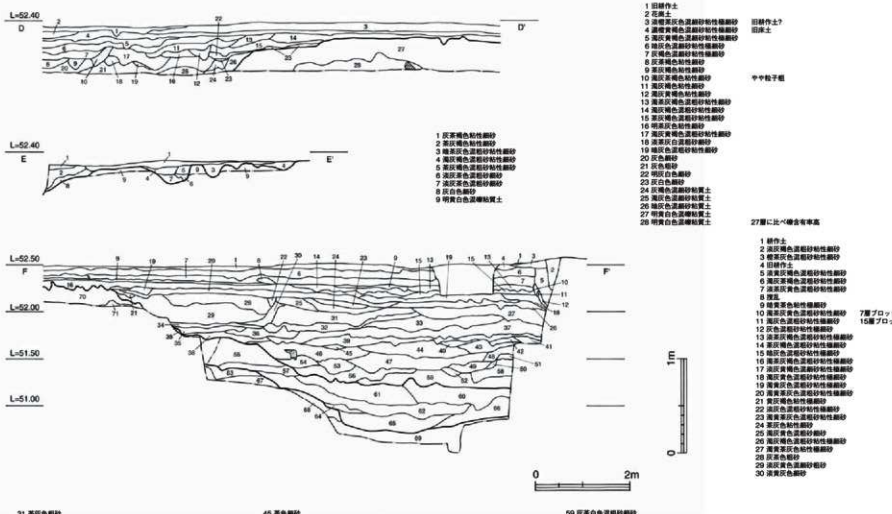
下層およびSRd03は強く屈曲して南へ延びるのかもしれない。

さて、上層は最も厚いところで約0.10 mの堆積を見る。B断面やG断面で図示したものは上層を除去した状態であるが、上層除去後の地形は全体的に浅い窪み状を呈する。この層内からは粗砂・細砂の堆積がほとんど認められず、やや時間をかけてゆっくりと埋没していった過程が想定できる。遺物はこの層から最も多く出土した。中層は茶灰色系の粗砂・細砂を多く含む粘性極細砂からなる。層厚は概ね最大約0.40 m前後を測る。粗砂・細砂はラミナ状に含まれる場所が多く、ある程度の流水環境にあったものと考えられる。遺物の出土はあまり多く認められず、小片が主体となる。下層は約0.10～0.50 mと厚さに差が認められた。基本的に暗灰色～黒色を呈するが、樹木片や木の葉といった植物遺存体を多く含む部分が多く見られ、暗茶褐色を呈する層もある。遺物はその大半が下層最底部から出土したが、きわめて少ない。

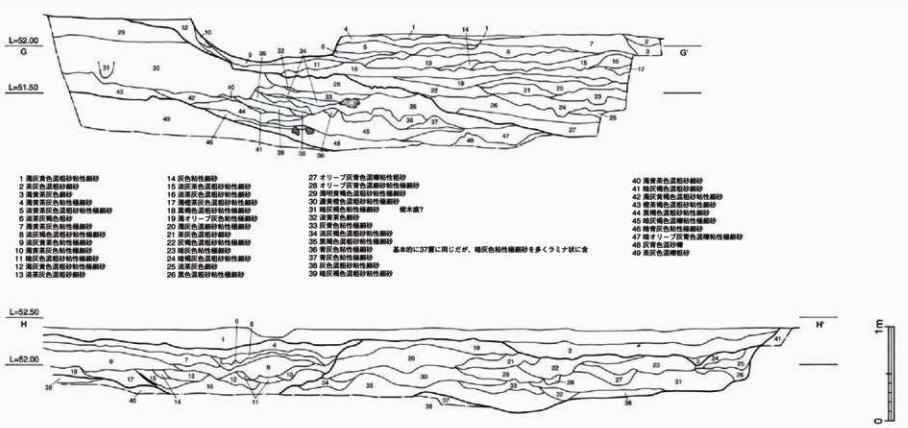
出土遺物は小片ながら比較的多量に出土している。第125図583･584は平面精査時に出土したもので、須恵器杯（583）と土師器杯（584）である。第125図585～第126図664は上層出土遺物である。遺物の出土量のほとんどはこの層からである。585～594は弥生土器である。585～588は壺底部に分類した。589～593は甕に分類した。589・590は口縁部、591～593は底部である。小片が中心であることから詳細は不明であるが、概ね後期頃のものと想定する。いずれもやや摩滅が進んでおり、上流側から流されてきたものと考える。594は須恵器杯である。小片であるが、口径がやや大きく復元される。古墳時代後期後半のものと考える。G・H地区には当該期の意向は認められないが、d地区においてSDd100が検出されており、当該期のものと想定できる遺物の出土が見られる。丘陵裾部に展開していた同時期の遺物が流されてきたものであろう。595～616は須恵器杯である。平坦な底部を有し、595のように円盤高台状を呈するものもあるが、大半は底部と体部の境は稜線をなして明瞭である。体部は比較的薄く、直線的に斜め上方へ伸びるものが多いが、601～603･606･607のようにやや内湾気味に立ち上がり、口縁端部が外反するものも若干認められる。ただし、607については別の器形に分類すべきかもしれない。617～623は須恵器高台付坏である。底部片がほとんどで、全体の形状は不明なものばかりである。高台の形状は断面台形ないしはつぶれた平行四辺形で、底部と体部の境付近に張り付く。624～630は須恵器坏蓋である。いずれも摘み部を欠損した破片で、全体の形状は不明である。復元した径は大きく624･625、626･627、628と3種の法量に分化するように見える。小型の624･625は平坦な天井部を持ち、口縁部は比較的明瞭に折り返す。端部をやや丸く納める624と細く外反させて摘み出す625とが見られる。中型のものは平坦な天井部を持つ626と若干笠状を呈する627とに分かれる。口縁部の折り返しはやや弱く、端部は丸く納める。大型のものは平坦な天井部を持ち、口縁部の折り返しはやや弱い。端部は丸く納める。631～637は須恵器皿である。やや小型の631～633とやや大型の634～636に分かれる。いずれも平坦な底部を持ち、やや浅い角度で体部が立ち上がる。633の体部はやや外反気味であるが、その他は比較的直線的に立ち上がる。638は小片であるが須恵器片口鉢に分類した。やや軟質の焼成である。639・640は須恵器壺の口縁部である。640は異なる器形になる可能性がある。641～646は須恵器壺に分類した。641・642・646は無台、643～645は高台付である。641～644は杯底部の可能性も想定したが、内面見込み部の調整が極めて粗雑であることから、この部位の精緻な調整を必要としないであろう壺であると判断した。647は須恵器甕である。648は小片であるものの円面硯脚部と判断した。649～654は土師器杯である。いずれも底部の小片で全体の形状は不明であるが、平坦な平底から明瞭に屈曲し斜め上方に直線的に延びる体部を有する形状が想定できる。649のみ円盤状高台を有する。



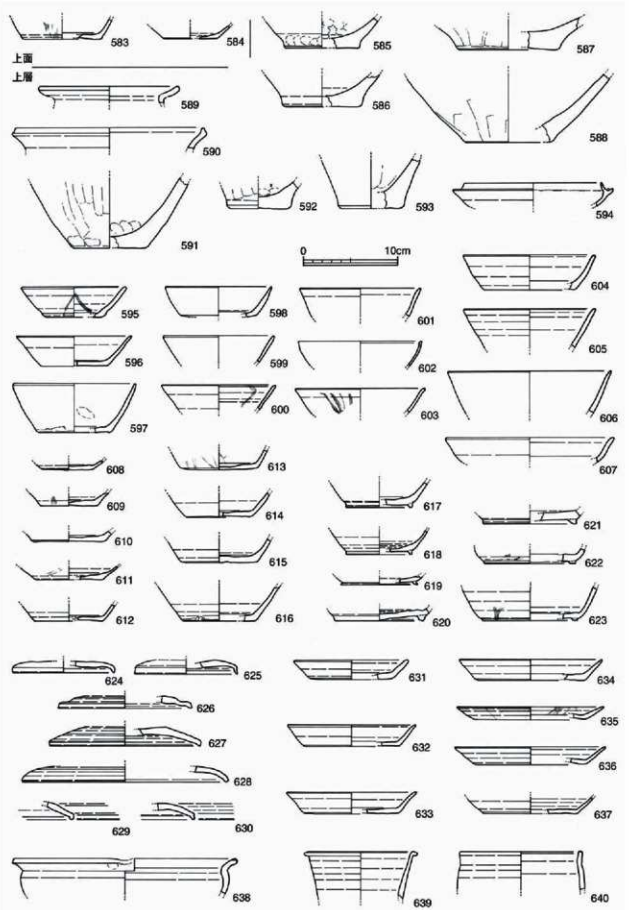
第 122 図　SRd01・03 断面図（縦 1/40・横 1/80）



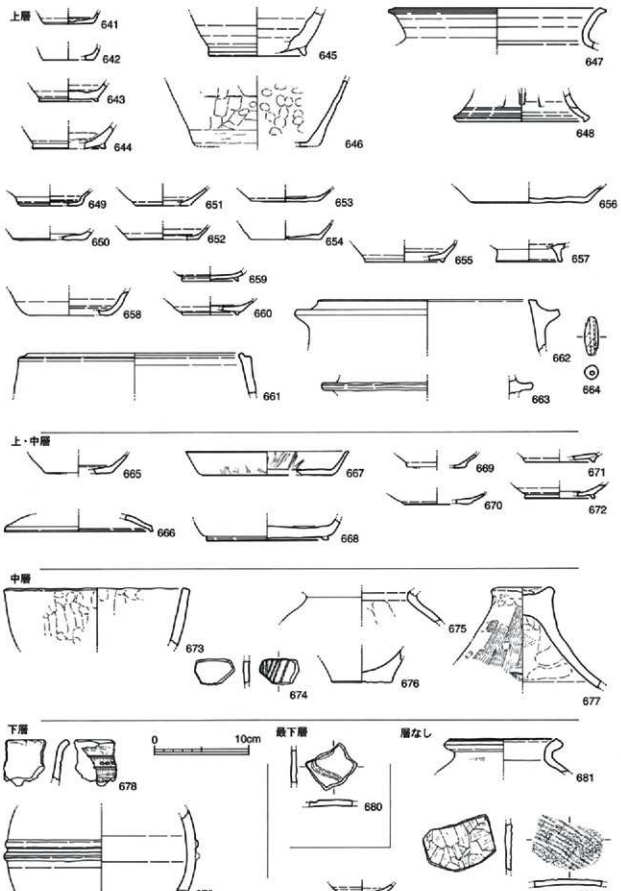
第 123 図　SRd01・03 断面図（縦 1/40・横 1/80）



第124図　SRd01・03断面図（縦1/40・横1/80）



第125図　SRd01 出土遺物（1）（1/4）



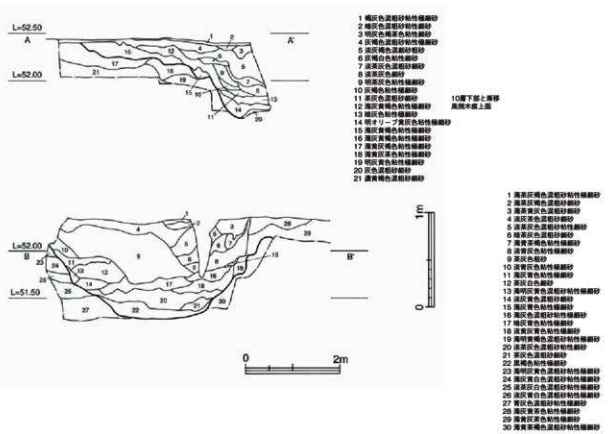
第 126 図　SRd01 出土遺物（2）（1/4）

655 は土師器高台付杯である。656 は土師器皿、657 は土師器椀にそれぞれ分類した。658 は土師質土器杯、659・660 は土師質土器椀に分類した。661 は土師質土器土釜、662・663 は土師質土器羽釜、664 は管状土錘である。上層出土遺物の大半は古代後半頃のものが主体であると考える。

665 ～ 672 は上・中層間の出土遺物である。これらも上層同様、概ね古代後半期のものと考える。673 ～ 677 は中層出土遺物である。いずれも弥生土器である。673 は鉢、674 は壺、675・676 は甕、677 は甕蓋に分類した。674・677 例から弥生時代前期の遺物がやや多く認められる。678・679 は下層出土遺物である。678 は甕口縁部で口縁直下に２条の平行沈線とその間に刺突文が施される。679 は壺体部で、最大径を測る部分に２条の貼り付け突帯が見られる。678 が前期と考えられるのに対し、679 は後期のものと考えられる。680 は最下層出土遺物の縄文土器深鉢である。図化しうるものはこの１点のみである。縄文時代後期の磨消縄文を施したものの可能性が考えられるが、小片のため詳細不明である。あるいは SRd03 に属する遺物の可能性もある。681 ～ 683 は層位不明遺物である。681 は弥生土器甕、681 は須恵器甕、683 は緑釉陶器椀である。

第 129 図 695・696 は SRd03 出土の突帯文土器である。いずれも小片であることから詳細な器形は不明であるが、浅鉢に復元できるものと考える。

以上の状況から、SRd01 の時期については最終埋没層が古代後半期であることがわかる以外は、不明である。また、SRd03 は縄文時代晩期頃のものと考えられるが、遺物の点数が少ないことから、積極的に評価することは困難である。



第 127 図　SRd02 断面図（縦 1/40・横 1/80）

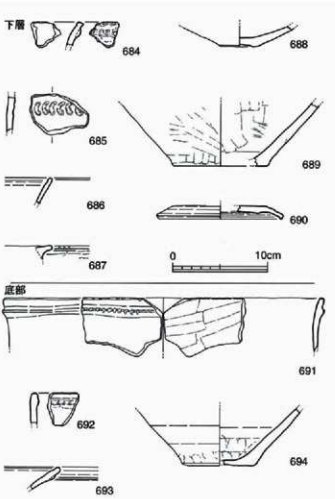
SRd02（第127・第128図）

H地区南東隅から同地区北壁中央西寄り付近までその単位を追うことが出来た流路である。著しく蛇行を繰り返す流路で、最大幅は約10mを測るが、流芯の部分の幅は概ね約4mほどである。深さは約0.08～1.00mとやや幅をもつ。大半が茶灰色系の粗砂・細砂を主体とする。B断面を観察すると、9層の茶灰色粗砂のように一気に堆積した結果と見られる状況が見られるほか、他の層でも一定量の水量が窺える。大きくはこの茶灰色系の粗砂・細砂を主体とする上層と、暗灰青～黒色の粘性極細砂からなる下層に大別できる。下層はSRd01と比べると堆積する幅は狭い。

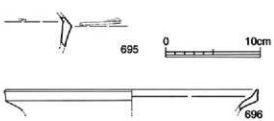
遺物は下層以下を中心として出土するがあまり多くなく、小片が中心である。684～690は下層出土遺物である。684～686は突帯文土器である。684･685は深鉢、686は浅鉢にそれぞれ分類した。684は口縁直下にD字刺突文が施された貼り付け突帯が認められるほか、端部に刻み目が認められる。685は体部片と考えられるが、半裁竹管文が施される。687は弥生土器甕口縁部である。前期末から中期初頭のものと考えられる。端部に刻み目が施される。688・689は壷底部である。690は須恵器蓋である。

691～694は底部出土遺物である。いずれも突帯文土器である。691・692は深鉢である。693は小片のため詳細不明であるが、浅鉢であると考える。外面口縁直下に貼り付け突帯が、内面には浅い沈線がそれぞれ認められる。694は壷底部である。

流路の時期は縄文時代晩期に遡る可能性があるものの、下層で須恵器や弥生土器が混じることを考えると、それよりも新しい



第128図　SRd02出土遺物（1/4）



第129図　SRd03出土遺物（1/4）

可能性が高い。詳細な時期は不明である。

SRd04（第 130・第 131 図）

d 地区南西隅で検出した旧河道である。概ね SRd01 と同一方向に流れるが、流路の幅は南岸が調査区外へ延びるため不明である。断面形は浅い皿状を呈し、深さは検出面から測ると最深部で約 0.60 m を測る。概ね上・中・下層に 3 文出来るが、上層の上に最上層を設定した。この層上面は SFd03 や SDd043・041 の遺構面となっており、これを除去すると SDd044 が検出できる。上層は SRd01 同様灰褐色系の粘性極細砂からなり、堆積範囲は広い。これを除去して中層上面を出すとやはり浅いくぼ地が形成される。中層は濁黄灰色系の粘性極細砂を主体とする。地山である明黄灰色混粗砂粘性極細砂の二次堆積層と見られる。下層は茶灰色系の粗砂混じり粘性極細砂である。底部との境に形成された窪みが若干認められるが、そこには淡灰色細砂が堆積する。

遺物は出土したがほとんどが上層からである。697 ～ 747 は上層出土遺物である。697・698 は須恵器蓋杯の身である。小片であり、全体の形状は不明であるが、受け部の立ち上がりがやや直立気味で長く延びる。古墳時代後期前半頃のものと考える。699 は須恵器高杯である。700･701 は須恵器平瓶である。700 は口縁部、701 は頚部である。702 は土師器甕の把手である。703 ～ 710 は須恵器杯である。平坦な底部から直線的な体部が斜め上方へ立ち上がる形態をとるものが多い。711 ～ 720 は須恵器蓋である。711 ～ 714 は摘み部である。天井部が平坦で、断面形状が逆台形を呈するものである。715 ～ 720 は口縁部片である。721 ～ 725 は須恵器皿である。平坦な底部からやや外反気味に立ち上がる体部を有するものが主であるが、725 については口縁部の小片であるが、端部が肥厚し内面に沈線が施される。土師器皿の模倣形態であると考えられる。726・727 は須恵器壷である。728 ～ 730 は須恵器甕である。731 ～ 734 は黒色土器椀である。735・736 は土師質土器杯、737 は土師質土器椀である。738 は土師質土器甕の口縁部である。739 は土師質土器壷に分類した。740 ～ 742 は緑釉陶器椀である。いずれも小片であり、全体の形状は不明である。743・744 は管状土錘である。745 ～ 747 は土師質土器羽釜である。748・749 は土師器杯に分類した。概ね古代後半の遺物が主体となり、時期的に見ても SRd01 の上層とほぼ同じ時期と見て差し支えない。同時並存の可能性を想定すべきかもしれない。

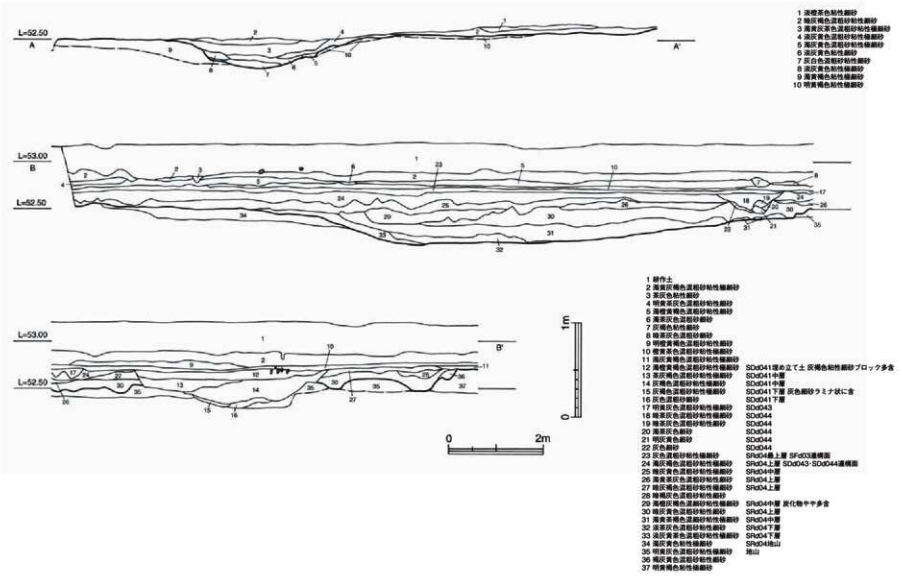
SRd05（第 132 図）

H 地区南西部で検出した南東から北西方向へ延びる旧河道である。検出長は約 40.0 m、検出幅は約 6.00 ～ 8.00 m を測る。流芯部については約 1.60 ～ 2.80 m の幅を測る。検出面からの深さは約 0.40 ～ 0.85 m と幅がある。埋土は黄茶褐～黄灰色系の粘性極細砂を主体とする。流芯部は顕著に蛇行する傾向にあり、蛇行の変化点は大きく窪む。窪みの部分の埋土は茶灰～灰色の粗砂・細砂で埋まる。

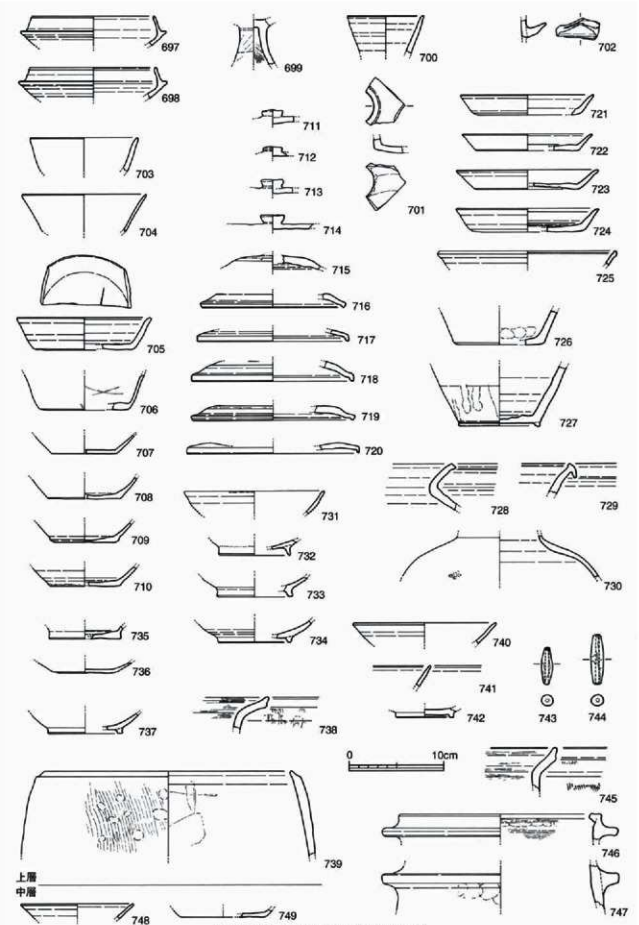
出土遺物は少量で、特に時期を特定しうる土器に乏しい。後述するように若干量の石器の出土はあるが、流路の時期を特定できる材料とは言いがたい。石器については後の包含層の項目で詳述する。

SRd06（第 133 図）

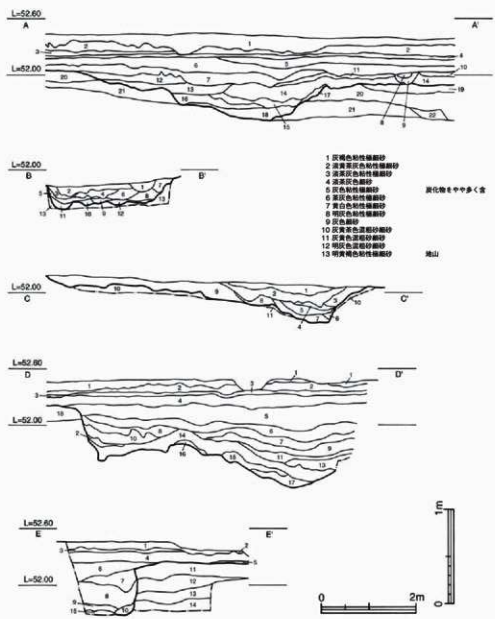
G 地区北東隅で検出した旧河道である。調査区の東壁から北壁に沿うように延びた浅い落ち込み状を呈し、最大検出幅は約 7 m、深さは約 0.20 m を測る。埋土は黄褐色ないし黄灰色系のシルト質土である。図化しうる出土遺物は認められない。



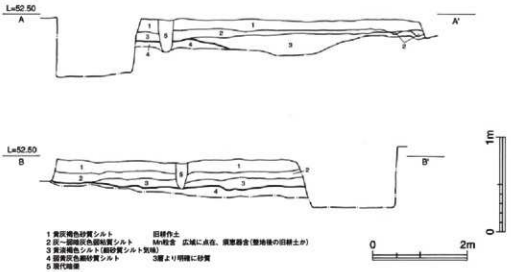
第 130 図　SRd04 断面図（縦 1/40・横 1/80）



第 131 図　SRd04 出土遺物（1/4）



第 132 図　SRd05 断面図（縦 1/40・横 1/80）



第 133 図　SRd06 断面図（縦 1/40・横 1/80）

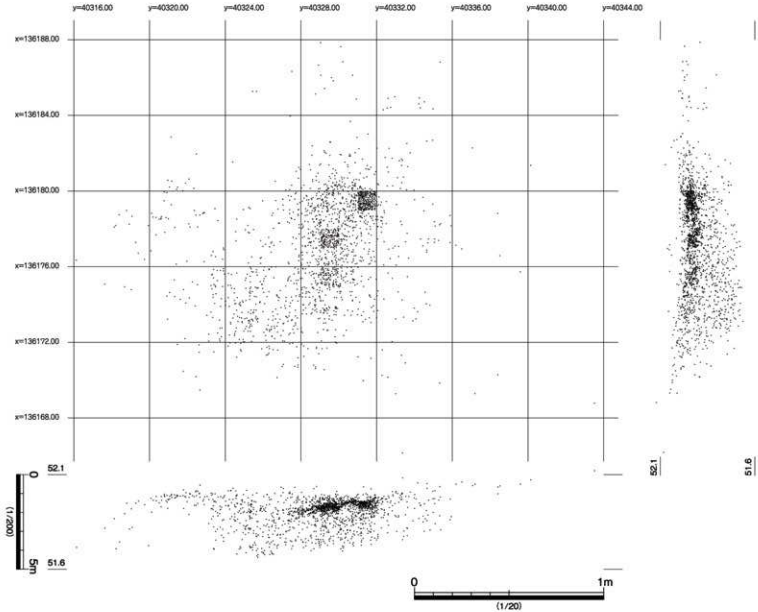
11. 包含層

石器集中部Ｂ１（第 134 ～ 170 図）

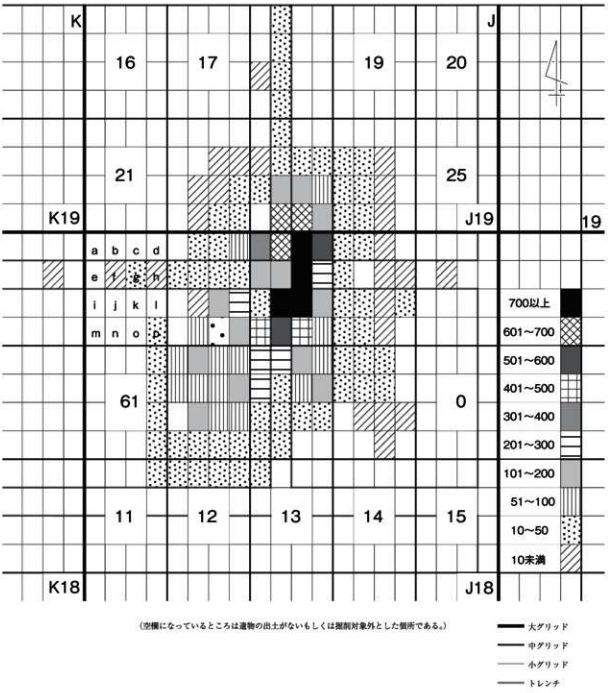
Ｈ地区西半中央部で検出した遺構である。平成 14 年度に実施した中世遺構面検出作業時及び排水溝掘削時にその存在が判明したため、平成 15 年度、改めて上面遺構を完掘した後に調査を行った。調査は、①平面精査による石器集中部の範囲確認、②外縁部に地形確認用のトレンチ掘削、③石器集中部の外縁における遺物出土状況確認用トレンチ掘削、④石器集中部を縦・横断するトレンチの掘削、⑤石器集中部坪掘りの順で行った。掘削方法は外縁部設定トレンチにおいてはスコップを用い、石器集中部縦・横断トレンチ及びグリッド内においては手ガリ・手バチ併用で掘削した。遺物の取上げは基本的にトータルステーションを用い、１点ずつ遺物番号を添付しながら実測を行った。但し、作業効率を上げるため、チップ及び掘削中に原位置から遊離した遺物についてはグリッド一括で取上げた。なお、18 Ｊ３ｉ・19 Ｊ 24 ｇの２グリッドについては上記の掘削方法で得られる遺物量との比較を行うため、スコップを用いて掘削し、排土は全て土嚢に詰めて持ち帰り、水洗選別を行った。

さて、検出時の地形はこの密度の高い付近がやや窪む状況であったが、これは上面を機械掘削する際にやや掘りすぎたためである。検出面は基本的に水平でやや北西方向へ向かって下がる。石器の包含層は黄灰褐色系の混砂粘質土を主体とするが、粘質あるいは砂質が強い箇所が認められる。堆積状況と遺物の分布に関連は認められない。掘削深度はトレンチで確認した状況から、概ね 20 ～ 30cmの範囲に収まると判断し、全体的には平均 25cm掘り下げた。

遺物の分布範囲は東西約 25 m南北約 20 mを測るが、遺物が濃密な分布するのは中心部約 12 m四方である。第 134 図に石器集中部１遺物平面分布図を挙げているが、図示されているものは全てトータルステーションによる実測を行ったものである。また、第 135 図に全遺物を対象とした各グリッドの遺物濃度を模式図化したものを挙げた。この図からは特に石器集中部を縦・横断するトレンチの交点付近が最も密度が高いことが読み取れる。特に密度が高いのは中グリッド 18 Ｊ３で１グリッドあたり 1,000 点近い遺物が出土している。その周辺でも 200 ～ 700 点の遺物が出土するグリッドが点在し、外縁部へ



第134図　石器集中部Ｂ１平・断面図（1/20・1/200）



（空欄になっているところは遺物の出土がないもしくは掘削対象外とした個所である。）

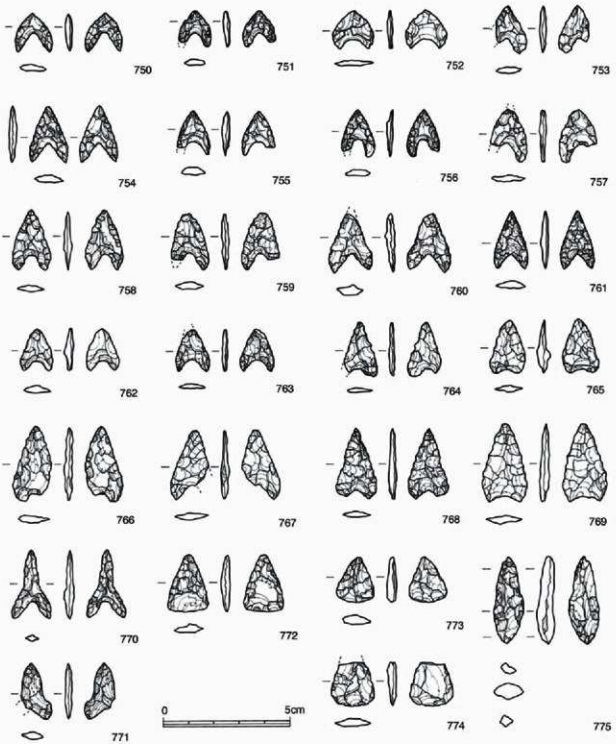
大グリッド
中グリッド
小グリッド
トレンチ

第 135 図　石器集中部 1 遺物密度模式図

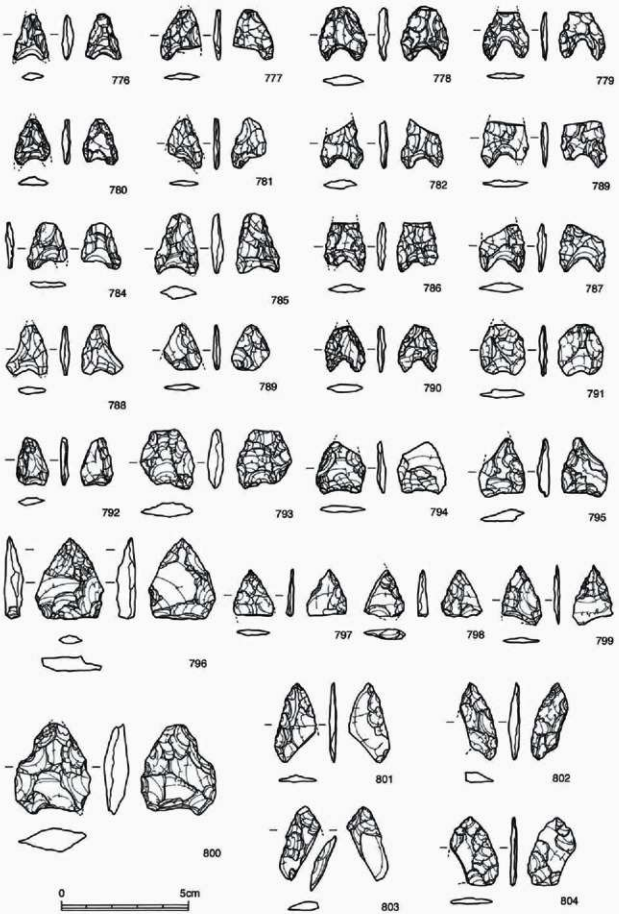
向けて点数が落ちる傾向にある。但し、石器集中部南西隅（18Ｊ６・７・11・12グリッド）付近においては遺物の出土量があまり大きく減少せず、掘削対象外のグリッドへさらに分布範囲が広がる可能性が想定される。遺物の出土傾向は、いずれの器種についても分布状況はほぼまんべんなく散らばっており、特定の器種が一箇所に集中する傾向は認められない。密集部の外縁においても石核や石鏃といった器種が若干分布する状況が認められる。出土した石器はほとんどがサヌカイトであるが、石質にバリエーションが認められる。また、若干ハリ質安山岩が認められる。

出土遺物の総数は25,044点である。内訳はトータルステーションによる実測を行ったものが1,895点・遊離遺物として取り上げたものが23,149点である。実測遺物の内訳であるが、定型石器は68点出土し、その内訳は未製品を含む石鏃が45点、二次加工ある剥片（以下ＲＦ）16点、スクレイパー５点、石錐・石匙未製品と想定されるものが各１点である。他に剥片が777点、チップ981点、石核18点、敲石などの礫器４点、その他未分類・上層遺物・石が47点出土している。また、遊離遺物は定型石器として石鏃破損品15点、剥片3,079点、チップ20,055点である。剥片とチップは小型のものにおいて分離が困難なものが多数あり、区分の基準は１cm角以上を剥片、それ以下をチップとしている。なお、実測遺物の中には上層の須恵器などが若干混入している。また、遊離遺物の中には先に述べた２グリッドの水洗選別資料を含むほか、小片の遺物は掘削時に破損したものも含まれており、若干の数量の変化が想定される。

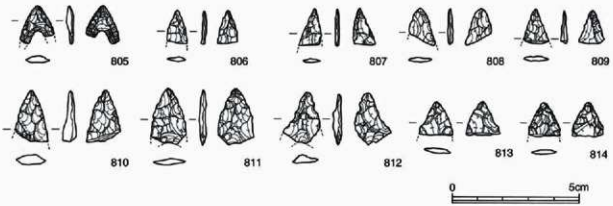
第136～162図はＢ１出土石器である。第136～140図は石鏃である。第136図は完形あるいは全体の形状を把握しうるものを掲載した。750～771は凹基式の石鏃である。750・751は所謂「鍬形鏃」に分類できる。752は器体の長幅比から、鍬形鏃の未製品とも考えられる。その他のものは刳り込みの深さが異なるものの、総じて側縁部が若干外側へ膨らみ、概ね脚部のあたりに器体の最大幅が来る平面形状を呈する。その結果、脚端はやや細く尖る形状を取るものが多い。770・771は脚端の形状は概ね前者と共通するものの、側縁が「く」の字に屈曲する。その結果、器体最大幅の直前で先端へ向けて急激に先細りとなる形状となる。772～774は平基式に分類した。基部が若干丸みを帯びており、円基式に分類すべきかもしれない。775は突基式である。平面形状は鈍い柳葉形を呈するが、側面観のシャープさに欠ける。あるいは未製品・別の器種の可能性も考えられる。第137図は先端欠損品・未製品を集成した。第136図に挙げたものと比べるとやや調整加工が荒い。また、素材面が残置されているものが若干目立つ。776～791は基本的に先端部を欠失したものである。792～804は素材面残置あるいは作業の途中段階のものである。いずれも完形品同様、側縁部が外側へ湾曲し、脚部付近に最大幅を持つ傾向が見られる。特に796～799、801などは先端部の加工を予めある程度行った後に側縁部の加工に入ったことを窺わせる資料である。796は素材剥片の切断面を、押圧具を当てる面として用いたことが明確にわかる資料である。また、素材についても793・800といった肉厚の素材から整形を始めるものや801～804のように薄手の素材を用いるものと、バリエーションに富む。第138図805～814は先端のみあるいは脚部欠損資料である。812以外はやはり側縁部が丸みを帯びる。第139図は半身のみ残るもの、胴部・脚部のみのものを集成した。半身のものはおそらく刳り込みを施す作業中の折損と見られる。820は直線的な体部を持つことから、あるいは別器種の可能性もある。第140図は石鏃の形状とは程遠いものの、表裏に平坦な二次加工が施されることから石鏃製作の初期工程上にあると判断したものである。830は796同様、押圧具を当てる場所を平坦面や切断面に設定する。



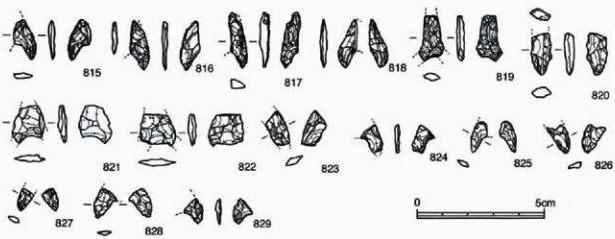
第136図　石器集中部B１出土石器　石鏃（1）(2/3)



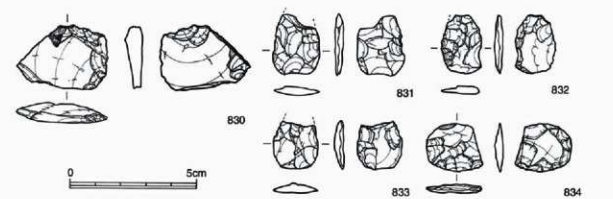
第137図　石器集中部B１出土石器　石鏃（２）(2/3)



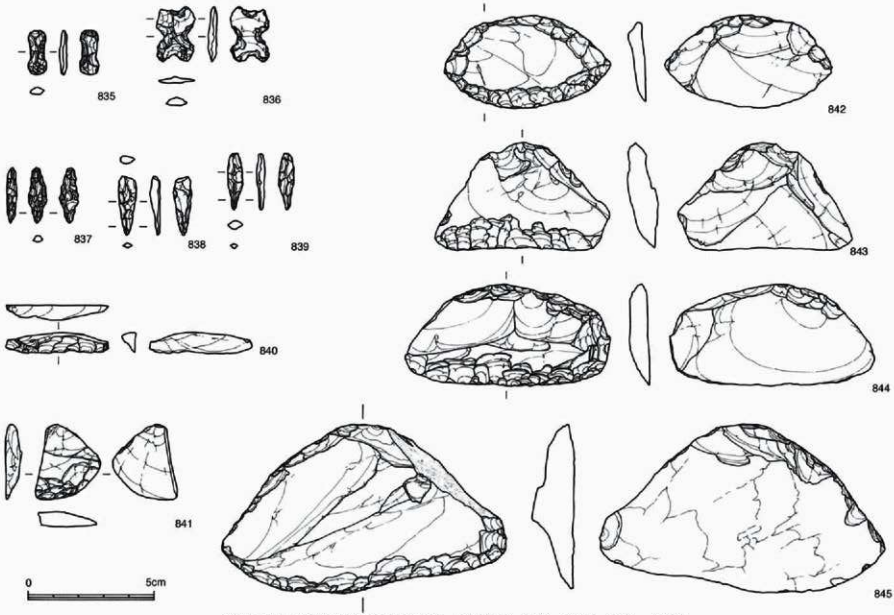
第138図　石器集中部Ｂ１出土石器　石鏃（３）(2/3)



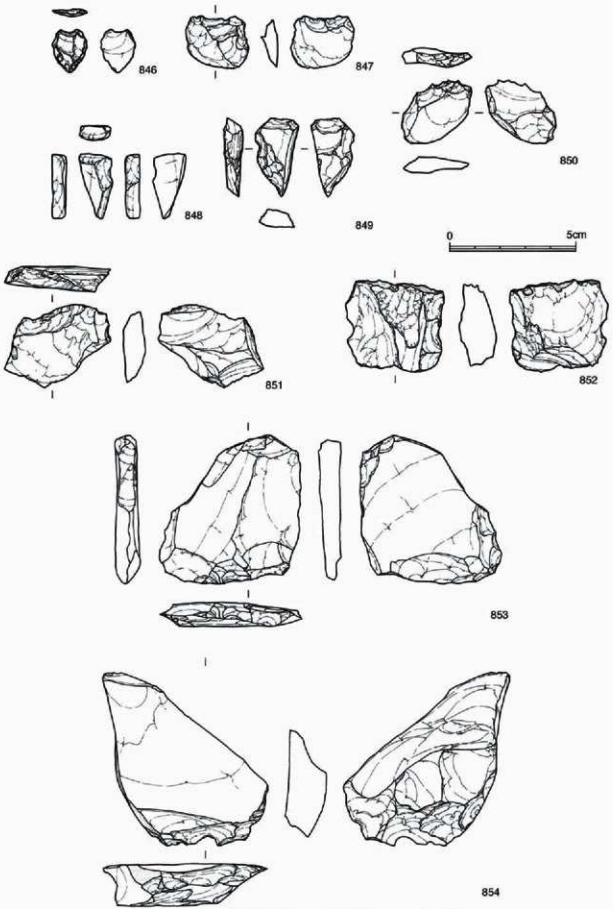
第139図　石器集中部Ｂ１出土石器　石鏃（４）(2/3)



第140図　石器集中部Ｂ１出土石器　石鏃（５）(2/3)



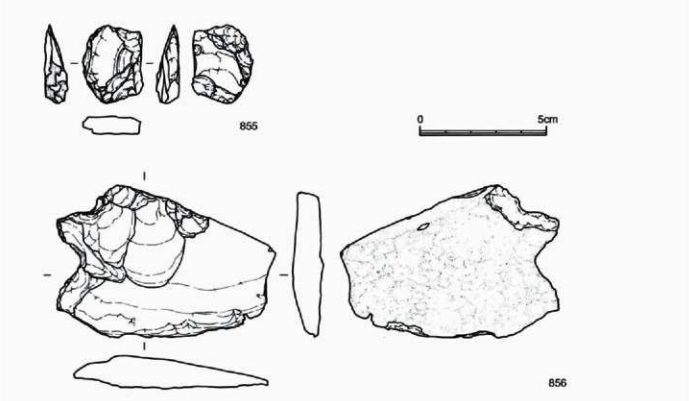
第 141 図　石器集中部Ｂ１出土石器　異形石器・石錐・スクレイパー（2/3）



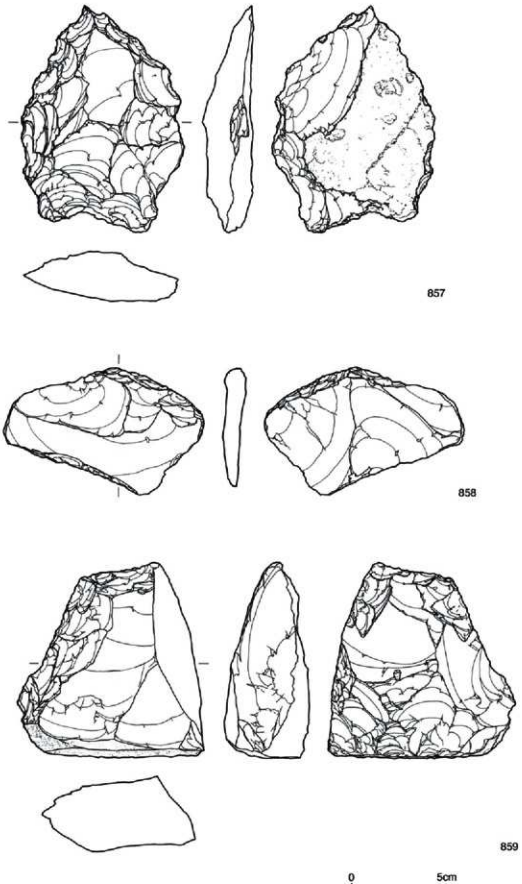
第142図　石器集中部Ｂ１出土石器　ＲＦ（2/3）

第 141 ～ 143 図はその他の定型石器である。835・836 は異型石器である。835 は全周を浅く微細な二次加工によって整形したものである。836 は石鏃未製品の可能性もあるが、脚部および側縁部の剝り込みのほかに、浅いながら上端の表裏に微細な二次加工が施されている。これは、第 137 図 796 ～ 799、801 例のような、Ｂ１での石鏃製作が先端部を先行して加工する傾向とは異なることから、石鏃以外の器形を想定した。837 ～ 839 は石錐である。いずれも摘みを持たない形状である。840 ～ 845 はスクレイパーである。840 は刃部のみが出土しており、刃部再生が行われた可能性が考えられる。841 と 844・845 は素材剥片の腹面側から浅い二次加工が施されるが、それ以外は素材剥片の背面側から腹面側へ向けて二次加工が施される。素材剥片は横長ないしは軸が斜めに歪んだ横長剥片である。第 142 図 846 ～ 854 はＲＦである。形状は不整形なものが多い。第 143 図 855 は楔形石器、856 は石匙未製品に分類した。

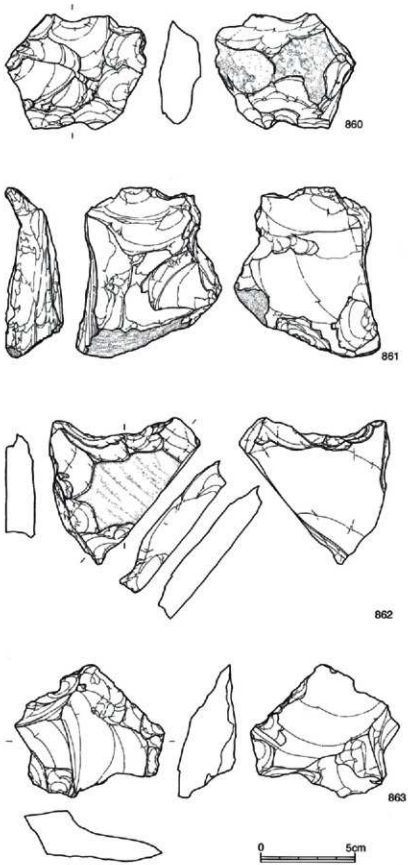
第 144 ～ 146 図は石核を集成した。大型剥片を含む、板状に分割した礫を素材にする場合が多く見受けられる。857 は原礫面を留めた大型剥片を素材とし、その主要剥離面側を中心に背面側から求心的に剥片を剥離したものである。図上端で先が尖ることから尖頭器の未製品である可能性もあるが、裏面に調整加工がまだ及んでおらず、石核であると判断した。858 は素材剥片の主要剥離面打面側で連続的に剥片を剥離している。859 は下端に原礫面を留め、ほぼ全周からやや求心的に剥片を剥離している。正面右側面は作業中の石核の折れか。860 は背面に原礫面を留め、表裏ともに求心的に剥片を剥離するものである。861・863 は剥片剥離作業中のアクシデントで剥落した肉厚の剥片を素材とする。862 は作業中に折損したものか。864 は表裏で求心的に剥片を剥離したか、打面と作業面を交互に入れ替えながら図上面を正面としつつ、裏面でも剥片剥離を行ったかやや不明なところがある。865・867 も似たような状況であろう。866 は素材剥片の打面側から作業を開始し、打面と作業面を入れ替えながら交互に剥片を剥離したものである。868 は背面に原礫面を留め、表裏で打面と作業面を入れ替えながら剥片剥離



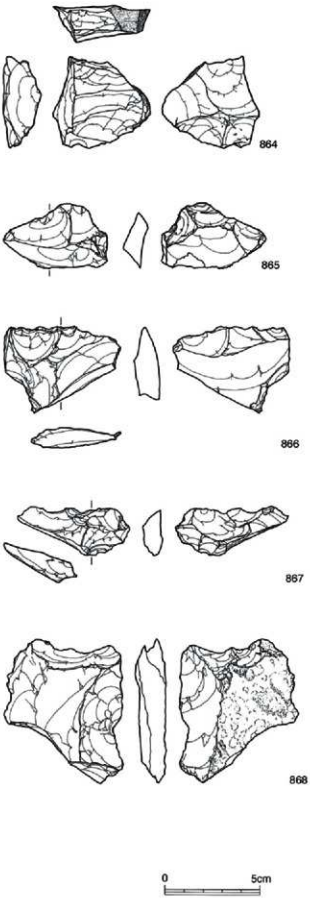
第 143 図　石器集中部Ｂ１出土石器　楔形石器・石匙未製品（2/3）



第144図　石器集中部B１出土石器　石核（１）（1/2）



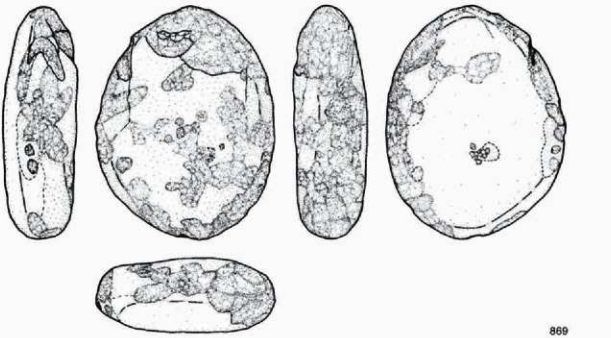
第145図　石器集中部B１出土石器　石核（2）（1/2）

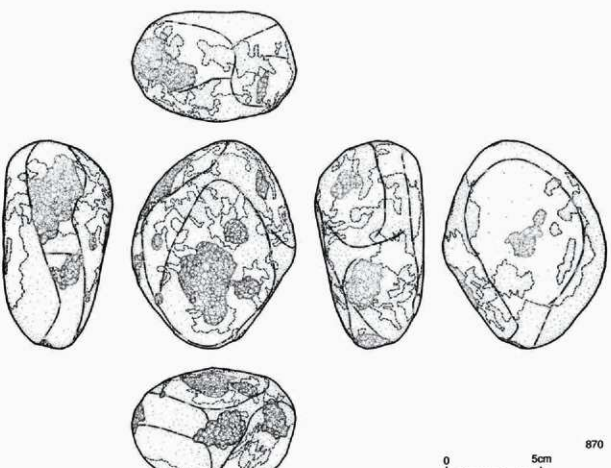


第146図　石器集中部Ｂ１出土石器
石核（３）(1/2)

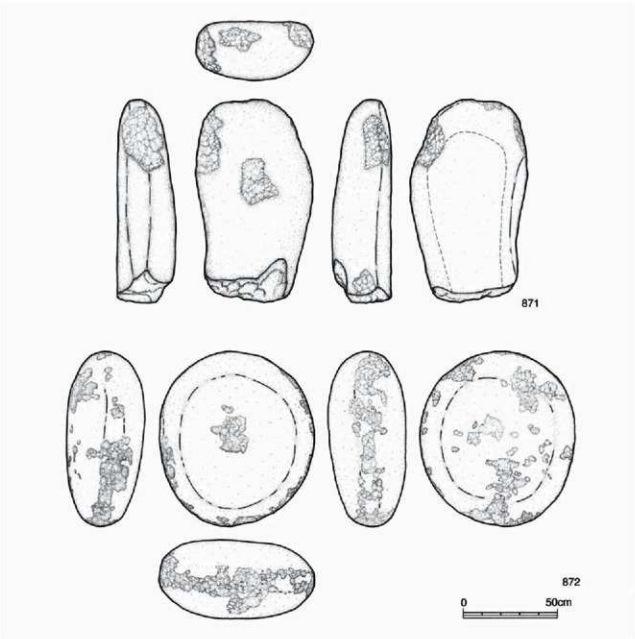
作業を行ったものである。石核については、全体的に直接打撃による剥片剥離作業がなされていたものと考えられる。第147・148図は敲石・凹石を集成した。いずれも敲打痕がほぼ全面に認められる。871は正面中央に窪みが認められる。

第149～155図は出土した剥片を集成した。全点図化は物理的に不可能であったため、全体の形状がある程度把握可能なもので、特に打面を有するものを中心に抽出した。出土グリッド単位で集成し、北西隅に近いグリッドから順に掲載している。第149図は石器集中部Ｂ１の北西部各グリッドから出土したものである。873・876・881・884のように原礫面を一部に留め、この原礫面を打面とする例が散見される。第150図885～902は18Ｊ３グリッドから出土した剥片である。このグリッドはやや多量の遺物が出土している。やや横長剥片が卓越する。やはり全体的に、一部に原礫面を留め、そこが打面となるものが散見される。また、打面が単一ないし複数の剥離面から構成されるものも多く認められる。902は肉厚の横長剥片であるが、他に同一個体を持たない単独資料である。第151図は18Ｊ４・６出土資料である。打面が単一ないし複数の剥離面から構成されるものが散見される点は変わらない。第152・153図は18Ｊ７グリッド出土遺物である。やはり総じて横長剥片が卓越する。924は裏面を中心に微細なクラックが多量に認められ、受熱した可能性があるものが存在することを窺わせる。また、礫面を留めるものが散見される。第154図は18Ｊ８グリッド出土遺物である。932・933・938のようにやや寸の詰まった縦長剥片が若干見られるほかは、打面を広く持った横長剥片を主体とする。やはり礫面を留めたものが散見される。

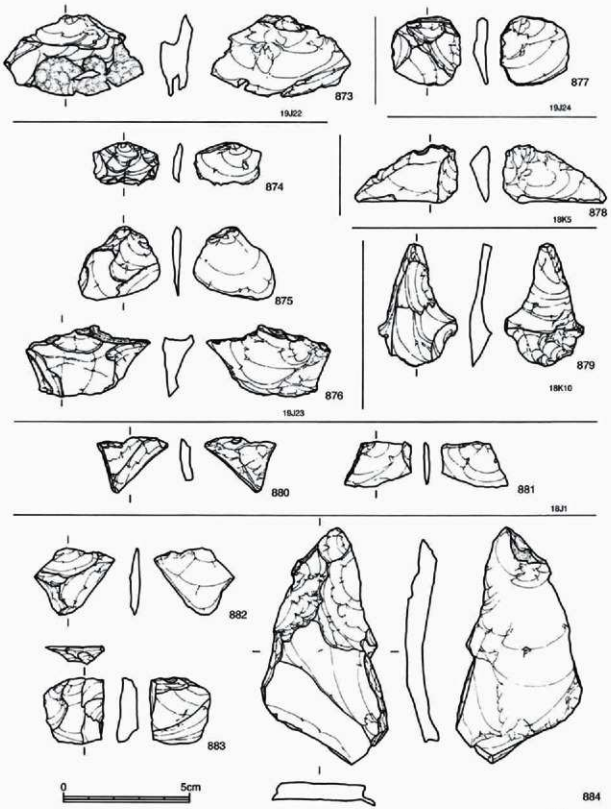




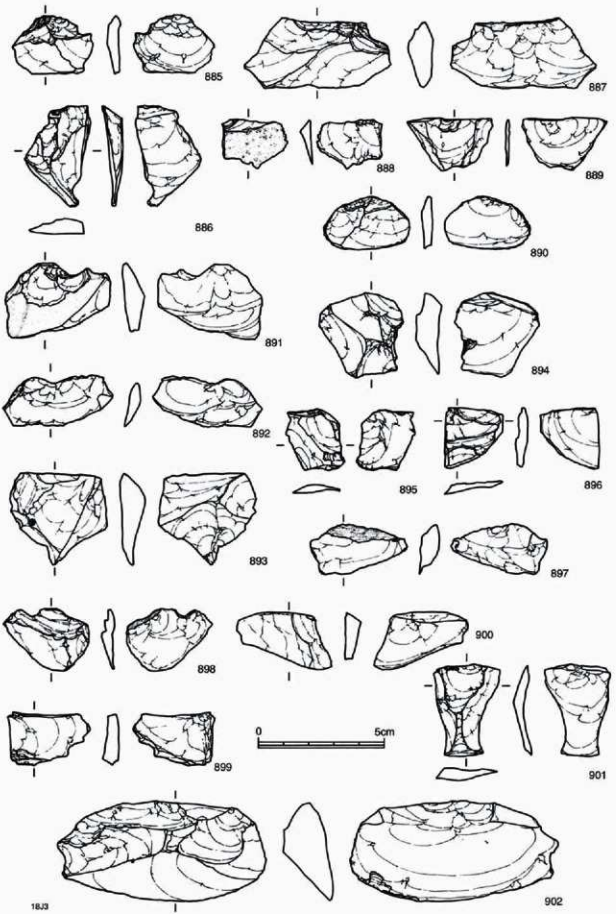
第147図　石器集中部B１出土石器　敲石（1/2）



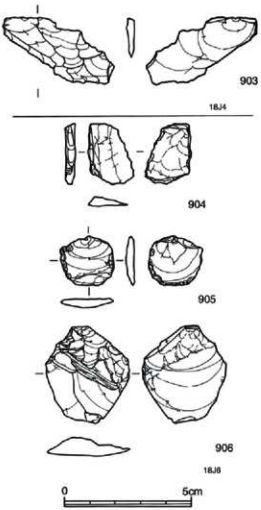
第148図　石器集中部B１出土石器　凹石・敲石（1/2）



第149図　石器集中部B１出土石器　剥片（1）(2/3)



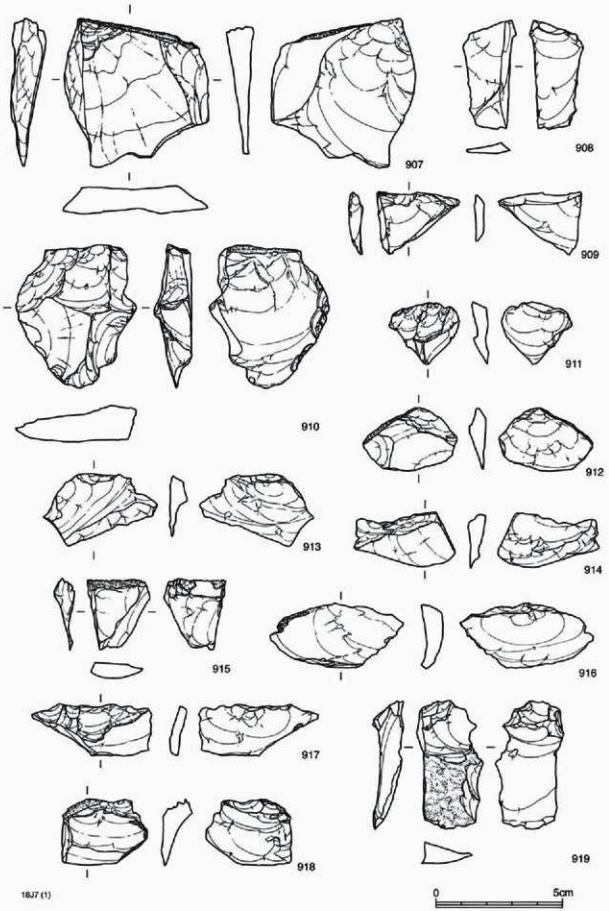
第150図　石器集中部B１出土石器　剥片（2）(2/3)



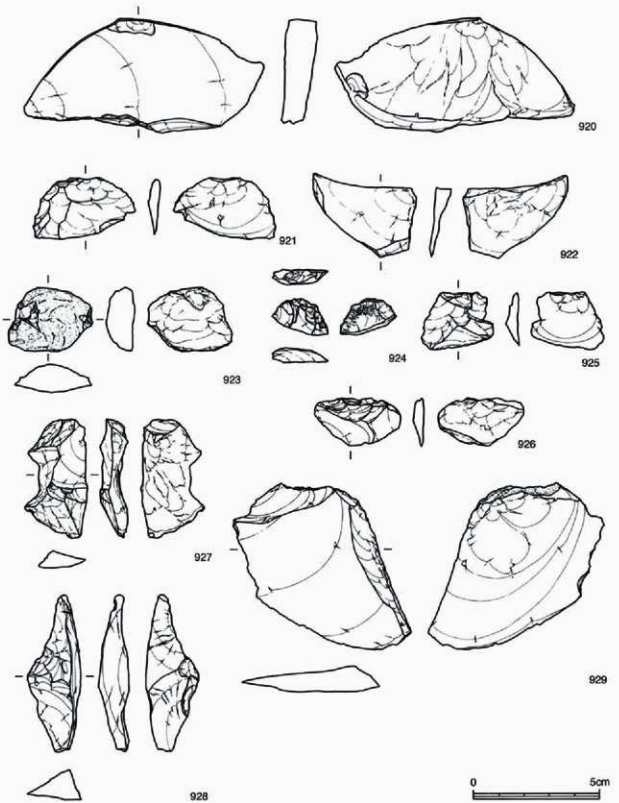
第 151 図　石器集中部Ｂ１出土石器
剥片（３）(2/3)

第 155 図は 18 Ｊ９～ 14･18 出土遺物である。このあたりに来ると図化しうる剥片は散漫となってくる。剥片の形状は縦長・横長・不整形とまちまちである。第 156 ～ 162 図は接合資料を図化したものである。第 161 図はサヌカイト石材の産地推定分析を実施した資料である。

第 163 ～ 170 図は各器種の分布図である。第 163･164 図は石鏃･異型石器の分布とその平面形状を示す。集中部ほぼ全面から出土していることがわかり、石鏃の形態と分布状況に差は見られない。第 165 図は石錐の分布状況である。北半部からの出土であり、形態に顕著な差はない。第 166 図は石核の分布状況である。概ね集中部全体に散漫に分布しているが、857・859・861・863・868 のグループ、981・996 のグループが密度の濃い部分の外縁から出土している状況が見て取れる。第 167 図は楔形石器、第 168 図はＲＦ、第 169 図は石匙未製品の分布状況である。顕著な特徴は見られない。第 170 図はスクレイパーの出土状況である。集中部の南半部に集中する傾向が見られる。

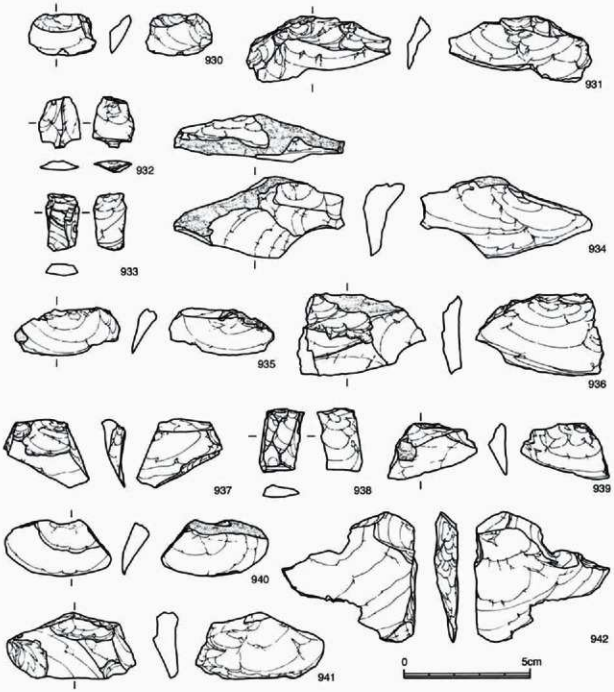


第 152 図　石器集中部Ｂ１出土石器　剥片（４）（2/3）



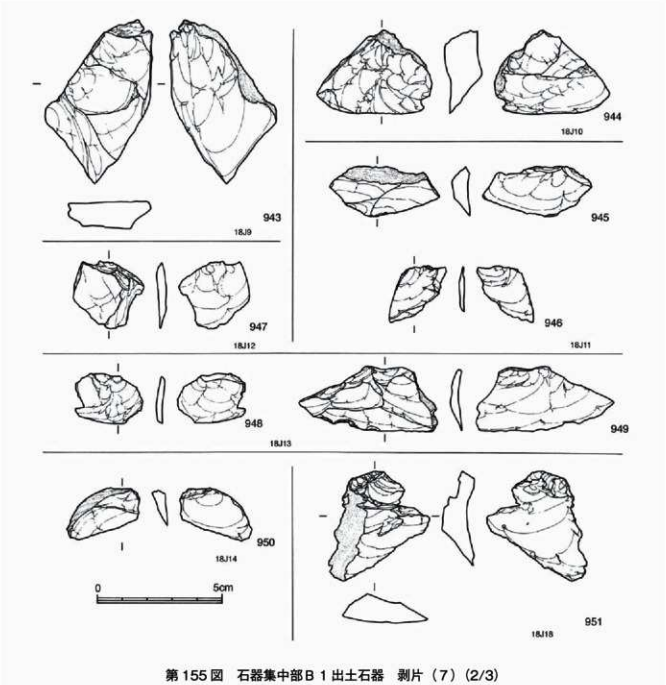
16J7 (2)

第153図　石器集中部B１出土石器　剥片（５）（2/3）

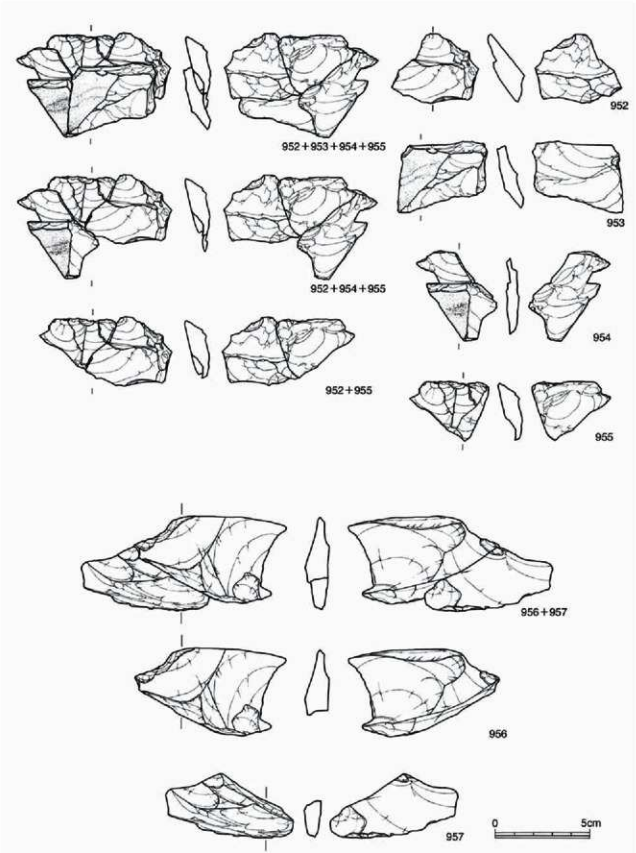


15J8

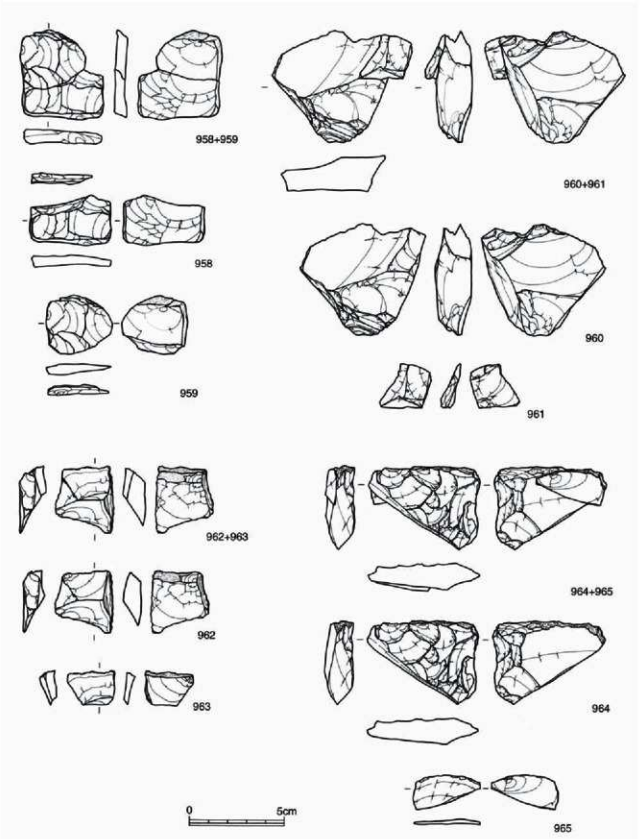
第154図　石器集中部B１出土石器　剥片（6）(2/3)



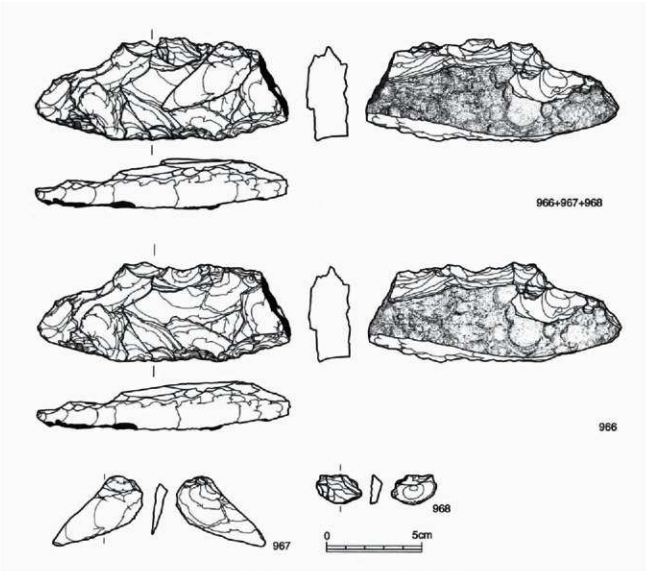
第155図　石器集中部B１出土石器　剥片（7）(2/3)



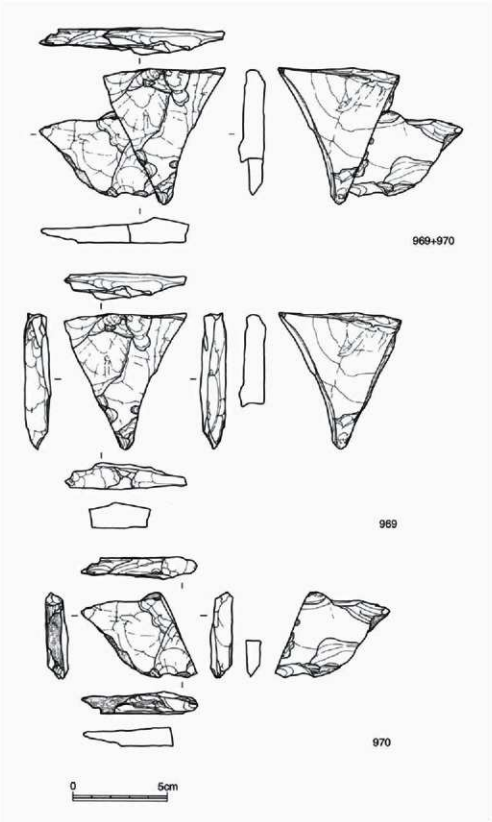
第156図　石器集中部B１出土石器　接合資料（１）（1/2）



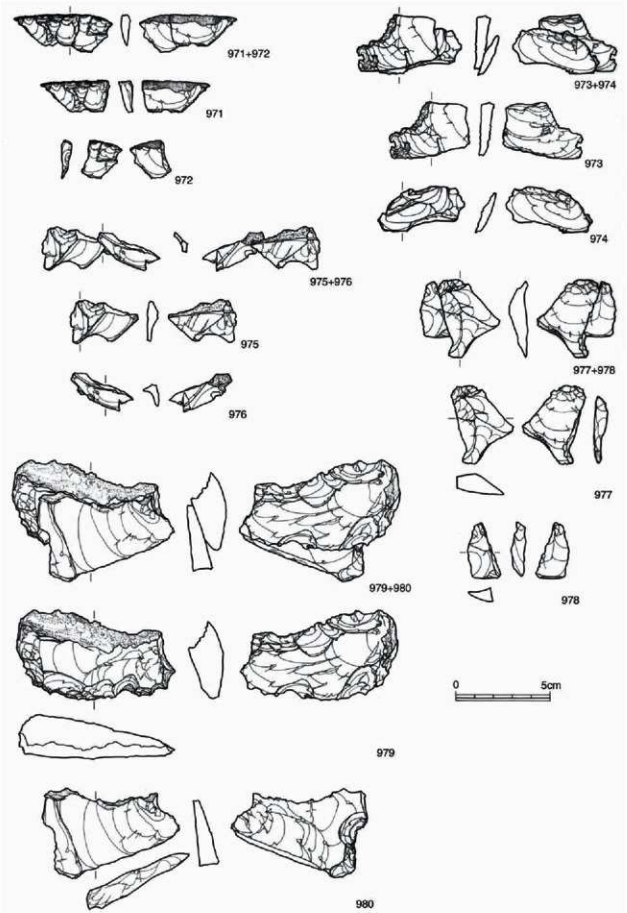
第157図　石器集中部B１出土石器　接合資料（2）(1/2)



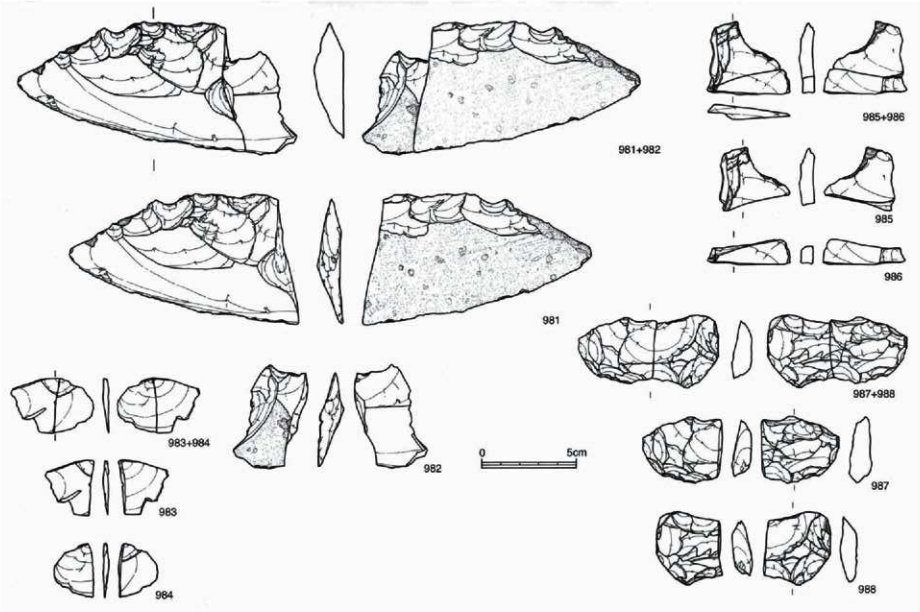
第158図　石器集中部B１出土石器　接合資料（3）（1/2）



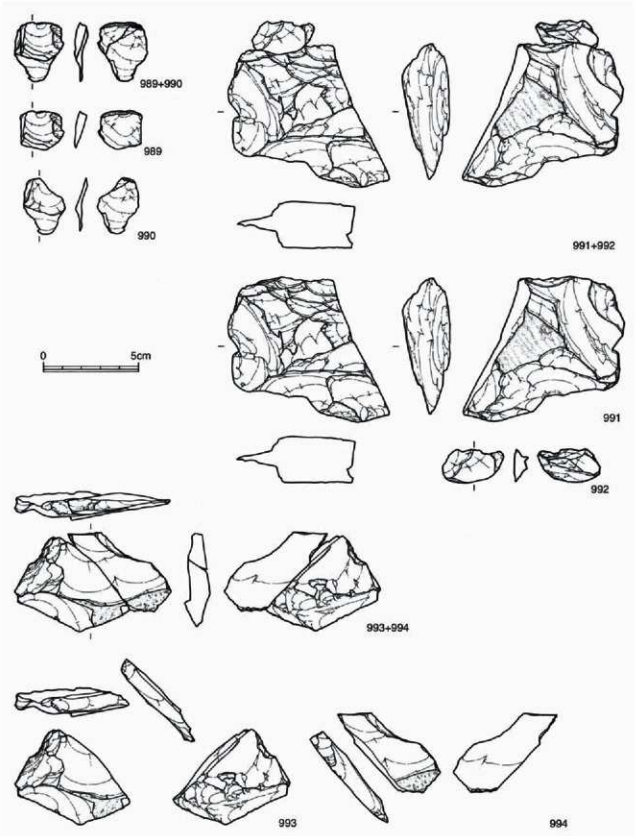
第159図　石器集中部B１出土石器　接合資料（４）（1/2）



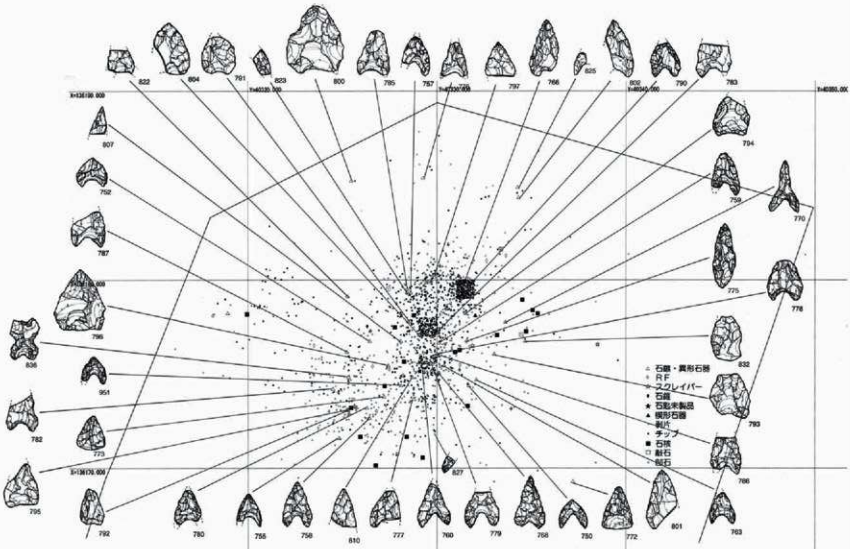
第160図　石器集中部Ｂ１出土石器　接合資料（５）（1/2）



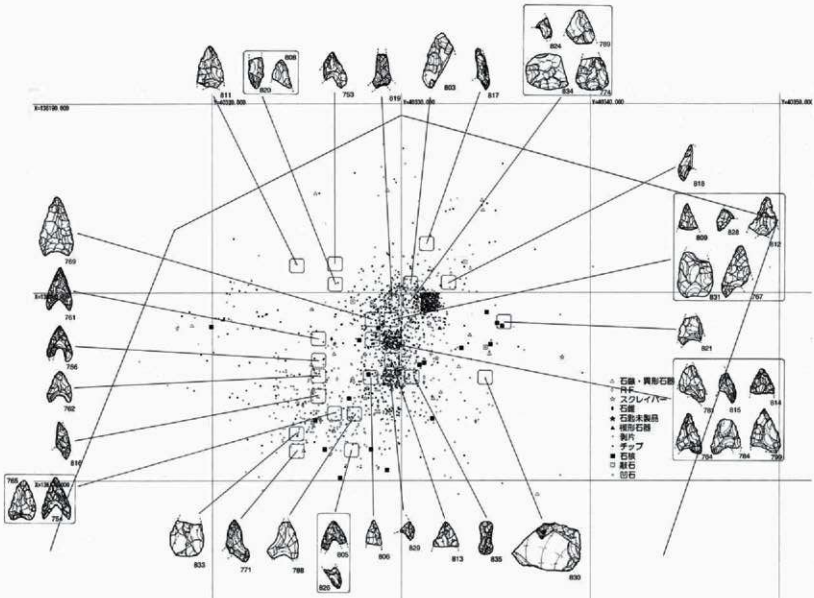
第161図　石器集中部B１出土石器　接合資料（6）(1/2)



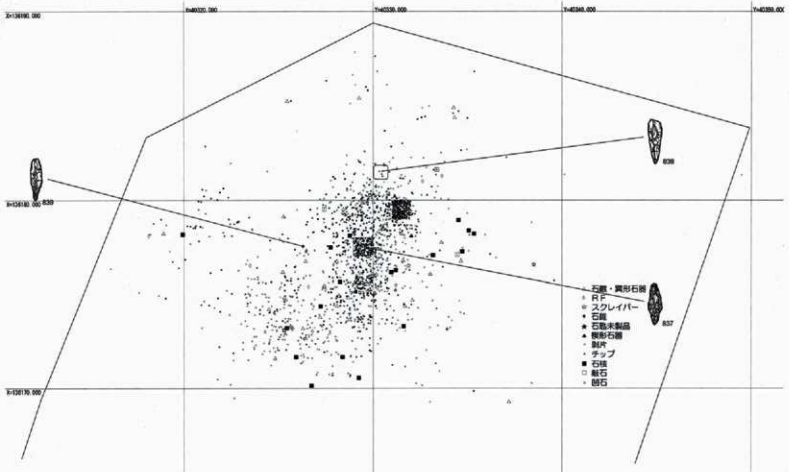
第162図　石器集中部B１出土石器　接合資料（7）（1/2）



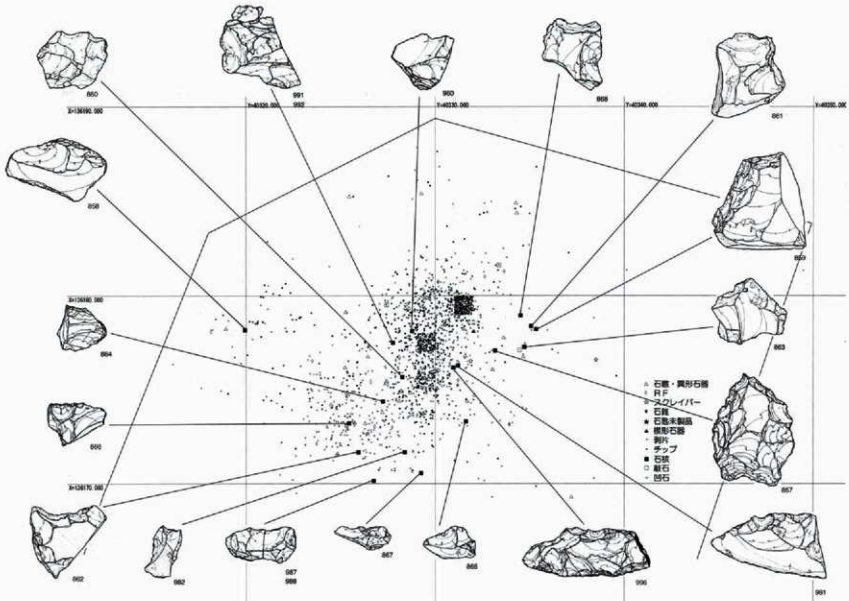
第163図　石器集中部Ｂ１出土遺物分布図（1）（1/200・1/2）



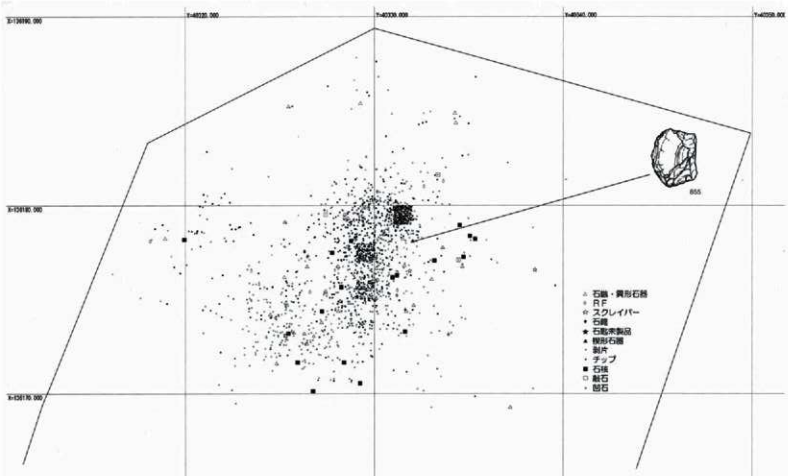
第164図　石器集中部Ｂ１出土遺物分布図（２）（1/200・1/2）



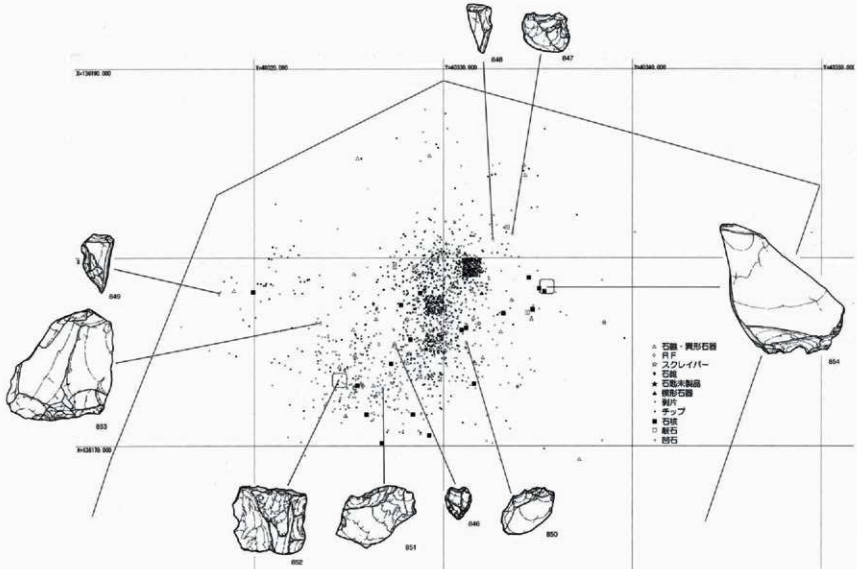
第 165 図　石器集中部Ｂ１出土遺物分布図（３）（1/200・1/2）



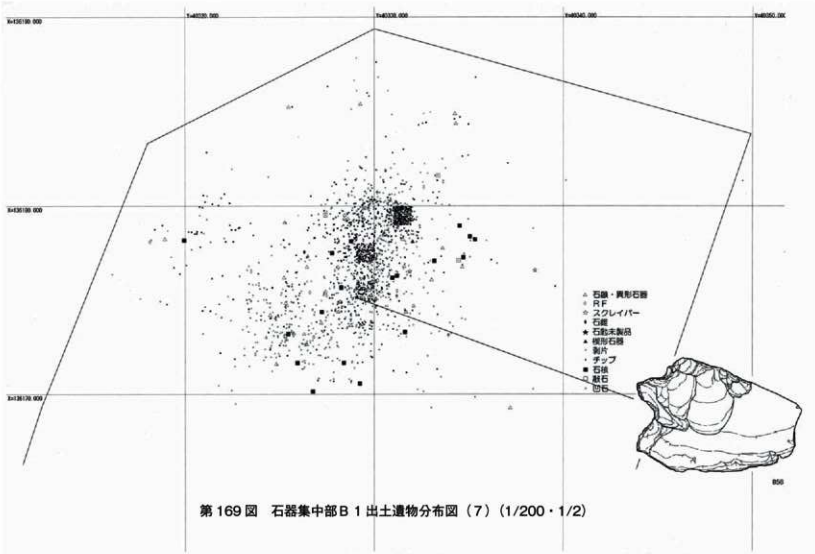
第166図　石器集中部B１出土遺物分布図（４）（1/200・1/2）



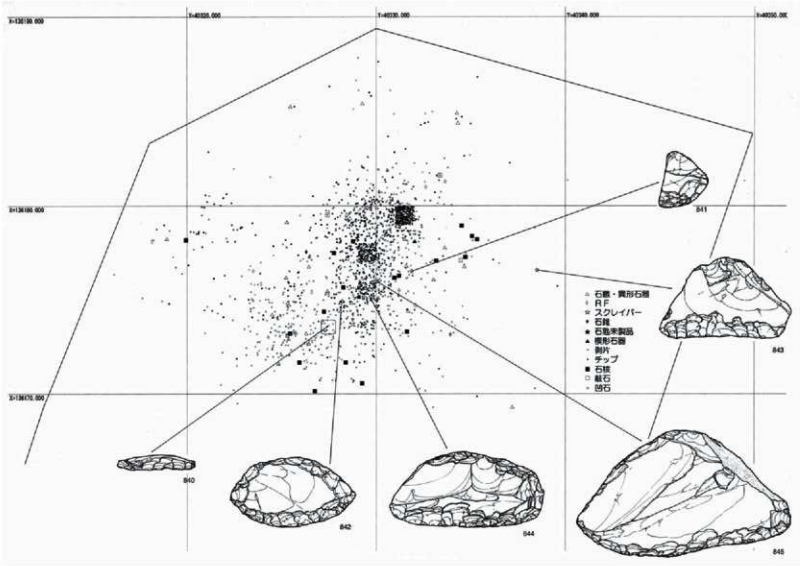
第167図　石器集中部Ｂ１出土遺物分布図（５）（1/200・1/2）



第168図　石器集中部Ｂ１出土遺物分布図（６）（1/200・1/2）



第169図　石器集中部B１出土遺物分布図（７）（1/200・1/2）



第170図　石器集中部Ｂ１出土遺物分布図（8）（1/200・1/2）

石器集中部Ｂ２（第 171 ～ 173 図）

Ｇ地区中央南寄りで検出した遺構である（第 171 図）。STd01 掘削中に確認した遺構で、東西 16 m、南北 12 mの範囲にわたって検出した。遺物の密度はかなり散漫である。

第 172・173 図はＢ２出土の石器である。石器集中部Ｂ１に比べると定型石器の量がやや少ない。995 ～ 1000 は石鏃である。1000 以外は凹基式である。995 はやや細身を呈するが、996 ～ 998 はやや寸が詰まる。999 は脚部片である。1000 は突基式に分類したが、全体的に鈍い作りとなっており、未製品か別の器種に分類される可能性がある。1001 はスクレイパーである。背面に原礫面を留めた縦長剥片を素材とし、そのほぼ全周に二次加工が施される。刃部は素材剥片の腹面側からやや急角度で連続的に施された二次加工により作り出される。1002 はＲＦである。やや薄手の剥片の打面側表裏に浅い二次加工が施される。1003 は 1004 ～ 1007 は石核である。1004・1005 は石核の表裏から交互に横長剥片を剥離し、ほぼ限界まで剥離作業を行ったものである。作業面は正面と背面の２面に設定されている。1006 は肉厚の剥片を素材とし、その全周から求心的に剥片剥離作業を行ったものである。1007 は 1006 と同じ性格のもので、剥片剥離作業の初期工程と考えられる。すべてサヌカイト製である。

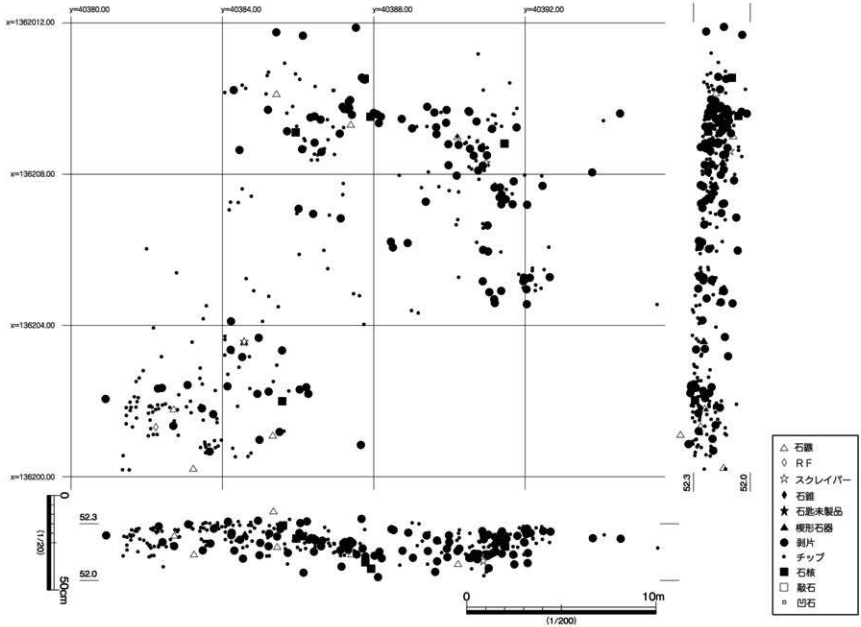
各地区・包含層出土遺物

以下、各地区における包含層の状況および出土した遺物についての記載を行う。なお、記載は原則土器をまとめて行い、その後に石器についての記載を行う。また、石器については遺構出土資料についてもここで触れる。基本的に当該期の遺構から出土したのではなく、本来の位置から遊離したものがほとんどであると判断した為である。

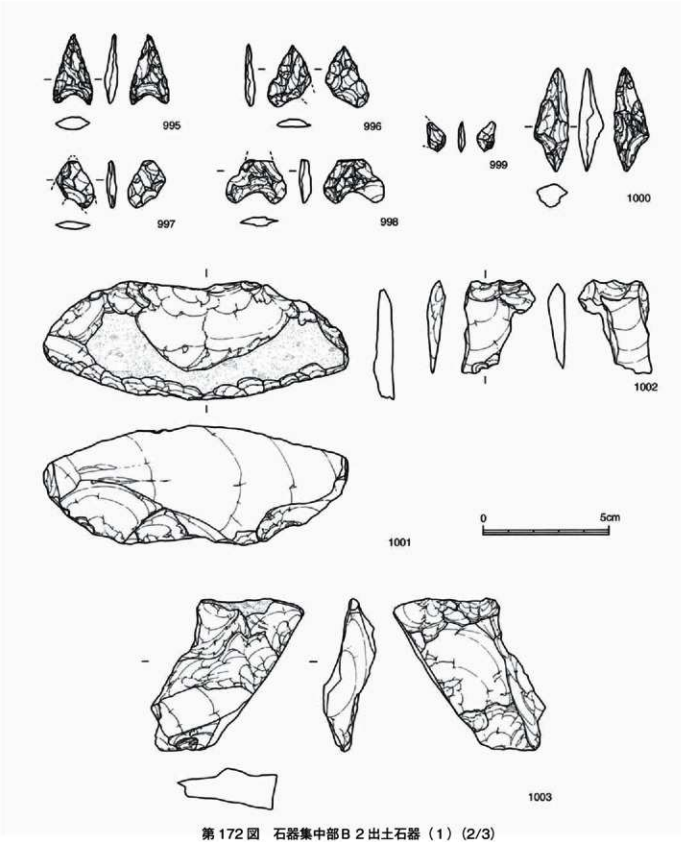
Ｇ地区包含層

地形的にはＧ地区中央付近を東西に横切るようにやや高く、北および南へ向けて緩やかに低くなる傾向がある。それに伴い包含層の厚さも変化する。ただし、後世の耕作に伴い平坦化が図られた結果、かなりの部分で遺構面が削平されたところがあるようで、遺構面よりも上位から出土した遺物がやや目立つ。

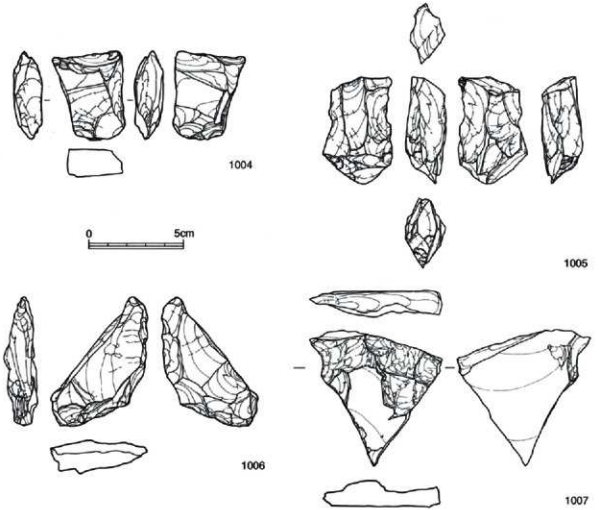
第 174 図はＩ 21 区出土土器である。SRd01 とその周辺の上面について機械掘削・平面精査を行っている最中の遺物が多い。1008 ～ 1010 は須恵器杯である。小片が中心であり、全体の形状は判別し難いが、平坦な底部から直線的な体部が斜め上方に延びる形状を持つものと考える。器壁は薄く仕上げられる。1011 は須恵器高杯脚部である。1012 は須恵器蓋の摘みである。1013 ～ 1016 は須恵器椀である。口縁部の小片が中心であり、全体の形状は不明である。1017 は須恵器壺である。底部片であり、全体の形状は不明で皿に分類される可能性もあるが、内面見込み部の調整が粗いことから壺に分類した。1018 は瓦質土器捏鉢である。1019 は瓦器椀、1020 は土師質土器杯、1021・1022 は土師質土器小皿にそれぞれ分類した。1008 ～ 1012・1017 は古代後半頃のものが中心と考えられる。SRd01 上層出土遺物の時期に近い。また、1013 ～ 1022 はＧ地区北西隅部の中世遺構群の遺物と近接した時期のものと考える。第 175 図はＨ 19 区出土土器である。1023・1024 は弥生土器甕である。共に小片であり、詳細な形状は不明である。概ね後期頃のものと考える。1025 ～ 1027 は須恵器杯である。いずれも小片であり詳細な器形は不明である。1028 は須恵器高台付杯である。1029 は須恵器蓋である。小片のため、詳細は不明であるがかなり大型品に復元できる。1033 は瓦器椀、1030 は須恵器壺蓋、1031・1032 は須恵器壺である。



第 171 図　石器集中部Ｂ２平・断面図



第172図　石器集中部Ｂ２出土石器（1）(2/3)

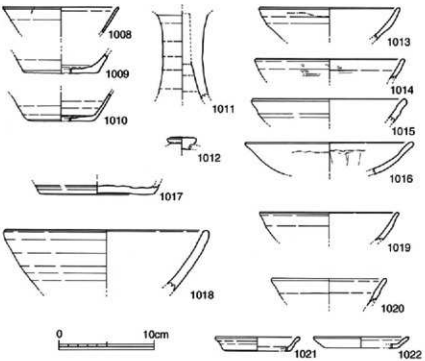


第173図　石器集中部B２出土石器（２）(1/2)

1030は薬壺の蓋か。1034・1035は須恵器椀である。1036は土師質土器甕である。

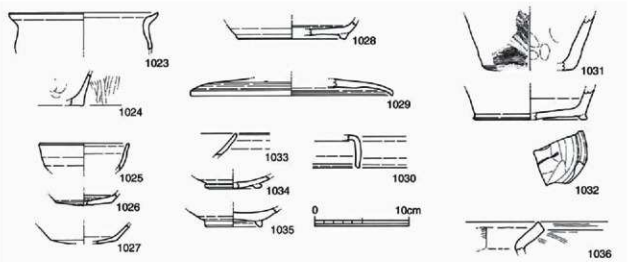
第176図はF 19区出土土器である。1037～1039は須恵器杯である。1040は須恵器高台付杯である。1041・1042は須恵器蓋の摘みである。1043・1044は須恵器蓋である。1045は須恵器皿、1046･1047は須恵器椀である。1048は土師質土器捏鉢、1049は土師質土器土釜脚部である。第177図はG地区の予備調査時出土遺物である。1050は須恵器杯、1051は須恵器高台付杯、1052は須恵器高杯、1053は須恵器蓋、1054・1055は須恵器皿、1056は土師質土器土釜である。

第178図はⅠ21区出土石器である。1057～1077は石鏃である。1064・1065・1067はSDd004、1060はSDd005、1066・1072はSRd01上層、1077はSRd01中層から、残りは包含層からの出土である。圧倒的に凹基式が多く認められ、平基式に分類されるのは1067・1068程度である。1057～1061、1065のように、表裏共に器体中央付近まで二次加工が及ぶ比較的丁寧な作りのものがある一方、1062～1064、1066～1076のようにやや粗く、片面ないし両面に素材面を残した周縁部のみの加工で終わるような例もある。1064・1077などは未製品である可能性もある。いずれもサヌカイトを用いる。1078はSRd01中層出土のスクレイパーである。原礫面を留めるやや縦長気味の剥片を素材とし、背面から

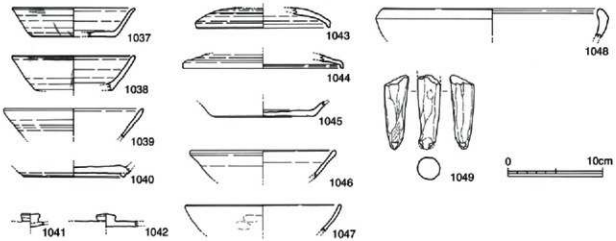


第174図　Ⅰ21区包含層出土遺物（1/4）

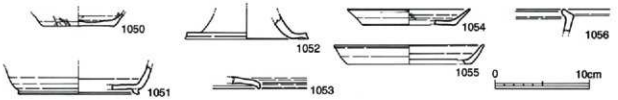
覆面へ向けて急峻な二次加工を施して整形する。長軸側の加工に比べると短軸側の加工はやや浅い。サヌカイト製。1079はSRd01上層出土の楔形石器である。サヌカイト製。縄文時代・弥生時代のものが混在していると見られる。第179図はH 19区出土石器である。1080～1084は石鏃である。1081がSTd01から、1083がSRd01上層から、それ以外は包含層からの出土である。1080～1082は凹基式、1083は凸基式、1084はやや分類に悩むが、柳葉形鏃に分類できるか。両側縁部にやや急峻な二次加工が施されるが、先端部に明確な尖頭部が作り出されていない。あるいは未製品か。1081はSTd01から出土しているが、下層に石器集中部B 2が存在することから、この遺構起源の可能性も想定できる。いずれもサヌカイト製。1085はサヌカイト製のスクレイパー、1086・1087はSRd01出土の打製石包丁である。1086は原礫面を打面とした横長剥片を素材として、剥片末端部に浅い二次加工を施して成形したものである。打面側には加工は施さない。両側縁に浅い刳り込みを施す。1087は横長剥片を素材に用い、端部に連続した細かい剥離痕を留めるものである。共にサヌカイト製。第180図はF 19区出土のサヌカイト製石匙である。刃部は連続する浅い二次加工で、摘み部は粗い二次加工でそれぞれ作り出される。



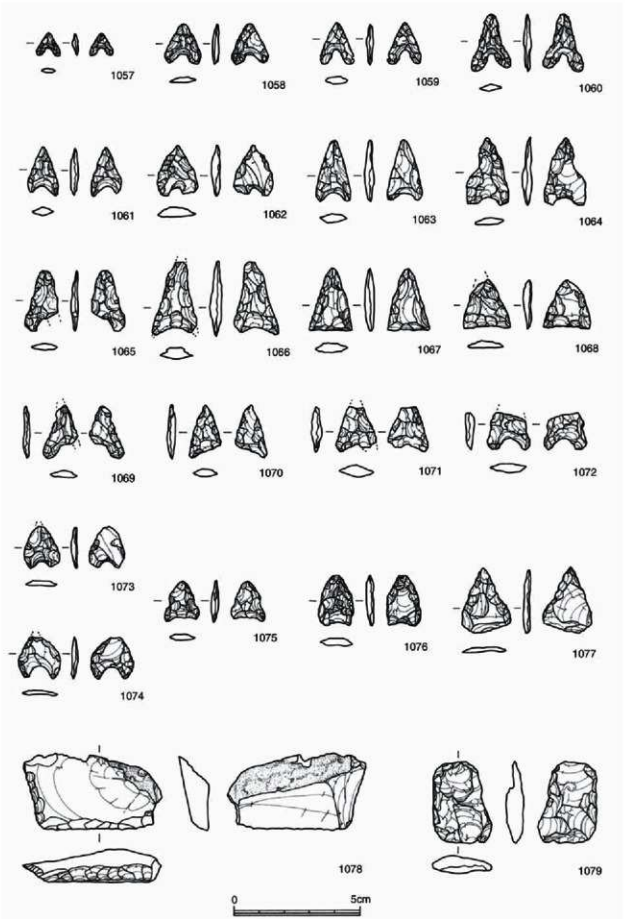
第175図　H19区包含層出土遺物（1/4）



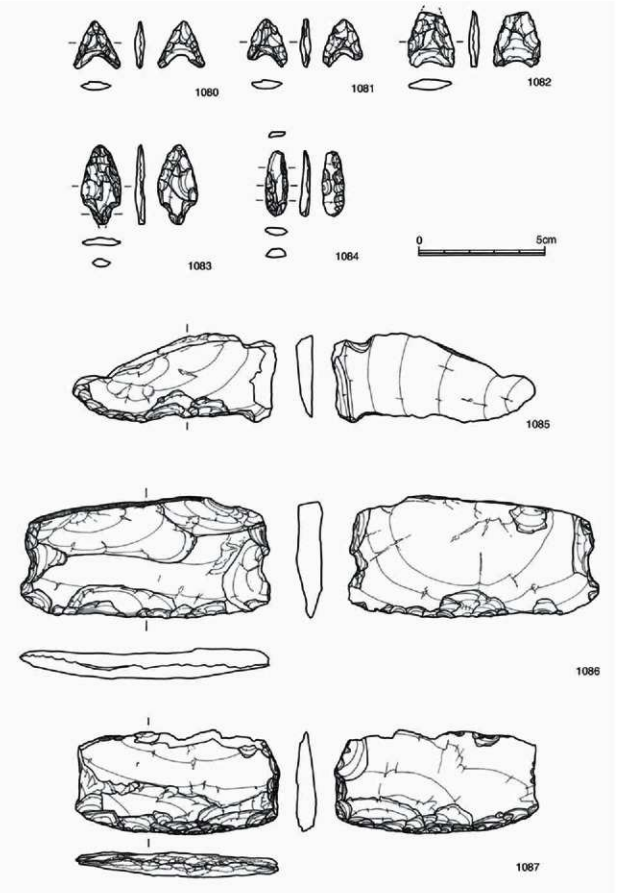
第176図　F19区包含層出土遺物（1/4）



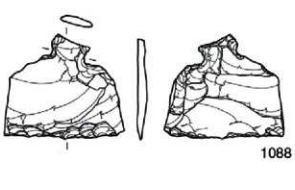
第177図　G地区（予備調査トレンチ）出土遺物（1/4）



第178図　Ⅰ21区出土石器（2/3）



第179図　H19区出土石器（2/3）



第180図　F 19区出土石器（2/3）

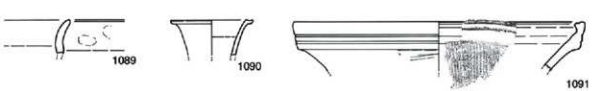
H地区包含層

この地区も北東部を中心にSRd01が存在するほか、南西隅にSRd04が存在することから、南東隅から北西隅へ向けて緩やかな高まりが形成され、相対的に北東隅および南西隅に浅い窪地が形成される。

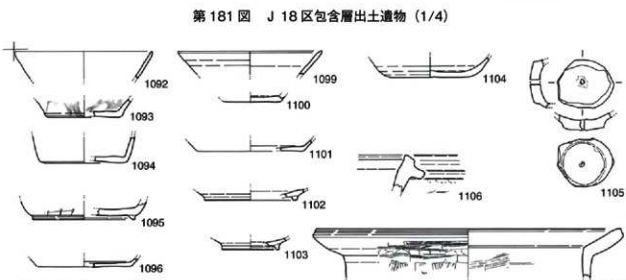
第181図はJ 18区出土土器である。図化しうるものはあまり顕著ではない。1089は弥生土器甕に分類した。1090は須恵器壺である。ともに石器集中部B 1の上面検出中に出土したものである。1091は備前系陶器擂鉢である。遺構上面を覆う包含層の時期を示すか。

第182図はI 18区出土土器である。機械掘削時に出土したものが多く、機械を集中して使用した北側のSRd01周辺の遺物が主体となると見られる。また、南西隅部の包含層掘削時の遺物も若干あり、SRd04によって形成された窪みに堆積した層と見られる。1092～1094は須恵器杯である。いずれも小片であり、全体の形状は判別しがたい。1095は須恵器高台付杯である。1096・1097は須恵器皿である。1098は須恵器壺に分類した。内面見込みの調整が1095に比べ粗く、同器種に分類した。1099・1100は土師器杯、1101は土師器皿、1102は土師器高台付皿にそれぞれ分類した。1103は黒色土器椀に分類した。1104は土師質土器杯に分類した。1105は土師質土器耳皿である。長軸方向の内面形状が弱い湾曲を示すのに対し、短軸方向の内面形状が同様に弱い湾曲を示しつつ体部との境付近で強い屈曲部が見られることから、長軸方向に沿って体部の強い折り曲げが施されたものと考え、そのような特徴を持つ耳皿であると判断した。内面見込み中央部に底部外面から内面へ向けて施されたと見られる穿孔が観察できる。1106は土師質土器羽釜、1107は土師質土器土釜である。1108・1109は白磁椀である。

第183図はI 17区出土土器である。1110は須恵器壺である。1111は土師質土器土釜である。第184図はF 17区出土遺物である。機械掘削・平面精査時に出土したものが多い。この調査区はほぼ全面がSRd01ないしSRd02に占められ、特にSRd01上層が調査区のほぼ全面を覆っていた状況から考えて、出土遺物の大半はSRd01に帰属する可能性が高い。1112・1113は弥生土器壺である。1112は前期の壺口縁部と見られる。1114～1119は須恵器杯である。いずれも小片であり詳細不明であるが、8世紀後半頃のものが主体であると考える。1120～1122は須恵器高台付杯である。1123～1125は須恵器蓋である。1126・1127は須恵器皿、1128は須恵器壺、1129は須恵器甕にそれぞれ分類した。1130・1131は土師器杯に分類した。1132は黒色土器椀、1133は土師質土器椀、1134は土師質土器杯にそれぞれ分類



第181図　Ｊ18区包含層出土遺物（1/4）

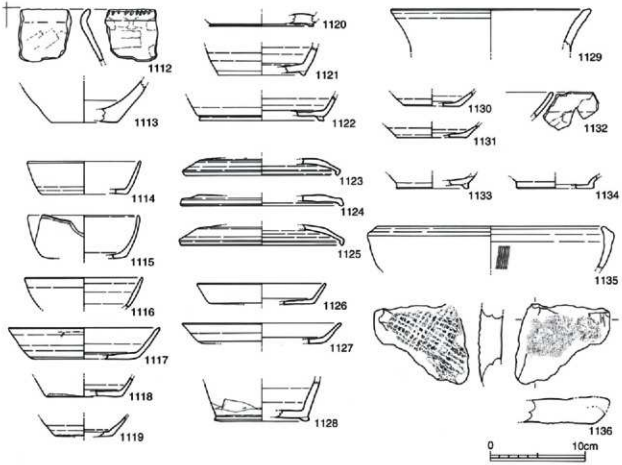


第182図　Ｉ18区包含層出土遺物（1/4）

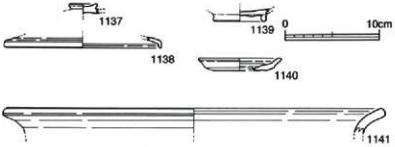
した。1135は土師質土器擂鉢である。内面に6条の卸し目を認める。1136は平瓦片である。第185図はＨ地区予備調査で出土した土器である。1137・1138は須恵器蓋である。1139は土師質土器椀、1140は土師質土器小皿である。

第186図はＪ18区出土の石器である。遺物はSDd041・042およびSRd05から出土しているが、SDd041・042は石器集中部Ｂ1を横断しており、溝を掘削した際に石器集中部Ｂ1の石器が巻き上げられたものである可能性が考えられ、混入品と見たほうがよい。また、SRd05から出土したものも、他に時期を示すものが認められず、混入の可能性も捨てきれない。1142・1143は石鏃未製品である。1142はやや作業が進んでいるが、1143と共に素材の側縁部の平坦面や素材の縁辺を折り取った面から調整加工を施したことが窺える。同様の加工は石器集中部Ｂ1の資料でも見られる（第137図796・第140図830）。1143はSRd05から出土した資料であることから、石器集中部Ｂ1との直接的な関係は想定しにくい。1144は石錐に分類した。横長剥片の打面とその対辺に二次加工を施したものである。打面は一部残置され、バルブが残る。下端部を一部欠損することから詳細は不明であるが、未製品である可能性もある。1145はスクレイパーである。礫面を打面とする肉厚の横長剥片を素材とし、素材の背面側から腹面側へ向けて浅い連続的な二次加工を施す。SDd042から出土した。1146・1147はSRd05下層出土の石匙である。1148はＪ18区南東部平面精査中に出土した、やや粗製の槍先形尖頭器である。

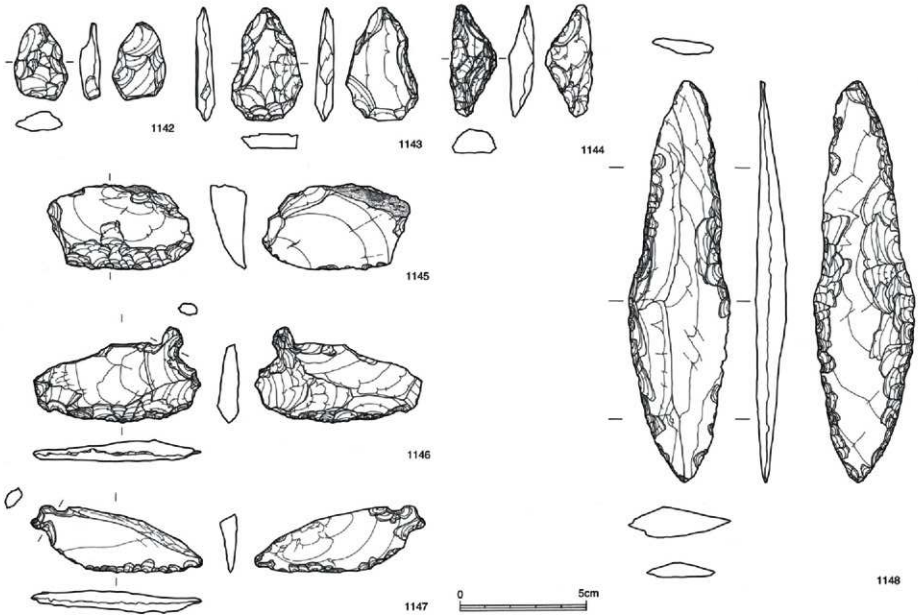
第183図　Ｉ17区包含層出土遺物（1/4）



第184図　Ｆ17区包含層出土遺物（1/4）



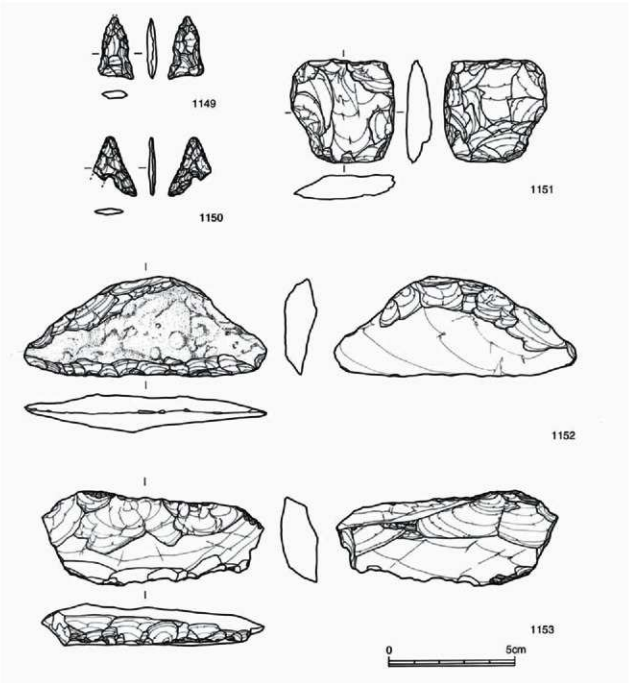
第185図　Ｈ地区（予備調査トレンチ）出土遺物（1/4）



第186図　J 18区出土石器（2/3）

扁平な横長剥片の表裏周縁部に浅い二次加工を施すもので、特に裏面に当たる素材剥片腹面側が顕著である。これはバルブの除去し、器体を薄く仕上げることを目的としたものであると考えられる。なお、特筆する点として、SRd05から出土したもののなかに、大分県姫島産と見られる乳白色の黒曜石の細片が1点認められる。その他の石材はすべてサヌカイトである。

第187図はⅠ18区出土石器である。この調査区でも、遺構内に混入した形での石器が主体となる。1149・1150は石鏃である。前者はSRd05、後者はSDd044から出土した。1151はSRd01上層出土の楔形石器である。1152は包含層出土のスクレイパーである。背面が原礫面からなる横長剥片の端部に、連続するやや急峻な二次加工を施すものである。打面部は表裏共に二次加工を施し、特に裏面はバルブ

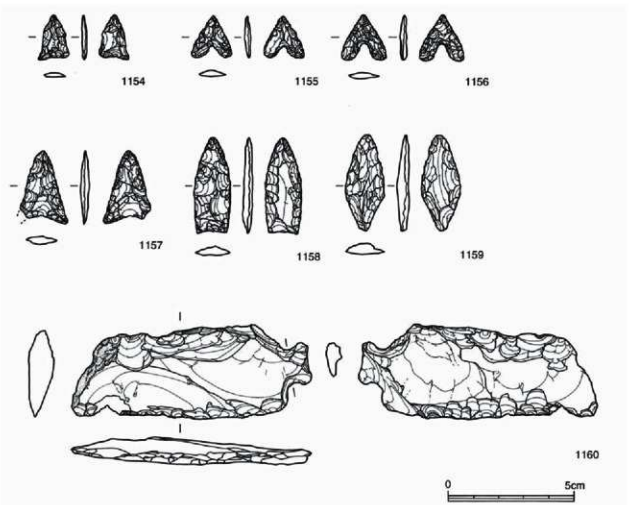


第187図　Ⅰ18区出土石器（2/3）

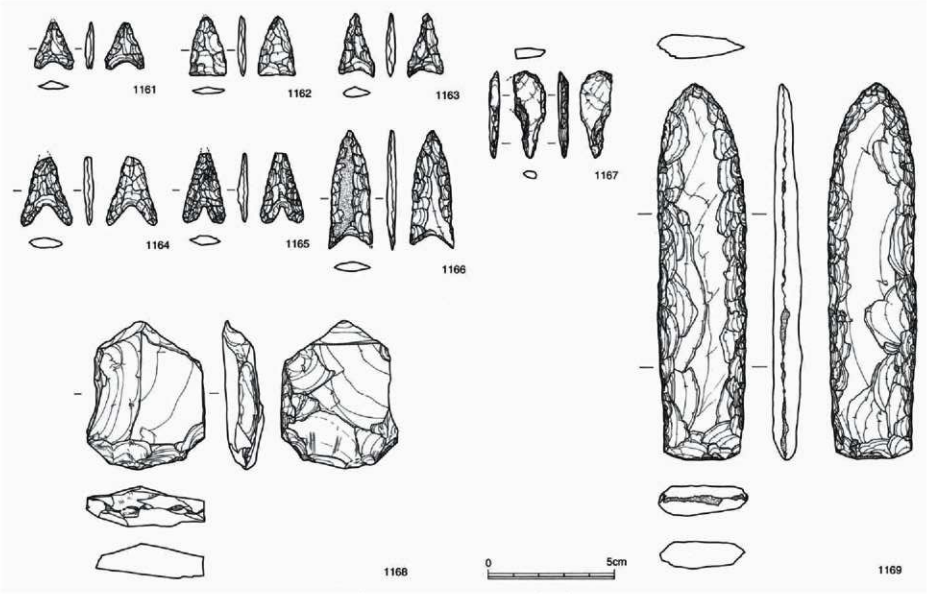
が概ね除去された状態になる。1153 は SRd01 中層出土の R F である。肉厚の横長剥片の背面側から腹面側へ向け、連続的で単位の粗い急峻な二次加工を施すものである。打面腹面側にも平坦で粗い二次加工が施される。石材はすべてサヌカイトである。

第 188 図は H 17 区から出土した石器である。SRd01・02、SDd042 から出土したものを含む。SDd042 出土遺物は SRd01・02 いずれかの出土と見られる。1154 ～ 1159 は石鏃である。1154 は五角形鏃で縄文時代晩期のものと考えられる。SDd042 出土である。1155 ～ 1157 は凹基式の石鏃である。1156 は所謂「鍬形鏃」に分類できるか。SRd01 上面出土である。1155・1157 は SRd02 出土である。1158 は平基式の石鏃である。薄い横長剥片を素材とするものと見られ、表面は全面に二次加工が施されるが、裏面は周縁部のみが加工され、中心部には素材面が残置される。1159 は突基式の石鏃に分類した。SRd01 上層出土である。1160 は包含層出土の石匙である。背面にわずかに礫面を残置する。摘み部の作り出しは粗い二次加工による。石材はすべてサヌカイトである。

第 189 図は F 17 区出土石器である。SRd01･02 から出土したものを含む。1161 ～ 1166 は石鏃である。1162 以外は凹基式、1162 は平基式に分類した。1161 ～ 1165 は全面に調整加工が施されるが、1166 は表裏に素材面が残置される。背面に原礫面を留めた横長剥片が素材と見られる。1165 は SRd01 上･中層、1161 は SRd01 下層､1164 は SRd02 からそれぞれ出土した。1167 は石錐である。SRd02 上層出土である。



第 188 図　H 17 区出土石器（2/3）



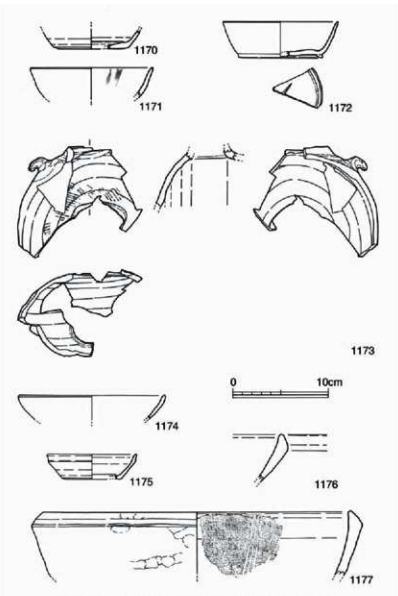
第189図　F 17区出土石器（2/3）

1168は打製石斧片である。刃部が下端になるよう図化しているが、使用に伴うと見られる擦過痕が表裏面および刃部端に認められる。SRd02出土である。1169は石槍である。大型の横長剥片を素材とし、その周縁部に浅い二次加工を連続的に施す。特に素材剥片の打面側には大きめの剥離を施している。また、基部両側縁と下端に敲打による潰し加工が施される。使用石材はすべてサヌカイト製である。

d地区包含層

この地区は平坦面と丘陵裾部とに大きく地形分類できる。平坦面では南西隅でSRd04が存在するほか、C 19区以北の遺構面が浅い窪地を呈する。包含層はその上面に堆積する。出土遺物はあまり多くはない。また、丘陵裾部は比較的厚い包含層が認められる。B 18区においては遺構面上面に堆積する層から奈良時代のものと見られる遺物が多く出土した。

第190図はE 17 N区から出土した土器である。1170・1171は須恵器杯である。1172は須恵器高台付



第190図　E 17 N区包含層出土遺物（1/4）

杯である。小片のため全体の形状は不明であるが、底部外面に十字のヘラ記号が認められる。1173は提瓶である。体部の大半および頸部から口縁部を欠質しており、全体の形状は不明であるが、各面に見られる調整痕から成形の過程が追えそうである。まず、体部を横位にした状態で回転ナデによる成形がなされる。その後、図正面側に円盤充填の痕跡が、その周辺にタタキ目がそれぞれ認められることから一度体部は円盤充填によって風船状にすべての口が閉じた状態となったであろう。その後、頸部を取り付ける部分に穿孔を行い、口縁部をその穴に差し込み、精緻なナデ調整を施して仕上げたものと考えられる。

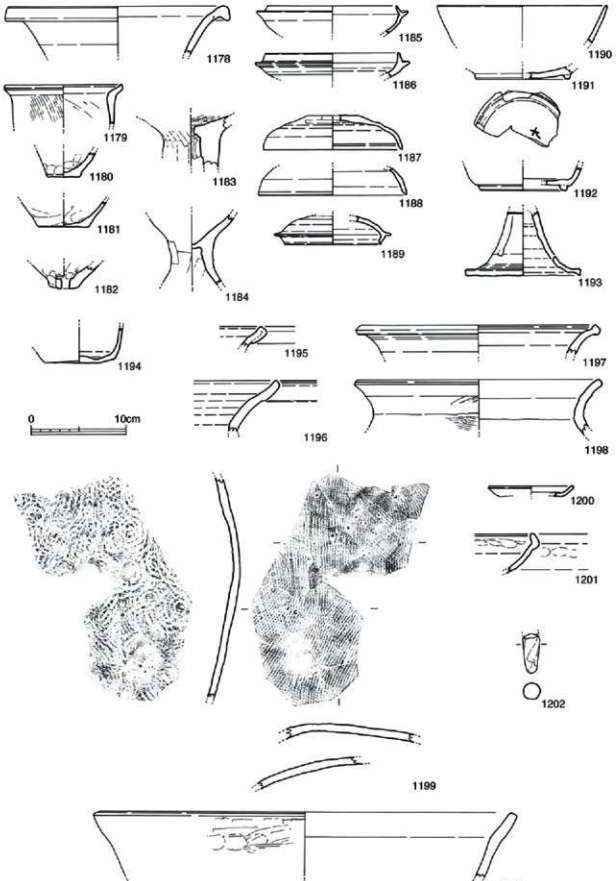
1174は黒色土器椀、1175は土師質土器杯、1176は土師質土器捏鉢、1177は土師質土器擂鉢にそれぞれ分類した。

第191～194図はB 18区から出土した遺物である。第191図は大きく包含層として取り上げた遺物である。1178～1184は弥生土器である。1178は壷、1179～1181は甕、1182は甑形土器、1183・1184は高杯に分類した。1185～1189は須恵器蓋杯である。1185～1188は古墳時代後期後半頃のものと考えられる。1189は古墳時代終末頃のものと考えられる。1190は須恵器杯である。1191・1192は須恵器高台付杯である。1191は底部のみの破片であるが、外面に線刻が見られる。1193は須恵器高杯である。1194は須恵器壷底部、1195～1199は須恵器甕である。1200は土師質土器小皿。1201は土師質土器捏鉢、1202は土師質土器土釜脚部、1203は土師質土器土鍋である。

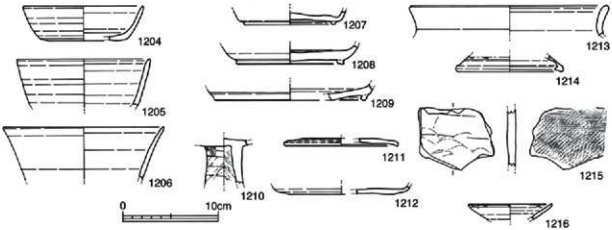
第192図はB 18区の上位包含層出土土器である。この下位に、後述する奈良時代のものを主体とする包含層が存在する。1204～1206は須恵器杯である。1204は底部と体部の境がやや丸みを帯びる。1205・1206はやや大振りの器形を呈する。1207～1209は須恵器高台付杯に分類した。1209は底径が他のものに比べ大きく、皿に分類すべきかもしれない。1210は須恵器高杯である。1211は須恵器蓋、1212は須恵器皿である。1213は須恵器壷、1214は須恵器壺蓋にそれぞれ分類した。1215は須恵器甕、1216は土師質土器小皿に分類した。概ね8世紀後半頃のものが主体と考える。

第193・194図は奈良時代包含層出土遺物として取り上げた土器である。出土量が比較的多く、遺存状態がやや良好なものが多い。1217～1220は弥生土器である。1217～1219は甕、1220は高杯である。弥生時代後期前半頃のものか。1221～1226は古墳時代のものと考えられる須恵器蓋杯である。1221・1222は身である。後期後半頃のものと考える。1223～1226は蓋である。1223は後期前半頃のもの、1224・1225は後期後半頃、1226は終末期のものと考える。1227～1230は須恵器杯、1231～1238は須恵器高台付杯、1239～1244は須恵器蓋である。1245は須恵器鉢、1246は須恵器壺頸部、1247は須恵器壺肩部、1248・1249は須恵器壺蓋に分類した。杯の形状だけから見ると 時期的なまとまりを持つ資料とは一概には言えないものの、概ね8世紀中頃～後半にかけてのものと考えられる。ただ、1246・1247の形状を見ると9世紀後半～10世紀にものの可能性が想定できる。1250～1253は須恵器甕、1254は提瓶、1255は須恵器甑把手に分類した。1256は土師器杯、1257・1258は土師器甑、1256例を見る限り、若干10世紀代のものと見られる資料も混じる。

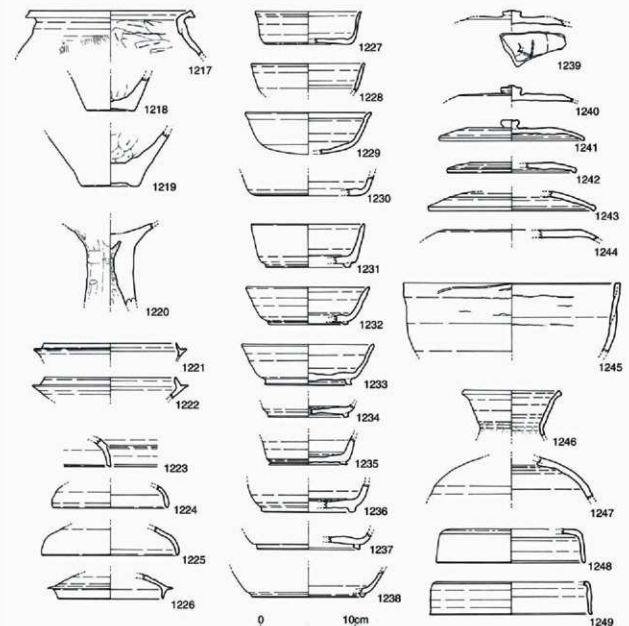
第195図はC 18区包含層出土土器である。1260は須恵器杯、1261は須恵器高杯、1262は須恵器皿、1263は須恵器壷、1264は須恵器甕にそれぞれ分類した。1265・1266は土師器杯、1268は土師器甑把手に分類した。1268は土師質土器土釜、1269は土師質土器羽釜、1270は土師質土器土鍋である。



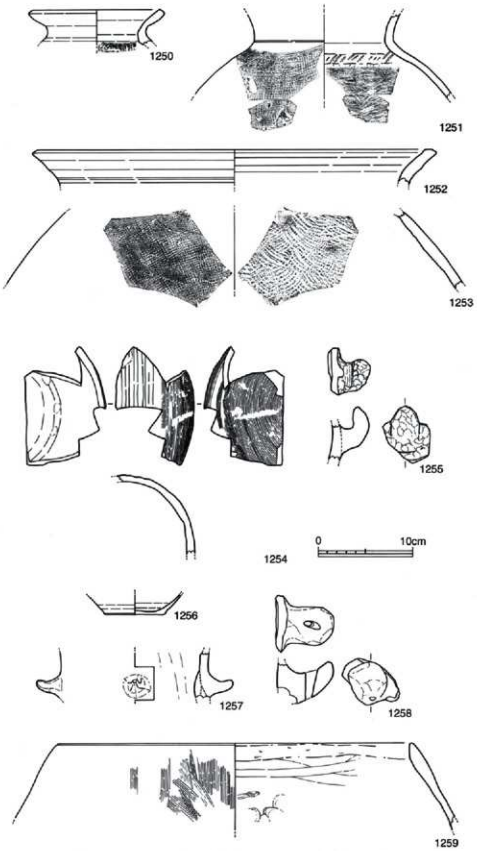
第191図　B 18区包含層出土遺物（1）（1/4）



第192図　B 18区包含層出土遺物（2）（1/4）

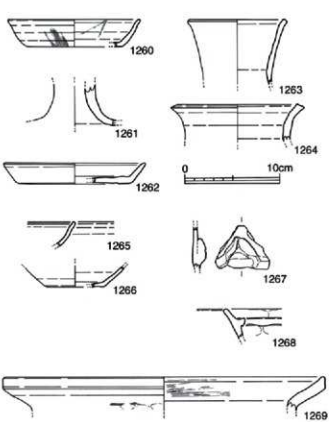


第193図　B 18区奈良包含層出土遺物（1）（1/4）



第194図　B 18 区奈良包含層出土遺物（2）（1/4）

第196図はC 19 E区包含層出土土器である。1271 ～ 1274は弥生土器である。1271は壷底部、1272・1273は甕、1274は高杯脚部である。1275 ～ 1279は須恵器杯である。概ね8世紀代のものが主体であると考えられるが、1279は9世紀～10世紀の所産と考えられる。1280・1281は須恵器高台付杯である。1282は古墳時代後期のものと考えられる須恵器無蓋高杯である。1283は須恵器椀、1284は須恵器捏鉢である。共に中世のもの。1285・1286は須恵器壷。1287・1288は土師質土器杯、1289 ～ 1291は土師質土器土釜、1292・1293は土師質土器土鍋、1294は白磁小皿である。1287はやや小型の器形で、小杯といったほうがよいかもしれない。

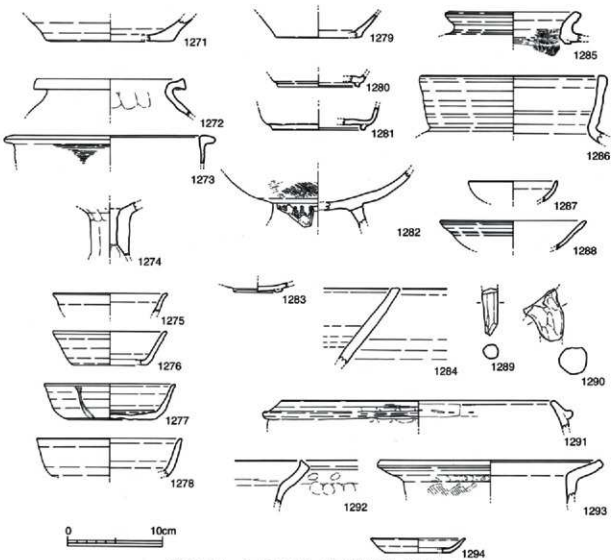


第195図　C 18区包含層出土遺物（1/4）

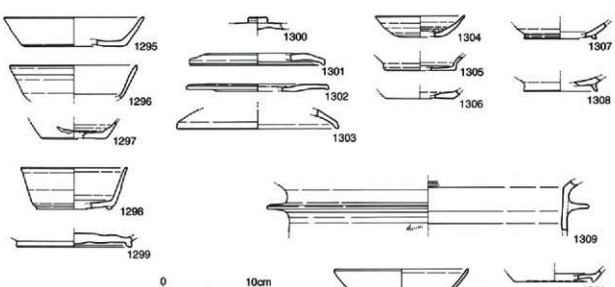
第197図はC 19 W区包含層出土土器である。1295 ～ 1297は須恵器杯、1298・1299は須恵器高台付杯である。1300 ～ 1303は須恵器蓋である。1304 ～ 1306は土師器杯である。1304は小型の部類に入り、小杯とすべきかもしれない。また、1305は円盤状高台を有する。1307は土師器椀、1308は黒色土器椀に分類した。1309は土師質土器羽釜、1310は緑釉陶器椀、1311は白磁皿である。

第198・199図はD19区包含層出土土器である。図化にある程度耐えうるものがやや多く出土している。1312は弥生土器高杯に分類した。1313 ～ 1324は須恵器杯である。小片のため全体の形状が不明なものが多いが、平坦な底部と直線的な体部を持つものが大半を占めるようである。1325 ～ 1331は須恵器高台付杯である。1333 ～ 1340は須恵器蓋である。1341 ～ 1348は須恵器皿である。1349 ～ 1351は須恵器壷に分類した。1349は薬壷である。1350・1351も短頸壷の頸部から肩部にかけての破片である。1352・1353は須恵器壷底部である。1354は須恵器であるが、器種は不明である。口縁部の形状から捏鉢の可能性が考えられるが、傾きは図示したとおりの形状に復元される。小片のため、詳細は不明である。1355 ～ 1362は土師器杯である。底部片のみである。1363は土師器高台付杯、1364は土師器甕である。1365・1366は黒色土器椀である。1367は土師質土器土釜である。1368・1369は土師質土器羽釜、1370・1371は土師質土器竈である。1372は白磁椀である。全体的に見ると9 ～ 10世紀頃のものが主体か。

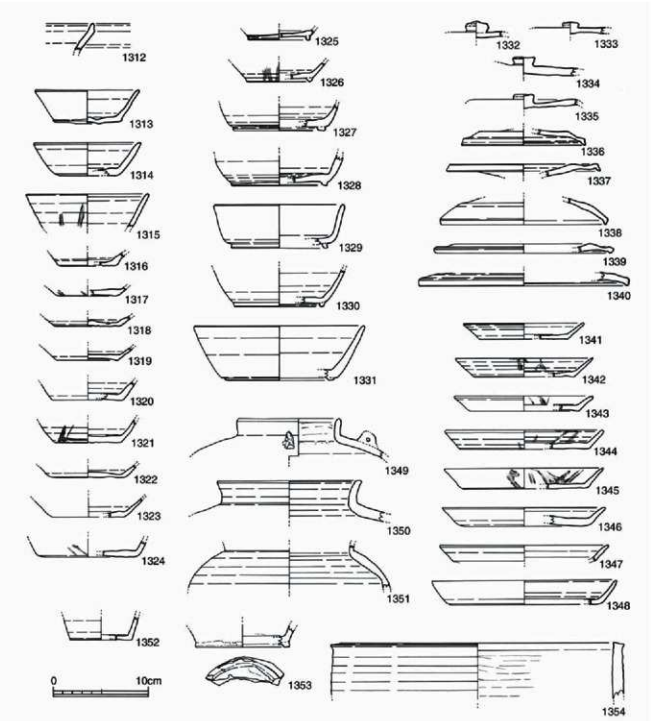
第200図はC 20区包含層出土土器である。1373・1374は弥生土器壷、1375 ～ 1378は弥生土器甕に分類した。おおむね弥生時代後期頃のものと考えられる。1379は須恵器蓋杯の身である。古墳時代後期後半頃のものである。1380・1381は須恵器杯、1382・1383は須恵器蓋、1384 ～ 1387は須恵器皿である。1387はSRd04出土の第131図725同様口縁部がやや肥厚し、口縁部内面に浅い沈線を持つ特徴



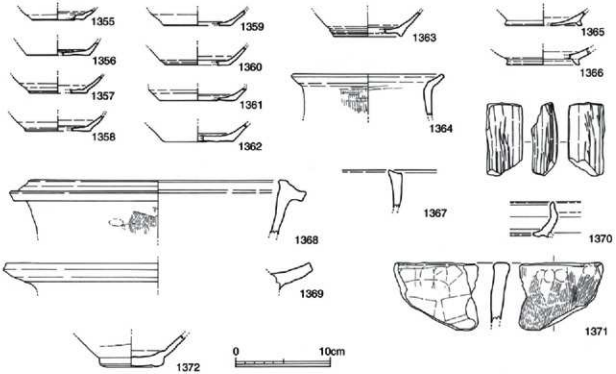
第196図　C 19 E区包含層出土遺物（1/4）



第197図　C 19W区包含層出土遺物（1/4）



第198図　D 19区包含層出土遺物（1）（1/4）

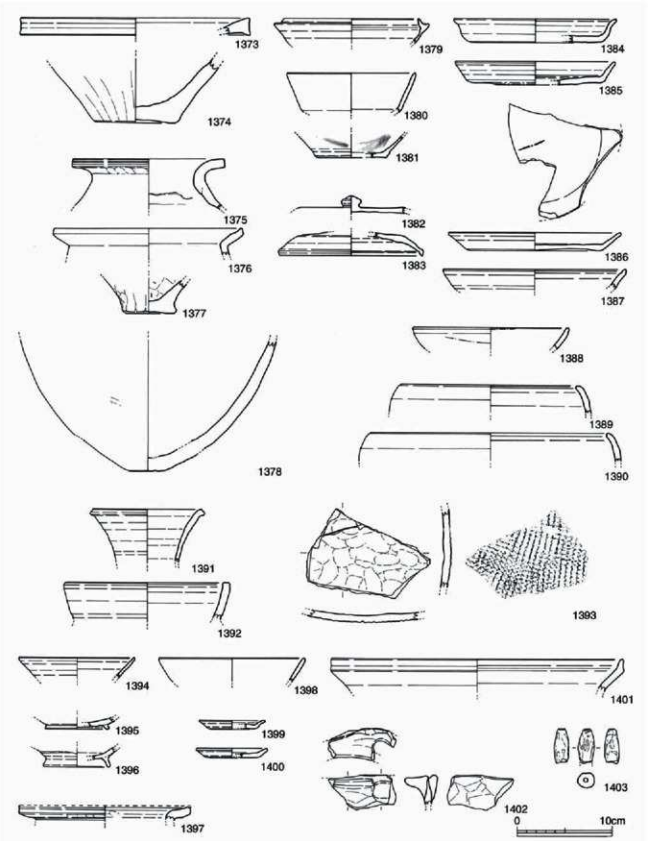


第199図　D19区包含層出土遺物（2）（1/4）

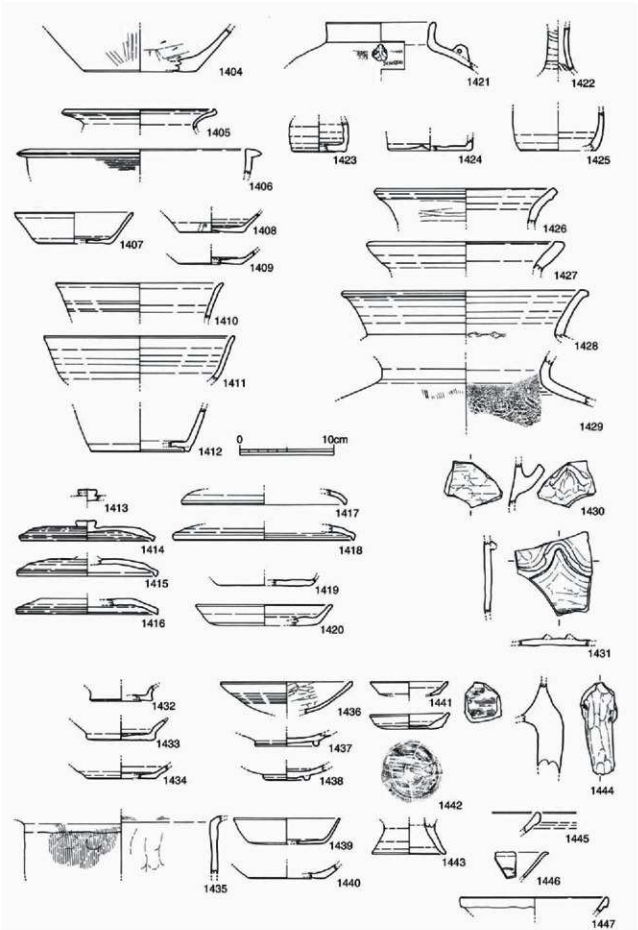
から土師器模倣形態であると想定できる。1388は須恵器椀、1389・1390は須恵器鉄鉢形土器に分類した。1391・1392は須恵器壺口縁部、1393は須恵器甕である。1394は土師器杯、1395・1396は土師器椀、1397は土師器甕に分類した。1398は土師質土器杯、1399・1400は土師質土器小皿である。1401は土師質土器羽釜、1402は土師質土器土鍋、1403は管状土錘である。

第201図はD20区包含層出土土器である。図化に耐えうるものがやや多く出土している。1404は弥生土器壺底部である。1405・1406は弥生土器甕である。1407～1411は須恵器杯である。1410・1411はやや大型の器形が想定できる。1412は須恵器高台付杯である。1413～1418は須恵器蓋、1419・1420は須恵器皿である。1421は須恵器短頸壺、1422は須恵器長頸壺である。1423～1425は須恵器壺である。1426～1429は須恵器甕である。1430は須恵器把手である。1431は須恵器であるが、器種は不明である。平坦な盤へ山形に突帯を貼り付けたものであるが、どのような器形になるか見当がつかない。1432～1434は土師器杯、1435は土師器甕である。1436～1438は須恵器椀、1439・1440は土師質土器杯である。1441・1442は土師質土器小皿、1443は高台付皿である。1444は土師質土器土釜、1445～1447は白磁椀である。

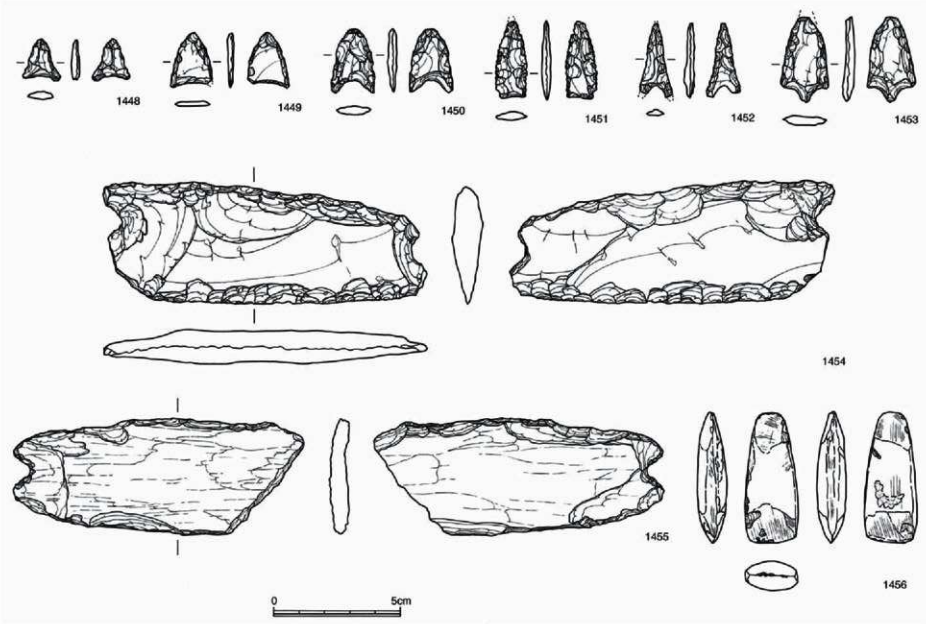
第202図はD20区出土石器である。SDd046から出土したもの以外はすべて包含層からの出土である。1448～1453は石鏃である。1449・1451はSDd046から出土しているが、混入したものであろう。1448・1450・1452を凹基式、1449・1451を平基式、1453を突基式にそれぞれ分類した。1448・1452以外は、素材面が大きく残した周縁加工の石鏃である。1454・1455は打製石包丁である。1454は右側縁がやや狭い。1455はかなり荒い加工である。1456は磨製石斧である。かなり小型の製品であるが、かなり丁寧に作られている。刃部が若干片減りしているように見え、あるいは使用に伴う磨耗が生じた可



第200図　C 20区包含層出土遺物（1/4）



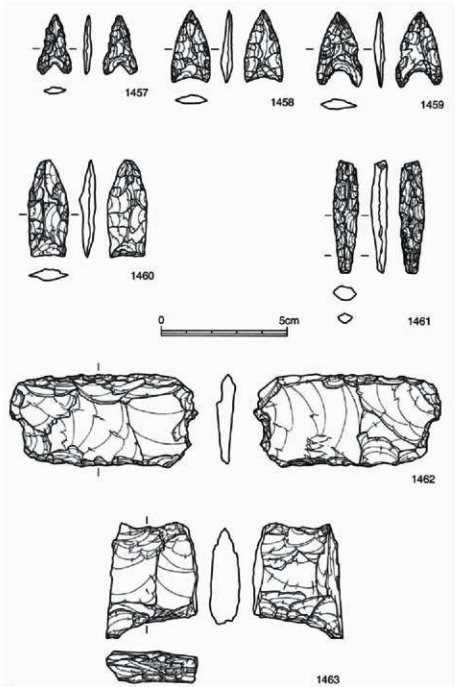
第201図　D 20区包含層出土遺物（1/4）



第 202 図　D 20 区出土石器（2/3）

能性が考えられる。SDd046 から出土したが、混入品である。1455 が結晶片岩製、1456 が緑色岩製であるほかはサヌカイト製である。なお、写真のみでの報告となるが、1519 は珪化木の小片である。

第 203 図はＣ 20 区出土石器である。大半が包含層からの出土であり、1457 のみが SDd052 から出土している。ただし、混入したものである。1457 ～ 1460 は石鏃である。1457 ～ 1459 は凹基式、1460 は平基式である。1461 は石錐である。1462 は石包丁、1463 は楔形石器に分類した。



第 203 図　Ｃ 20 区出土石器（2/3）

第 204 図はD 19 区出土石器である。大半が包含層からの出土であるが、SDd046 から出土したものが若干ある。1464 ～ 1468 は石鏃である。1464・1465・1467 は凹基式、残りは平基式である。1469 は SDd046 から出土したが、混入品である。1471 はスクレイパー、1472 は楔形石器に分類した。1472 の表裏には摩滅痕が見られ、元は打製石斧であったものを転用したと考えられる。以上はすべてサヌカイト製である。1473 は砥石である。砂岩の扁平な円礫を素材とし、比較的使い込んでいる。受熱したものと見られ、表面にスス状の黒色化した部分が見られるほか、上端部と裏面左側縁に受熱剥離痕が認められる。SDd046 からの出土である。

第 205 図はC 19 E 出土石器である。大半が包含層から出土したもので、1474・1477 の 2 点は SDd082 から出土しているが、混入したものと考えられる。1474 ～ 1477 は石鏃である。1474・1476 は平基式、1475 は凹基式、1477 は突基式である。1475 を除く 3 点は表裏中心部に素材面を残置した周縁加工が施される。1478 は石匙である。不整形剥片を素材とし、その打面側の表裏に浅い連続する二次加工を施すものである。刃部はほとんど手を加えない。摘み部については表裏から浅い加工を施すだけで作り出される。1479 は打製石包丁である。外縁部は浅い二次加工により整形される。正面右側縁のみ剥り込みが認められる。いずれもサヌカイト製である。

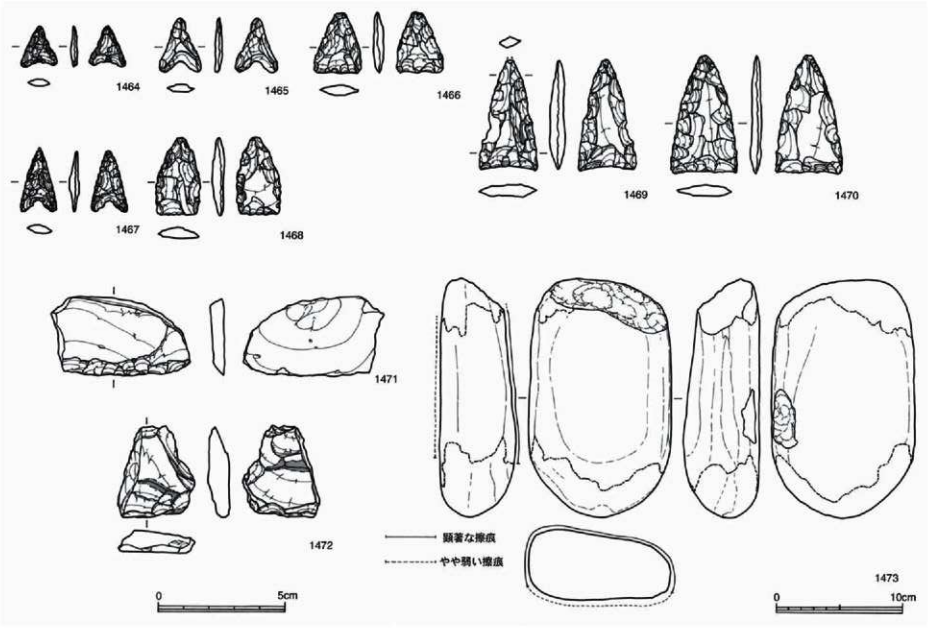
第 206 図はC 18 区出土石器である。1480 は SDd082 から出土した石鏃である。横長剥片の表裏外縁部に浅い連続する二次加工を施す。器体の中央部には素材面が残置される。1481 は打製石包丁である。やや肉厚の横長剥片を素材とする。

第 207 図はB 18 区出土石器である。1482･1483 は石鏃である。1482 は平基式、1483 は凹基式である。1482 は SDd083 からの出土である。同溝は弥生時代後期末頃の開削と見られることから、1482 は混入品であろう。1484 は石匙である。刃部右半を欠損する。1485 は楔形石器に分類した。

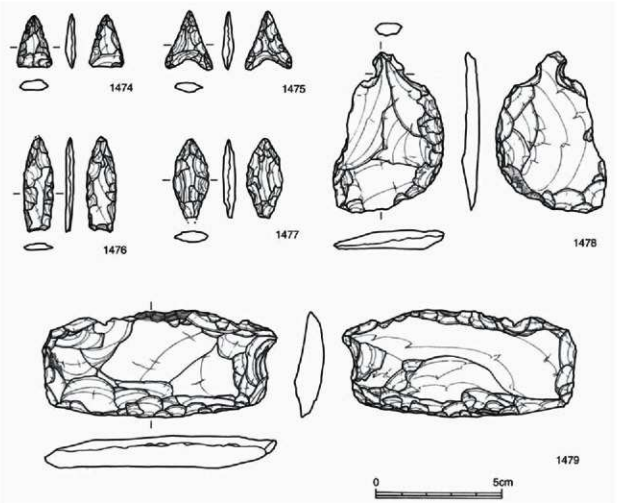
第 208 図はE 16 区出土土器である。平面精査・側溝掘削などの際に出土したものが多いが、調査区の南半部を中心に SRd04 が存在することから、本来的には SRd04 起源の遺物である可能性が高い。1486 は須恵器杯である。1487 は須恵器高台付杯、1488 は須恵器蓋、1489 は須恵器鉢である。1490・1491 は土師器杯、1492 は土師器皿である。1493 は土師質土器杯、1493 は土師質土器小皿である。1495 は土師質土器壺に分類した。1496 は緑釉陶器椀、1497 は外面に連弁文を施した青磁椀である。

第 209 ～ 211 図はE 16 区から出土した石器である。SRd04 からの出土が目立つ。1498 ～ 1509 は石鏃である。凹基式のものが目立つが、平基式のものや、突基式のものも認められる。1510 はスクレイパーである。礫面を打面とした横長剥片の背面側から腹面側へ向けて浅い連続した二次加工が施される。1511 は打製石包丁である。やや肉厚の横長剥片を素材とする。左側縁部を欠損する。第 210 図 1512・1513 は打製石斧である。いずれも破損に伴い廃棄されたものと見られるが、刃部を中心に擦過痕が顕著に認められる。1514 は楔形石器である。以上はいずれもサヌカイト製である。1517 は凹石である。砂岩製。

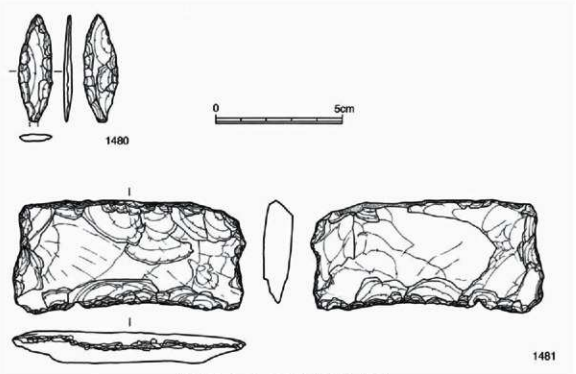
第 211 図 1518 は銅銭である。SDd043・044・046 の交点付近で検出した。錆による劣化が著しく、銭の種類は判別できなかった。



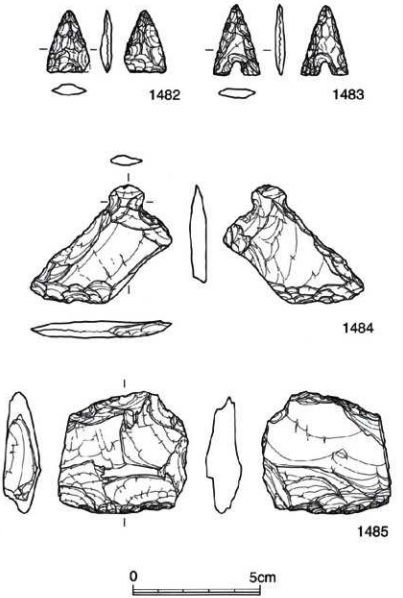
第 204 図　D 19 区出土石器（2/3・1/3）



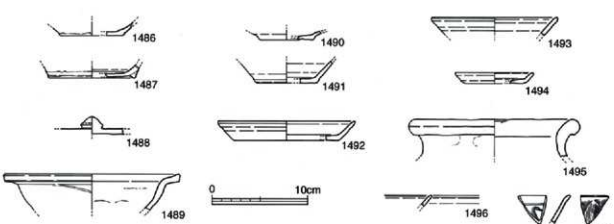
第205図　C 19 E区出土石器（2/3）



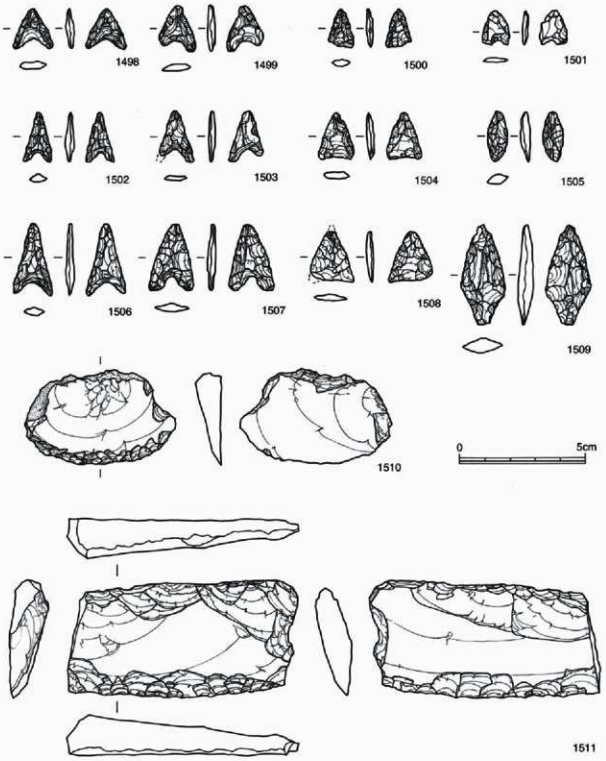
第206図　C 18 区出土石器（2/3）



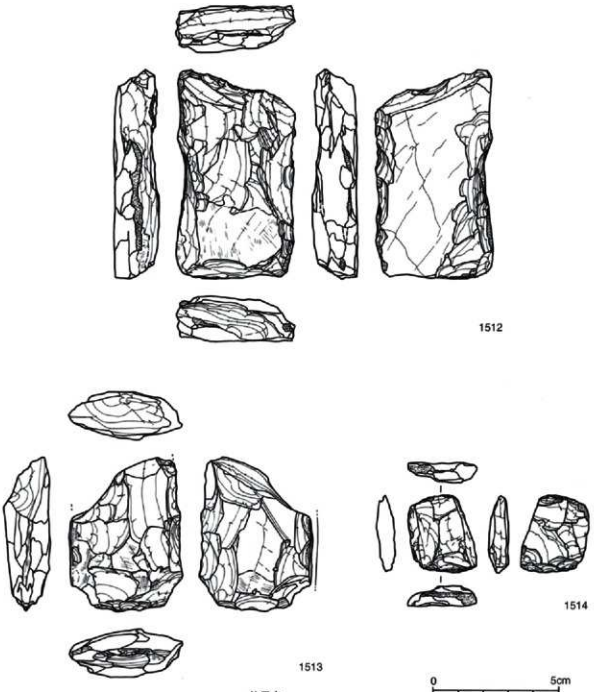
第207図　B 18区出土石器（2/3）



第208図　E 16区包含層出土遺物（1/4）



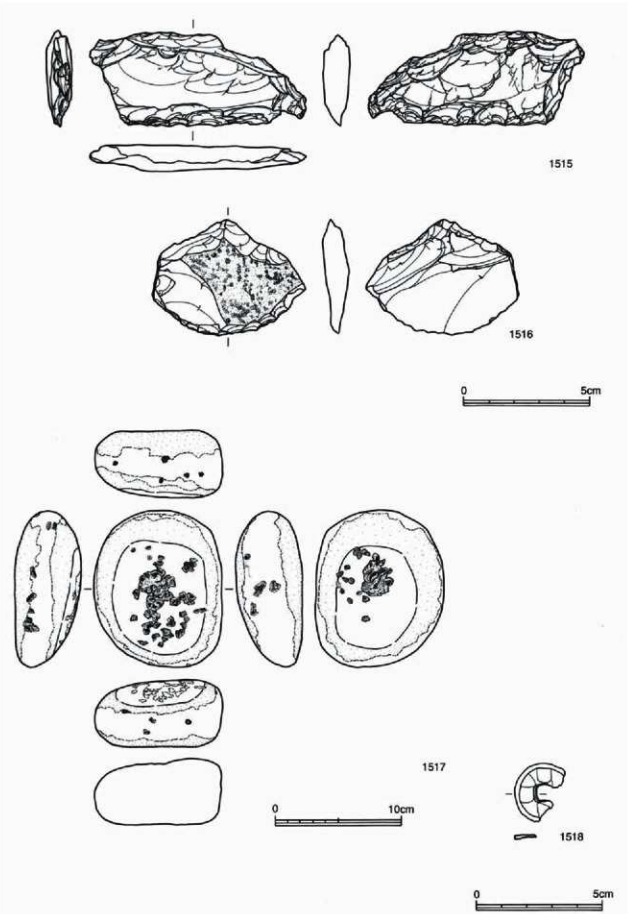
第209図　E 16区出土石器（1）(2/3)



第210図　E 16区出土石器（2）(2/3)

(参考文献)
片桐孝浩編　1992 『中小河川大東川改修工事（津ノ郷橋～弘光橋間）に伴う埋蔵文化財発掘調査報告　川津元結木遺跡』香川県教育委員会
木下晴一編　2000 『サンポート高松総合整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告　第１冊　西打遺跡Ⅰ』香川県教育委員会
森下英治　2000 「讃岐地域の突帯文系土器」「突帯文と遠賀川」
西村尋文編　2005 『香川県農業試験場移転事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告　第１冊　西末則遺跡Ⅰ』香川県教育委員会
北山健一郎編　2007 『香川県農業試験場移転事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告　第２冊　西末則遺跡Ⅱ』香川県教育委員会

乗松真也編　2004 『サンポート高松総合整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告　第６冊　浜ノ町遺跡』香川県教育委員会



第211図　E 16区出土石器（3）・金属製品（2/3・1/3）

第３章　自然科学分析

西末則遺跡出土サヌカイトの産地推定

竹原弘展 (パレオ・ラボ)

１．はじめに

西末則遺跡出土サヌカイトについて、エネルギー分散型蛍光Ｘ線分析装置による元素分析を行い、原産地を推定した。

２．試料と方法

対象試料は西末則遺跡より出土したサヌカイトの８点である（第３表）。試料は風化層に覆われていたため、試料の一部分をエアブラシを用いて新鮮面を表出させ、測定箇所とした。

分析装置は、(株) セイコーインスツルメンツ社製のエネルギー分散型蛍光Ｘ線分析計 SEA － 2001L を使用した。装置の仕様は、Ｘ線管はロジウム Rh ターゲット、Ｘ線検出器は Si(Li) 半導体検出器である。測定条件は、測定時間 300sec、照射径 10㎜、電流自動設定 (1-63 μ A、デッドタイムが 20％未満になるよう自動的に設定)、電圧 50kV、試料室内雰囲気真空に設定した。

原石採取地点	判別群	試料数
二上山・春日山	二上山・春日山	12
国分台自衛隊演習場横	国分台自衛隊演習場横	12
国分台下みかん畑	国分台みかん畑・蓮光寺	12
国分台南斜面	**国分台みかん畑・蓮光寺**	**20**
蓮光寺	**国分台みかん畑・蓮光寺**	**19**
赤子谷第1地点	**赤子谷・法印谷**	**19**
赤子谷第2地点	**赤子谷・法印谷**	**20**
法印谷	**赤子谷・法印谷**	**20**
神谷神社	神谷神社1・2	12
高産霊神社	高産霊神社1・2	12
金山	金山	12
金山南麓	**金山南麓**	**20**
城山南側	城山	6
城山北側	城山	6
双子山南嶺	**双子山南嶺**	**16**
雄山	雄山・雌山	6
雌山	雄山・雌山	6

※**ゴシック体**は香川県埋蔵文化財センターより新たに提供していただいた。

第２表　原石採取地点と判別群名称

産地推定には、黒曜石産地推定法において用いられている蛍光Ｘ線分析によるＸ線強度を用いた判別図法 (例えば望月 2004) を、分析対象をサヌカイトに置き換えて適用した。本方法は、まず各試料を蛍光Ｘ線分析装置で測定し、その測定結果のうち、カリウム (K)、マンガン (Mn)、鉄 (Fe) とルビジウム (Rb)、ストロンチウム (Sr)、イットリウム (Y)、ジルコニウム (Zr) の合計７元素のＸ線強度 (cps；count per second) について、以下に示す指標値を計算する。

1).Rb 分率 =Rb 強度× 100/(Rb 強度 +Sr 強度 +Y 強度 +Zr 強度)
2).Sr 分率 =Sr 強度× 100/(Rb 強度 +Sr 強度 +Y 強度 +Zr 強度)
3).Mn 強度× 100/Fe 強度
4).log(Fe 強度 /K 強度)

そしてこれらの指標値を用いた２つの判別図 (横軸 Rb 分率－縦軸 Mn 強度× 100/Fe 強度の判別図

と横軸 Sr 分率－縦軸 log(Fe 強度 /K 強度) の判別図) を作成し、各地の原石データと遺跡出土遺物のデータを照合して、原産地を推定するものである。

原石試料も、採取原石を割って新鮮な面を表出させた上で産地推定対象試料と同様の条件で測定した。

今回の測定にあたって、(株) バレオ・ラボにて所有していたサヌカイト 10 地点 96 点に加えて、香川県埋蔵文化財センターより新たに 7 地点 134 点を提供していただいた。第 2 表に各原石採取地とそれぞれの試料点数を示す。

3．分析結果

第 212 図および第 213 図に、サヌカイト原石の判別図と西末則遺跡出土試料をプロットした図を示す。なお、両図は視覚的にわかりやすくするため、各判別群を楕円で取り囲んである。新たに加わった原石も判別図に取り込んだが、判別群が新たに増えた一方で、重複領域が増えて非常に複雑な図となった。

西末則遺跡出土資料は、それぞれ資料番号 1 は国分台みかん畑・蓮光寺、資料番号 2 は国分台みかん畑・蓮光寺と神谷神社 1 の重複領域に、資料番号 3 は国分台みかん畑・蓮光寺、資料番号 4 は国分台自衛隊演習場横、資料番号 5 は国分台みかん畑・蓮光寺、資料番号 6 は国分台みかん畑・蓮光寺、資料番号 7 は国分台みかん畑・蓮光寺、資料番号 8 は金山・金山南麓の重複領域に収まった。それぞれの資料は、これらの地域より採取されたものである可能性が高いと考えられる。しかし、今回判別図の元となる原石を増やした結果、判別群の分布が非常にシビアなものとなった。このことは、例えば国分台みかん畑・蓮光寺と同自衛隊演習場横と神谷神社との間、あるいは金山と城山と赤子谷・法印谷・双子山との間等、互いに近いないしほとんど重複している場合は誤判別する可能性が捨てきれないということである。しかしながら、逆に例えば金山や国分台自衛隊演習場横や雄山・雌山の間においては十分に判別可能であることからも、判別図法が全く適用不能であるというわけではない。ただ今後サヌカイトにおける判別図法について改良を模索していく必要性はあろう。現状ではある程度プロットされた箇所の周囲の判別群については可能性を考慮しなければならないであろう。

4．終わりに

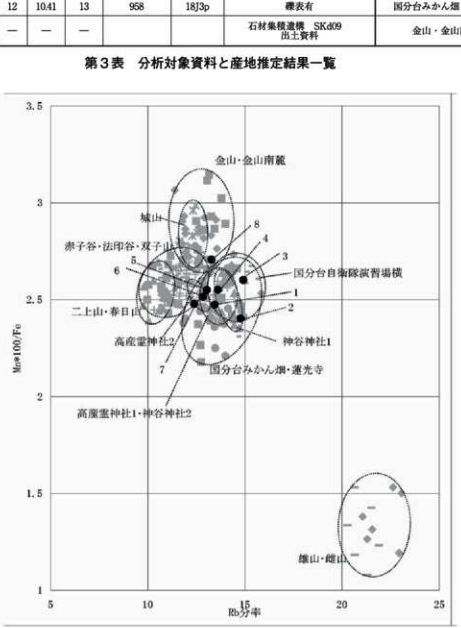
西末則遺跡より出土したサヌカイトについて、蛍光 X 線分析を用いた判別図法による産地推定を行った結果、8 点の資料のうち、5 点が国分台みかん畑あるいは蓮光寺、1 点が国分台みかん畑、蓮光寺あるいは神谷神社、1 点が国分台自衛隊演習場横、1 点が金山の可能性が高いと推定された。

引用文献・参考文献

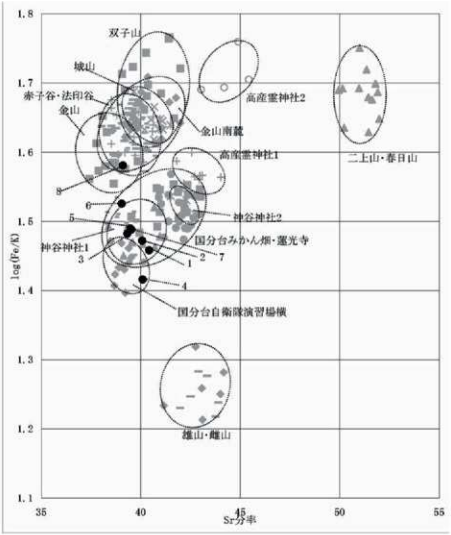
望月明彦（2004）用田大河内遺跡出土黒曜石の産地推定．かながわ考古学財団調査報告 167　用田大河内遺跡、511-517、財団法人かながわ考古学財団

資料番号	器種	石材	個体	重量	個体群	報文番号	グリッド	備考	判別群
		分類番号(g)							
1	剥片	Snk	1	8.51	3	954	18J7d		国分台みかん畑・蓮光寺
2	剥片	Snk	2	10.53	18	962	19J23o	SO245は遊離遺物	国分台みかん畑・蓮光寺 or 神谷神社1
3	剥片	Snk	5	3.21	4	961	18J3p	打面有	国分台みかん畑・蓮光寺
4	剥片	Snk	6	1.72	16	965	18J3c	礫表有　Hd0071　40.06g（接合関係あり）	国分台自衛隊演習場横
5	剥片	Snk	8	1.86	20	968	18J6p		国分台みかん畑・蓮光寺
6	剥片	Snk	9	22.21	8	957	18J7o		国分台みかん畑・蓮光寺
7	剥片	Snk	12	10.41	13	958	18J3p	礫表有	国分台みかん畑・蓮光寺
8	剥片	Snk	—	—	—			石材集積遺構　SKd09 出土資料	金山・金山南麓

第３表　分析対象資料と産地推定結果一覧



第212図　サヌカイト産地推定判別図（1）



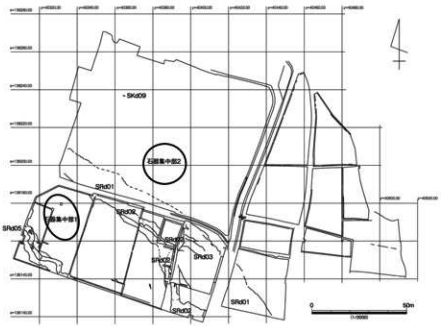
第 213 図　サヌカイト産地推定判別図（2）

第４章　まとめ

１．遺構の変遷

縄文時代

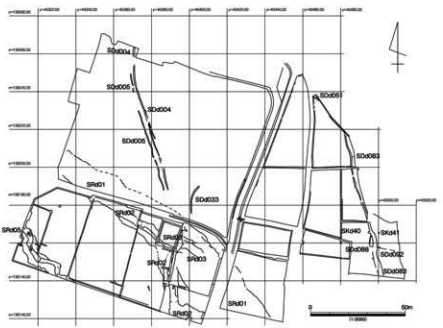
Ｈ地区東端のSRd03内で縄文時代晩期の土器が若干量出土している。摩滅があまり進んでいないことから、近接した位置に当該期の居住域が想定できる。また、土器を伴わないことから、明確な時期については不明であるが、Ｈ地区西端に石器集中部１基、Ｇ地区中央付近で石器集中部１基と石器埋納遺構SKd09を確認した。SRd03のベース土中に包含されることから、石器集中部は縄文時代晩期以前と考えられ、構成資料中に鍬形鏃が認められることから縄文時代前期頃のものと想定する。SKd09は先述のベース土を切り込むことから、縄文時代晩期頃と想定する。遺跡南半部で縄文時代晩期の土坑が２基検出されているほか、北端部で溝状遺構や旧流路から当該期の土器が出土していることから、少なくとも遺跡内外の比較的近接した位置に集落が存在した可能性が想定できる。



第214図　縄文時代遺構配置図

弥生時代

Ｇ地区SDd004、ｄ地区SDd083などで若干量の遺物が出土していることから、当該期の遺構と考えられるが、集落域との直接的な関連は薄いものと考えられる。前者は埋没旧河道から派生した幹線水路の残骸の可能性

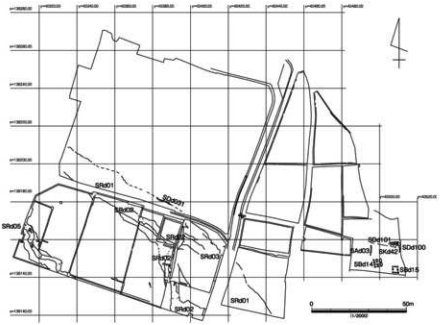


第215図　弥生時代遺構配置図

が、後者は丘陵裾部に掘削された幹線水路で、『西末則遺跡Ⅰ』で報告されたSDa05・06であると考えられる。現況で確認できている範囲は、集落域ではなく生産域であった可能性が想定できる。

古墳時代

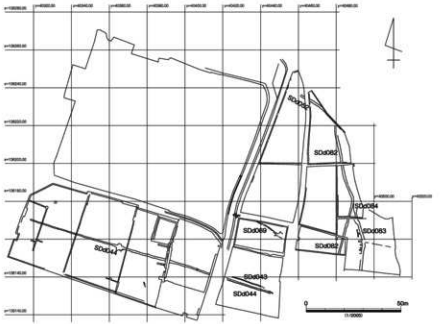
先述のSDd083の上層で後期後半の遺物がまとまることから、弥生時代の幹線水路の最終埋没がこの頃と考えられる。また、SDd100・101からも後期後半のものと見られる遺物がまとまっていることから、当該期の遺構と考えられる。後年度報告予定のすぐ南側の調査区には、当該期の竪穴住居跡が数棟存在することから、今回報告した遺構については概ねこの集落に起因するものと想定できる。なお、SDd031からは古墳時代終末期の遺物のみが出土する状況が認められ、関連する他の遺構は確認できないものの、当該期の集落が近接した位置に存在すると想定できる。



第216図　古墳時代遺構配置図

古代

出土遺物が少ないため時期的な根拠がやや弱いが、d地区SBd14・15が当該期のものと想定できる。また、d地区SDd052・082・084で概ね8世紀代の遺物を多く認めることから、古代前半期のものと想定できる。古墳時代同様、後年度報告予定のすぐ南側の調査区で奈良時代のものと考えられる2間×5間の南北棟の身舎に西面庇が付く建

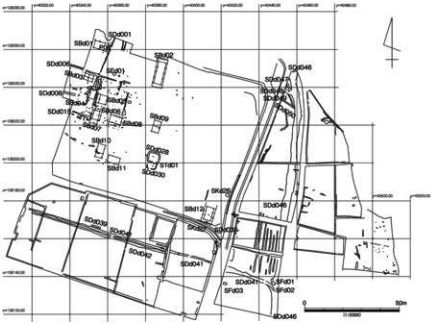


第217図　古代時代遺構配置図

物や、残存状況は不良ながら、同程度の規模を持つと考えられる建物が認められる。さらに、以上の遺構周辺の包含層からは８～９世紀のものを主体とする土器が多量出土しているほか、Ｈ地区～Ｇ地区南西にかけて所在するSRd01は出土遺物の状況から古代後半期に最終埋没となることが分かる。当該期の遺構の分布とその詳細な性格付けについては、後年度の報告に委ねたい。

中世

遺跡内で15棟復元できた掘立柱建物のうち、13棟が当該期のものである。そのうちの12棟がＧ地区に集中し、残り１棟もほぼＧ地区に接した位置に存在する。さらにそのうちの９棟はＩ21区から検出された。また、このうちの６棟はＩ21区のほぼ中央部に極めて近接した状態で存在する。いずれも概ねSDd006とSDd014に囲われるように検出できていることから、これらの溝状遺構を区画施設とし、その中に建てられたものと考えることが出来る。桁行１～２間、梁間２～３間のあまり大きくない建物が主体であるが、SBd08のように２間×５間の構造を持つものも認められる。遺構全般に残存状況が不良であるため、個々の建物がSDd006・012などによって区画されていた可能性も想定できる。これらの建物から若干距離をおいた所に１間×４間の身舎に四面庇が付くSBd02や１間×３間の身舎に四面庇が付くSBd12が存在する。これらの建物がどのような性格を持つのか、裏づけのための資料が存在しないので明らかにしがたい。これらの建物が認められない部分は柱穴その他の居住遺構に伴うものが認められず、生産域などとして利用されていた可能性が考えられる。Ｇ地区とＨ地区北半(SDd042以北）は『西末則遺跡Ｉ』で復元された周辺の条里型地割のほぼ一町分に内包されており、地割の中での土地利用状況を示す、良好な資料であるといえる。この地割の最も東端で確認できる南北線はこのＧ・Ｈ地区とｄ地区を区切る現北村用水の開削されたラインに当たる。これよりも東側は、特に北半部において丘陵裾に沿って掘削されたSDd046に規制されるように17°東偏した軸を持たない遺構が多い。耕地開発が地形に規制されていたことを示していると考えられる。



第218図　中世時代遺構配置図

このＧ地区とＨ地区の北半からなる一町分の範囲を屋敷地Ａと仮称した際、屋敷地Ａの南側を除き、当該期の明確な建物が認められないことから、このエリアは生産域などに当てられていたと考えられる。そして、屋敷地Ａの南西に位置する一町分中央部（『西末則遺跡Ⅱ』掲載　Ｉ地区・Ｋ地区）及び屋敷地Ａ南辺から半町南へずれた範囲（後年度報告）においても別の単位の屋敷地が認められる。全体的に

12 世紀代の遺構が多いが、SDd001・040・046 において 13 世紀代と見られる遺物が認められ、若干新しいものも含まれるようだ。

2．サヌカイト個体について

石器集中部 B1 出土石器を概観した際、見かけ上の特徴に差異を持つものが複数例認められ、複数の母岩の存在が想定できた。そこで、トータルステーションによる遺物取り上げを行ったもののうち、チップを除く 866 点の資料について、肉眼観察による個体の識別作業を試みた。作業手順は、初めに石核や大型の剥片、接合資料など、個々の個体の特徴を捉えやすいものを用いて基準を作り、その後、対象全点を観察し、その基準を満たすものを同一個体として識別した。個体識別の観察項目は概ね次のとおりである。

○色調

○質感　a　気泡の有無

　　b　結晶の有無

　　c　密度

○縞・網目などの模様といった見かけ上の特徴

ただし、サヌカイトの風化状況が同一個体でも異なる場合が認められる（個体 No. 12　報文番号 981-982）。この場合、大きな 1687 側で観察すると淡灰色をベースとし、灰色の縞が入るという特徴を持つが、小さな 1833 側では灰色をベースとし、白色の縞が入るように見え、一見しただけでは別個体として判断される。しかし、細かく観察すると 1687 に見られる灰色の縞はさらにその中に淡灰色の細い筋が認められる。また、これらの縞模様は色調が若干異なるものの同じ間隔で存在する。

以下、分類した個体について記載する。太字のものは後述する産地同定分析を実施した資料である。

個体 No.　1

灰～灰白色を基調とする。石質は密で、各剥離面で見た場合、石のきめが細かい。気泡・結晶粒は微量認めるのみである。フィッシャーの多くは剥離面の末端部で認められ、平坦部では顕著ではないものが多い。顕著ではないが、灰色の網目状の模様が見えるものがある。産地同定分析の資料番号 1（報文番号 954）が相当する。

個体 No.　2

灰色～暗灰色を基調とする。石質はやや密で、各剥離面で見た場合、石のきめはやや細かい。気泡・結晶を若干認める。フィッシャーはやや顕著で、剥離面のほぼ全体に認められ、末端部・平坦面を問わず、白色の筋状に走るのが観察できる。産地同定分析の資料番号 2（報文番号 962）が相当する。

個体 No.　3

灰白色を基調とする。石質は密で、石のきめは細かい。灰色ないし白色の筋が平行に走る。若干気泡が混じる。

個体 No.　4

灰白色を基調とする。石質はやや密で、石のきめはやや細かく、気泡を若干認める。フィッシャーがやや目立つ。

個体No. 5

青灰色を基調とする。石質は密であるが、石理に沿った剥離面ではフィッシャーがやや目立つ。気泡・結晶がやや目立つ。産地同定分析の資料番号3（報文番号961）が相当する。

個体No. 6

灰色を基調とする。石質はやや粗い。白色の石理に沿った間隔の広い筋が認められる。フィッシャーはやや目立つ程度で、気泡がわずかに認められる。産地同定分析の資料番号4（報文番号965）が相当する。

個体No. 7

灰色～灰白色を基調とする。石質はやや粗く見える。やや大きな気泡が見られ、気泡の中は白色に風化する。また、白色の結晶も若干認められる。フィッシャーは普通である。

個体No. 8

淡灰白色～白色を基調とする。石質はやや密で、石のきめはやや細かい。気泡もわずかで、フィッシャーは顕著ではない。石理と水平な方向に間隔のやや詰まった灰色の筋が認められるほか、灰色の微細な斑点が若干認められる。産地同定分析の資料番号5（報文番号968）が相当する。

個体No. 9

濁灰色を基調とする。石質はやや粗く見える。やや太い灰白色の筋が石理に沿って認められる。産地同定分析の資料番号6（報文番号957）が相当する。

個体No. 10

灰色を基調とする。石質はやや密で気泡はやや少ない。フィッシャーが若干顕著に認められる。間隔がやや密で石理に並行する白色の筋が認められる。

個体No. 11

濁白色を基調とする。石質はやや密であるが、きめはやや粗く見える。気泡は認められるが顕著ではない。フィッシャーは比較的全体に認められる。灰色～暗灰色の網目状の模様が全面に認められる。

個体No. 12

灰白色を基調とする。石質はやや密で、きめもやや細かい。気泡は細かいものが若干認められる。灰色の筋が若干認められるほか、微細な白色の斑点が少量認められる。産地同定分析の資料番号7（報文番号958）が相当する。

個体No. 13

灰色を基調とする。石質は密で光沢を持ち、ガラス質に近い。微細な白色粒を若干含む。白く短く伸びるフィッシャーを持つ。いわゆるハリ質安山岩である。

個体No. 14

灰白色を基調とする。石質は密でやや光沢を持つが、No. 13ほどではない。やや大き目の気泡を持ち、灰色のやや太い筋を持つ。遺跡全体を見ても、同じ質を持つ石材は認められない。報文番号902の剥片がそれに相当する。

なお、産地同定分析の結果からは、いずれの個体も国分台を中心とした範囲から原石が採取された可能性が高いことを示す結果が出ている。本来、識別した全個体に対して実施すべき分析ではあるが、それがかなわなかったため、接合資料のあるものでより個体の状況を把握することが可能なものを抽出

し、主観的に見て、きめが細かく縞模様のあまり入らない国分台周辺産出と思われる資料と、白色に風化するないしは縞模様の強い金山周辺産と思われる個体を概ね半分ずつ混ぜて分析に掛けたが、視覚的な印象から産地同定を行うのはやや困難なようである。

さて、以上のように14個体に識別したうえで、トータルステーションで取上げられなかった水洗選別資料やグリッド一括で取上げた遊離遺物も選別し、全点の重量計測を行った。計測は電磁式はかり HF-3000N（株式会社エー・アンド・デイ製）を使用して計測した。その結果を個体毎にまとめたのが、下記の第２表である。個体毎の重量は約 50 g～900 g を量り、石器集中部１全体の総重量は約 5,322 g を量る。これは残された石器の重量であり、製作の後、持ち出された石器があると考えるべきで、本来当地へ搬入された石材の重量はこれを上回っていたと考えられる。重量だけで見ると非常に手ごろなサイズの石材を搬入したと考えられる。参考までに石材の重量とサイズの目安を記すと、500 g 前後の石材のサイズは８㎝角で厚さが３㎝程度である。第 144 図 859 の石核が概ねそのサイズとなる。また、別遺構になるが、埋納遺構 SKd09 出土の大型剥片（第 61 図 139）が 1234 g を量ることから、その大きさも想定出来よう。なお、この SKd09 出土の剥片・石核は概ね 50 g 弱～２㎏を量り、飛び抜けて重い大型剥片（第 60 図 137）を除くと、概ね石器集中部１の 500 g 前後の個体を抜いたものと重量構成が類似する。仮に両者の遺跡内への石材搬入形態が共通していると想定した場合、SKd09 出土資料に見られるような、スクレイパーや石匙などの素材として機能する、あるいは小型の石核となるサイズの剥片と、連続して大小の剥片を多数取り得る大型剥片が石器集中部１にも搬入されていたと想定できる。第２表に見られる資料の内訳は、概ね石鏃を中心に製作するために打割を繰り返して素材を生産し、その中から適時目的となる剥片をとる作業を行った結果の残滓と考えられる。作業で得られたもののうち、かなりの剥片が石器に加工され、石器集中部外へ持ち出された可能性が高い。比較的多数資料がある中で、接合した資料数がさほど多くない点がそれを裏付けている。また、連続して剥離作業を行った痕跡を示す接合資料はあるものの、石核との接合例がほとんどなく、作業中のトラブルで折れた剥片や石核同士の接合が多いのも、残された石器が剥片剥離作業の末期に近いものを示している可能性が高い。

個体番号	重さ（g）			構成点数（TS 取上のみ）
	TS 取上	遊離遺物	総重量	
1	789.02	128.94	917.96	273
2	387.82	92	479.82	127
3	406.07	0	406.07	12
4	67.86	30.58	98.44	15
5	456.30	7.21	463.51	29
6	335.66	0	335.66	20
7	581.26	0	581.26	14
8	829.03	84.73	913.76	161
9	104.74	0	104.74	18
10	215.5	11.17	226.67	23
11	60.69	3.62	64.31	12
12	488.39	60.3	548.69	135
13	29.04	44.75	73.79	26
14	52.38	0	52.38	1
チップ	55.22	0	55.223	922
計	4858.983	463.3	5322.283	1788

第４表　石器集中部１　個体別重量一覧

今後、これらの資料をもとに、他遺跡との比較などを加えたうえで、より詳細な縄文時代の石器製作工程が把握できるものと考える。